西宮遺跡（1）
西　宮　岩　陰

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第54集

2018

国　土　交　通　省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

西宮遺跡（1）
西　宮　岩　陰

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第54集

2018

国　土　交　通　省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

西宮遺跡全景(空撮・南東から)

発掘部分の南側(写真左側)が西宮遺跡、北側(写真右側)が東宮遺跡。遺跡の東側手前に旧JR吾妻線(現在は路線変更で廃線)と吾妻川。北側(写真右隅中央部)の町並はダム建設に伴う川原畑の代替え地である。江戸時代の川原畑村は、吾妻川左岸に位置する。川原畑村は代替え地の造られている上面と、東宮遺跡・西宮遺跡として発掘された下面である。下面の集落や畑の大部分は天明三年の泥流により埋没している。

西宮遺跡1区北側全景(空撮・北東から)

1区は南と北側を半分ずつ調査した。調査区全面で天明泥流下から畑が確認された。1区北側では、畑の境界部分石を高く積み上げたヤックラがある。天明泥流下に覆われた畑を復旧するために泥流下の耕作土を泥流上の畑に客土する復旧作業(復旧溝)が多くの畑で実施されていた。

口絵 2

西宮遺跡２区全景（空撮・南から）

天明三年の浅間泥流により埋没した江戸時代吾妻郡川原畑村の一部である。３軒の屋敷と屋敷に属さない建物２軒、各屋敷を結ぶ道、共同井戸１基が確認され屋敷の西・北・東側は畑となっていた。各屋敷は南側の町道の下にある幹線道路（絵図から存在が想定される。未発掘）と道で繋がっている。

２区全景（南から）

２区北西部は山であり、北側は急傾斜地であった。屋敷や畑を作るために多くの石垣を築いて平地面を確保していた。南の町道から眺めると、多くの石垣が、積まれている村の景観がよくわかる。

3号屋敷全景(東から)

屋敷は、西・北・東側のなだらかな斜面を削りそこに石垣を築き屋敷の敷地としている。南側町道の下には江戸時代村の幹線道路があったと思われる。西側に屋敷の母屋である5号建物、南東コーナー部分に付属建物である2号厠、屋敷地の東側は菜園等で使われていたと思われる。井戸は西側の共同井戸を利用していたものと思われる

5号建物板床痕跡(西から)

5号建物西側は板の貼られた床面となっていた。床板は残っていなかったが、腐敗し、土に近い床材の痕跡が残っていた。床材の大引や根太の痕跡も明瞭に残っていた。板床の痕跡は土間に近い囲炉裏東側まで残っていた。

口絵 4

5号建物囲炉裏(南から)

5号建物囲炉裏断面(南から)

2号建物出土陶磁器

2号建物出土陶磁器(復元)

西宮岩陰　岩陰部分(南西から)

岩陰1号石造物1a，1b号石造物(北東から)

岩陰1号石造物1d号石造物(南西から)

岩陰1号石造物1e号石造物(南西から)

序

八ッ場ダムは、治水・利水・発電を行う多目的ダムとして計画され、吾妻郡長野原町を中心に工事が進められてきました。八ッ場ダムの建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成６年度から実施し、本年で23年目を迎えました。

西宮遺跡は、平成20・26年度に発掘調査を行い、天明三年(1783)の浅間山大噴火に伴う泥流で被災した村が、良好な遺存状態で検出されました。浅間泥流下の屋敷・道・畑・井戸等当時の村の様子、およびそこから出土した鍋や茶釜や陶磁器は、18世紀後半の生活様相を豊かに伝える内容でした。西宮岩陰は、平成26年度に西宮遺跡と同時に発掘調査を行い、西宮遺跡の北西方向にある大きな岩を信仰の対象とした遺跡です。岩陰と岩の頂上部に石造物がありました。西宮の集落の人々と深い関係を持つ信仰の場と思われます。

西宮遺跡の東側に接する東宮遺跡では、西宮遺跡同様の集落が発掘調査されすでに３冊の報告書が刊行されています。西宮遺跡や西宮岩陰ではそれらの調査成果をもとにさらに多くのことがわかってきました。これらの調査結果は村の様子を明らかにし、長野原町を中心とした地域ひいては群馬における近世村落史を考える上でも重要な資料となるものと考えております。

発掘調査から報告書の刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者の皆様には、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衰心より感謝申し上げます。

平成30年３月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長　　中 野 三 智 男

例　言

1．本書は、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成20年に実施された「西宮遺跡」および平成20年と平成26年に実施された「西宮遺跡」「西宮岩陰」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。遺跡名は別であるが、両遺跡は近接しておりほぼ同時期に存在した江戸時代の吾妻郡川原畑村の一部である。一冊の報告書での中でまとめて報告する。

2．遺跡の呼称および所在地

西宮遺跡(にしみやいせき)は、群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字西宮に所在する。

・地番は、甲107、乙107、108、109、甲110、乙110、111-1、112-2、112、113、114-1、114-2、162、甲163、乙163、164-1、164-2、164-3、165、92-4、93-1、94-1、94-2、94-5である。

西宮岩陰(にしみやいわかげ)は、群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字西宮に所在する。

・地番は、159、甲160、乙160、161である。

3．事業主体　国土交通省関東地方整備局

4．調査主体　公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年４月に公益財団法人に組織改定)である。

5．発掘調査及び整理作業の期間

（1）発掘事業

西宮遺跡

・調査期間・発掘調査担当　平成20年11月１日～平成20年12月26日(平成20年度)、麻生敏隆(主任専門員(総括)、綿貫　昭(主任調査研究員)

調査面積　2,970㎡

遺跡掘削工事　スナガ環境測設株式会社

・調査期間・発掘調査担当　平成26年４月１日～平成26年６月30日(平成26年度)、岩崎泰一(調査１課長・上席専門員)、中沢　悟(専門調査役)

調査面積　3,996㎡

遺跡掘削工事　スナガ環境測設株式会社

西宮岩陰

・調査期間・発掘調査担当　平成26年４月１日～平成26年６月30日(平成26年度)、岩崎泰一(調査１課長・上席専門員)、中沢　悟(専門調査役)

調査面積　504㎡

遺跡掘削工事　スナガ環境測設株式会社

（2）整理事業

西宮遺跡　西宮岩陰

整理期間　平成28年４月１日～平成29年３月31日(平成28年度)

整理担当　大西雅弘(上席専門員)

整理期間　平成29年４月１日～平成30年３月31日(平成29年度)

整理担当　中沢　悟(専門調査役)

6．本書作成の担当者は以下のとおりである。

編集　中沢　悟(専門調査役)、大西雅広(上席専門員)

本文執筆　第１章～第４章、第５章第２節(遺物説明以外)中沢　悟(専門調査役)、第３章遺物説明　徳江秀夫(上席専門員)、第５章第１節　飯島静男(地質学者・群馬地質研究会)

デジタル編集　齊田智彦(主任調査研究員)

遺構写真　発掘調査担当者　岩崎泰一(調査１課長・上席専門員)、中沢　悟(専門調査役)

遺物写真　大西雅広(調査課長)、板垣泰之(専門員)・関　邦一(専門調査役)、津島秀章(資料第２課長)

遺物観察・観察表執筆

陶磁器　大西雅広(調査課長)・徳江秀夫(上席専門員)

金属製品　板垣泰之(専門員)・関　邦一(専門調査役))

石製品　津島秀章(資料第２課長)

保存処理　板垣泰之(専門員)・関　邦一(専門調査役)

7．発掘調査および整理事業での委託

遺構測量　株式会社　測　研

8．石材の同定は、飯島静男(地質学者・群馬地質研究会)に依頼した。

9．発掘調査および報告書の作成にあたり、山崎　健(独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所埋蔵文化財センター)、佐藤健太郎(関西大学)、群馬県教育委員会文化財保護課、長野原町教育委員会、県立文書館のご指導とご助言を得た。　長野原町教育委員会および県立文書館から絵図面の提供を得た。

10. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡　　例

1．本書で使用した座標値および方位は、日本測地系、平面直角座標系第Ⅸ系を用い、座標北で示した。調査区は、X＝61280～61412、Y＝－101200～－101284の範囲に収まる。

2．等高線・遺構断面図等に記した数値は、海抜標高を示す。

3．遺構図・遺物図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。また、遺物写真の縮尺は、実測図と同一の縮尺を原則とした。

遺構図：　１・２区遺跡全体図1/400　屋敷全体図1/160　建物1/80・1/100　建物内は1/40・1/60　畑1/80・1/100　石垣1/80　道1/150　厠1/40

これ以外の縮尺を用いる場合は、各下部にスケールを示すか、各個別に縮尺を記している。また平面図と断面図とで一部縮尺が異なる。異なる縮尺を用いた場合も、各図にスケールを示す。

遺物図：　陶磁器1/3　1/4

金属製品類(鍛冶関連遺物を含) 1/1　1/2　1/3　1/4　石器・石製品1/2　1/3　1/4　1/6

これ以外の縮尺の場合は、各図下部にスケールを示すか、各個別図に縮尺を記している。

4．遺物の掲載は、種別に限らず遺構毎に通し番号とした。

5．本書の図版に使用したスクリーントーン及びマークは、次のことを示す。

遺構平面図　灰　炭化物　灰・炭　焼土・泥流　焼土　粘土

硬化面　ローム　礫　浅間Ａ軽石

遺構断面図　攪乱

遺物実測図　炭化　　黒色　　灰　　炭　　土

6．遺構平面図中の遺物記号は、次のことを示す。

●　土器・陶磁器　　▲　石器・石製品　　■　鉄・金属製品

7．遺構の計測は、全容が計測できない遺構について残存値(　)で表記してある。

8．本遺跡で検出された畑の畝間を埋めている浅間Ａ軽石は、天明３(1783)年の浅間山噴出軽石の略である。また、「天明三年泥流」あるいは「天明泥流」は、天明３年新暦８月５日の浅間山噴火に伴う泥流堆積物の略称である。

9．遺物観察表での表現および記載法は、以下の通りである。

・遺物観察表は遺構毎とし、第６章の後ろにまとめて掲載した

・遺物計測位置の表現は、陶磁器類は口径：口、　底径・高台径：底、　器高：高と略記し、他の遺物についても長さ：長、幅、厚さ：厚、高さ：高、外径：径、孔径：孔、重さ：重と略記した。また、銭貨の内輪径は、孔と略記した。

・計測値の単位はcmとし、重量はｇで表記している。

・欠損した遺物の計測値には、(　)で現存値を記した。

10. 本書で使用した地形図は下記の通りである。

国土地理院：地形図　1:50,000 「草津」(平成11年発行)

国土地理院：地形図　1:200,000 「長野」(平成18年発行)

西宮遺跡・西宮岩陰目次

口絵
序
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
写真目次
第１章　調査の方法と経過 ……１
　第１節　調査に至る経過 ……１
　第２節　調査の方法・方針・経過 ……１
　第３節　調査区の概要 ……４
第２章　遺跡の環境 ……７
　第１節　地理的環境 ……７
　第２節　歴史的環境 ……10
第３章　西宮遺跡 ……15
　第１節　調査概要と発見された遺構と遺物 ……15
　（１）１号屋敷跡 ……15
　①１号屋敷跡の調査経過と調査概要　②敷地内での浅間Ａ軽石　③２号建物　④３号建物　⑤７号建物　⑥10号土坑　⑦１号道　⑧石垣　⑨出土遺物
　（２）２号屋敷跡 ……35
　①２号屋敷跡の調査経過と調査概要　②４号建物　③１号厠　④５号道跡　⑤出土遺物
　（３）３号屋敷跡 ……49
　①３号屋敷跡の調査経過と調査概要　②５号建物　③２号厠　④11号土坑　⑤２号集石　⑥16号石垣　⑦出土遺物
　（４）屋敷外 ……68
　①１号建物　②６号建物　③２号井戸　④１号井戸　⑤１号集石　⑥道の概要　⑦石垣　⑧１号祭祀遺構　⑨出土遺物
　（５）畑等 ……85
　①復旧溝　②石捨場　③畑　④平坦面　⑤ヤックラ　⑥１区１号道　⑦暗渠　⑧列石　⑨２区畑面で確認された植物痕　⑩明治６年の壬申地引絵図との比較
　（６）北斜面の調査 ……111
　①調査概要　②砂礫層について
第４章　西宮岩陰
　第１節　発見された遺構と遺物 ……115
　（１）調査概要　（２）調査された岩陰の平坦面
　（３）１号石造物　（４）２号石造物　（５）調査結果から考えられること　（６）出土遺物
第５章　自然科学分析 ……127
　第１節　川原畑西宮岩陰の露頭について ……127
　（１）　凝灰角礫岩
　（２）　火山礫凝灰岩
　（３）　構造等
第６章　調査成果のまとめ ……128
　第１節　上野国における馬の牡牝について ……128
　（１）江戸時代における西宮遺跡周辺の馬
　（２）発掘成果から見る牡馬と雌馬
　（３）明治時代の上野国における牡馬と牝馬
　①牡馬牝馬の数　②県内における牡馬と牝馬の住み分け　③馬の繁殖地　④去勢の実施　⑤西宮・東宮遺跡周辺の馬について
　（４）付図２　明治８年頃　上野国における馬の牡牝住み分け図について
　第２節　まとめ ……136
遺物実測図 ……138
遺物観察表 ……155
写真図版
抄録

挿図目次

第１図　西宮遺跡・西宮岩陰調査区全体図(1/1000)・・・・・・・・・・・・・・ 5
第２図　西宮遺跡基本土層 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第３図　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第４図　吾妻郡河原畑村(川原畑村)周辺の道と村 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第５図　天明泥流下の遺跡分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
第６図　２区全体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
第７図　１号屋敷全体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
第８図　１号屋敷２号建物、10号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第９図　１号屋敷２号建物断面(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第10図　１号屋敷２号建物断面(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
第11図　１号屋敷２号建物馬屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
第12図　１号屋敷２号建物１号竈、炭出土方形遺構、１号囲炉裏 ・・・ 24
第13図　１号屋敷２号建物北側12号石垣との間の土壁、焼土、炭化物(１)
・・・ 26
第14図　１号屋敷２号建物北側12号石垣との間の土壁、焼土、炭化物(２)
・・・ 27
第15図　１号屋敷３号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第16図　１号屋敷７号建物、10号土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第17図　１号屋敷12号石垣立面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第18図　１号屋敷12・13号石垣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
第19図　１号屋敷14号石垣・立面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第20図　１号屋敷17号石垣・立面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
第21図　２号屋敷全体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
第22図　２号屋敷４号建物・浅間Ａ軽石集中 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
第23図　２号屋敷４号建物壁断面、４号建物浅間Ａ軽石集中断面 ・・・ 38
第24図　２号屋敷４号建物全体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39
第25図　２号屋敷４号建物断面(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
第26図　２号屋敷４号建物断面(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
第27図　２号屋敷４号建物馬屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42
第28図　２号屋敷４号建物竈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
第29図　２号屋敷４号建物炭出土方形遺構、唐臼・Pit16 ・・・・・・・・ 46
第30図　２号屋敷４号建物１号囲炉裏 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第31図　２号屋敷1号厠・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
第32図　３号屋敷全体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第33図　３号屋敷５号建物床の痕跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第34図　３号屋敷５号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第35図　３号屋敷５号建物礎石断面(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第36図　３号屋敷５号建物礎石断面(２)、16号石垣土壁立面 ・・・・・・ 54
第37図　３号屋敷５号建物馬屋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第38図　３号屋敷５号建物１号竈 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第39図　３号屋敷５号建物炭出土方形遺構、唐臼 ・・・・・・・・・・・・・・ 59
第40図　３号屋敷５号建物１号囲炉裏・２号囲炉裏 ・・・・・・・・・・・・・ 60
第41図　３号屋敷３号厠敷２号厠 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
第42図　３号屋敷５号建物11号土坑、２号集石・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
第43図　３号屋敷16号石垣 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
第44図　３号屋敷16号石垣断面・立面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
第45図　１号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
第46図　６号建物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
第47図　６号建物断面、２号井戸・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
第48図　１号井戸 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
第49図　１号集石 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
第50図　道断面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
第51図　道全体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77・78
第52図　10号石垣・立面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 80
第53図　11号・15号石垣・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81
第54図　18号石垣 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 82
第55図　18号石垣断面・立面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
第56図　１号祭祀 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
第57図　１区復旧溝、畑全体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
第58図　１区１号復旧溝、１・２号畑・２号畑断面 ・・・・・・・・・・・・ 90
第59図　１区２号復旧溝、４・６号畑・６号畑断面 ・・・・・・・・・・・・ 91
第60図　１区３号復旧溝、５号畑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 92
第61図　１区３号畑・断面、１号道、ヤックラ・断面 ・・・・・・・・・・ 93
第62図　１区４号復旧溝、７号畑・７号畑断面・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
第63図　１区復旧溝断面、石捨場 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95
第64図　２区復旧溝、畑全体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
第65図　２区１号復旧溝 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97
第66図　２区６・13号畑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 98
第67図　２区２・４号畑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
第68図　２区２・４号畑断面、１号畑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 100
第69図　２区３号畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101
第70図　２区７号畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 102
第71図　２区８号畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 103
第72図　２区８・10・11号畑断面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 104
第73図　２区10・11号畑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 105
第74図　２区９号畑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106
第75図　２区12・５号畑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 107
第76図　１区平坦面、２区平坦面１～３ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 108
第77図　１区１・２号暗渠、１号列石全体図・１号列石断面 ・・・・・ 109
第78図　１区１・２号暗渠 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 110
第79図　２区北斜面トレンチ・断面(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 112
第80図　２区北斜面トレンチ・断面(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 113
第81図　２区北斜面トレンチ・断面(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 114
第82図　西宮岩陰の位置と立地・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 117
第83図　１号石造物全体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
第84図　１号石造物出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 119
第85図　１号石造物断面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 120
第86図　１号石造物(１ａ・１ｂ)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 121
第87図　１号石造物(１ｃ・１ｄ・１ｅ) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 122
第88図　１号石造物１ａ・１ｂ・１ｄ・１ｅ立面 ・・・・・・・・・・・・・・・ 123
第89図　２号石造物全体 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 124
第90図　発掘調査以前に存在していた石造物(現在は移設済み)・・・・ 125
第91図　絵図に描かれている西宮岩陰周辺 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 126
第92図　明治８年頃　上野国における馬の牡牝住み分け図 ・・・・・・ 131
第93図　１号屋敷２号建物出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
第94図　１号屋敷２号建物出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
第95図　１号屋敷２号建物出土遺物(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 140
第96図　１号屋敷２号建物出土遺物(４)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 141
第97図　１号屋敷12・13・14号石垣出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 142
第98図　２号屋敷４号建物出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 143
第99図　２号屋敷４号建物出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 144
第100図　３号屋敷５号建物出土遺物(１)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 145
第101図　３号屋敷５号建物出土遺物(２)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 146
第102図　３号屋敷５号建物出土遺物(３)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 147
第103図　１号建物、６号建物、１号井戸、１号集石出土遺物 ・・・・ 148
第104図　11号・15号石垣、３号・５号畑出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・ 149
第105図　泥流面からの出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 150
第106図　ヤックラ、トレンチ、1号祭祀からの出土遺物 ・・・・・・・・・ 151
第107図　西宮岩陰１号石造物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 152
第108図　西宮岩陰１号石造物履土 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153
第109図　西宮岩陰２号石造物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 154

表 目 次

第１表　西宮遺跡・西宮宮殿調査経過 ・・・

3　4号建物前庭部浅間A軽石A・B・C　南から
4　4号建物前庭部浅間A軽石A・B・C断面　南から
5　4号建物馬屋　南から
6　4号建物馬屋　南から
7　4号建物馬屋履上上の土壁断面　南から
8　4号建物馬屋履上上の土壁とオガラと思われる痕跡　南東から

P L．18　1　4号建物馬屋桶断面　天明泥流で埋没　南から
2　4号建物馬屋桶　北から
3　4号建物馬屋桶　タガと側板痕跡有　南から
4　4号建物馬屋桶断面　桶の底面と周辺にローム　南から
5　4号建物馬屋、上間　南から
6　4号建物上間　南から
7　4号建物竈　南から
8　4号建物竈　南から

P L．19　1　4号建物竈　泥流で側壁の石が北側に倒れる　西から
2　4号建物竈　南から
3　4号建物竈掘り方　南から
4　4号建物竈　据えられた側壁石の痕跡　南から
5　4号建物竈掘り方　南から
6　4号建物炭出上方形遺構　南から
7　4号建物唐臼支脚穴・唐臼抜取穴　南から
8　4号建物唐臼抜取穴天明泥流で埋没　南から

P L．20　1　4号建物１号囲炉裏　南から
2　4号建物１号囲炉裏　南から
3　4号建物１号囲炉裏遺物出上状況　南から
4　4号建物１号囲炉裏遺物出上状況　南から
5　4号建物上壁　南から
6　4号建物上壁　西から
7　1号厠１・２号桶　南から
8　1号厠１号桶断面　天明泥流で埋没　南から

P L．21　1　1号厠１号桶　桶の底面と周辺にローム、東から
2　1号厠２号桶断面　天明泥流で埋没　南から
3　1号厠２号桶　タガと側板痕跡有　南から
4　1号厠床下部分　地山には大量の石　南から
5　1号厠１・２号桶　南から
6　1号厠１・２号桶断面　西から
7　5号道　北から
8　5号道断面　南西から

P L．22　1　4号建物北側14号石垣下部分遺物出上状況　南東から
2　4号建物北側14号石垣下部分遺物出上状況　南東から
3　4号建物出上遺物No１・３
4　4号建物出上遺物No７
5　4号建物出上遺物No２
6　4号建物出上遺物No５
7　4号建物出上遺物No６・11・12・10
8　4号建物出上遺物No９

P L．23　1　3号屋敷全景(空撮)
2　3号屋敷全景　東から

P L．24　1　3号屋敷全景　南西から
2　5号建物全景　西から

P L．25　1　5号建物床板・大引・根太の痕跡　西から
2　5号建物床板・大引・根太の痕跡　南から

P L．26　1　5号建物床板・大引・根太の痕跡　南から
2　5号建物床板・大引・根太の痕跡　南東から
3　5号建物床板・大引・根太の痕跡　南西から
4　5号建物床板・大引・根太の痕跡　東から
5　5号建物作業風景
6　5号建物北側泥流上に移動した床板痕跡　南西から
7　5号建物大引・根太の痕跡　南から
8　5号建物大引・根太の痕跡　西から

P L．27　1　5号建物礎石No28に残った上台痕跡　南から
2　5号建物礎石No28に残った上台痕跡約15cm幅　南から
3　5号建物礎石No27に残った床束痕跡　南から
4　5号建物礎石No27に残った床束痕跡約12cm
5　5号建物北側礎石列と雨落溝　西から
6　5号建物礎石列と西側雨落溝　南から

P L．28　1　5号建物北側西端礎石列と雨落溝　東から
2　5号建物北側礎石列と雨落溝　西から
3　5号建物馬屋　北から
4　5号建物馬屋　南から
5　5号建物馬屋桶　タガと側板の痕跡残る　南から
6　5号建物馬屋桶断面　桶の底面と側面にローム　南から
7　5号建物上間断面　南から
8　5号建物竈　天明泥流により壊されている　南から

P L．29　1　5号建物竈　南から
2　5号建物竈　南から
3　5号建物竈　南から
4　5号建物竈　東から
5　5号建物竈　南から
6　5号建物竈掘り方　南から
7　5号建物炭出上方形遺構　南から
8　5号建物炭出上方形遺構断面　天明泥流で埋没　南から

P L．30　1　5号建物炭出上方形遺構　西から
2　5号建物炭出上方形遺構　南から
3　5号建物唐臼支脚穴と唐臼抜取穴　南から
4　5号建物唐臼支脚穴　南から
5　5号建物１号囲炉裏検出状況　南から
6　5号建物１号囲炉裏灰層・焼上面断面　南から
7　5号建物１号囲炉裏灰層・焼上断面　南から
8　5号建物１号囲炉裏灰層の焼上下から平石　南から

P L．31　1　5号建物１号囲炉裏断面　南から
2　5号建物１号囲炉裏掘り方　南から
3　5号建物１号囲炉裏　南から
4　5号建物２号囲炉裏　南から
5　5号建物２号囲炉裏　南から
6　5号建物炭集中　南から
7　5号建物上壁　南から
8　5号建物上壁　南から

P L．32　1　5号建物北側16号石垣に押しつけられて残った上壁　南西から
2　5号建物上壁２　南東から
3　5号建物上壁２　貫と小舞の痕跡あり　南から
4　5号建物上壁５・６　南から
5　5号建物上壁５　貫と小舞の痕跡あり　南から

P L．33　1　2号厠全景　南西から
2　2号厠　北から
3　2号厠断面　タガと側板痕跡有　南西から
4　2号厠１号桶　桶の底面と側面にローム　南西から
5　2号厠断面　南西から
6　2号厠断面　北から
7　11号土坑　東から
8　11号土坑断面　南から

P L．34　1　2号集石　南から
2　2号集石　西から
3　16号石垣　南東から
4　16号石垣上段と下段で使用される石の大きさが違う　南から
5　16号石垣　南から
6　16号石垣断面　南西から
7　16号石垣上段と下段の石垣で位置がずれている　東から

P L．35　1　5号建物出上遺物No８～10・12～16・19　東から
2　5号建物出上遺物No８～16・19　東から
3　5号建物出上遺物No20　南から
4　5号建物出上遺物No３　東から
5　5号建物出上遺物No11　東から
6　5号建物出上遺物No４　西から
7　5号建物出上状況　南東から
8　5号建物出上遺物No22　東から

P L．36　1　5号建物出上遺物No23
2　5号建物出上遺物No25・26　南西から
3　5号建物出上遺物No25　南西から

4　1号建物全景　南から
5　1号建物全景　南から
6　1号建物(平成20年度調査)　南から
7　1号建物炉(平成20年度調査)
8　1号建物出土遺物No２　12号石垣の一部の可能性有
P L．37　1　6号建物全景　南から
2　6号建物全景　南から
3　6号建物全景　視見で全体不明瞭　北から
4　6号建物　西から
5　6号建物桶　南から
6　6号建物１号桶　西から
7　6号建物１号桶断面　南から
8　6号建物１号桶断面　南西から
P L．38　1　6号建物炉　南から
2　6号建物出土遺物No２　南から
3　1号井戸　北から
4　1号井戸　南から
5　1号井戸断面　南から
6　1号井戸石積状況　南から
7　2号井戸　南から
8　2号井戸　南から
P L．39　1　2区道全景　南西から
2　1号集石　東から
3　1号道　南から
4　2号道　東から
5　2・3・6号道　北から
P L．40　1　4号道　北から
2　5号道　南から
3　10号石垣　東から
4　10号石垣　南から
5　10号石垣断面　南から
6　18号石垣　南西から
7　18号石垣　東から
8　18号石垣　東から
P L．41　1　1号祭祀、11号石垣　南から
2　1号祭祀　南西から
3　1号祭祀　南西から
4　1号祭祀　北から
5　11号石垣出土遺物No１　南から
P L．42　1　1区北側全景　北東から
2　1区南側全景(空撮)
P L．43　1　1区２・３号復旧溝、6号畑　南西から
2　1区６号畑、２号復旧溝　南東から
3　2・3号復旧溝　北西から
4　1区４号復旧溝　北西から
5　1区４号復旧溝、７号畑　北西から
P L．44　1　2区１号復旧溝　北東から
2　2区１号復旧溝　南東から
P L．45　1　1区石搗場　南東から
2　1区１号・４号畑、２号復旧溝　南東から
3　1区石搗場、２号畑　北東から
4　1区２号畑　北東から
5　1区２・３号畑、ヤックラ　南西から
P L．46　1　1区３号畑　西から
2　1区６号畑　北東から
P L．47　1　2区南東部畑全景　北東から
2　2区西部畑全景　南西から
P L．48　1　2区３号畑　南西から
2　2区４号畑　東から
3　2区５号畑　東から
4　2区６号畑　南西から
5　2区７号畑　東から
6　2区７号畑　東から
7　2区８号畑　南から
8　2区９号畑　南から
P L．49　1　2区10号畑　西から
2　2区11号畑　東から
3　2区12号畑　西から
4　2区13号畑　南から
5　1区６号畑内平坦面　北東から
6　1区平坦面　南東から
7　1区ヤックラ　南東から
8　1区ヤックラ　南東から
P L．50　1　1区ヤックラ　北西から
2　1区ヤックラ断面Ｊ－Ｊ’　南東から
3　1区ヤックラ断面Ｌ－Ｌ’　南東から
4　1区ヤックラ断面Ｌ－Ｌ’　北から
5　1区１号道　北東から
6　1区１号道　北西から
7　1区１号暗渠　北西から
8　1区１・２号暗渠　北西から
P L．51　1　1区２号暗渠　北西から
2　1区２号暗渠　北西から
3　1区石列　北東から
4　1区列石　北西から
5　1区２号畑面植物痕　北西から
6　1区２号畑面植物痕
7　1区６号畑面植物痕　北東から
8　1区６号畑面植物痕　北東から
P L．52　1　1号トレンチ　南東から
2　2号トレンチ　南から
3　3号トレンチ　南から
4　4号トレンチ　南から
5　5号トレンチ　南から
6　6号トレンチ　南東から
7　7号トレンチ　南から
8　8号トレンチ　西から
P L．53　1　8号トレンチ浅間Ａ軽石少量あり　南西から
2　8号トレンチ５号石垣付近　南西から
3　8号トレンチ　南西から
4　9号トレンチ　南から
5　9号トレンチ　西から
6　10号トレンチ　南西から
7　11号トレンチ　南西から
西宮岩陰
P L．54　1　1号石造物調査前風景　東から
2　東側１ａ・１ｂ号石造物、平地面、平石　南西から
P L．55　1　1号石造物調査前風景　南東から
2　1号石造物１ａ・１ｂ号石造物　東から
3　1号石造物１ａ・１ｂ号石造物　南から
4　1号石造物１ａ・１ｂ号石造物　西から
5　1号石造物１ｂ号石造物　南西から
6　1号石造物１ｂ号石造物　南から
7　1号石造物１ｂ号石造物　南東から
8　1号石造物１ｃ号石造物　南から
P L．56　1　1号石造物１ｄ号石造物　南から
2　1号石造物１ｅ号石造物　南から
3　1号石造物東側の平坦面　東から
4　1号石造物平坦面と南側の石垣　南東から
5　岩頭上部２号石造物調査前　北から
6　岩頭上部２号石造物　北から
7　岩頭上部２号石造物　南から
8　平成29年８月現在の西宮岩陰　南から
P L．57　1号屋敷２号建物出土遺物(１)
P L．58　1号屋敷２号建物出土遺物(２)
P L．59　1号屋敷２号建物、12・13・14号石垣、４号建物出土遺物(１)
P L．60　2号屋敷４号建物出土遺物(２)
P L．61　3号屋敷５号建物出土遺物(１)
P L．62　3号屋敷５号建物出土遺物(２)
P L．63　出土遺物出(１)
P L．64　出土遺物出(２)
P L．65　岩陰１号石造物(１)
P L．66　岩陰１号石造物(２)・岩陰２号石造物

第１章　調査の方法と経過

第１節　調査の方法と経過

吾妻川は、その源を群馬・長野県境の鳥居峠に発し、浅間山・草津白根山の中間を東流して万座川・熊川・白砂川等の支流を合わせ、途中、吾妻峡と称される美観をつくりながら、さらに温川・四万川・名久田川等の支流を合わせ、渋川市付近で利根川と合流する全長76.2㎞の一級河川である。

八ッ場ダムは、その吾妻川の中流に建設され、①洪水調節、②流水の正常な機能維持、③水道及び工業用水の新たな確保並びに発電を目的とする多目的ダムで、天端標高586m、堤高116m、湛水面積約3.0㎢、総貯水容量1.075億㎥の規模を測る重力式コンクリートダムである。ダム位置は、左岸が群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字八ッ場、右岸が大字川原湯字金花山にあり、名勝「吾妻峡」の入口部付近にあたる。

八ッ場ダム建設計画は、「昭和24年利根川改修改定計画」の一環として、昭和27年５月に調査着手後、平成４年７月、「八ッ場ダム建設事業に係る基本協定書」及び「用地補償調査に関する協定書」が締結されることによって本格着工となった。

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関しては、平成６年３月18日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結され、埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定した。これにより、委託者である建設省関東地方建設局長と受託者である群馬県教育委員会教育長とが年度区分ごとに発掘調査受委託契約を締結のうえ、以後発掘調査が実施されることが決定したのである。

この協定を踏まえて、平成６年４月１日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受委託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約を締結し、八ッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とする八ッ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。

平成11年４月１日には、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の間で、「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書（第１回変更）」が締結され、発掘調査受委託契約についての変更が行われた。これにより、受託者が群馬県教育委員会教育長から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長へ変更となり、現在の調査体制に至っている。

また、平成17年４月１日、同協定書（第２回変更）の締結により、発掘調査の業務完了期日が、「平成18年３月31日」から「平成23年３月31日」まで延長、平成20年３月31日、同協定書（第３回変更）の締結により、発掘調査の業務完了期日が「平成28年３月31日」まで延長、平成28年３月25日、同協定書（第４回変更）の締結により、発掘調査の業務完了期日が「平成29年３月31日」まで延長、平成29年３月29日、同協定書（第５回変更）の締結により、発掘調査の業務完了期日が「平成32年３月31日」まで延長された。

西宮遺跡は長野原町大字川原畑字西宮地内に所在する。これまでに発掘調査は平成20年度（平成20年11月１日～12月26日と平成26年度（平成26年４月１日～６月30日）の２ヶ年度にわたって実施された。西宮岩陰は、西宮遺跡と同時に調査を実施した。

第２節　調査の方針・方法・経過

１　調査の方針

西宮遺跡は、東宮遺跡の西に接しており、これまでの東宮遺跡の発掘成果から、集落の中央にある道に沿って作られている屋敷や建物、多くの畑や石垣等の存在、および天保８年・12年の絵図や古文書・明治６年の壬申字引絵図等の検討から、江戸時代天明３年の泥流により、埋没した上野国吾妻郡川原畑村の一部であることが明らかとなってきた。川原畑村の中でも、吾妻川に近い段下にある集落の一部であり、その中でも、西宮名所と呼ばれている集落であろうと思われる。そこで、以上の経緯

を踏まえた上で、調査方針は、「集落の構成要素である遺構(屋敷・畑・溝・石垣・井戸・道など)を精査し、記録保存を実施するとともに、集落の全体像(景観)を追求すること」とした。

２　調査の方法

西宮遺跡は、主に、吾妻川中位河岸段丘面上に立地し、厚さ50cm～1.5mの天明泥流に被覆されている。

調査は、まず、バックホーを使用することにより、天明泥流の除去作業から始めた。その後、発掘作業員で、ジョレンや移植ゴテ等による遺構の検出作業、並びにトレンチ掘削や截ち割り作業等により、遺構調査を実施した。

遺物取り上げについては、遺構別地点別取り上げを基本とし、遺物の所属が明らかでない遺物に関しては、遺構外遺物として通番で取り上げた。遺構平面測量にあたっては、測量業者委託によるデジタル測量を基本として、縮率1/10・1/20・1/40を基準に、縮率を適宜選択して実施した。遺構断面測量も平面測量に準じた。

遺構写真については、委託業者による航空写真撮影(ラジコンヘリ使用)、現場担当者による地上写真、並びに高所作業車使用による高所写真撮影を行った。現場担当者による撮影には、デジタルカメラ(Canon　EOS　Kiss　Digital　N)と６×７版モノクロネガフィルムを使用した。

３　調査の経過

発掘調査は、平成20年11月１日から12月26日および、平成26年４月１日から６月30日まで実施された。発掘調査期間内の個別遺構調査進行状況については、「第１表　西宮遺跡・西宮岩陰調査経過」の通りである。

(１)平成20年度の調査

１区の調査は、土を調査区域外に出さないように、調査区域南側半分を先に調査し、次に北側半分の調査を実施した。

旧ＪＲの線路近くの１区および１区北側に位置する２区の一部の調査を実施した。１区ではＪＲの線路に近い部分は、危険を伴うために発掘調査ができたのは線路から北側10m前後離れた範囲の調査となった。発掘調査により、天明三年の浅間山噴火に伴う泥流堆積物(以下、「天明泥流」と略す)に埋没した畑・ヤックラが全面で確認された。またその畑の下には大量の石を溝の中に埋めている暗渠と列石が確認されている。また天明泥流の上から掘り込んでいる復旧溝が畑の約半分の面積で確認された。２区は調査範囲中央部に水道本館が埋設してあり、それを避けながらの狭い範囲での調査であった。調査の結果１号建物の一部、および礎石や柱穴を持つ２号建物の一部を確認した。建物裏の石垣には焼けた土壁が押し付けられたように残っており、そこに炭化した土壁の芯に組まれている小舞が残っていた。天明泥流の埋没段階では、すでに焼失していた建物と思われる。また畑や石垣等を調査した。調査範囲が狭いので詳しくは、次回以降の調査となった。

(２)平成26年度の調査

西宮遺跡

２区の調査を実施した。平成20年度の段階で調査区中央に埋設してあった水道本館は撤去されていたので、全面を発掘調査することが可能となった。調査区は斜面であり、１～９号石垣がある。これらの石垣の大部分は天明泥流以降に積まれたものが多いが、東宮の発掘調査例から、天明段階で存在した石垣の上に作られている可能性がある。そこで天明以降であることを確認したのちに、石垣１・３は部分的に立面図を作成し、他の石垣は写真撮影後撤去した。

発掘調査は北側斜面部分の遺構確認から開始した。１～10号のトレンチを設定し、１～７号トレンチでは、泥流が無く遺構も無かった。８号トレンチでは、復旧溝と思われる遺構がわずかに残っていた。９号トレンチは、南北に長いトレンチを設定した。低い南側では天明泥流とその下に浅間Ａ軽石(As-A)があり、畑が確認された。北側には石垣があり、石垣の上には明瞭な天明泥流は無く、畑等の遺構は、残っていなかった。10号トレンチ南部分は、泥流が確認され、南側からは畑が確認された。発掘調査は、10号トレンチから南に遺構があることが確認されたので、北側から泥流を除去して発掘を実施した。その結果、平成20年度に部分的に調査した１号建物・２号建物・石垣・畑等を含む、建物７棟・厠２基・道６本・井戸２基・石垣９基・畑・土坑等を調査した。

第１表　西宮遺跡・西宮岩除調査経過

区	遺構		20年度 11月 前	20年度 11月 後	20年度 12月 前	20年度 12月 後	26年度 4月 前	26年度 4月 後	26年度 5月 前	26年度 5月 後	26年度 6月 前	26年度 6月 後	備考
１区	表土・泥流除去		■	■									
		復旧廃	■	■	■								
		畑		■	■								
		平坦面			■								
		列石		■									
		２面１号暗渠		■									
		２面２号暗渠		■	■								
２区	遺構確認調査(北側斜面)						■	■					
	１～９号石垣						■	■					
	１～10号トレンチ						■	■					
	11号トレンチ										■		
	表土・泥流除去			■				■	■				
	１号屋敷	２号建物				■			■	■	■	■	
		３号建物									■	■	
		７号建物										■	
		10号土坑								■	■		
		12号石垣			■			■		■			
		13号石垣									■	■	
		14号石垣							■				
		17号石垣									■	■	
	表土・泥流除去								■	■			
	２号屋敷	４号建物							■	■	■	■	
		１号廻								■	■		
		５号道								■			
	表土・泥流除去								■	■			
	３号屋敷	５号建物							■	■	■	■	
		２号廻								■	■	■	
		11号土坑										■	
		２号集石										■	
		16号石垣										■	
		６号畑									■		
	表土・泥流除去				■	■							
	屋敷外	１号建物			■							■	
		６号建物									■	■	
		１号井戸							■	■	■	■	
		２号井戸									■	■	
		１号集石									■	■	
		１号道									■	■	
		２号道										■	
		３号道										■	
		４号道							■				
		６号道								■			
		10号石垣					■	■			■	■	
		11号石垣			■				■	■			
		15号石垣									■		
		18号石垣										■	
		１号平坦面				■				■			
		２号平坦面								■			
		３号平坦面								■			
		１号畑							■	■			
		２号畑							■	■			
		３号畑							■	■			
		４号畑									■		
		５号畑									■		
		６号畑									■	■	
		７号畑									■		
		８号畑								■	■		
		９号畑					■	■					
		10号畑					■	■					
		11号畑					■	■					
		12号畑									■		
		１号祭祀遺構									■	■	
岩除	遺構確認調査							■	■				
	１～５号台座調査									■	■	■	
	石垣調査										■	■	
	平地面調査							■	■	■	■		
	岩上６号台座調査											■	

西宮岩陰

西宮岩陰は、西宮遺跡の北西の高い斜面に位置する。大きな岩の手前に石垣を築き、平らな面を造成している。天保８年及び天保14年の絵図にはそこに社と思われる建物が立っている。発掘時ではすでに移転されており、検出されなかった。

調査前には、岩陰に庚申塔２基と御嶽山大権現遙拝所と記された石造物が１基、岩の頂上には宝篋印塔１基の石造物が安置されていた。発掘の結果、石造物や石造物の土台の石、陶磁器・銭等が出土した。絵図の書かれている階段状の遺構は残っていなかった。

（３）整理事業の経過

整理事業は、平成28年４月１日から平成29年３月31日および平成29年４月１日から平成30年３月31日まで実施した。平成28年度の作業は、遺構平面図類および遺構写真の確認から開始し、出土遺物の分類作業を行った。併せて遺構写真の選定を行った。遺物については、７月から陶磁器類、金属製品、石製品といった種別ごとに、接合・復元、掲載遺物の選定、写真撮影、実測作業、これら遺物図のトレース作業を行う。

平成29年度の整理は、本文原稿及び、遺構図の編集、報告書版下のレイアウト作成、全体のデジタル編集作業およびデジタル組版を行い、平成30年１月に印刷・製本を業者委託して３月に発掘調査報告書を刊行した。また、整理した遺物や写真等については、管理台帳を作成し、活用に備えて遺物や資料類の収納作業を行い、すべての整理業務を完了した。

第３節　調査区の概要

１　調査区の設定

平成６年度から始まった八ッ場ダム建設に伴う発掘調査においては、遺跡名称の略号やグリッドの設定などについて、「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき進められている。以下、本報告書でもそれに準拠し、必要部分について掲載する。

調査における遺跡番号は、八ッ場ダム建設に関わる長野原町の大字５地区（１：川原畑、２：川原湯、３：横壁、４：林、５：長野原）、東吾妻町の大字３地区（６：三島、７：大柏木、８：松谷）に番号を付し、八ッ場ダムの略号（YD）に続ける。ハイフン以下は各地区内に所在する遺跡に対して調査順に通し番号を付し、遺跡番号とする。西宮遺跡は「YD １-08」西宮岩陰「YD １-09」である。

基準座標は、国家座標（2002年４月改正以前の日本測地系）に基づく平面直角座標第Ⅸ系（日本測地系）を使用し、東吾妻町大柏木付近を原点（座標値X=+58000.0、Y=-97000.0）とした１km方眼を基点として60の区画を設定し、この大グリッドを「地区」と呼ぶ。本遺跡はこのNo.35に所在する。さらに、１km方眼を南東隅から100m方眼の１～100に区画し、この中グリッドを「区」とする。南東隅を１とし、東から西へ連続する10単位を南から北へ配列し、北西隅を100として完結するよう配置する。

「区」の100m方眼は、さらに４m方眼で625区画に分割され、その４m方眼の小グリッドを「グリッド」と呼ぶ。なお、小グリッドの東西にはA～Yまでのアルファベットを、南北には１～25までの算用数字を用いながら、南東隅を基点としグリッドを呼称する。

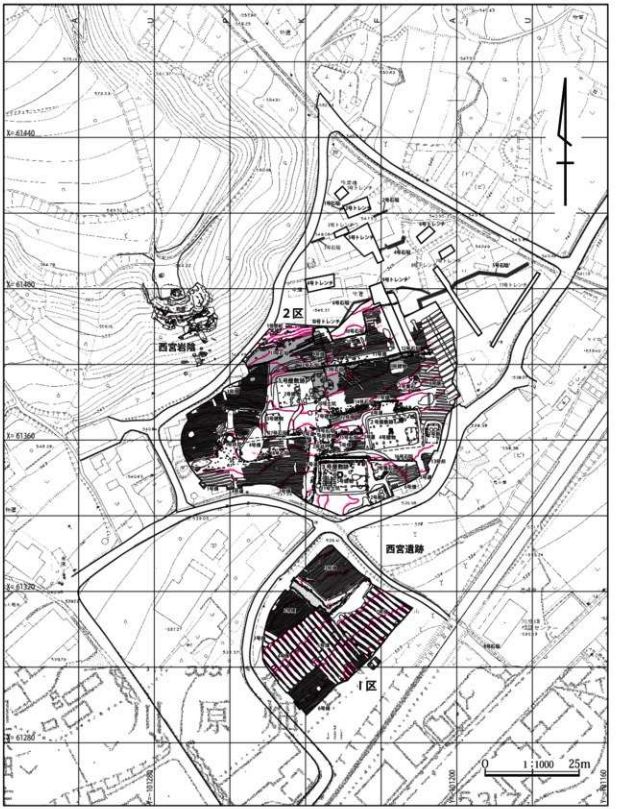
また、遺構図や本文中の記載において、特に混乱が予想されない場合は地区番号を略して用いている。

２　調査前の状況

１区は、町道南でＪＲ吾妻線線路北側、西側は町道、東側は水路までの範囲である。２区は、１区北側で、南・西・北側を町道に囲まれ、東側には境川があり、東宮遺跡との境となっている。調査区域内には20年ほど前まで９軒の住宅が存在した。

調査区は北が高く、南に向かって低くなる傾斜面である。南北の調査区150mの範囲での高低差は17.5mと大きい。東西方向では西側が低く、東宮のある西側部分が高くなっており、東西の調査区110mの範囲での高低差は３mである。

表土及び天明泥流堆積物の厚さは、１区南側のJR付近で0.5m、２区に近い北端で1.4m、２区では南西部分が最も厚く1.5m、調査区中央部分では1.2mとなっている。２区の北側１～７号トレンチ部分では、明瞭な天明泥流の堆積が無かった。８～10号トレンチ部分では、北側では明瞭な天明泥流は、なかったが南側では残っていた。



第１図　西宮遺跡・西宮岩陰調査区全体図(1/1000)

３　基本土層

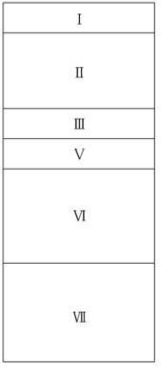
西宮遺跡は、吾妻川中位河岸段丘面上に立地し、最上位段丘面との境界を形成する段丘崖により、北西側の遺跡範囲は区画されている。天明泥流は、標高543.0m以上の高さまで到達していると思われるが、その高さ付近では薄く、泥流に覆われた遺構を確認することはできなかった。天明泥流の発生日時は、天明三年(1783年)７月８日(新暦８月５日)である。

天明泥流の直下には、浅間Ａ軽石(As-A軽石)が約１cmの厚さで堆積している。浅間Ａ軽石降下日時は、新暦７月27～29日と推測されている(関俊明 2003)。本遺跡に堆積する浅間Ａ軽石の降下日時を新暦７月27～29日頃とすると、泥流発生日時との間には１週間ほどの時間差が存在したこととなる。４号建物の庭に堆積した浅間Ａ軽石を１ヶ所に集めて厚く堆積していた場所の存在等から、浅間Ａ軽石降下後に作業を行っていることがわかる。

１号屋敷２号建物の北側12号石垣の一部から建物の雨落溝付近に、多くの炭化した建築部材や土壁が焼けたと思われる焼土・炭等が出土している。これらの堆積物は、浅間Ａ軽石(As-A軽石)の上に位置している。浅間Ａ軽石(As-A軽石)降下後、天明泥流で埋まるまでの間で火災にあったものと思われる。

以下、第２図として西宮遺跡における基本土層模式図を掲載しておく。場所は９号トレンチ部分である。

参考文献
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『長野原一本松遺跡(１)』第287集
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『八ッ場ダム発掘調査集成(１)』第303集
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』第319集
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2011『東宮遺跡』(１)－遺構・建築部材編－第514集
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2012『東宮遺跡』(２)－遺物編－第536集
公益財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団　2017『東宮遺跡』(３)第628集



第２図　西宮遺跡基本土層

Ⅰ層：暗褐色土(10YR3/3)。現在の耕作土及び表土。

Ⅱ層：黄褐色土(10YR5/8)。10～15cmの礫を多く含む。(２区の北側に厚く堆積。１区にはない・昭和10年９月25日の山津波等による崩壊土？)

Ⅲ層：暗褐色土(10YR3/4)。天明三年(1783年)浅間山噴火に伴う泥流堆積物(天明泥流)。径５～10cm礫15～30％混入する。

Ⅳ層：浅間Ａ軽石(As-A：1783年)。発泡のよい白色軽石。径２～４mmの軽石が主体。畑面や建物の雨落溝に多く堆積している。少量ではあるが、径10mm大の同質の軽石を含む。

Ⅴ層：黒褐色土(10YR2/2)。粒子細かく、締まり・粘性ともに弱い。畑の耕作土等。

Ⅵ層：黒褐色土(10YR3/2)。粒子細かく、締まり・粘性とも、Ⅳ層より強い。白色或いは黄色軽石粒３～５％混入する。

Ⅶ層：黄褐色土(10YR5/8)。拳大から人頭大の角礫を含む。崩壊土。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

長野原町は群馬県北西部、吾妻郡の南西隅に位置する。町域の北部を吾妻川が東流し、川を挟んで北西には草津白根山、南西には浅間山が位置する。また東部には、吾妻川より北側に高間山(1342m)や王城山(1123m)、南側に丸岩(1124m)や菅峰(1474m)、浅間隠山(1757m)、鼻曲山などが南北に連なる。長野原町は、その地形の特徴から、高間及び白根の両山系と菅峰に挟まれた吾妻川流域地帯の北部と浅間高原地帯の南部とに大別される。

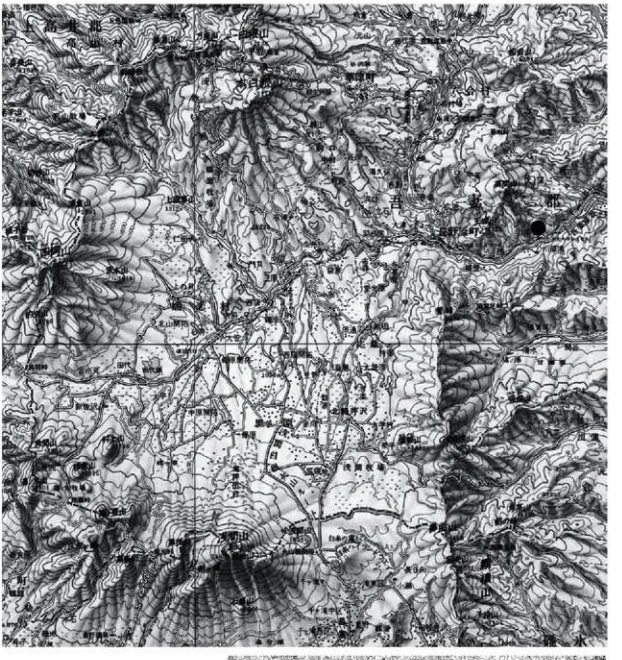
吾妻川は、長野県境の鳥居峠(1362m)付近に水源を発して東流し、町域のほぼ中央では川幅をやや広くするものの、東端では第三紀層を刻んで吾妻渓谷を形成している。その支流は、両岸の山地から発する河川や渓流が多く、左岸には草津白根山麓から発する万座川や赤川、遅沢川、上信越国境の白砂山麓から発する白砂川などが南流する。また右岸には、浅間山麓から発する小宿川や、鼻曲山麓から発する熊川などが北流する。流長76.2kmの吾妻川は、渋川市街地付近で、全長322kmの利根川に合流する。

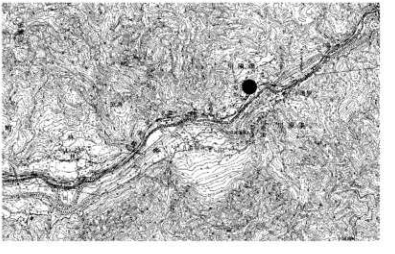
長野原町は、地質構造上では那須火山帯と富士火山帯が接する付近にあるため、周囲の山地は火山活動により形成された火山性山地が多く、浅間山や白根山は現在も活動を続ける。高間山や王城山、菅峰も約100 ～ 90万年前頃活動していた火山であるが、現在は浸食が進みほとんど原形を止めていない。菅峰火山から流出した溶岩が断層によって独立したものが「丸岩」である。丸岩は南側を除いた三方が100mにも達する垂直の崖に囲まれ、吾妻川方面から望むと巨大な円柱状に見える特徴的な岩峰である。それは、長野原・横壁・林・川原湯・川原畑の八ッ場ダム関連の５地区どこからでも望むことができるランドマークとなっている。

吾妻川両岸には、吾妻川からの比高差を基準に、最上位・上位・中位・下位の４段階の河岸段丘面が形成されている。現在の吾妻川からの平均的な比高差は、最上位段丘で約80～90m、上位段丘で約60～65m、中位段丘で約30～50m、下位段丘で約10～15mを測る。

長野原町の地質形成に大きな影響を与えた火山が浅間山である。町域の南西部、長野県境に位置し、古い方から黒斑山・仏岩・前掛山・釜山の４つの火山体で構成される標高2568mの成層山である。約2.1万年前の黒斑火山の噴火では、山体崩壊によって「応桑泥流」が発生した。この泥流堆積物は、当時の河床を数十mの厚さで埋めており、その後の浸食によって吾妻川両岸に最上位と上位の河岸段丘面が形成されたといわれる。浅間山はその後も多くの火山噴出物を堆積させているが、特に町域では浅間草津黄色軽石(As-YPk：1.3～1.4万年前)の堆積が顕著である。また、浅間Ｂテフラ(As-B：1108年)や浅間粕川テフラ(As-Kk：1128年)も平安時代の黒色土中に数cmの厚さで確認できる。さらに天明三年(1783年)の噴火により発生した泥流は、下位段丘面や中位段丘面を平均約１mの厚さで覆っている。

西宮遺跡は、標高約532～550mの吾妻川左岸中位河岸段丘面上の大字川原畑字西宮に所在し、高間山の南東麓に位置する。高間山頂から吾妻川左岸に露出する川原湯岩脈(国指定天然記念物)の方向へは、南に延びる細長い尾根が張り出しており、尾根の東、川原畑地区内を流れる戸倉沢(とくらざわ)・ミョウガ沢・境沢(さかいさわ)・松葉沢(まつばざわ)・八ッ場沢(やんばざわ) ・穴山沢(あなやまざわ)、その支流の鈴沢(すずざわ)と温井沢(ぬくいざわ)等の渓流は、すべて高間山及びこの尾根に源を発している。従って、川原畑地区内の渓流は、源流付近では東流し、中・下流から吾妻川へ流れ込む付近にかけて、次第に南流する傾向がある。本遺跡は、東側の境沢、西側の戸倉沢に区画された中位河岸段丘上の平坦地に主として立地している。

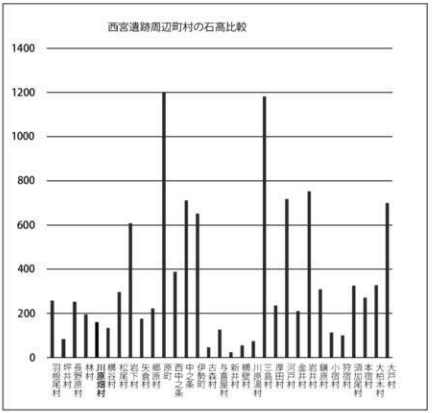




第３図　遺跡位置図(国土地理院1/200000地形図「長野」平成18年11月１日発行・1/50000地形図「草津」平成11年１月１日発行を使用

第２表　川原畑村周辺における元禄16年(1703)の石高一覧

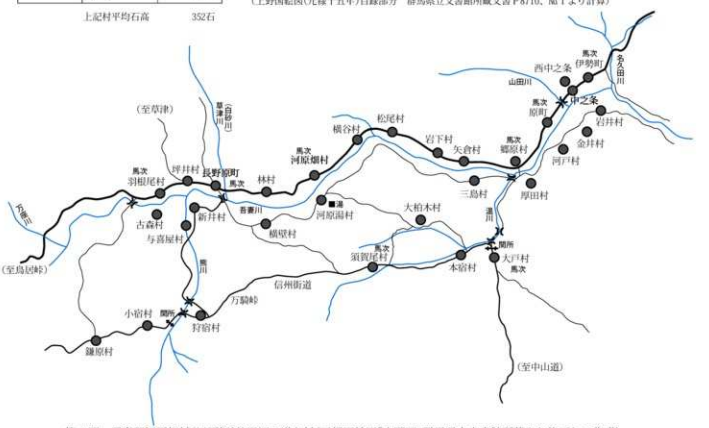
区域	町村名	石高
吾妻川左岸	羽根尾村	258.278
	坪井村	84.315
	長野原町	252.479
	林村	195.415
	川原畑村	159.913
	横谷村	134.357
	松尾村	296.733
	岩下村	607.95
	矢倉村	175.513
	郷原村	223.082
	原町	1198.732
	西中之条	387.862
	中之条	711.508
	伊勢町	652.227
吾妻川右岸	古森村	46.304
	与喜屋村	126.321
	新井村	24.049
	横壁村	55.272
	川原湯村	73.705
	三島村	1181.89
	厚田村	235.466
	河戸村	717.732
	金井村	210.377
	岩井村	752.884
信州街道	鎌原村	309.154
	小宿村	113.294
	狩宿村	99.919
	須加尾村	325.782
	本宿村	271.243
	大柏木村	327.401
	大戸村	699.55
	上記村平均石高	352石



『群馬県史』資料編11付録郷村変遷の元禄16年の資料により作成

県内平均石高　404石

(上野国絵図(元禄十五年)目録部分　群馬県立文書館所蔵文書Ｐ8710、№１より計算)



第４図　吾妻郡河原畑村(川原畑村)周辺の道と村(元禄国絵図「上野国」群馬県立文書館所蔵より修正して作成)

第２節　歴史的環境

１　八ッ場地域の歴史的環境

西宮遺跡では、大部分が江戸時代天明泥流下の遺構である。そこで旧石器時代から近世までの遺構や遺物について概略を説明し、江戸時代を中心とした周辺の遺跡について説明する。

旧石器時代

長野原町においては旧石器時代の遺物は現在のところ出土していない。

縄文時代

吾妻川およびその支流沿岸の段丘面、特に中・上・最上流河岸段丘、丘陵部に遺跡が多く分布し、集落が展開する。草創期後半の撚糸文土器や早期の押型文土器などが楡木Ⅱ遺跡文(１)・立馬Ⅱ遺跡(２)等で出土している。前期の遺構数は少なく、上原Ⅰ遺跡(３)で住居が確認されている。中期になると遺跡数・遺構量とも大幅に増加する。大きな遺跡として林中原Ⅱ遺跡(４)、長野原一本松遺跡(５)、上ノ平Ⅰ遺跡(６)、横壁中村遺跡(７)がある。後期になると集落はやや減少する。代表的な遺跡として長野原一本松遺跡、横壁中村遺跡、林中原Ⅱ遺跡がある。晩期になるとさらに遺跡数は減少する。川原湯勝沼遺跡(８)では、氷Ⅱ式土器による再葬墓と思われる土坑が検出されている。

弥生時代

長野原町では、この時期の遺跡は非常に少ない。尾坂遺跡(９)では、前期の再葬墓や土坑、立馬Ⅰ遺跡(10)は中期の住居と甕棺墓が調査されている。

古墳時代

長野原町に古墳は確認されていない。調査された住居も極めて少ない。上原Ⅰ遺跡(３)では前期と考えられる住居が検出されている。５～６世紀後半の住居は下原遺跡(11)・上原Ⅳ遺跡(３)で調査されている。

奈良・平安時代

奈良時代の集落は現在まで確認されていない。平安時代９世紀中頃になると長野原町の多くの地域で大きな集落が造られるようになる。上ノ平Ⅰ遺跡(６)では皇朝十二銭中の「貞観永宝」や多くの灰釉陶器等が出土している。多くの遺跡で県内外との交流を伺うことが出来る。遺跡の時期は９～10世紀を中心としている。大きな遺跡として横壁中村遺跡(７)、楡木Ⅱ遺跡(12)がある。

中世

長野原町では、1500年代後半を中心に真田氏が吾妻地域に進出してくる。その頃の城として、羽根尾城・長野原城・林城・丸岩城・柳沢城等がある。長野原城を中心とした「長野原合戦」(永禄六年・1563)を経て、同じ年に東吾妻町岩櫃城が真田氏の支配下に置かれるようになる。

近世

西宮遺跡では、近世の集落が中心であるので、長野原町や東吾妻町で発掘調査された遺跡について、以下概要を記す。

これまで発掘調査されてきた、江戸時代天明三年泥流下から発掘された遺跡について、地図と一覧表を用いて説明する。天明泥流で埋まった遺跡は、吾妻川流域の両岸の低い段丘面である。大部分の遺跡から畑が確認されており、吾妻川流域で多くの畑が造られていたことが分かる。集落は西宮遺跡で３軒の屋敷跡、東宮遺跡で11軒の屋敷跡、ほかに小林家住宅・尾坂遺跡・町遺跡・下田遺跡・横壁中村遺跡・石河原遺跡・上郷岡原遺跡等で母屋を伴うと思われる建物が確認されている。それらの集落には、道・井戸・水路・石垣等が確認されている遺跡もあり、天明三年段階での集落の様子が次第に明らかになってきている。

西宮遺跡のある長野原町大字川原畑村は、江戸時代の川原畑村の一部である。おん出し名所と西宮名所等と呼ばれている地区と東側に位置する東宮遺跡と思われる。１号屋敷跡は県内の天明泥流下から確認された屋敷の中では最大であり、馬は少なくとも３疋はいたようである。多くの陶磁器等の出土から、この村は豊かな村と思われる。そこで県内の村の石高と比較してみる。県内全体の平均石高は天明段階以前元禄15年(1702)の段階で404石、天保５年(1834)の段階で524石であった。元禄16年(1703)段階での川原畑村の石高は159.913石となっている。(第２表参照)県内の平均石高と比較すると半分以下の村であることがわかる。西宮遺跡のある川原畑村は近接する林村や長野原町より石高が少なく、対岸の横壁村や川原湯村より高くなっている。

※　(　)内の番号は14Ｐの文献番号

２　川原畑村の概要・変遷

長野原町大字川原畑は、群馬県北西部の高間山南東麓に位置し、その大部分は山林である。集落は吾妻川左岸の河岸段丘面上（中位及び最上位河岸段丘）に存在し、中位段丘面上の集落部を川原畑村下村、最上位段丘面上の集落部を上村と一般に称する。

「河原畑村」の地名は、天正十二年(1584年)と推定される十二月二十五日付の真田昌幸朱印状に見える(『群馬県史・資料編７・中世３』1986所収「渡文書」)。その後、天正十八年(1590年)より沼田藩真田氏の領地となり、天和元年(1681年)真田氏改易後、幕府領となった。江戸時代における川原畑村の石高の推移は「表３　川原畑村石高表」の通りである。

なお、寛文三年(1663年)の石高については、当時の沼田藩５代藩主真田伊賀守信利が、真田松代本家の10万石に対抗するため、表石３万石に対して14万4000石を強引に打ち出し幕府に報告した検地(古検)によるもので、農民の難渋は並大抵のものではなかったとされている。

ここで、寛文検地帳に見える川原畑村の記述を挙げておく。

第３表　川原畑村石高表

年号	石高
万治二年(1659)	75石９斗１升６合
寛文三年(1663)	341石７斗２升１合
貞享二年(1685)	159石９斗１升３合
元禄十五年(1702)	159石９斗１升３合5

（表書）

寛文三年

川原畑村　御検地帳

卯ノ九月廿三日

田畑　　合三拾六町五反三畝拾五歩

内

上田　　七反五畝弐拾歩

白米拾壱石三斗五升

中田　　九畝拾四歩

白米壱石弐斗三升壱合

下田　　三畝七歩

白米三斗五升六合

下々田　弐畝弐拾六歩

白米弐斗五升八合

上畠　　拾弐町六反三畝弐拾七歩

白米百五拾壱石六斗六升八合

中畠　　五町五反八畝弐拾九歩

白米五拾五石八斗九升七合

下畠　　五町五反九畝八歩

白米四拾四石七斗四升壱合

屋敷　　九反六歩

白米拾石八斗弐升四合

高合　　三百四拾壱石七斗弐升壱合

内　拾三石壱斗九升五合　　田方

三百弐拾八石五斗弐升六合　　畠方

右の外落地

中畠　壱畝七歩　　弐筆

検地役人　　小幡四郎兵衛　　外三人

一方、貞享二年(1685年)の石高については、前橋藩主酒井忠挙の家老高須隼人が、天和元年(1681年)真田信利の領地没収後、再検地(新検)を実施したことによるもので、寛文検地(古検)と比較すると、石高はおよそ半減されている。村々では、以前の真田信利の苛政が厳しかったため、これを「貞享の御助け縄」と呼んだという。

明治時代に入ると、明治５年(1872年)の大小区制期には第20大区・第10小区に属し、明治11年(1878年)の郡区町村制に移行すると、林村、横壁村、川原畑村、川原湯村が組み合わされて林村に戸長役場が置かれた。その後、明治17年(1884年)には、戸長配置区域の改正があり、川原畑村外３ヵ村戸長役場として、川原畑村に連合戸長役場が置かれることとなった。さらに、明治22年(1889年)の市町村制の施行により、10ヶ村が合併して長野原町になると、旧来の町村は大字となり、長野原町大字川原畑村と称したが、大正６年(1917年)からは村の呼称がとれ、長野原町大字川原畑となった。

人口・戸数(世帯数)について、明治時代の大字別の明細が分かるものとしては、明治11年と明治22年の二つの記録しかない。それ以後は、５年毎の国勢調査の結果をもとにして、集約すると「第４表　川原畑人口推移表」の通りである。

第４表　川原畑人口推移表

年号	世帯数	人口	備考
明治11年(1878)	37	172	
明治22年(1889)	35	206	長野原町成立
昭和19年(1944)	64	287	うち疎開戸数４
昭和26年(1951)	75	359	
昭和30年(1955)	69	315	
昭和35年(1960)	66	296	
昭和45年(1970)	75	316	
昭和50年(1975)	78	299	
昭和55年(1980)	79	290	
昭和60年(1985)	80	261	
平成２年(1990)	82	242	
平成７年(1995)	83	239	
平成12年(2000)	80	211	
平成17年(2005)	30	83	

３　川原畑村と交通

鎌倉時代の建久四年(1193年)、源頼朝三原野狩の往路は、碓氷峠を越え、軽井沢、中軽井沢を経て六里ヶ原を通り、帰路は、狩宿村から万騎峠を越え、関屋(本宿村)に向かったと伝承されている。

また、戦国時代になり、永禄六年(1563年)、長野原合戦の際、岩櫛軍の長野原城への侵攻路をみても、天険を越え大城山(王城山)へ駆け上った道や暮坂峠を越え湯窪(湯久保)へ、または火打花を経て長野原へと入る道があったとされている。

さらに、この時代からは、霊湯草津温泉への浴客の往来も始まり、江戸時代初期には川原湯温泉に浴するものも数多くなったことから、長野原町を通過する中山道裏街道は、相当の交通量があったものと想像できる。

川原畑村の旧道は、天保十四年(1843年)の絵図によれば、川原畑上村・下村を分ける段丘崖の中腹から麓に当たる部分を東西に走行し、東は旧三ッ堂の石段下を通って吾妻渓谷(道陸神峠)へ、西は旧諏訪神社の石段下を通って久森峠へと抜けている。当時の川原畑村の集落はこの旧道に沿って東西に細長く形成され、その南側になだらかに広がる日当たりの良い河岸段丘平坦面は畑を中心とした耕作地として利用されていたことが推測できる。

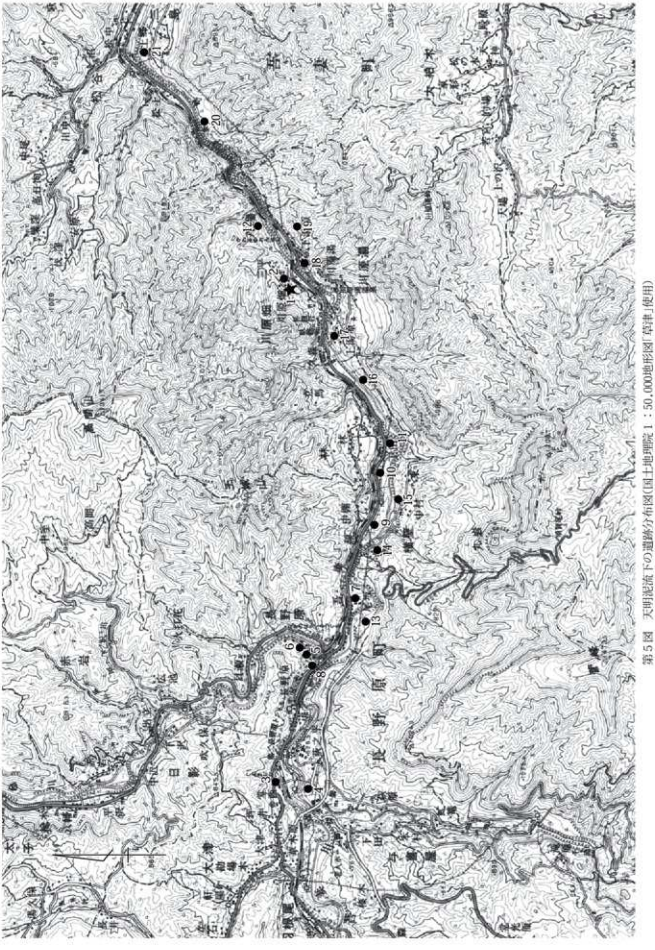
西宮遺跡のある地域は『信州と国境を接し、しかも草津温泉が控えていたため、古くから人々の往来が盛んであった。とりわけ戦国時代末から江戸時代初頭にかけては、信州上田の真田氏が吾妻の岩櫛城を中継して沼田城を結ぶため、吾妻川北岸沿いの通称「真田道」を軍事輸送路として利用したとされ、慶長十二年(1607)の沼田城主真田信幸の伝馬規定によれば、平川戸(現、東吾妻町)と長野原(現長野原町)が伝馬宿に指定されている。

元禄上野国絵図には、川原畑村も長野原町同様に馬次と書かれている。長野原町と川原畑村との荷継に関する取り決めが書かれている証文がある。元禄二年(1689)の「吾妻郡長野原町と川原畑村荷物馬継ぎ連判証文」である。証文によれば、信州から酒などの商人荷物をこの真田道を利用して吾妻郡原町まで運送する際の長野原町と川原畑村との荷継に関する取り決めである。酒やかがり荷物など荷物の種類によって川原畑村と長野原町で分担することになったことが分かる。』(群馬県立文書館ホームページ演習群馬の古文書37引用一部加除筆)川原畑村は馬継としての役割も果たしていたことが分かる。

４　川原畑村の被害報告

天明三年(1783年)７月８日(新暦８月５日)、浅間山の大噴火に伴い発生した泥流(天明泥流)は、吾妻川を流下し、沿岸の村々を呑み込みながら甚大な被害をもたらした。当時の川原畑村(現吾妻郡長野原町大字川原畑)は、地形上、上村と下村の別があったが、天明泥流の流下により下村のほとんどが壊滅した。当時の原町在住富沢久兵衛『浅間記』の記述によれば、村の被害は、「二十一軒流、四人死」とある。

参考文献
群馬県史編さん委員会編　1986『群馬県史』資料編７中世３
萩原　進　1986「浅間山天明噴火史料集成」Ⅱ群馬県文化事業振興会
長野原町誌編纂委員会編　1976『長野原町誌』上巻
上毛民俗学会編　1987『長野原町の民俗』
関　俊明　2006「天明泥流はどう流下したか」『ぐんま史料研究』第24号
群馬県立文書館
篠原正洋　2008「天明泥流に呑まれた屋敷の謎」『埋文群馬』47号(財)
群馬県埋蔵文化財調査事業団


長野原町
川原畑
川原畑
川原畑

第５表　天明泥流下の周辺遺跡　元禄郷張から村名を推定

No.	遺跡名	所在地	旧村名	天明泥流下の遺構	文献
					本報告書
1	西宮遺跡	長野原町大字川原畑	川原畑村	畑・屋敷３棟・井戸・道、建物内に板間の痕跡が残る。	14
2	東宮遺跡	長野原町大字川原畑	川原畑村	屋敷11棟・畑・溝・石垣・井戸等。多くの陶磁器や銭・大量の建築材や木製品出土。	14
3	小林家住宅	〃大字長野原	坪井村	吾妻の分限者小林鈴左衛門屋敷の一部を検出。土蔵跡１棟、礎石建物２棟、屋敷の背後の石垣。石製の臼石、固定臼石、石臼、鉄製製品、陶磁器等出土。	15
4	旧新井村跡	〃大字与喜屋	新井村	石臼(磨つき用)・粉砕用石臼・五輪塔、鉈、秤	16・17
5	長野原城	〃大字長野原	長野原町	畑２面	18
6	嶋本１遺跡	〃大字長野原	長野原町	畑	19
7	尾坂遺跡	〃大字長野原	長野原町	母屋・厠、小屋２軒、畑(約４万㎡)・道・石垣・溝等。経鼓・銭(寛永通宝)・陶磁器・木製品(土台・曲げ物等)	20・9
8	町遺跡	〃大字長野原	長野原町	母屋と思われる建物から大量の建築部材や、多くの下駄等の木製品出土、道跡北側は畑。	21
9	中棚Ⅱ遺跡	〃大字林	林村	畑・道・石垣。畑内より里字の石膏型を採取	22・23
10	下原遺跡	〃大字林	林村	畑・石垣・井戸・溝・道	22
11	下田遺跡	〃大字林	林村	母屋と思われる建物(土間・囲炉裏２基・竈)と畑 掘建柱建物の上から礎石建物、他に２軒の建物	23・24
12	石畑遺跡	〃大字川原畑	川原畑村	畑	25
13	久〃戸遺跡	〃大字長野原	長野原町	畑・石垣・井戸・溝・道・慶長一分判金出土	22・23
14	西久保Ⅳ遺跡	〃大字横壁	横壁村	畑・道	26
15	横壁中村遺跡	〃大字横壁	横壁村	吾妻川寄りの極限られた部分から畑と石列	22
16	川原湯勝沼遺跡	〃大字川原湯	川原湯村	畑、花粉分析から蕎麦栽培を推定。	28
17	石川原遺跡	〃大字川原湯	川原湯村	お堂・寺院・道・用水・畑・寺院から出土した密教用具等、寺院は天台宗不動院と考えられる。	29
18	西の上遺跡	〃大字川原湯	川原湯村	道・畑(アワかとエの植物痕跡残る。)	27・29
19	下湯原遺跡	〃大字川原湯	川原湯村	畑・道・お堂のある墓地・礎石建物１等	29・30
20	上郷西遺跡	東吾妻町三島	三島村	畑２面	31
21	上郷岡原遺跡	〃三島	三島村	畑・母屋建物２・掘立柱建物６・便槽６・道６・畑36・水田７・井戸１・建物壁２・墓１等。麻がまとまって出土している。	32

文献

1　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2009『嶋本Ⅱ遺跡(２)』第458集
2　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006『立馬Ⅱ遺跡』第375集
3　長野原町教育委員会　2015『林地区遺跡群』長野原町埋蔵文化財調査報告　第30集
4　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2015『林中原Ⅱ遺跡(１)』第617集
5　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『長野原一本松遺跡(１)』第278集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『長野原一本松遺跡(２)』第408集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『長野原一本松遺跡(３)』第433集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『長野原一本松遺跡(４)』第441集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『長野原一本松遺跡(５)』第461集
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『長野原一本松遺跡(６)』第554集
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『長野原一本松遺跡(７)』第578集
6　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008『上ノ平１遺跡(１)』第440集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007『遺跡は今(15)』第438集
7　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2005『横壁中村遺跡(２)』第355集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006『横壁中村遺跡(３)』第368集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006『横壁中村遺跡(４)』第381集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007『横壁中村遺跡(５)』第406集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008『横壁中村遺跡(６)』第436集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007『横壁中村遺跡(７)』第439集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2009『横壁中村遺跡(８)』第462集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2009『横壁中村遺跡(９)』第466集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2010『横壁中村遺跡(10)』第488集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2010『横壁中村遺跡(11)』第492集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2012『横壁中村遺跡(12)』第526集
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2013『横壁中村遺跡(13)』第559集
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2014『横壁中村遺跡(14)』第587集
8　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006『川原湯勝沼遺跡(２)』第356集
9　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2016『尾坂遺跡(２)』第618集
10　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2006『立馬Ⅰ遺跡』第388集
11　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007『下原遺跡Ⅱ』第389集
12　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008『嶋本Ⅱ遺跡(１)』第432集
13　群馬県　1980『群馬県史』資料編11　近世3　郷村変遷
14　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2011『東宮遺跡(１)　第514集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2012『東宮遺跡(２)　第536集
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2017『東宮遺跡(３)　第628集
15　長野原町教育委員会　2005『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告　第12集
16　長野原町教育委員会　1990『長野原町の遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告　第１集
17　あさを社　1982『縁よみがえった鎌原』上州路文庫⑥
18　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2014『長野原城　林中原Ⅰ遺跡』第586集
19　長野原町教育委員会　2005『第２章１．嶋本１遺跡』『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告　第15集
20　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『第10章　尾坂遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(１)』第303集
21　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2015『町遺跡』第593集
22　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』第319集
23　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『第７章　下田遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(１)』第303集
24　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2015『遺跡は今(23)』
25　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『第２章　石畑遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(１)』第303集
26　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2012『嶋本１・上原Ⅳ遺跡(２)・西久保Ⅳ遺跡』第549集
27　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2004『久〃戸遺跡(２)・中棚Ⅱ遺跡(２)・西の上遺跡・上郷入遺跡』第349集
28　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2002『第４章　川原湯勝沼遺跡』『八ッ場ダム発掘調査集成(１)』第303集
29　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2016『遺跡は今(24)』
30　(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2016『理文群馬(61)』
31　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008『上郷西遺跡』第448集
32　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2007『上郷岡原遺跡(１)』第410集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団　2008『上郷岡原遺跡(２)』第438集

第３章　西宮遺跡

第１節　調査概要と発見された遺構と遺物

発掘調査は、平成20年11・12月、平成26年４月・５・６月に実施した。平成20年度の調査は、町道南部分全体と北側の一部を調査した。町道南側部分では、復旧溝・畑・ヤックラ・道・暗渠等を調査した。この部分を１区と呼称する。町道北側部分では、１号屋敷２号建物の一部や１号建物及び畑や石垣等の一部を発掘調査した。平成26年度の調査では、町道北側部分全体を発掘調査し、屋敷をはじめ多くの建物・道・畑等の遺構を調査した。この町道北側部分を２区と呼称する。報告は、遺構ごとに報告する。遺構番号は畑・平坦面・復旧溝で１区と２区で重複するので、１区と２区と分けて報告する。他の遺構番号は重複しないので、遺構番号ごとに報告する。１区と２区の調査内容は以下表の通りである。

（１）１号屋敷（第７図、PL.３）33区I～M-16～20グリッドに位置する。

①　１号屋敷調査経過と調査概要

平成20年度　１号屋敷は、平成20年12月に２号建物の北と東側の調査を行った。南側に水道本管が、南側と東側には電柱等があり調査出来た範囲は狭かった。調査では、１号屋敷２号建物北側の礎石部分（２石以外残っていなかった）と唐臼抜取穴。馬屋（西と南端部分以外）、２号建物北側の雨落溝と12号石垣、および建物東側の13号石垣を調査した。２号建物北側の南落溝から12号石垣の一部にかけて多くの焼土や炭が出土した。焼土や屋根材と思われる炭化材は、12号石垣上の９号畑南側平地面にも多く堆積していた。これらは焼けた建物の一部と思われる。炭化した建築部材や焼土は浅間Ａ軽石の上を覆うように堆積しており、その上を天明泥流が埋めていた。１号囲炉裏北側では、多くの陶磁器皿が12枚重なり合うようにまとまって出土し、その東側に鍋が出土した。しかし調査できた範囲は狭かった。平成26年度は、屋敷全体の調査を実施した。

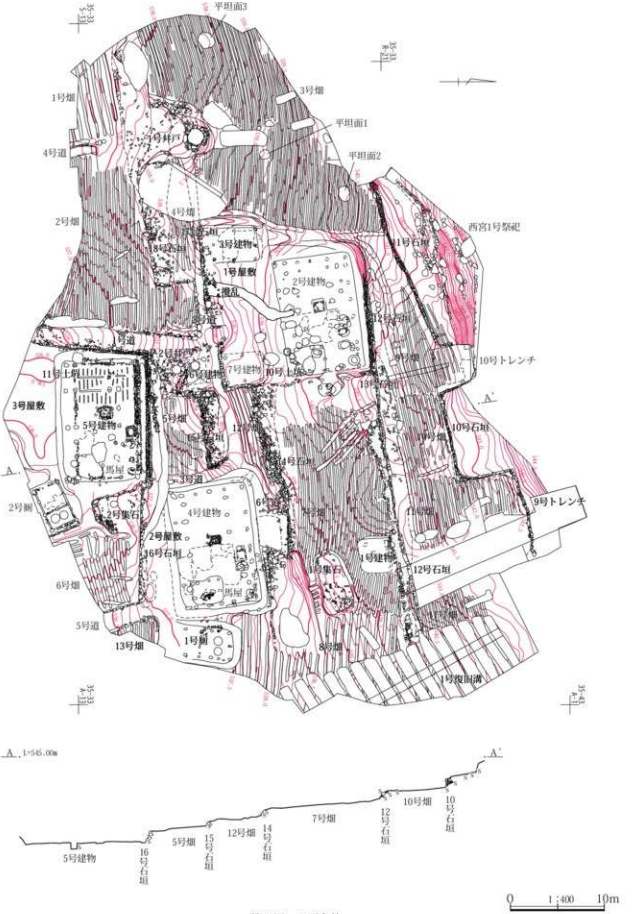
第６表　西宮遺跡遺構一覧表

帰属時期	区	遺構名
天明三年以前	1	暗渠１・２号、列石１号
	2	７号建物
天明三年（泥流下）	2	１号屋敷（２号建物・３号建物・７号建物、10号土坑、12号石垣・13号石垣・14号石垣・17号石垣）
		２号屋敷（４号建物・１号厩・５号道・６号道）
		３号屋敷（５号建物・２号厩・16号石垣、２号集石）
		屋敷外（１号建物・６号建物、１号井戸、１号集石、１号道・２号道・３号道・４号道、10号石垣・11号石垣・15号石垣・18号石垣）
	1	畑（１～７号畑、１号平坦面）、復旧溝（１～４）
	2	畑（１～13号畑、１～３号平坦面）、復旧溝１
天明泥流被災後	2	２号井戸、１～９号石垣、１号石造物、11号土坑
	1	１～４号復旧溝
	2	１号復旧溝

★建物に付随する遺構（囲炉裏・道・馬屋・唐臼・便槽など）は上記遺構一覧から省略した。
★１・２号建物、11・12・13号石垣、７・８・９号畑は、平成20年度に一部調査を実施している。

平成26年度　１号屋敷跡は、南に向かって低くなる緩やかな傾斜面に位置し、北側は狭い畑と道があり、道の北は山林となっている。南側は緩やかな斜面となっており、２・４号畑・６号建物・３号屋敷５号建物がある。３号屋敷の南には現在の町道がある。この道は現在使われており発掘調査できないが、天保14年の絵図に描かれている江戸時代の道に相当すると思われ、天明三年段階、集落の幹線道路であったと思われる。この幹線道路である道から北側約20mの位置に１号屋敷がある。１号屋敷は町道より約２m高くなっている。

１号屋敷の敷地は、東西約13m、南北約16mの範囲である。標高の高い北側を、高さ約1.1～1.5mほど掘り込み12号石垣を築き、南側は0.4～0.6mほど盛土して、14号及び17号石垣を築いている。西側は標高の高い北側の一部を削り土手とし、南側は逆に盛土としている。東側は落差の大きい北側部分を掘り込み13号石垣を積んでいる。このように切土と盛土で屋敷の敷地面を造成し、その中に母屋である２号建物を造り、南側に広い庭を確保している。南西に物置と思われる３号建物、南東に７号建物が建てられていた。７号建物は、天明泥流直下では、確認できなかったことや、雨落溝の存在が確認できなかったので、天明泥流段階では、既になかったのではないだろうか。前庭は攪乱を多く受けており、平らに造成した様子は残っていなかった。10号土坑が掘られてい


平坦面3
3号畑
平坦面1
平坦面2
1号畑
4号道
2号畑
西宮1号祭祀
1号石垣
1号屋敷
2号建物
10号トレンチ
3号屋敷
5号建物
10号石垣
9号トレンチ
2号屋敷
4号建物
12号石垣
6号畑
5号道
13号畑
1号厠
8号畑
1号復旧溝
A
A'
A 1:545.00m
A'
5号建物
16号石垣
5号畑
15号石垣
12号畑
14号石垣
7号畑
12号石垣
10号畑
10号石垣
0
1:400
10m

第６図　２区全体

るが、時期は不明である。さらに前庭には、17号石垣部分から２号建物の南側一部を掘り込んでいる新しい撹乱溝があった。

②　敷地内での浅間Ａ軽石

Ａ軽石の堆積は、２号建物内および軒下に相当する範囲には確認できないが、建物北側で12号石垣との間の雨落溝内および西側の雨落溝の中には多くの堆積が確認できた。前庭は撹乱を受けており浅間Ａ軽石は確認できなかった。３号建物では北側の雨落溝中に浅間Ａ軽石が残っていた。７号建物は前に説明したように、雨落溝が無く、浅間Ａ軽石の確認はできなかった。

③　２号建物（第８～10図、PL.４、）33区I～M-18～20グリッドに位置する。

(ア)建物の概要

１号屋敷の母屋である。天明泥流以降の建物に伴う囲炉裏等が屋敷内覆土中に残っており、床面にも多くの撹乱土坑が掘られていた。多くの撹乱を受けており、屋敷の規模や構造を理解するのは大変であった。同時に調査を進めた２号屋敷４号建物が、構造や規模において非常に似ており、それを参考に調査を進めた。４号建物は下屋柱を含む東・北・西側の３面に礎石、下屋柱を含む南側および建物内部の柱はすべて柱基礎部分を地中に埋め込む掘立柱となっている。これを参考に２号建物を観察すると、撹乱により多くの礎石は失っているが、残っていた礎石はすべて４号建物と同様に、建物外側の壁面部分であった。南西端下屋部分の大きな礎石も残った。異なるのは馬屋部分の柱に１ヶ所礎石が使われていたことである。礎石で残っていなかった部分は、推定し点線で柱位置を示した。建物の出入り口である南側に半間の下屋がある。母屋の北側と西側を囲むように雨落溝が残っていた。雨落溝の幅は50cm前後である。２号建物は、東側が土間で、西側が板間となっている。屋敷の出入り口は東側にある土間の南側である。土間の東側に馬屋が、奥に竈が設置されている。竈の東側に唐臼の支脚と石臼が抜き取られたであろう掘り込みがある。竈の両脇には、小穴が２個掘られていた。４号建物の竈両脇にもある。柱穴と思われる。竈南西には、多くの炭の小破片や炭の粉を出土した炭出土方形遺構がある。１号囲炉裏は、土間と板間との間に作られており、北・西・南の３面は板間に囲まれているが、東側の１面は土間に面している。板間に関連する大引痕や根太痕は残っていなかった。

【規模・構造】建物は残りが悪く規模や構造は明らかでないが、４号建物を参考にして以下説明する。柱は北側の桁行き方向で９本、南側は出入り口部分の柱を飛ばして８本、梁行き方向で下屋を含めて６本と思われる。建物の出入り口である南側に半間の下屋がある。この下屋の柱は５本である。柱間の間隔は板間が184cm前後、土間は123～153cmとなっている。桁行(東西）11.9m×梁行(南北）6.4m、建物南側に母屋の礎石から92cm離れて下屋柱を持つ。下屋を含めると梁行きは7.4mである。柱を配置する柱間の間隔は、東側の馬屋を含む土間部分と西側の板の間部分で異なるようである。

残っていた７個の礎石は川原石が使われていた。(礎１～礎７)石の表面は自然面で多少の凹凸があり、加工されたものは無い。礎石の大きさは一様ではなく、馬屋南東の１石(礎７)が特に大きく幅62cm厚さ20cmある。また南東端の礎石(礎１)は幅52cm厚さ20cmと大きいが、他の５個の礎石は幅20～40cmと小さい。下屋部分に使われている礎石が大きく、母屋壁面部分で使われている礎石は小さい。２号建物では礎石の残りが悪いために、４号建物の礎石や柱穴を参考にして本来在ったと思われる場所に点線で示した。

下屋を含めた建物外壁部分西・北・東３面に礎石を用い、建物内部および南側壁面と下屋内側部分は、全て掘

第７表　１号屋敷２号建物礎石・柱穴計測表

１号屋敷２号建物礎石

No	長径cm	短径cm	厚さcm
礎１	52	44	20
礎２	44	32	14
礎３	30	22	13
礎４	36	26	10
礎５	25	24	－
礎６	30	16	12
礎７	62	60	20

１号屋敷２号建物柱穴

No	長径cm	短径cm	深さcm
P１	46	34	51
P２	28	24	55
P３	40	30	21
P４	68	54	45
P５	80	52	44
P６	40	30	37
P７	60	46	54
P８	84	64	21
P９	120	78	29
P10	70	50	32
P11	50	38	40
P12	48	40	45
P13	40	32	16
P14	100	72	－
P15	35	26	－

4号建物
3号道
7号畑
14号石垣
12号畑
5号畑
15号石垣
13号石垣
9号畑
10号土坑
7号建物
2号井戸
12号石垣
2号畑
2号建物
撹乱
1号屋敷
17号石垣
4号畑
3号建物
11号石垣
3号畑
0　1:160　4m

第７図　１号屋敷全体

立柱が使われている。掘立柱建物ではなく、礎石建の建物でもない。おそらく掘立柱建物から礎石建の建物へ変化する中で採用された建物ではないだろうか。

(イ)馬屋(第11図、PL．５)

【位置・規模・構造】２号建物の南東隅に位置する。８本柱と思われる柱の中で、１石の礎石と４本の柱穴が確認された。馬屋は、中央部分が凹状にへこんでおり、土間部分より20㎝前後低くなっていた。馬屋の規模は東側の柱穴が無く不明であるが、東西方向推定で250㎝、南北方向推定280㎝で南北方向が少し長くなっている。

馬屋の南側には埋設桶(便槽)が据えられていたと思われる土抗状の掘り込みがある。底部には黄褐色の２枚の粘土質の土が埋められていた。粘土質の層の厚さ20㎝で、上層はやや黄色が強く下層はやや褐色が強い。土坑状の掘り込み面の側面には乱雑な方向で木の皮が少し残っていた。埋設桶(便槽)の規模は、底部で幅55㎝深さ約55㎝であった。側面に桶のタガや縦板の痕跡は残っていなかった。

(ウ)土間(第８図、PL．６)

【概要】建物の東側に土間、西側が板間と思われる。土間には馬屋・竈・炭出土方形遺構等がある。土間と板間の境界は、土間の観察から1号囲炉裏の東側を境界として分かれていたようである。馬屋・囲炉裏・竈に囲まれた土間では、ローム等を用いて平らに整地し固めてあった。貼られた粘土は黄色の強い粘土と灰白色の強い粘土の２種類あった。ロームの貼られた範囲を図示した。土間と板間床下部分の地山の高さは、土間部分が10㎝前後高くなっている。

【所見】土間と板間との境に柱は無い。同一空間として仕切りは無く、囲炉裏の板間部分は３面を板間とし、１面は土間に面するように作られていたものと思われる。土間と板間を板戸等で空間が区切られるのは、西側奥の幅１間半の板間であると思われる。

(エ)竈(第12図、PL．６)

【位置・出土状況】２号建物土間奥に位置する。残りが非常に悪く、掘り込まれている燃焼面下面に焼土が、その下に多くの炭の粉が残っていた。竈の側壁に使われていた石は残っていなかったが、南側以外の燃焼部周辺に石が抜き取られたであろう浅い掘り込みが残っていた。この場所に竈の壁面を固める多くの石が据えられていたものと思われる。

【規模】残りが悪く不明であるが、燃焼部に残る焼土や炭の範囲から、燃焼部幅50㎝長さ80㎝である。竈燃焼部分底面の高さは、ロームの貼られている土間レベルより20㎝前後深くなっている。

(オ)炭出土方形遺構(第12図、PL．８) 33区K-20グリッドに位置する。

【位置・出土状況】竈と囲炉裏の間の床面に長方形を呈し土抗状に少し低くなって、底部に粉状の炭が全面に敷いたような遺構である。炭出土方形遺構と呼称した。同じような遺構は、４・５号建物で確認されている。

【規模・形状】東西90㎝南北130㎝、床面から深さ８㎝、中央部分が凹状で少し深くなっている。

【構造・所見】特に意図的に掘り込まれた遺構と見るより、竈と囲炉裏の間に位置しており、不要となった竈内の炭火を消し炭等として再利用するために、処理し一時保管していた場所と想定される。

(カ)唐臼(想定)（第８・10図、PL．６・７）

建物の北東コーナー部分に直径1.1m深さ33㎝の掘り込がある。この掘り込みから西側へ約145㎝、離れた場所に直径45㎝深さ38㎝の掘り込みがある。表面にはこの掘り込を囲むように３個の大きな石が埋められていた。これは東宮遺跡１号建物の唐臼同様で、唐臼の杵を支える支脚を埋めた掘り込みと思われる。支脚が動かないように大きな石で支脚を固定している。石製で作られていると思われる臼は、抜き取られたためか残っていなかった。この唐臼(想定)は、４・５号建物にも同じような位置につくられていた。

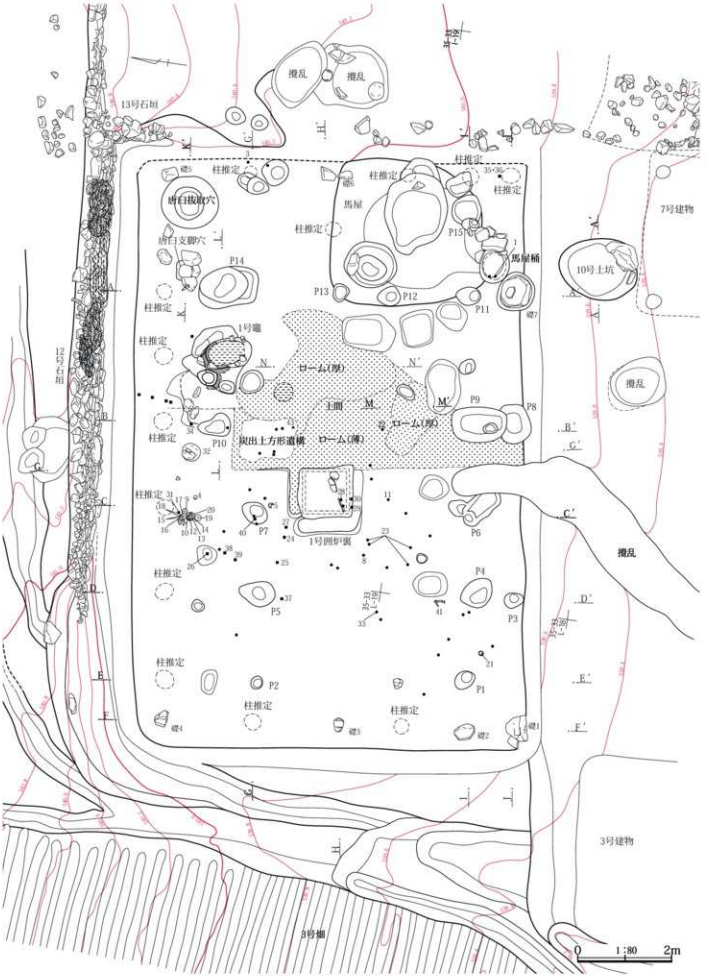
(キ)床面

【位置・出土状況】囲炉裏より西側は板間になっていたものと思われる。床面の範囲は東西方向約5.6m南北方向約6.5mと思われる。しかし床面を示す大引・根太痕等の遺構は残っていなかった。

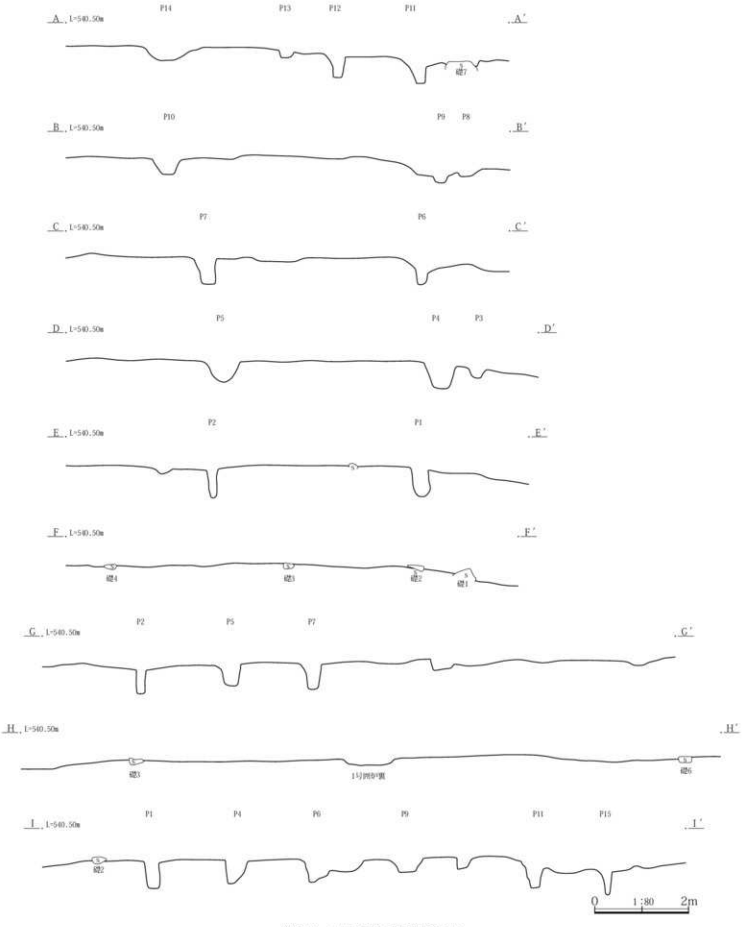
(ク)１号囲炉裏　(第12図、PL．７・８)

【位置・出土状況】建物ほぼ中央、床面と土間との境部分に位置する。

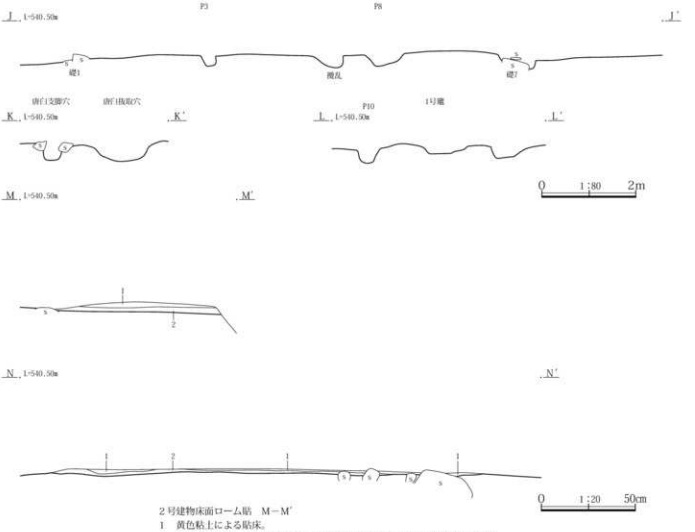
【構造・規模・形状】囲炉裏東側は土間に接し、北・西・南面は板間に接していたと思われる。燃焼面は土間より低い位置であった。土間に接する東面以外では囲炉裏を囲むように、高さ３㎝幅20～30㎝の土手状の高まりがあ



第8図　1号屋敷2号建物、10号土坑



第９図　１号屋敷２号建物断面（１）



２号建物床面ローム貼　M－M'
1　黄色粘土による貼床。
2　茶褐色粘質土　小礫は含まない。良く淘汰された土。焉屋最下層の土に似る。

２号建物床面ローム貼　N－N'
1　赤褐色土　　二次変成。基本的にはローム土。
2　灰褐色砂質土　φ5mmの小礫混。

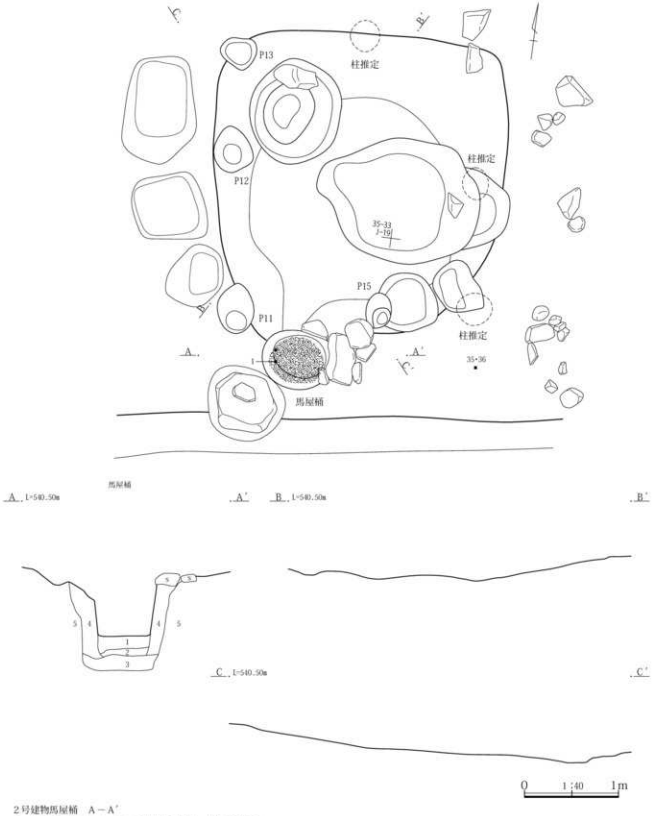
第10図　１号屋敷２号建物断面（２）

る。これはおそらく囲炉裏を掘ったときに出た土を囲炉裏のまわりに積んだものと思われる。囲炉裏は東西南北幅110cm深さ５cm方形に掘り込み、中にローム等を貼り使用面としている。囲炉裏を囲むように内径90cm前後の角材で出来た外枠と思われる痕跡が残っている。囲炉裏の中には長さ20 ～ 30cm幅10～15cmの２個の平らな石が、中央から南東寄りに置いてある。火を燃すときに使用する枕石と思われる。この石から炉の中央部分にかけて特に焼土化していた。

【所見】囲炉裏の構造や使用状況を良好に残している囲炉裏である。囲炉裏は大きく２種類ある。A類：西宮遺跡５号建物や東宮遺跡１・７・18号建物の囲炉裏のように、４面を板間に囲まれている。方形に石を積み上げ燃焼面は床面より低いが、床面で使用出来る高さまで高くしている。B類：西宮遺跡２・４号建物の囲炉裏のように、３面が床面に囲まれ、１面が土間に接している。燃焼面は床面に近い位置である。２・４号建物の囲炉裏では床面を方形に掘り込み、燃焼面は床面より低い位置となっている。A類では、囲炉裏中央部に厚く灰が残っていることが多いが、B類ではほとんど灰が残っていない。使用方法や目的が少し異なっているとみられる。

(ケ)土壁・焼土・炭化物(第13・14図、PL.８・９)

【位置・出土状況】２号建物の北側で12号石垣との間に土壁と思われるロームを大量に含む塊が一部残ってい

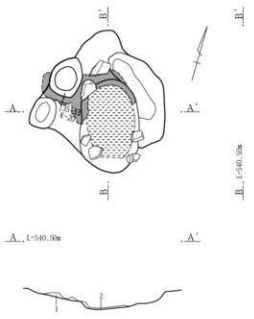


２号建物馬屋桶　Ａ－Ａ'

1　黄褐色粘質土　ロームを主とした粘質土。砂礫含まない。
2　黄褐色土　３～５cmの石と砂粒を多く含む層。４層に近いが部分的に黄褐色粘質土を含む。
3　黄褐色粘質土　ロームを主とした粘土質である。砂礫は含まない。
4　黄褐色土　砂礫と２～３cmの礫を多く含む。地山を主とした埋土。
5　黄褐色土　砂礫と５～10cmの礫を多く含む。地山。

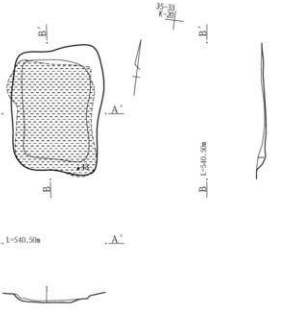
第11図　１号屋敷２号建物馬屋

１号竈



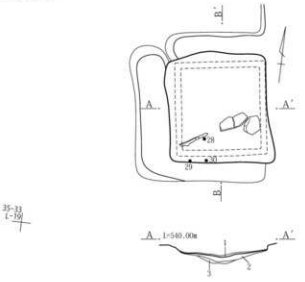
２号建物１号竈　Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'
１　赤褐色土　ロームを主とする層。部分的に焼土化している。
２　黒褐色土　炭の粉。炭の破片長さ１～２㎝、幅0.5㎝。少量の焼土粒を主とし、炭を少量含む。

炭出土方形遺構

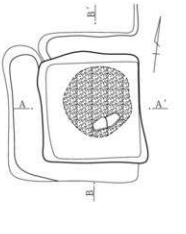


２号建物炭出土方形遺構　Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'
１　黒褐色土　泥流と炭を主とした層。
　　灰と焼土ほとんど含まず。

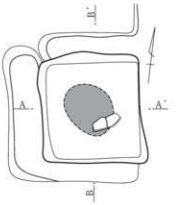
１号囲炉裏



１号囲炉裏灰範囲



１号囲炉裏焼土範囲



２号建物１号囲炉裏　Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'
１　泥流の混じる炭化材を主体とする炭の層。
２　灰層　0.5～2.0㎝の炭を少量含む。
３　焼土化したローム　囲炉裏底全体に１～２㎝のロームを貼っている。
　　※囲炉裏掘り方面には地山の礫が顔を出している。

0　1:40　1m

第12図　１号屋敷２号建物１号竈、炭出土方形遺構、１号囲炉裏

た。残っていた範囲は竈から唐臼の付近北側の狭い範囲であった。他の部分では残っていなかった。土壁は、火災等により焼け一部焼土化しており、土壁中の竹製の小舞や建築部材の破片等が炭化して残っていた。土壁の規模は不明である。

【構造・所見】この土壁は、12号石垣に押し付けられたような状態で残っていた。土壁と石垣の間には、厚さ20cmほどの泥流が厚く堆積しており、土壁の最下部で雨落溝部分には炭化した多くの建築材が残っていた。その下には浅間Ａ軽石が良好に残っていた。12号石垣上の平坦面には焼土と、屋根に葺かれていたであろう萱と思われる炭化材が多く残っていた。他の部分では雨落溝や石垣付近には建築部材と思われる炭化材は、確認できなかった。これらの結果から。以下のことが考えられる。

（１）浅間Ａ軽石が降下し雨落溝部分に厚く堆積する。

（２）建物が火災を受け屋根材に使われていた建築部材等が焼けて浅間Ａ軽石の上に落下する。土壁・屋根等が焼ける。しかし倒れることない状態で建物は残っていた。

（３）天明泥流が押し寄せ、泥流の一部が２号建物を巻き込むように押し寄せ12号石垣付近に堆積する。

（４）天明泥流により２号建物が12号石垣部分に押されて倒れる。

（５）２号建物の壁上面から屋根材が、12号石垣を超えて石垣上面の平坦面から９号畑面にかけて倒れ込む。

④　**３号建物**　（第15図､PL.10･11）33区L･M-16･17グリッドに位置する。

【位置・出土状況】１号屋敷内の南西端部、母屋である２号建物の南西部で、７号建物の西側に位置する。地形的に南側部分は低くなっているので、南側に17号石垣を築き盛土して平地面を確保し、その上に建てられている。平地面は２号建物土間の高さより70cmほど低い位置となっている。２間×２間の掘立柱を持つ小さな建物である。

建物の内側は、土間で平地となっていた。中央の柱穴を境として、北側は暗褐色のロームを下面に橙色のロームを上面に塗った床面となっていた。ロームの厚さは10cmである。南側床面にもわずかにロームが堆積していたが、厚く貼った状態ではなく、多くの地山の石が表面に顔を出して地山に近い表面となっていた。南北で使い分けられていたようである。建物内に浅間Ａ軽石は無く、建物の西側の雨落溝内に多くの浅間Ａ軽石が堆積していた。

【規模・形状】建物の大きさは、掘立柱穴の心々寸法で、東西方向３m南北方向4.45m、雨落溝までの整地面は東西方向４m南北方向5.3mである。柱穴から雨落溝までの距離は60cm前後、雨落溝の深さは５～９cmである。柱穴は、８本あり直径は20cm前後深さ30～50cmである。

【構造・所見】２間×２間の掘立柱を持つ小屋であり、２号建物の付属建物であったと思われる。北側の土間はなぜここまで丁寧にロームが貼られたのだろうか。

⑤　**７号建物**　（第16図、PL.11）33区I・J-17グリッドに位置する。

【位置・出土状況】１号屋敷内の南東端部、母屋である２号建物の南東部に位置し、３号建物の東側に位置する。地形的に、南側部分は低くなっているので、南側に14号石垣を築き盛土して平地面を確保しその上に建てられている。調査段階で天明泥流除去後の地表面では確認できなかった。また建物外側に雨落溝も残っていなかった。

天明泥流段階ではすでに取り壊されていた建物であったものと思われる。精査により柱穴が確認され建物の存在が明らかとなった。建物の土間面は明らかでないが、確認された土間面は２号建物の土間の高さより80cmほど低い位置となっている。１間×２間の掘立柱を持つ小さな建物である。

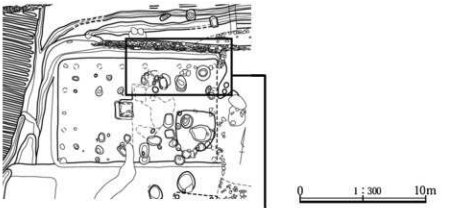
【規模・形状】建物の大きさは、掘立柱穴の心々寸法で、東西方向2.7m南北方向3.6mである。柱穴は、６本あり直径は30cm前後深さ20～30cmである。

【構造・所見】１間×２間の掘立柱を持つ小屋であり、２号建物の付属建物であったと思われる。

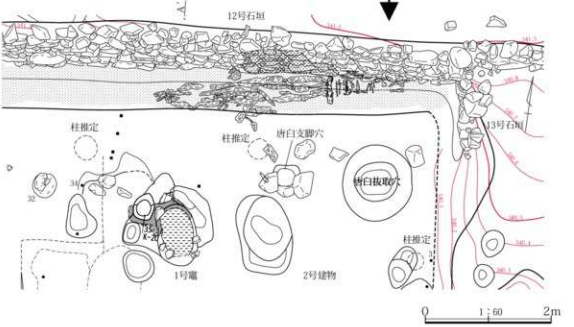
⑥　**10号土坑**（第16図、PL.11）33区J-18グリッドに位置する。

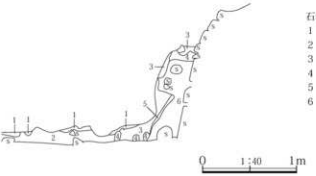
２号建物馬屋前の前庭部分に円形に掘られた土坑である。褐色砂質の前庭の土を掘り込み、暗褐色の礫を含む土で埋まっていた。土坑の大きさは直径1.2m深さ50cmであり、覆土中央部に幅35cm前後厚さ15cmほどの大きな石が２個、ロームとともに埋められていた。大きさからみて、便槽桶等を埋めた土坑に似ているが、桶を埋めた痕跡はなかった。用途は不明である。

⑦　**１号道**（第50・51図、PL.39）33区J-11～16グリッドに位置する。



２面

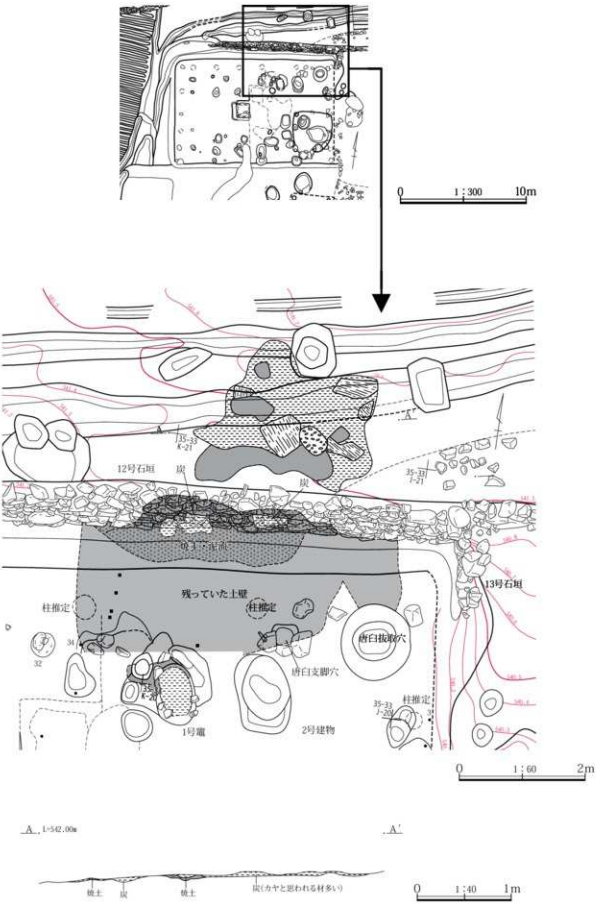




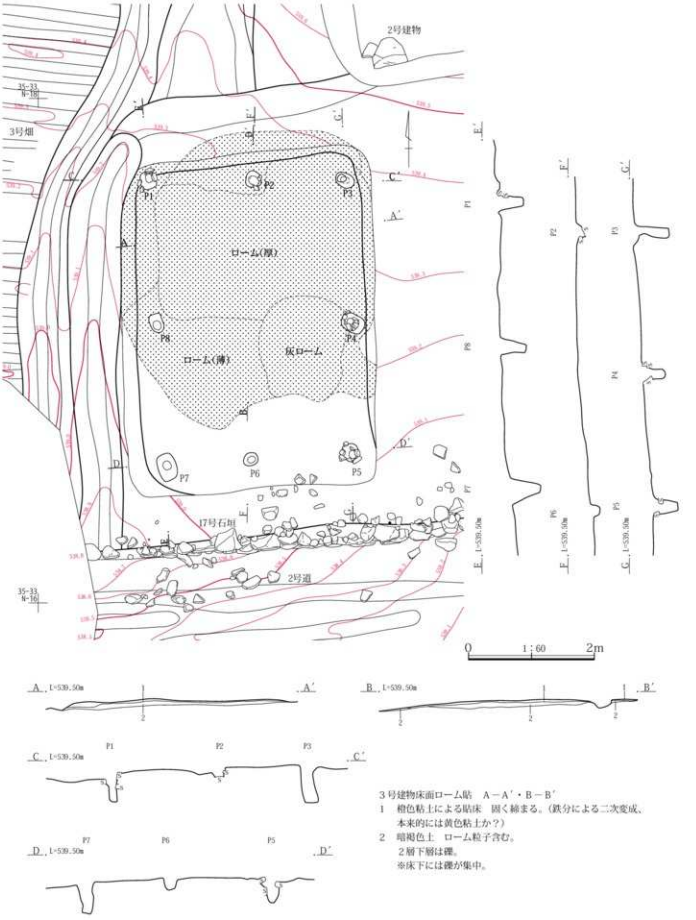
石垣、土壁、焼土　A－A'

1　淡黄色層　ロームを主とする層。（土壁）
2　褐灰色層　ローム小ブロック含む層。
3　赤色土層　焼土層。
4　黒褐色土　泥流中に焼土を含む層。
5　黒色土　炭を主とした層。
6　黒褐色土　泥流層。

第13図　１号屋敷２号建物北側12号石垣との間の土壁、焼土、炭化物（１）

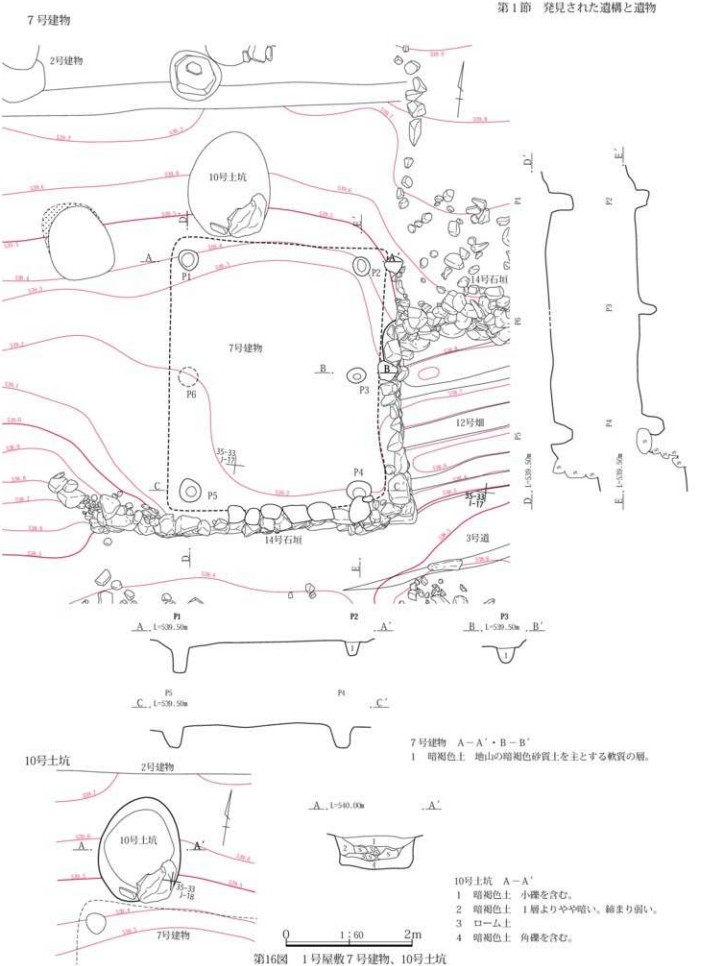


第14図　１号屋敷２号建物北側12号石垣との間の土壁、焼土、炭化物（２）



３号建物床面ローム貼　Ａ－Ａ′・Ｂ－Ｂ′
1　橙色粘土による貼床　固く締まる。(鉄分による二次変成、本来的には黄色粘土か？)
2　暗褐色土　ローム粒子含む。
　２層下層は礫。
　※床下には礫が集中。

第15図　１号屋敷３号建物



第16図　1号屋敷7号建物、10号土坑

１号屋敷に入るための道路である。道路面は、平らに整形され浅間Ａ軽石が部分的に残っていた。屋敷は南側にある町道下に想定される当時の幹線道路(未発掘)から20mほど北側の奥に入っており、屋敷面は道路面より２mほど高い位置にある。道路の作られた傾斜面は、北側が高く、南に向かって低くなる地形である。道路の西側は２号畑、東側は６号建物および３号屋敷５号建物となっている。３号屋敷は１号道の西側を掘り下げて作られているので、３号屋敷西側では道路との境に16号石垣が築かれている。道幅は180～190cmである。

⑧　石垣　石垣には大きく分けて次の２種類があるようである。石垣の説明では、次の考え方で説明する。

(１)屋敷に伴う石垣で、使われる石は一定の大きさを揃え、面を揃えて積んでいる。積まれる角度は80度前後である。仮に屋敷積石垣と呼称する。川原石が多い。

(２)畑の断面に積まれる石垣で、使われる石は大小不揃いであり、積まれる石の面は一定でない。積まれる角度は60度からさらに緩いものもある。石垣の幅１～２mの範囲に多くの石が積まれることがある。石捨場としての機能も持っている。仮に畑積石垣と呼称する。山石多い。

【位置】１号屋敷は、西側部分に石垣は無いが、北側に12号石垣、東側に13号石垣、南側に14・17号石垣ある。この部分の石垣は屋敷積石垣である。12号石垣は１号屋敷北側から７号畑北側迄の石垣であり、７号畑北側部分での石垣は畑積石垣である。１号屋敷北東部分で12号石垣から直角に南に延びる短い13号石垣がある。13号石垣は屋敷北東部分で段差のある部分に積まれ、段差が亡くなると消える。屋敷の南側には、１号屋敷盛土部分境の段差がありそこに２つの石垣が積まれている。１号道を境に東側に14号石垣、西側に17号石垣である。積み方は屋敷積石垣である。14号石垣は1号屋敷東端部分から北側の13号石垣に延びるのでは無く、２号道に沿って東側に延びて２号屋敷4号建物北側まで繋がっている。12号畑北側部分の石垣は畑積石垣で、４号建物北側部分は、屋敷積石垣となっている。17号石垣は、１号道から西側に積まれた石垣である。１号屋敷南西部分で北側に曲がるのではなく、２号道とともに１号井戸迄伸びている。

(ア)12号石垣(第17・18図、PL.12・13) 33区C～L-19・20グリッドに位置する

【概要】12号石垣は、１号屋敷２号建物北側部分と屋敷東側の７号畑北側部分に大きく分かれる。先に説明したように１号屋敷２号建物北側部分は屋敷積石垣であり、７号畑北側部分の石垣は畑積石垣である。

【規模・構造】屋敷北側の石垣は、40～50cmの大きさの自然石を平積みで７から８段積んでいることが多い。13号石垣東側の12号石垣は、20cm前後の小さな石をやや乱雑に積んでおり、積み方が異なっている。石垣の規模は長さが38mで西側の屋敷部分の長さは10.2m、石垣の高さは西側の屋敷部分で1.1～1.4m、東側の畑部分の崩れていない部分で1m前後である。

(イ)13号石垣(第18図、PL.12) 33区I-20グリッドに位置する。

【概要】13号石垣は、１号屋敷２号建物の北東端部分に位置し、北端は12号石垣と繋がっており、12号石垣の屋敷積部の石垣とともに、１号屋敷北東部分を区画している短い石垣である。

【規模・構造】石垣は、30～40cmの大きさの自然石を平積みで４から６段積んでいる。石垣の規模は南北方向の長さ1.2m、石垣の高さは12号石垣に接する部分で1.2mである。

(ウ)14号石垣(第19図、PL.13) 33区E～J-16～18グリッドに位置する。

【概要】14号石垣は、１号屋敷南側で出入り口東側部分から２号屋敷４号建物北側迄の長い石垣である。

次の(１)から(３)の種類に分かれる。

(１)屋敷南東部分で７号建物南と東側部分(屋敷積石垣)

(２)屋敷東側の12号畑北側部分(畑積石垣)

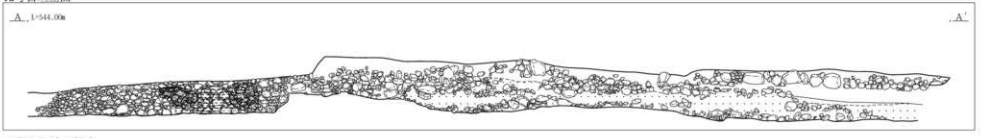
(３)２号屋敷４号建物北部分(屋敷積石垣)。この３ヶ所の石垣は作成目的が異なっており、作られた時期や構造等異なっていると思われるが、調査段階では繋がっているために14号石垣として調査した。報告でも同じように14号石垣として報告する。

【規模・構造】

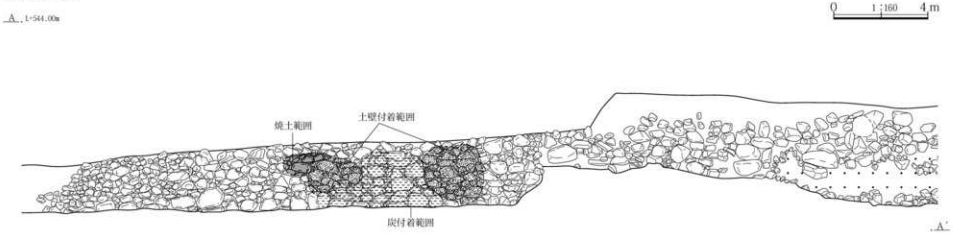
(１)屋敷南側の東西報告の石垣は、50～70cmの大きな自然石を平積みで３から４段、高さ70cm前後で積んでいる。長さは5.6mである(Ａ－Ａ′)。この部分の石垣は、２号道の北側の石垣にもなっている。屋敷東側の南北方向の石垣は、30～50cmの自然石を平積みで３から４段、高さ60cm前後で積んでいる(Ｂ－Ｂ′)長さは３mである。

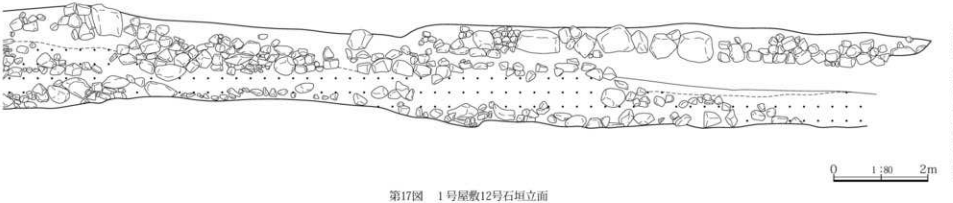
(２)12号畑北側の石垣は、屋敷に伴う石垣と異なり直線

12号石垣立面



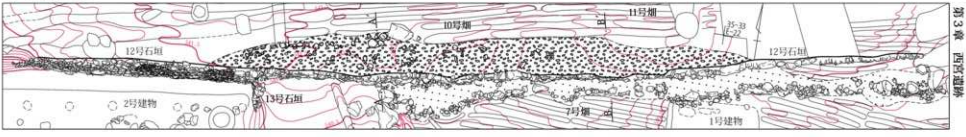
12号石垣立面拡大



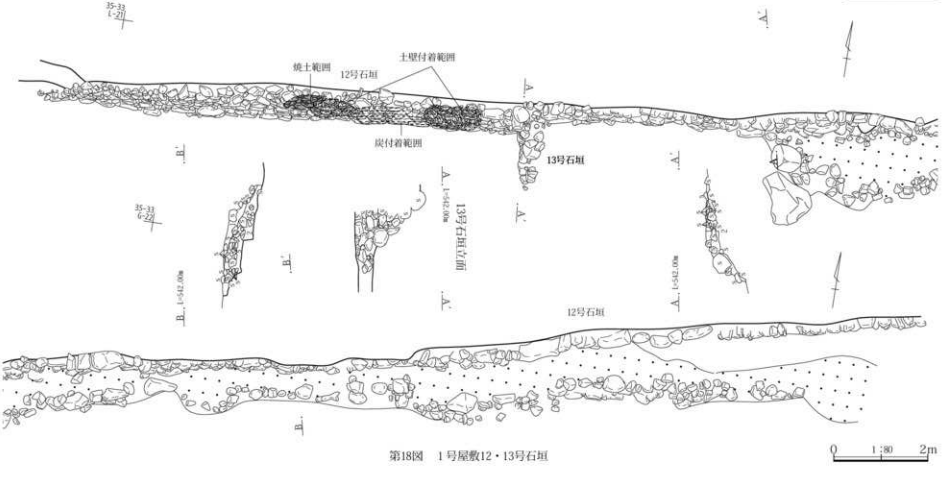


第17図　1号屋敷12号石垣立面

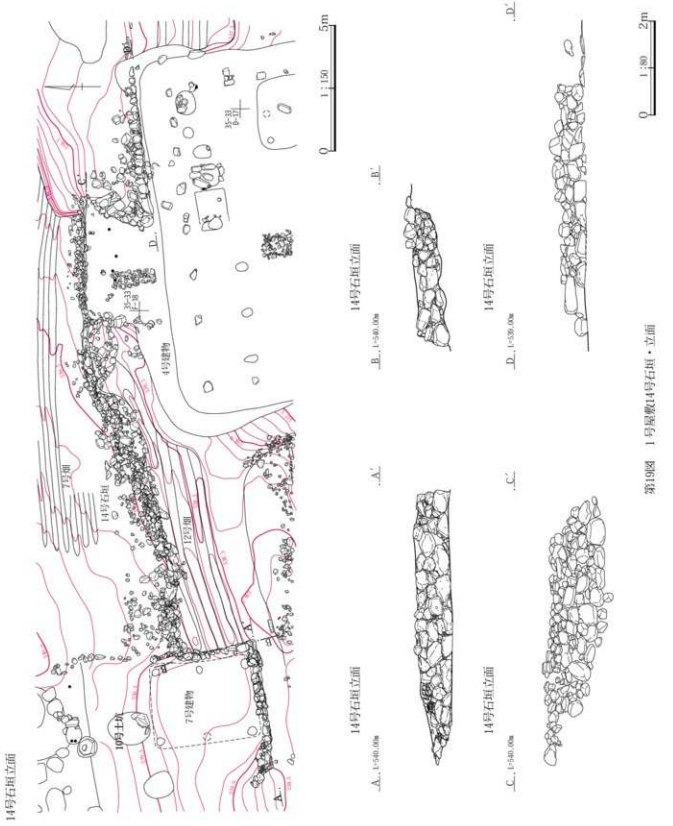
12・13号石垣平面



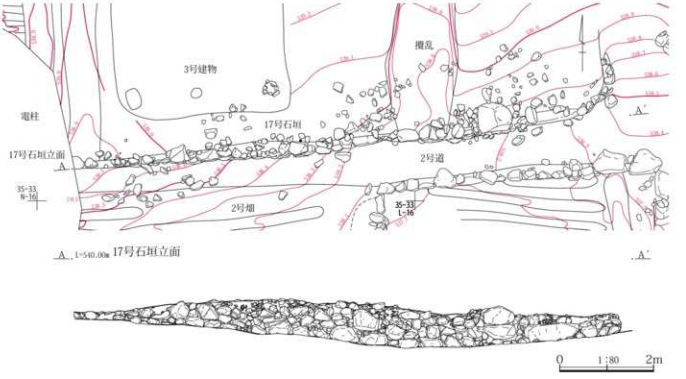
12・13号石垣拡大



第18図　1号屋敷12・13号石垣



第19図　１号掘取14号石垣・立面



第20図　１号屋敷17号石垣・立面

でなく積まれている。幅は１m前後で広い、積まれている石は10～60cmと大きさにばらつきがあり雑多な積み方部分が多い。自然石を５～６段、高さ70cm前後積んでいる。石垣の長さは14mである。

（３）４号建物北の石垣は、20～50cmの自然石を平積みで５から６段、高さ120cm前後で積んでいる（Ｃ－Ｃ′）石垣の長さは4.6mである。その部分から４号建物北側雨落溝に接している部分の石垣は長さ2.8m、積まれている石は４号建物北で雨落溝に接した部分の石垣同様に、20～50cmの自然石を平積みで３段、高さ60cm前後で積んでいる（Ｄ－Ｄ′）。Ｄ－Ｄ′部分石垣の長さは6.4mである。石垣の規模は長さが36.44mである。

(エ)17号石垣（第20図、PL.13）33区K～M-16グリッドに位置する。

【概要】17号石垣は、１号屋敷南側で出入り口西側部分に位置する。石垣は屋敷南側の２号道北側の石垣でもある。電柱により一部発掘できなかったが、電柱西に位置する大きな１号井戸迄、２号道とともに繋がっていたものと思われる。

【規模・構造】石垣は、30～50cmの自然石を平積みで３から４段高さ40cm前後で積んでいる。1号屋敷出入り口から1号井戸迄の長さは18.5mである。

⑨　出土遺物

母屋である２号建物の遺物出土状況を記すると、板間部分では、１号囲炉裏内の南辺寄りから煙管(28～30)が、囲炉裏の北東から煙管(27)が、煙管の北側と西側から銭(37～40)が出土している。囲炉裏と北壁の中間から陶磁器の小碗・皿（４・９～20）が、囲炉裏の南西から陶器すり鉢(23)が破片の状態で、その西側から鉄鎌(33)、鹿角(41)が出土している。南西隅近くからは香炉(21)が出土した。土間部分では炭出土方形遺構の南西寄りから砥石(43)が、方形遺構の北側から鉄鍋(32)が、その東側から古銭(34)が発見された。また、建物南東隅からも古銭(35・36)が出土している。２号建物出土の陶磁器は、掲載資料の他に江戸時代の国産磁器20点、83ｇ、国産陶器33点、247ｇ、近・現代陶磁器４点、32ｇが出土しているが、図示に足るものでは無かった。

この他に12号石垣出土の磁器碗（１）、13号石垣出土の磁器碗（２）、14号石垣裏込出土の磁器（３・５）、陶器（８・９・11～14）、煙管(15)、古銭(16)、17号石垣裏込出土の磁器（４）、陶器（６・７）を資料化した。

（２）２号屋敷（第21図、PL.15）33区B～F-15～18グリッドに位置する。

①　２号屋敷調査経過と調査概要

２号屋敷は、南に向かって低くなる緩やかな傾斜面に位置し、北側に14号石垣があり、その北は７号畑となっている。南側に３号屋敷があり、３号屋敷の東端に町道から２号屋敷に入るための５号道がある。町道下には、天明三年段階集落の中心となっている道があると思われ、そこに繋がっているものと思われる。

２号屋敷の敷地は、東西約19.5m南北は西側が12m、東側が13mであり、屋敷の北側に幅3.5m奥行２mほどの張り出しがある。南東部分は、東西６m南北９mの範囲張り出しがあり、そこに１号厠が作られている。４号建物北側では標高の高い北側を、高さ約1.7mほど掘り込みそこに14号石垣が築かれている。南側は、３号屋敷との境に築かれている16号石垣がある。

西側は南北方向に作られて３号道までとなっている。４号建物の前庭南東部分に浅間Ａ軽石が３ヶ所集められ山となっていた。庭等に堆積した浅間Ａ軽石を集めたものと思われる。西側の浅間Ａ軽石の山は東西98cm南北64cm高さ４cm、中央の浅間Ａ軽石の山は最も大きく東西196cm南北112cm高さ10cm、東側の浅間Ａ軽石の山は東西68cm南北76cm高さ４cmであった。

②　４号建物　（第22～26図、PL.16・17）33区C～F-15～17グリッドに位置する。

(ア)建物の概要

２号屋敷の母屋である。４号建物は東・北・西側の外側壁面下３面に礎石、南側は下屋部分の南東端に礎石、南西端は攪乱を受けており不明。他の柱はすべて掘立柱建物となっている。柱は桁行き方向で９本（１石は不明）、梁行き方向で６本と思われる。

建物の出入り口である南側に半間の下屋がある。母屋の北側・西側・東側に雨落溝が残っていた。南側の雨落溝は残っていない。雨落溝の幅は50cm前後である。４号建物は東側が土間で、西側が板間となっている。屋敷の出入り口は土間の南側である。土間の東側に馬屋が、奥に竈が設置されている。竈の東側に唐臼の支脚と唐臼が抜き取られたであろう掘り込みがある。竈の両脇には、小穴が２個掘られていた。２号建物の竈両脇にもあり、建物に伴なう柱穴と思われる。また竈西に接して、多くの炭の小破片や炭の粉を出土した炭出土方形遺構がある。囲炉裏は、土間と想定される板間との間に作られており、囲炉裏北・西・南の３面は板間、東の１面は土間に接している。板間に関連する大引き痕や根太痕は残っていなかった。

【規模・構造】柱は北側の桁行き方向で９本（１本不明）、南側は出入り口部分の柱を飛ばして８本、梁行き方向で下屋を含めて６本と思われる。建物の出入り口である南側に半間の下屋がある。この下屋の柱は５本である。柱間の間隔は板間が184cm前後、土間は123～153cmとなっている。桁行（東西）11.9m×梁行（南北）6.4m、建物南側に母屋の礎石から92cm離れて下屋柱を持つ。下屋を含めると梁行きは7.4mである。柱を配置する柱間の間隔は、東側の馬屋を含む土間部分と西側の板間部分で異なるようである。

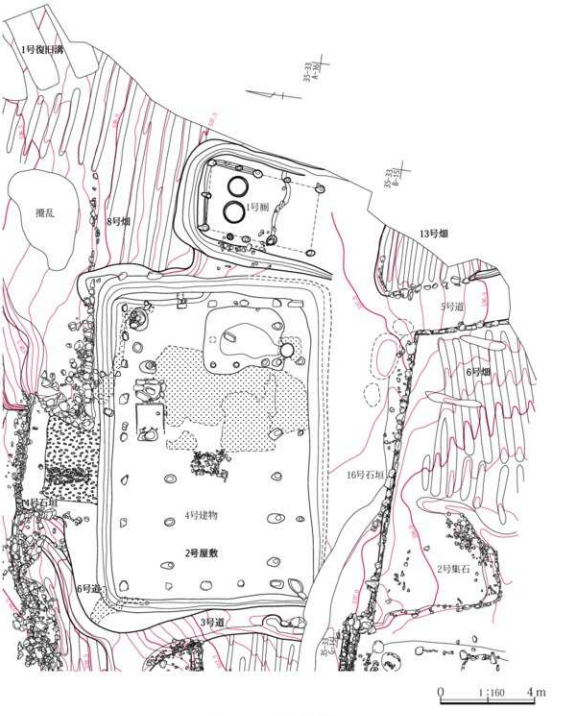
残っていた18個の礎石は平石および川原石が多用されていた。礎石の表面は、自然面で多少の凹凸があり、平らに加工された痕跡はない。礎石の大きさは一様ではなく、下屋柱となっている南東コーナー部分の１石（No18）が特に大きく長辺64cm厚さ21cmある。他の石は長径約30～50cmである。

下屋を含めた建物外壁部分西・北・東３面に礎石を用い、建物内部および南側壁面と下屋部分は、全て掘立柱となっている。礎石上の柱は礎石建、掘立柱部分は、柱の基礎部分が地中に埋められている構造となっている。礎石建と掘立の柱は、貫により連結されていたものと思われる。すべて礎石が使われている５号建物では、礎石に残る痕跡から、敷土台が使われているものと思われる。おそらく掘立柱建物から全面の礎石を用いた建物へ変化する中で、礎石と掘立柱がともに採用された建物ではないだろうか。

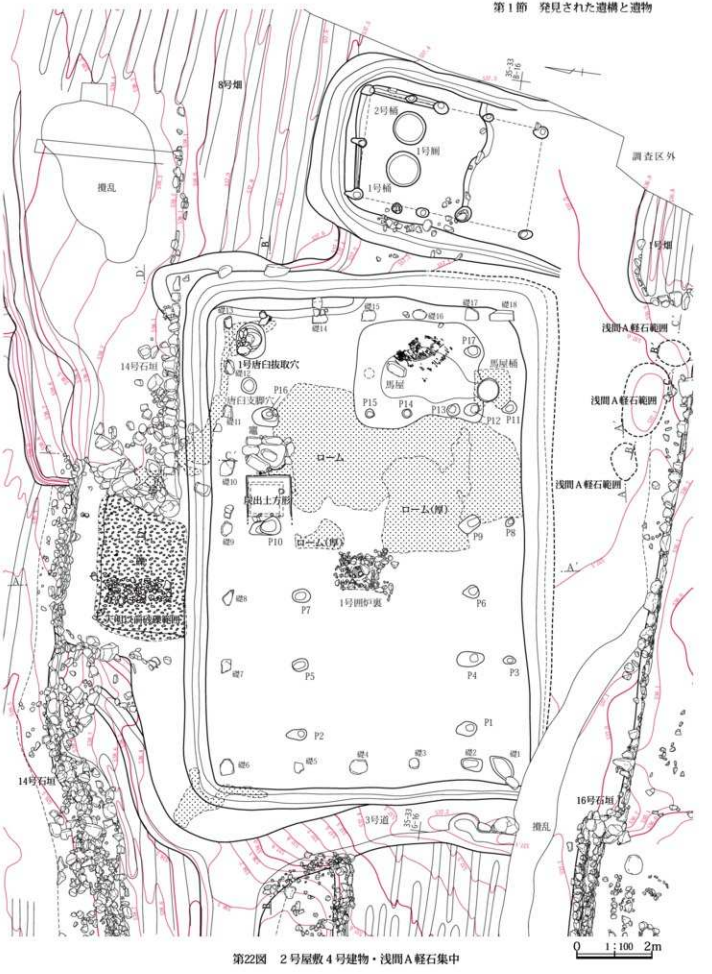
建物の北東部分で唐臼抜取穴から竈北側部分及び雨落溝上に、土壁が一部残っていた。さらに北西コーナー部分の雨落溝周辺部分、馬屋東側に土壁と思われる多くのロームが残っていた。

(イ)馬屋（第27図、PL17・18）

【位置・規模・構造】４号建物の南東隅に位置する。９本柱と思われる柱の中で、東側外壁部分に４個の礎石、内側に５個の柱穴が確認された。北壁面中央部に柱穴

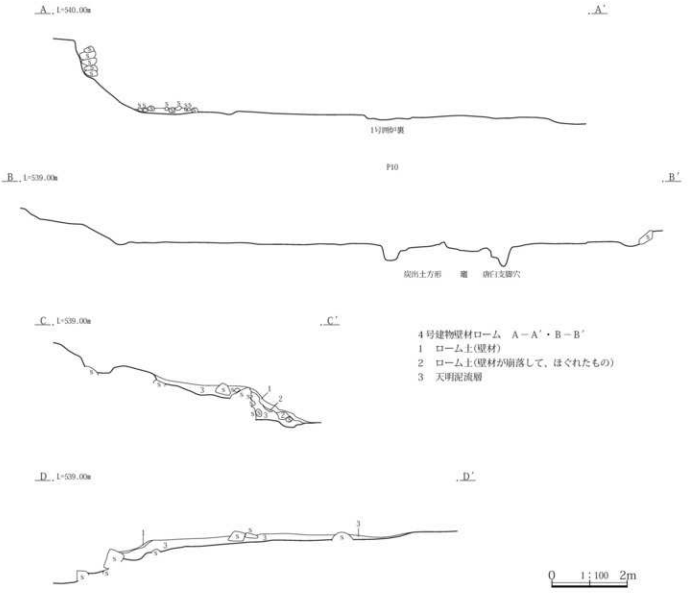

1号役比郭
撹乱
8号畑
1号厠
13号畑
5号道
6号畑
16号石垣
4号建物
2号屋敷
2号集石
7号石垣
6号道
3号道
0
1:160
4m

第21図　２号屋敷全体



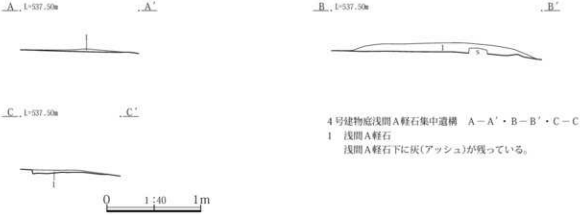
第22図　２号屋敷４号建物・浅間Ａ軽石集中

２区４号建物　壁断面



４号建物壁材ローム　Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'
1　ローム土(壁材)
2　ローム土(壁材が崩落して、ほぐれたもの)
3　天明泥流層

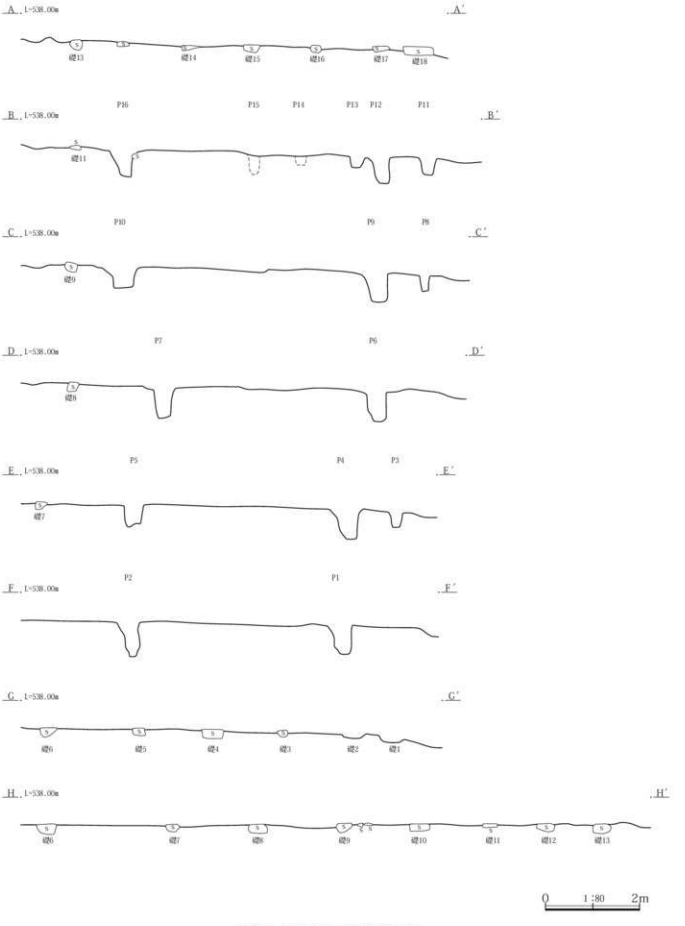
２区４号建物　浅間Ａ軽石集中



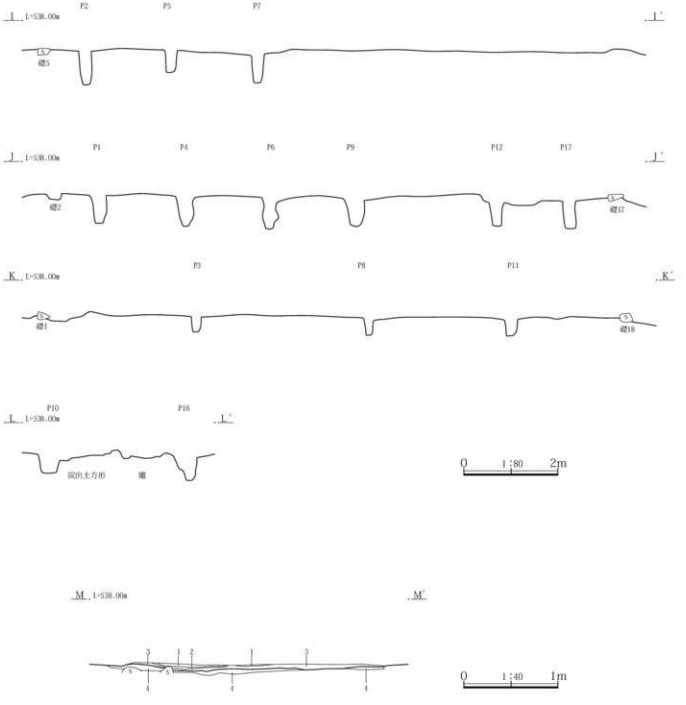
４号建物底浅間Ａ軽石集中遺構　Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'・Ｃ－Ｃ'
1　浅間Ａ軽石
　浅間Ａ軽石下に灰(アッシュ)が残っている。

第23図　２号屋敷４号建物壁断面、４号建物浅間Ａ軽石集中断面

第24図　２号屋敷４号建物全体

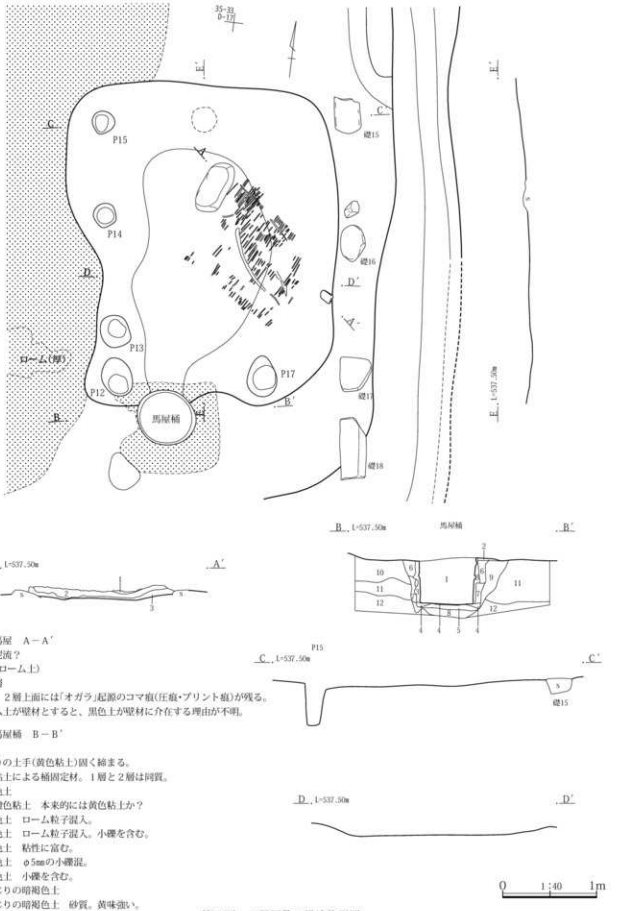


第25図　２号屋敷４号建物断面（１）



４号建物床面ローム貼　Ｍ－Ｍ'
１　灰黄色(肌色)のローム層　粘性強い。
２　黄橙色のローム　濃い黄橙色のローム。粘性強い。
３　黄色のローム　薄い黄色のローム。粘性あり。
４　暗褐色土　地山の砂質で、１mm前後の層。粘性なし。

第26図　２号屋敷４号建物断面(２)



４号建物馬屋　Ａ－Ａ'
1　天明泥流？
2　壁材(ローム上)
3　泥流層
※１、２層上面には「オガラ」起源のコマ痕(圧痕・プリント痕)が残る。
ローム土が壁材とすると、黒色土が壁材に介在する理由が不明。

４号建物馬屋桶　Ｂ－Ｂ'
1　泥流
2　桶周りの土手(黄色粘土)固く締まる。
3　黄色粘土による桶固定材。１層と２層は同質。
4　暗褐色土
5　灰～橙色粘土　本来的には黄色粘土か？
6　暗褐色土　ローム粒子混入。
7　暗褐色土　ローム粒子混入。小礫を含む。
8　暗褐色土　粘性に富む。
9　暗褐色土　φ5mmの小礫混。
10　暗褐色土　小礫を含む。
11　礫混じりの暗褐色土
12　礫混じりの暗褐色土　砂質。黄味強い。

第27図　２号屋敷４号建物馬屋

第８表　２号屋敷４号建物礎石・柱穴計測表

２号屋敷４号建物礎石

No	長径cm	短径cm	厚さcm
礎１	80	48	抜取
礎２	56	34	抜取
礎３	24	24	16
礎４	48	38	21
礎５	28	24	20
礎６	42	34	22
礎７	30	24	14
礎８	40	20	17
礎９	36	28	21
礎10	56	30	16
礎11	31	24	11
礎12	40	26	17
礎13	30	22	21
礎14	40	20	14
礎15	36	28	16
礎16	38	28	18
礎17	34	30	16
礎18	64	28	21

２号屋敷４号建物柱穴

No	長径cm	短径cm	深さcm
Ｐ１	54	40	61
Ｐ２	56	28	73
Ｐ３	34	20	13
Ｐ４	70	40	65
Ｐ５	40	32	45
Ｐ６	41	36	62
Ｐ７	50	34	63
Ｐ８	40	20	17
Ｐ９	54	36	61
Ｐ10	56	46	42
Ｐ11	40	30	32
Ｐ12	42	30	58
Ｐ13	32	30	24
Ｐ14	24	24	22
Ｐ15	24	24	40
Ｐ16	30	26	56
Ｐ17	44	32	60

は掘られていなかったが、柱はあったものと思われる。馬屋は、中央部分が凹状にへこんでおり、土間部分より18cm前後低くなっていた。馬屋の規模は、東西方向約245cm南北方向約275cmで南北方向が少し長くなっている。

馬屋の南側には埋設桶(便槽)が据えられていた。埋設桶を囲むように10～30cm幅で厚さ５cmのロームが貼られていた。桶の木質部は残っていなかったが、縦方向の木質部が少し残っていた。側面および底面にロームが貼られており、側面にはタガの痕跡が底部から27cmおよび44cmの高さのところに２本明瞭に残っていた。埋設桶(便槽)の規模は、底部で幅55cm深さ約48cmであった。埋設桶は桶を埋めるために桶より大きく掘り、底面にロームを貼り、桶を埋め桶の周辺にロームを貼り、貼られたローム外側を地山に近い土で埋めている。

馬屋東側にロームが厚さ５～８cmほどの厚さで堆積しており、その上には「麻幹(オガラ)」に似た植物の圧痕が前面に残っていた。このロームを主とした土は土壁と思われる。「麻幹(オガラ)」と思われる痕跡は、土壁の外側にあったものであろうか。土壁と馬屋床面との間には泥流が流れ込んで馬屋床面に堆積し、その後東側から押し寄せた大量の泥流により土壁が馬屋床面に倒れたと思われる。ほかに残っていた土壁は竈北側部分の雨落溝から石垣にかけての狭い範囲だけであった。

(ウ)土間(第24図、PL.18)

【概要】建物の東側に土間、西側が板間と思われる。土間には馬屋・竈・炭出土方形遺構等がある。土間と板間の境界は、土間の観察から１号囲炉裏の東側であったと思われる。

馬屋・囲炉裏・竈に囲まれた土間部分は、ローム等を用いて平らに整地し固めてあった。入口から囲炉裏までの範囲では、灰褐色・黄橙色・黄色の３種類のロームを主とした土が厚さ５～８cmほど貼られていた。北側の竈手前部分の床面に貼られていたロームを主とした土は薄かった。囲炉裏東側部分の床面にロームは貼られていなかった。土間と板間床下部分の地山の高さは、ほぼ同じ高さであった。

【所見】土間は、ロームを主とした土を貼って平らにしていた。セメントのように固くはなく、移植ごて等で切断できる。近代以降の農家とで見られるローム･砂･消石灰･にがり等を混ぜた三和土(タタキ)とは異なっているようである。

土間と囲炉裏の造られた板間との境に柱は無い。おそらく同一空間として使われていたものと思われる。西側奥の幅１間半の板間との間は、板戸等により区切られていたものと思われる。

(エ)竈(第28図、PL.18・19)

【位置・出土状況】４号建物土間の奥に位置する。泥流を取り除くと、細長い多くの石が、北側に倒れかけ、竈中央部から北側にかけて、小さな石とロームを多く含む土が確認された。細長い石とロームで作られていた竈が、泥流により壊されながら北側に押しつぶされたような状態であった。

【構造・規模】竈のまわりを囲む側壁に使われている石は、幅20～25cm長さ45～60cm厚さ12～25cmである。燃焼部幅両袖方向60cm前後、奥壁方向65cm前後で、やや奥壁方向に長い楕円形を呈している。燃焼部床面で灰・炭・焼土が残っていた面は、床面より少し低い。竈内の高さは、使われていた石の長さが60cm前後であるため、おそらく

60㎝前後であったと思われる。建てられていた細長い石の外側は、ロームが巻かれて固定されていた。燃焼部床面に残っていた灰・炭・焼土の厚さは５㎝前後である。

【所見】両袖方向１ｍ、炊口から奥壁方向1.3ｍの範囲を竈範囲とし、燃焼部側壁面には両側に細長い石３個を建て、奥壁部分には細長い大きな石２個を建てる。両袖６石＋奥壁２石の計８個の細長い石を建て、竈の構造材とする。炊口の部分には平石３個を置く。積まれた石の上には、小さな石とロームを用いて、鉄鍋等を据えられるように加工する。側壁外面にはロームを巻きつけ外面からみると、ロームで囲まれた竈とする。これが西宮遺跡で作られている竈の原型と思われる。４号建物の竈は右側の側壁や奥壁の石が少し異なるが、基本形はこのような造りであると思われる。

(オ)炭出土方形遺構(第29図、PL.19) 33区D･E-17グリッドに位置する。

【位置・出土状況】竈西側に接し、方形で土抗状に少し低くなって、底部全面に粉状の炭が全面に敷いたような遺構がある。灰と焼土粒は、ほとんど含まない。炭出土方形遺構と呼称した。同じような遺構は、２・５号建物でも確認されている。

【規模･形状】東西92㎝南北70㎝周辺の土間から深さ11㎝、中央部分が凹状で少し深くなっている。

【構造･所見】東西92㎝南北70㎝の規格された長方形を呈しており、おそらく木枠等により囲まれていたものと思われる。竈内の炭火等を消し炭等として再利用するために、処理し一時保管していた場所と考えられないだろうか。

(カ)唐臼(想定)（第29図、PL.19）

建物の北東コーナー部分に直径75㎝深さ35㎝の土抗状の掘り込みがある。この掘り込みから西側へ約145㎝離れた場所に直径45㎝深さ50㎝の掘り込みがある。土抗状の掘り込みは唐臼の抜取穴、西側の小さな掘り込みは唐臼の支脚が埋まっていた穴と思われる。覆土中には泥流や多くの石が詰まっていた。石製で作られていると思われる臼は、２・５号建物同様に抜取られたためか残っていなかった。唐臼の北と東側には、ロームを主とした土が唐臼を囲むように残っていた。

(キ)床面

【位置・出土状況】囲炉裏より西側は板間になっていたものと思われる。床面の範囲は東西方向約5.6ｍ南北方向約6.5ｍと思われる。しかし床面を示す大引・根太痕等の遺構は残っていなかった。

(ク)１号囲炉裏　(第30図、PL.20)

【位置・出土状況】建物ほぼ中央、床面と土間との境部分に位置する。確認面は床面より低かった。

【構造･規模･形状】囲炉裏東側は土間に接し、他の北･西･南の３面は板間に接していたと思われる。燃焼面は土間より低い位置であった。２号建物囲炉裏で見られた囲炉裏を囲むような、土手状の高まりは認められなかった。

囲炉裏中央部分幅約60㎝の範囲では、土間部分より15㎝ほど掘り込まれ、地山の石を撤去してあったが、周辺部は６～７㎝と掘り込みが浅く、地山の石の多くは撤去することなく、囲炉裏として使用されていた。囲炉裏中央部は焼けていたが、ローム等を持ち込んだ様子は確認できなかった。

囲炉裏を囲むように、内径90㎝前後の角材でできた外枠と思われる痕跡が残っている。

【所見】囲炉裏の構造や使用状況を残している囲炉裏である。囲炉裏東側は土間に接し、北・西・南面は板間に接していたと思われる。囲炉裏中央部には厚さ４㎝の灰とその下には赤く焼けた焼土が残っていた。

(ケ)土壁(第24図、PL.20)

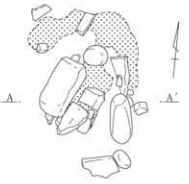
【位置・出土状況】４号建物内の北東部分に土壁と思われる多くのロームが残っていた。雨落溝部分の土壁は、雨落溝の直上付近から、泥流と思われる厚さ40㎝前後の土の上に乱雑に残っていた。

【構造･所見】この土壁は、５号建物の土壁のように建物北側全面でなく、４号建物北側の限定された一部分に残っていた。他の部分の土壁は不明である。

③　１号厠　(第31図、PL.20･21) 33区B･C-16･17グリッドに位置する。

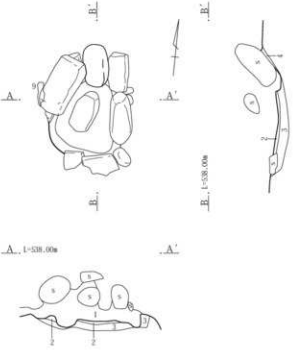
【位置・出土状況】２号屋敷内の南東部、母屋である４号建物の東側に位置し、床面の高さは２号屋敷面より10㎝ほど低くなっている。東側は、現町道があり、発掘できない。おそらく町道下には天明三年段階の村の幹線道路があり、１号厠東面はその道路に面しているものと思われる。柱穴が11本確認されているが、Ｐ６とＰ９との間およびＰ７とＰ８との間に柱穴は掘られていなかった。建物の内側は、北側で２個の桶が埋められていた部屋と南側で埋められていない部屋に分かれるようであ

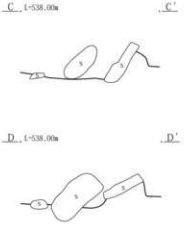
竈　１面



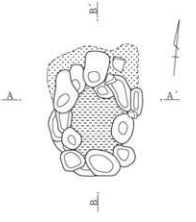
竈　３面

竈　２面





竈　４面

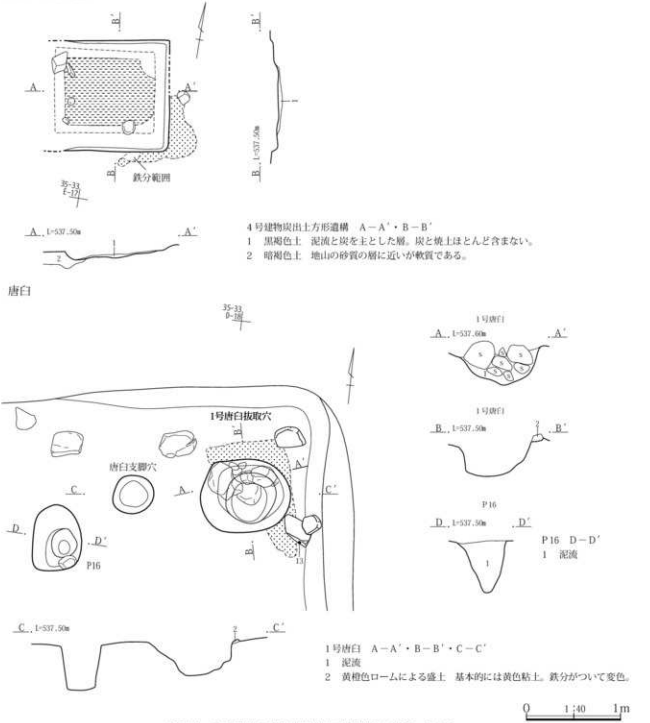


４号建物竈　Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'
1　天明泥流
2　灰層。多くの炭の小片とわずかな焼土粒を含む。
3　暗褐色土　地山。１mm以下の砂質の層。
4　黄色ローム

0　1:40　1m

第28図　２号屋敷４号建物竈

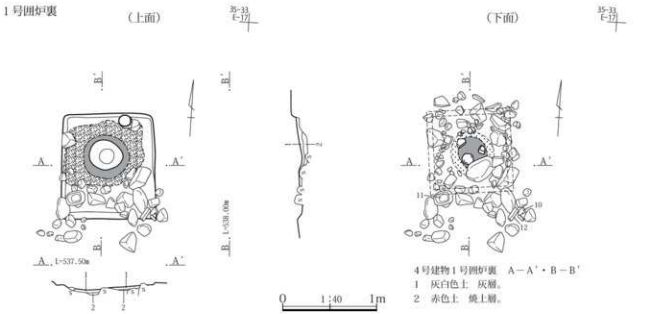
炭出土方形遺構



第29図　２号屋敷４号建物炭出土方形遺構、唐臼、Pit16

る。２個の桶が埋められていた部屋の面積が広く、桶を囲むように平らに整地され表面にロームが貼られていた。しかし南側にローム等は貼られていない、やや凹凸となっている。床面の高さは、桶部分より20cm低くなっていた。建物内に浅間Ａ軽石は無く、建物の北側の雨落溝内には多くの浅間Ａ軽石が、東側と西側では少量の浅間Ａ軽石が堆積していた。４号建物の付属建物であったと思われる。

【規模・形状】建物の大きさは、柱穴の心々寸法で、東西方向276cm南北方向458cm、雨落溝までの整地面は東西方向365cm南北方向不明である。柱穴から雨落溝までの距離は60cm前後、雨落溝の深さは３cm前後である。掘立柱穴は、11本あり直径は20cm前後深さ40～50cmである。北側に埋められている２個の埋設桶は、西側を１号桶、



第30図　２号屋敷４号建物１号囲炉裏

東側を２号桶とした。１号桶が少し大きい。１号桶の大きさは、桶の底面で直径86㎝口縁部付近で直径92㎝高さ75㎝、２号桶の大きさは、桶の底面で直径83㎝口縁部付近で直径85㎝高さ73㎝である。

【構造・所見】２個の桶穴は、桶を埋めるために桶より大きく掘られ、下面に厚さ６～８㎝のロームを貼り、桶を埋め桶のまわりに厚さ８～10㎝のロームを貼りつけ、その外側に掘り出した土等で埋めて固定している。断面の観察から桶の外側に貼り付けられたロームは、段差があり２段階で埋められていたものと思われる。桶内部には底面から５・20・70㎝の高さの位置にタガの痕跡が３ケ所残っていた。桶の側板の痕跡が明瞭に残っており、板の幅は15㎝前後である。２個の桶のまわりの土間には、厚さ６～８㎝のロームを約92㎝×約276㎝全範囲全体に貼っているようである。５号建物に付属する２号厠では、桶の埋まっている部屋が埋まっていない部屋より狭いが、１号厠では逆に広くなっている。

④　**５号道**（第51図参照）33区C-13・14グリッドに位置する。

【概要】５号道は、２号屋敷南東部に位置する。天明三年段階で２号屋敷南東部にあったであろう村の幹線道路と繋がっている道と思われる。西側は３号屋敷との境の16号石垣、東側には12号畑があり、畑と道との境には石が並べてあるが、石垣のように積まれてはいない。

【規模】道の長さは長さ４ｍ、幅1.7～1.8ｍである。４号建物庭面の標高は537ｍ、確認できた道南端部の標高は536.5ｍであり、約50㎝屋敷面が高くなっている。

※　６号道については（４）屋敷外⑥道の中で記載。

⑤　**出土遺物**

２号屋敷の母屋である４号建物から出土した資料の出土状況を記す。

カマドの西側、炭出土方形遺構の隙間から包丁（９）が出土した。

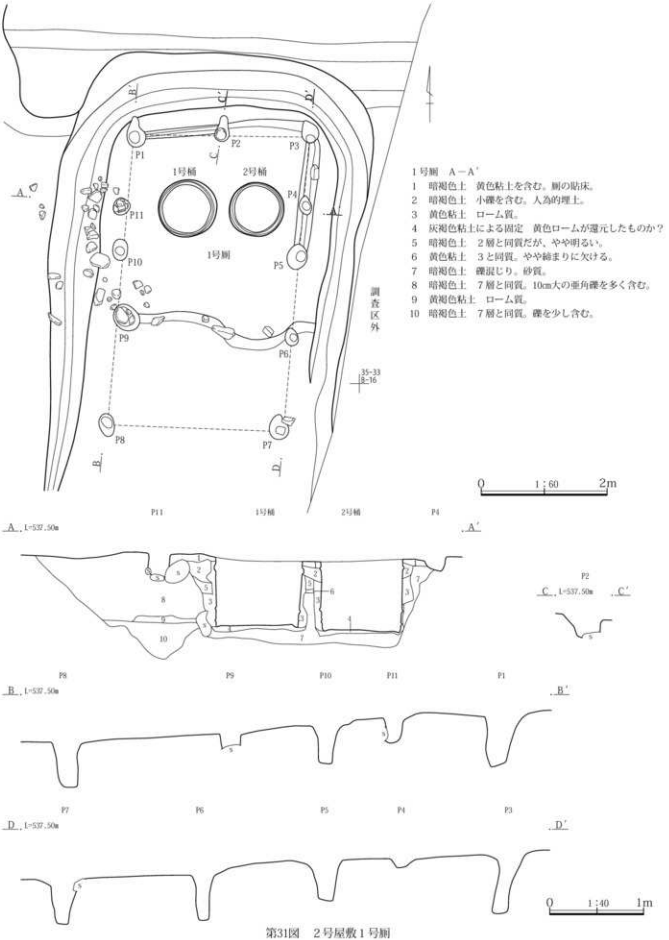
１号囲炉裏の北東隅から鉄製蓋（６）が出土している。これは、茶釜（８）の蓋と考えられる。南西隅から石製品（11）が、南東隅に接する部分から砥石（10・12）が出土している。

建物北側で張り出して、石垣により区画されていた礫敷部分とこれに接する場所から、薬缶（７）と茶釜（８）、陶器碗（１～３）、徳利（４）、陶器すり鉢（５）が出土している。

出土した薬缶の中には、布切れが残っていた。布切れの大きさは、4.5×3㎝、糸の厚さは１㎜と太い。２つに折られていた。薬缶で煎じるときに使用された袋状の布ではないだろうか。

５号建物出土の陶磁器は、掲載資料の他に、江戸時代の国産陶器１点、重量18ｇが出土しているが、図示するに足るものはなかった。

１号厠、５号道からの遺物の出土はなかった。



第31図　２号屋敷１号厠

（３）３号屋敷（第32図、PL.23・24）33区G～J-12～14グリッドに位置する。

①　３号屋敷調査経過と調査概要

３号屋敷は、南に向かって低くなる緩やかな傾斜面に位置し、北側は16号石垣がありその北は６号建物・５号畑・２号屋敷となっている。西側は１号道があり、東側は５号道がある。南側は現在の町道となっており、屋敷全体を発掘することはできなかった。町道下には、天明三年段階の集落の中心となっている道があると思われる。屋敷内には母屋である５号建物・２号厠・２号集石・６号畑がある。

３号屋敷の敷地は、屋敷北側で東西約26m、南北は発掘できた範囲は15mである。屋敷地西側に母屋である５号建物があり５号建物南東部に２号厠、東に接して２号集石、その東側に６号畑がある。敷地は平地面を確保するために標高の高い北・西・東側を削りそこに16号石垣を築いている。

５号建物は、建物西側が板張りの床面であり、東側が土間となっていた。床板・大引・根太等の木質部分は泥流中に埋もれ、その後木質部分が腐敗し泥流中で空洞となっている。空洞中には木質部がわずかに残り、泥流の色や土質とは異なっていた。調査の結果多くの床面の痕跡を確認することが出来た。

床板は泥流により北側にわずかに押し出され、さらに床板に乗り上げた泥流により床下の土間に落下している。大引・根太は、床下の土間部分に一部めり込んでおり痕跡を残した。

②　５号建物（第33～36図、PL.24～27）33区G～J-12～14グリッドに位置する。

(ア)建物の概要

３号屋敷の母屋である。５号建物は他の母屋である２・４号建物と異なり、すべて礎石を使用した建物である。礎石は桁行き方向で９本、梁行き方向で６本である。

建物の南側に半間の下屋がある。母屋の周りには雨落溝があり、溝中には浅間Ａ軽石が残っていた。雨落溝の幅は50cm前後である。５号建物は、東側が土間で、西側が板間となっている。屋敷の出入り口は東側にある土間の南側である。土間の東側に馬屋、奥に竈が設置されている。竈の東側に唐臼の支脚穴と唐臼が抜き取られたであろう掘り込みがある。また竈西に接して、多くの炭の小破片や炭の粉を出土した炭出土方形遺構がある。囲炉裏は、２ヶ所確認された。１号囲炉裏は多くの石を方形に組み上げて床板面で使用できるように使用面を高くしている。４面板間に囲まれている囲炉裏と思われる。

２号囲炉裏は、１号囲炉裏と竈との中間付近の土間部分に位置する。

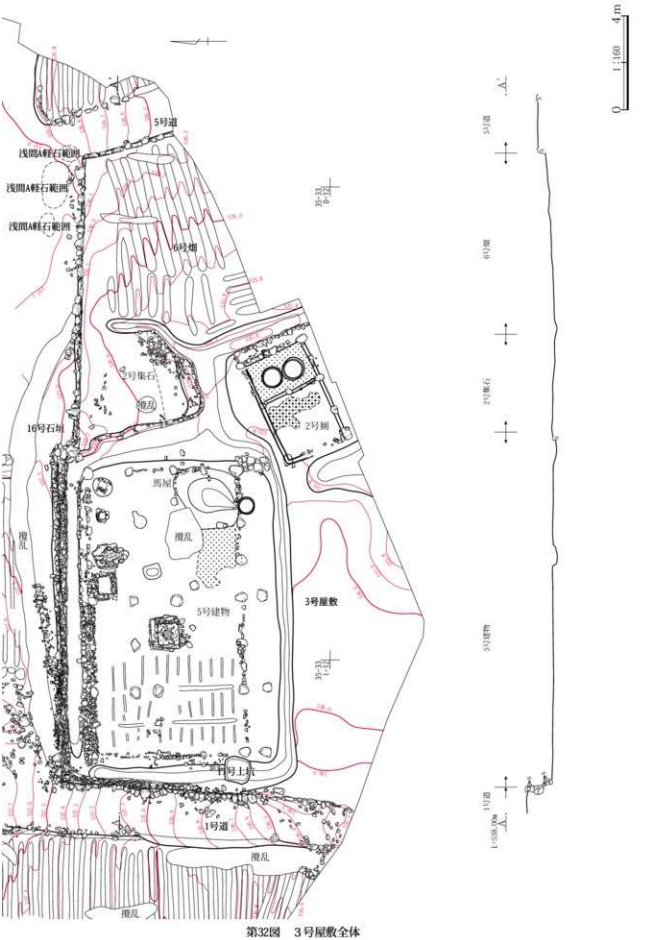
【規模・構造】柱は桁行き方向で９本、梁行き方向で６本である。建物の出入り口である南側に半間の下屋がある。この下屋の柱は５本である。柱間の間隔は板間部分が184cm前後、土間は123～153cmとなっている。桁行（東西）12m×梁行（南北）6.4m、建物南側に母屋の礎石から92cm離れて下屋柱を持つ。下屋を含めると梁行は7.4mである。柱を配置する柱間の間隔は、東側の馬屋を含む土間部分と西側の板の間部分で異なる。

残っていた34個の礎石は平石および川原石が多用されていた。礎石の表面は、自然面で多少の凹凸があり、平らに加工された痕跡はない。礎石の大きさは幅25～50cmで一様ではない。

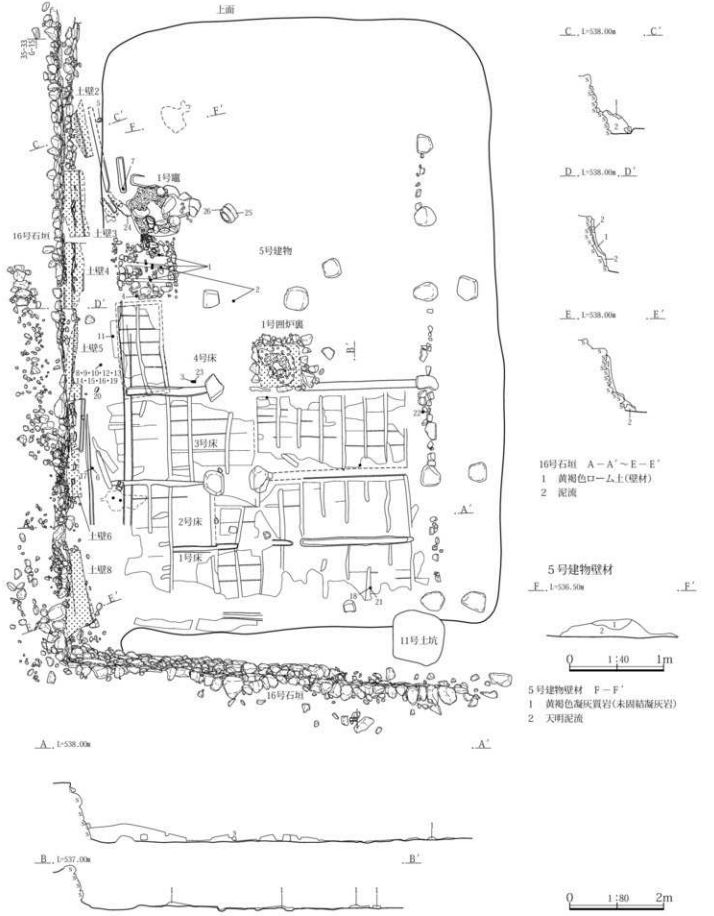
【礎石に残された土台の痕跡】礎石の表面を丁寧に観察すると敷土台と思われる痕跡が多く確認された。南側の下屋部分の礎石には残っていなかった。敷土台が建物外周の東西南北壁面を囲むように方形に配置され、柱は敷土台の上に建てられたものと思われる。一方床下部分や土間部分では、礎石の上に直接柱が建てられたようである。敷土台の痕跡は幅15cm前後である。

(イ)床面（第33図、PL.25・26）

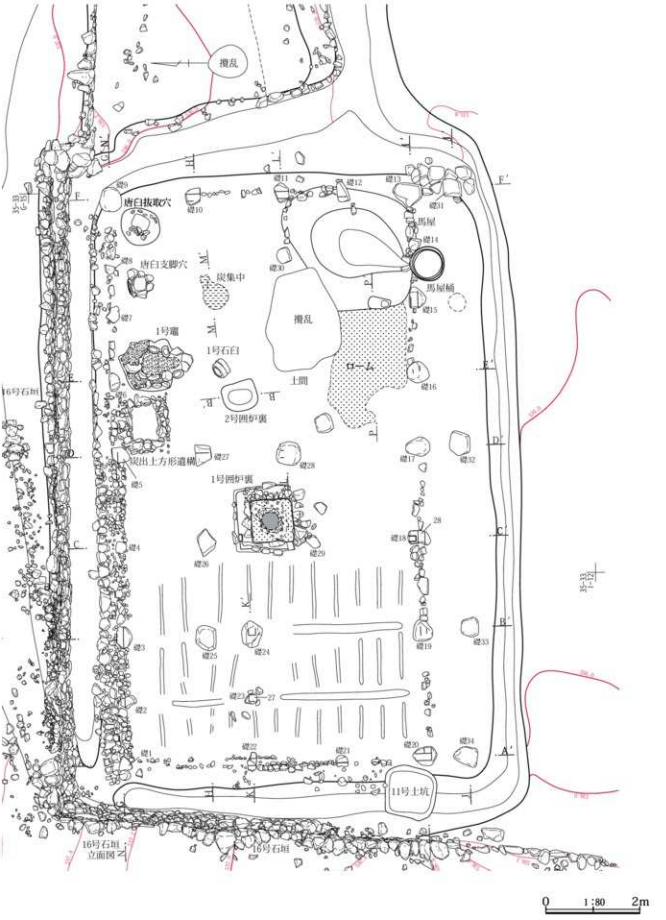
【確認状況】床面部分に残されていた床板・大引・根太の痕跡は、１号囲炉裏西側全面にあり、その部分は床板が貼られていたことがわかる。また１号囲炉裏北側で、炭出土方形遺構南側にも多くの床板の痕跡が残り、その部分にも床板が貼られていたことがわかる。その部分と１号囲炉裏との間では、わずかであるが３ヶ所板材の痕跡が残っていた。１号囲炉裏南東部で礎石との間に写真で観察すると細長く床板の痕跡が残っている。おそらく１号囲炉裏東側の礎石から西側は、前面床板が貼られていたものと思われる。床面は、３本の南北方向の大引を境に西から１・２・３・４号床と呼称する。北側の土台はほぼ現位置を保っていたようであるが、その上の床板の一部は泥流により40cm前後北側に移動していた。その


5号道
浅間A経石範囲
浅間A経石範囲
浅間A経石範囲
6号畑
9号集石
撹乱
16号石垣
2号厠
馬屋
撹乱
撹乱
5号建物
3号屋敷
11号土坑
1号道
撹乱
撹乱
A'
5号道
6号畑
25集石
5号建物
1号道
0
1:100
4m

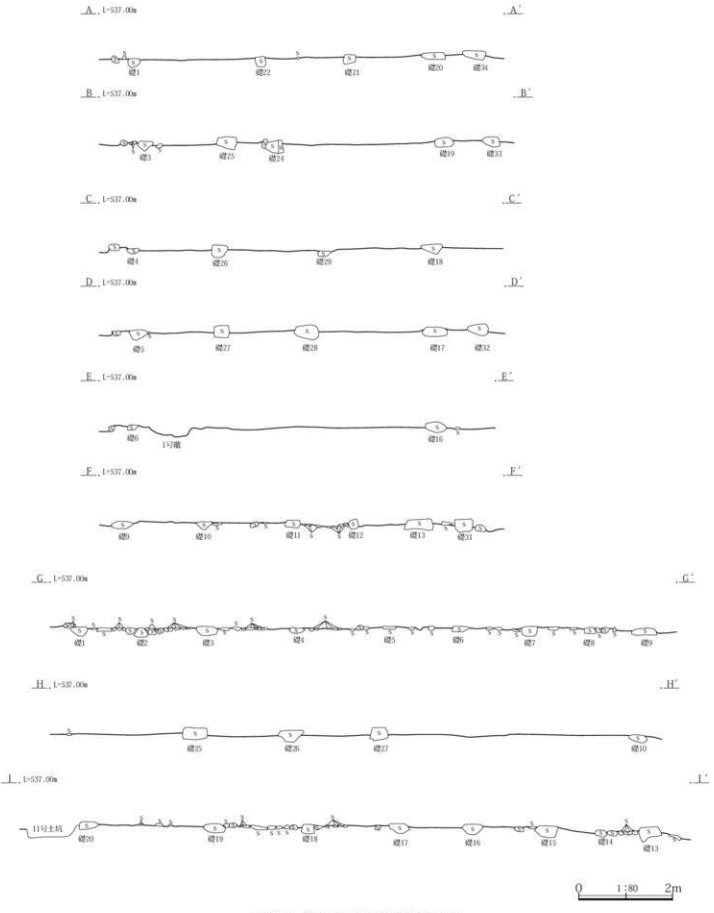
第32図　３号屋敷全体



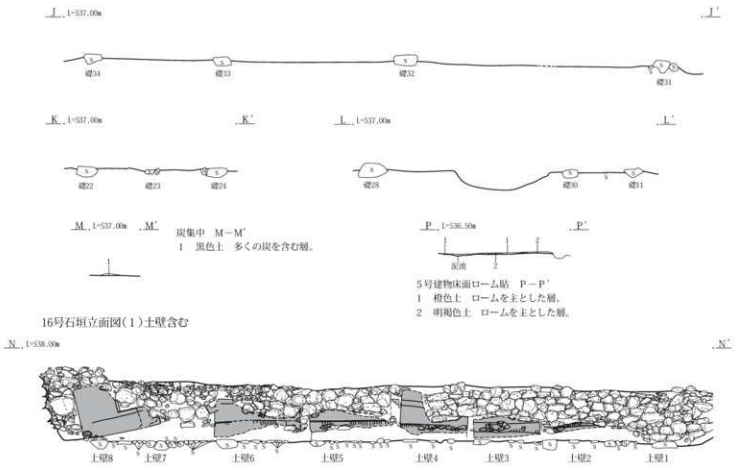
第33図　３号屋敷５号建物床の痕跡



第34図　３号屋敷５号建物

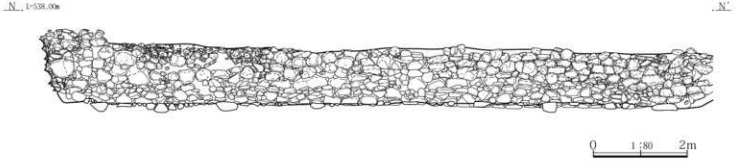


第35図　３号屋敷５号建物礎石断面（１）



16号石垣立面図（１）土壁含む

16号石垣立面図（２）



第36図　３号屋敷５号建物礎石断面（２）、16号石垣土壁立面

第９表　３号屋敷５号建物礎石計測表

No.	長径cm	短径cm	厚さcm
礎１	32	26	17
礎２	34	18	23
礎３	48	32	20
礎４	24	22	13
礎５	36	32	22
礎６	40	22	12
礎７	34	24	21
礎８	21	18	－
礎９	50	46	18
礎10	32	32	16
礎11	38	30	17
礎12	40	20	24
礎13	60	50	30
礎14	24	24	－
礎15	44	34	22
礎16	48	44	24
礎17	50	40	21
礎18	46	26	20
礎19	44	40	27
礎20	50	42	16
礎21	24	22	21
礎22	40	20	21
礎23	26	30	13
礎24	56	40	43
礎25	50	42	34
礎26	42	34	27
礎27	40	32	27
礎28	50	50	32
礎29	32	20	13
礎30	30	28	20
礎31	36	36	27
礎32	50	42	14
礎33	40	36	19
礎34	52	40	20

部分では、床板の下に泥流が堆積しており、床板が泥流により運ばれる前に、泥流が建物北側の雨落溝付近を埋めていたことがわかる。

【構造・所見】床板はすべて南北方向に貼られており、幅は30cm前後である。根太はすべて床板と直行する東西方向であり、45cm前後の間隔で13本確認できる。根太の太さは６cm前後である。大引は、すべて南北方向であり、南北方向に３ヶ所で確認できる。大引痕の太さは15cm前後である。

(ウ)馬屋(第37図、PL.28)

【位置・規模・構造】５号建物の南東隅に位置する。８本柱と思われる。東と南側で５個の礎石、北側で1個の礎石が残っていた。西側では、１個の柱穴が確認されたが、他の想定される１ヶ所の柱は、攪乱により残っていなかった。礎石又は柱穴があったものと思われる。馬屋は、中央部分が凹状にへこんでおり、土間部分より10cm前後低くなっていた。馬屋の規模は、東側方向約245cm南北方向約275cmで南北方向が少し長くなっている。

馬屋の南側には埋設桶(便槽)が据えられていた。埋設桶の木質部は残っていなかったが、内面にはタガの痕跡が底部から20cmおよび60cmの高さのところに２本明瞭に残っていた。底面外周に深さ６cmほどの掘り込みがある。桶底板の下に位置する側板部分と思われる。桶の材は残っていなかったが縦方向の側板の痕跡が残っていた。埋設桶(便槽)の規模は、底部で幅56cm深さ約74cmあった。埋設桶は、桶を埋めるために桶より大きく掘り、底面に石を含まない土を埋め、桶を埋め桶の周辺にロームを貼り、貼られたローム外側に地山に近い土で埋めている。

馬屋東側にロームが厚さ５～８cmほどの厚さで堆積しており、その上には「麻幹(オガラ)」に似た植物の圧痕が前面に残っていた。このロームを主とした土は土壁と思われる。「麻幹(オガラ)」と思われる痕跡は、土壁の外側にあったものであろうか。土壁と馬屋床面との間には泥流が流れ込んでいた。このロームを主とした土が土壁であるなら、水分を含む泥流が最初に押し寄せ馬屋床面に堆積し、その後東から押し寄せた大量の泥流により土壁が馬屋床面に倒れたのではないだろうか。

(エ)土間(第34図、PL.28)

【概要】土間には馬屋・竈・炭出土方形遺構・唐臼・２号囲炉裏等がある。土間は、１号囲炉裏東側の南北方向の礎石列から東側である。馬屋西側の土間は、ローム等を用いて平らに整地し固めてあった。橙色および明褐色のロームを主とした土が厚さ２～４cmほど貼られていた。土間と板間床下部分の地山の高さは、ほぼ同じ高さであった。

【所見】土間は、ロームを主とした土を貼って平らにしていた。セメントのように固くはなく、移植ごて等で切断できる。近代以降の農家とで見られるローム・砂、消石灰・にがり等を混ぜた三和土(たたき)とは異なっているようである。２・４号建物と異なり、土間と板間との境に柱があり、囲炉裏は板間の高さに合わせた高い位置に作られていた。しかし他の建物同様に土間と板間は板戸等で空間が区切られていなかったのではないだろうか。

(オ)竈(第38図、PL.29)

【位置・出土状況】５号建物土間奥に位置する。泥流を取り除くと、４号建物の竈のように、細長い石やその石を囲むようにロームがあり、北側の高い位置には焼土の塊が残っていた。これらの状況から竈が泥流により壊さ

れた状態であることが確認できた。４号建物の竈のように多くの側面の石は北側に傾いてはいなかった。

【構造・規模】壁面に使われている石は、幅20～25㎝長さ30～45㎝厚さ15～25㎝である。燃焼部幅両袖方向50㎝前後、奥壁方向60㎝前後で、やや奥壁方向に長い楕円形を呈している。燃焼部床面に少量の灰が残り、その下の中央部に幅30×25㎝厚さ12㎝薄い平石が置かれていた。その面の高さは、床面より10㎝ほど低くなっている。建てられていた細長い石が床面に固定されていた外側部分は、ロームで巻かれて固定されていた。ロームは、側壁に接した部分で赤く焼けて焼土化していた。

【所見】両袖方向1.05m、炊口から奥壁方向1.3mの範囲を竈範囲とし、燃焼部側壁面には両側に細長い石３石奥壁には２石を建てる。両袖６石＋奥壁２石の計８個の細長い石を建てて、竈の構造材とする。炊口の部分には平石３個を置く。積まれた石の上には、小さな石とロームを用いて、鉄鍋等を据えられるように加工する。側壁外面にはロームを巻きつけ外面からみると、ロームで囲まれた竈とする。これが西宮遺跡で作られている竈の原型と思われる。５号建物の竈は右側の側壁や奥壁の石が少し異なるが、基本形はこのような造りであると思われる。

(カ)炭出土方形遺構(第39図､PL.29･30) 33区H-14グリッドに位置する。

【位置・出土状況】竈西側に接し、多くの石を方形に積み上げた石室のような遺構である。確認段階では内部は全面天明泥流で埋まっていた。泥流の上から南北方向に２本の角材等が置かれていたであろうわずかな痕跡があった。角材が置かれたであろう北側の石積み部分ではそこに石は積まれていなかった。底面に多くの粉状の炭があるが焼土や灰は含まれない。炭出土方形遺構と呼称した。他の２・４号建物も同じ位置にあるが、深さはいずれも10㎝以下であり、石を石垣状に積み上げてはいない。

【規模・形状】石は３段積が基本であり、北側で大きな１石で壁面としているところもある。使われている石の大きさは、15×20㎝厚さ10㎝前後の石が多い、石垣に積まれている内径での大きさは東西方向75㎝南北方向55㎝でやや東西方向に長い。深さは28㎝ある。

【構造・所見】内面底部には多くの粉状の炭と陶磁器の破片が出土している。底面の高さは、北側の雨落溝の底部より30㎝前後低くなっている。雨が降っている時期は冠水していることも考えられる。炭の保管庫・野菜等の保管庫等も考えられるが、これほど大きくて深い石組の施設がなんの目的で作られたのか不明である。

(キ)唐臼(想定) (第39図、PL.30)

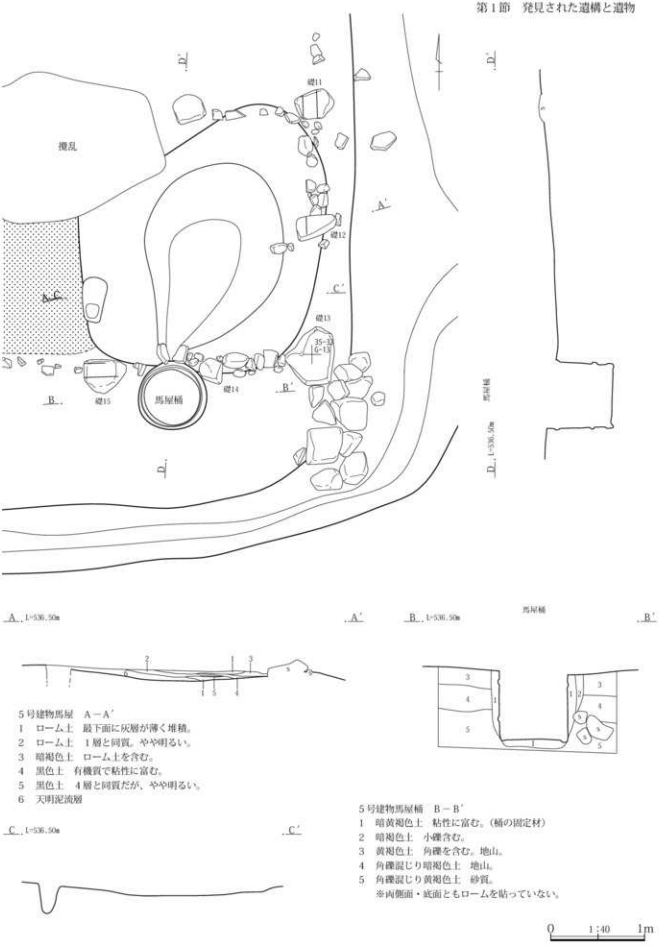
【位置・出土状況】建物の北東コーナー部分に直径70㎝深さ33㎝の土抗状の掘り込みがある。この掘り込みから西側へ約135㎝離れた場所に直径30㎝深さ55㎝の掘り込みがある。土抗状の掘り込みは唐臼の抜取穴、西側の小さな掘り込みは唐臼の支脚が埋まっていた掘り込み穴と思われる。掘り込み穴の周辺には支脚を囲むように幅15㎝石の厚さ10㎝前後の多くの石が置かれてあった。石製で作られていると思われる臼は、２・５号建物同様に抜き取られたためか残っていなかった。唐臼の北と東側には、ロームを主とした土が臼を囲むようにわずかに残っていた。

【構造･所見】２・５号建物２棟にはほぼ同じ場所で同じ大きさの唐臼の抜取穴と支脚を埋めたであろう土抗状の落ち込みが残っていた。２軒とも石製の臼は残っていない。土抗の中は泥流で埋まっていた。埋まった泥流の厚さは１m前後であるので、泥流が押し寄せた後で、掘り出されたのではないだろうか。

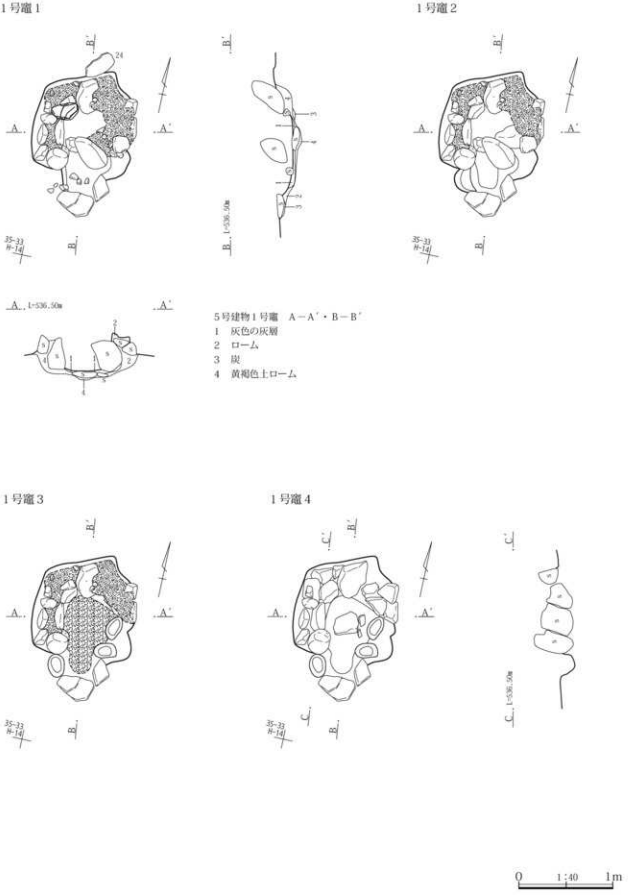
(ク)１号囲炉裏 (第40図、PL.30・31)

【位置・出土状況】建物ほぼ中央、床面の最も土間に近い４号床中央部に位置する。残されていた床板の痕跡から､囲炉裏の周囲には板が貼られていたものと思われる。囲炉裏の木製の枠は、腐食して残っていなかったが、それ以外の部分は使われていた状態をほぼ良好に残しており木製の枠を置けば、すぐにでも使用可能な状態であった。

【構造・規模・形状】床下部分を約1.5m四方の範囲に20～30㎝の大きな石を方形に組み、内径で80㎝四方、深さは石の上に置かれた木製の枠を含めて約30㎝とする。基礎部分の石組みの外側にはその石を補強するように、同じような大きさの石を多く並べる。石で囲まれた囲炉裏内の底部中央には、長さ56㎝幅35㎝厚さ17㎝の大きな石が１つ置かれていた。その底部中央の大きな石と方形に積まれた囲炉裏の石積との間は、中央に置かれた石の高さの半分近くまで、土間の土と同質の土が詰められて



第37図　３号屋敷５号建物馬屋



5号建物1号竈　A－A′・B－B′
1　灰色の灰層
2　ローム
3　炭
4　黄褐色土ローム

第38図　３号屋敷５号建物１号竈

炭出土方形遺構

上面

A　L=536.50m　A'

B　L=536.50m　B'

５号炭出土方形遺構　Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'
1　泥流
2　炭・灰層。焼土なし。

唐臼

唐臼支脚穴

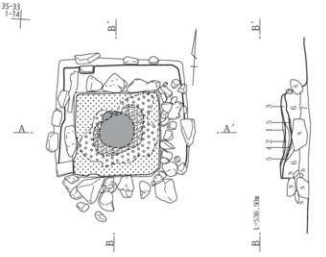
唐臼抜取穴

0　1:40　1m

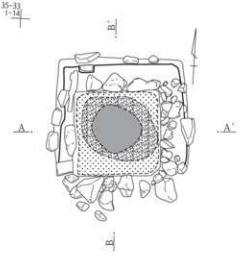
第39図　３号屋敷５号建物炭出土方形遺構、唐臼

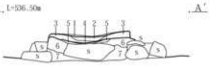
１号囲炉裏平面１

１号囲炉裏平面２



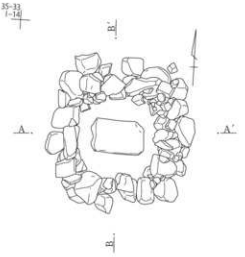
１号囲炉裏平面３



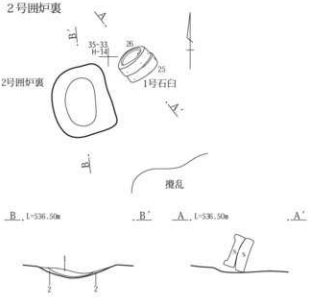


５号建物１号囲炉裏　Ａ－Ａ'・Ｂ－Ｂ'
1　灰白色土　灰を多く含み、少量の炭を含む。
2　焼土
3　黄褐色土　ローム層。下のローム層よりやや暗い。
4　灰白色土　灰を多く含み、少量の炭を含む。
5　焼土
6　黄褐色土　ローム層。上のローム層よりやや暗い。
7　褐色土　　住居床面と同じ砂質の層。ローム含まず。

１号囲炉裏掘り方



２号囲炉裏



５号建物２号囲炉裏　Ｂ－Ｂ'
1　灰白色土　灰が主で少量の炭を含む。焼土粒ほとんど含まず。
2　赤褐色土　焼土層。

0　1:40　1m

第40図　３号屋敷５号建物１号囲炉裏・２号囲炉裏

いた。その上には厚さ15㎝ロームが貼られ、中央の石のまわりを固めていた。その面に焼けた焼土と灰があり、中央の石の表面も焼けていた。この面で火が炊かれたことが考えられる。その後その上に厚さ６㎝前後ロームを積み上げ、天明泥流により埋没する段階までの囲炉裏の使用面としている。使用面は中央部が周辺部より５㎝ほど低くなっている。

このロームの外側に厚さ10㎝前後、内径80㎝前後の大きさの方形の木枠等が置かれていたものと思われる。囲炉裏の使用面は、このように多くの石やロームを用いて方形に、床下面より30㎝ほど高く積み上げ、その面を使用面としている。囲炉裏を囲むように厚さ10㎝前後の木枠が置かれたと思われる。囲炉裏内の灰は、中心部直径約70㎝の範囲で厚さは４㎝前後、焼土部分はその内側直径40㎝厚さは６㎝前後、まわりより少し低くなっている中心部には少し炭が残っていた。

【所見】多くの石を方形に組み、土間の高さより約30㎝高い面を確保して使用面としている。４面を床板にかこまれており、床面で使用できる高さとしている。

(ケ)２号囲炉裏(第40図、PL.31)

【位置・出土状況】建物ほぼ中央、竈と炭出土方形遺構の南、１号囲炉裏の東側に位置する。土間に作られた囲炉裏である。土間をほぼ方形に掘り込んで造られており、内面中央底部には灰白色の灰が７㎝前後の厚さで堆積しており、底面全体が焼けて焼土化している。

【構造・規模・形状】床下部分を掘り込んで造られており、確認段階では東西とも約80㎝四方であった。灰を除去した段階では南北70㎝東西60㎝であった。底面は焼土化しており、掘り込んだ深さは、周辺部で３㎝、中央部では床面より12㎝ほどの深さとなっている。

【所見】竈の南側に接した囲炉裏である。泥流を除去すると多くの灰が方形に残った状態で確認された。竈と同時期に使用されていた囲炉裏であろうか。

(コ)土壁(第36図、PL.31・32)

【位置・出土状況】５号建物北側の雨落溝から16号石垣にかけて、５号建物の土壁と思われるロームを主とした固まりが６面残っていた。各土壁面は５号建物の礎石位置を境に分離しており、礎石の上に立っていた柱を境に土壁が分かれていた真壁構造であることがわかる。以下詳しく検討する。

５号建物北側は礎石が９個あり、柱間は８ヶ所ある。柱の太さを約12㎝とすると柱間は東から110・110・140・140・170・170・125・125㎝前後となると思われる。この柱間に土壁があったとして、東より土壁１～土壁８とする。土壁１と土壁７は確認できなかった。土壁１はおそらく存在したが残っていなかった。土壁７は、残りが悪く、一部分しか残っていなかった。土壁の幅はそれぞれの場所の柱間とほぼ一致する。

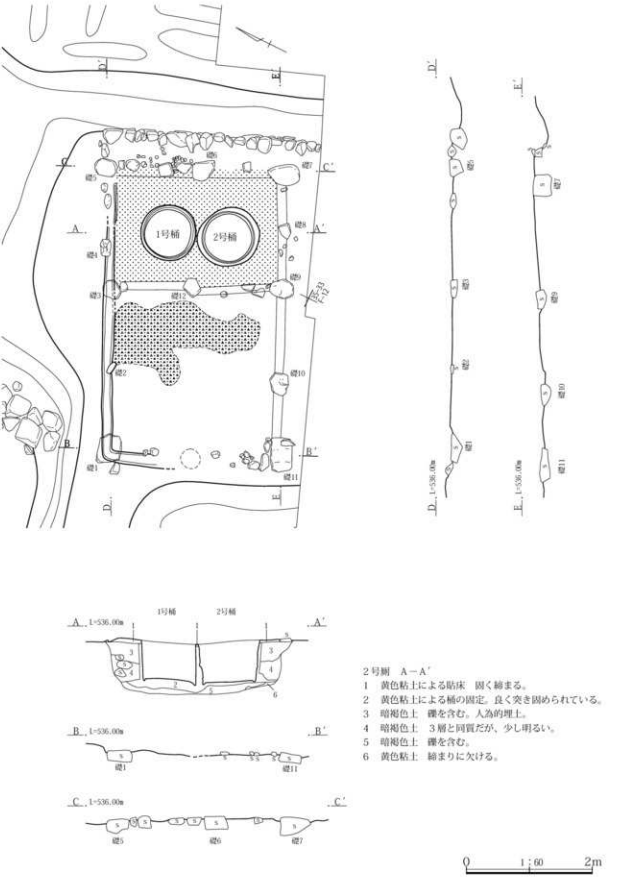
土壁には２本の貫の痕跡を残していた。貫の幅は10㎝前後である。土壁の高さは、最も残りの良かった西端部分で1.1ｍまで確認できた。土壁の厚さは５㎝前後である。

【構造・所見】土壁は雨落溝の浅間Ａ軽石の上に直接堆積していたのではなく、雨落溝部分に堆積した高さ30～50㎝の泥流の上から石垣にかけて押し倒された状態で残っていた。これは泥流が５号建物を巻き込むように押し寄せ、一定量の泥流で埋まった段階で、土壁が北側に倒れたことを示している。東宮遺跡11号建物に残る土壁から貫はおそらく４本あったと思われる。貫構造の建物である。

③　２号厠　(第41図、PL.33) 33区E・F-12グリッドに位置する。

【位置・出土状況】５号屋敷内の南東部、母屋である５号建物の南東側に位置する。南側は、現町道があり、発掘できない。おそらく町道の下には天明三年段階の村の幹線道路があり、２号厠東面はその道路に面しているものと思われる。平地面は５号建物床面より20㎝ほど低くなっている。礎石建の建物であり、礎石が12個確認されている。西壁面中央部の１礎石は残っていなかった。建物の内側は、東側で２個の桶が埋められていた部屋と南側で埋められていない部屋に分かれるようである。桶の木質部は残っていなかったが、良好に桶の痕跡が残っていた。桶まわりは平らに整地され、桶を囲むように表面にロームが貼られていた。しかし西側の区画は整地されているが、厚くローム等は貼られていない。土間の高さは、桶の埋められていた部分が埋められていない床面より６㎝高い。建物内に浅間Ａ軽石は無く、建物の東側の溝状の落ち込みの中にも浅間Ａ軽石はほとんど残っていない。

【規模・形状】建物の大きさは、東西方向約460㎝南北方向約276㎝である。礎石の上に建物の敷土台は残ってい



第41図　３号屋敷３号屋敷２号厠

なかったが、北側で敷土台の痕跡が掘り込まれた状態で残っていた。太さは10cm前後である。

北・西・南側に明瞭な雨落溝は確認できなかった。東側に溝があり、５号建物や２号集石等から流れ出た水が集まって流れたものと思われる。２号厠東側はその溝との境に２段ほど石が組まれ、建物内の浸水が無いように工夫している。桶の埋められていた床面部分より東側の溝底部は、約20cm低くなっている。

東側で２個の桶が埋まっていた区画の大きさは、短軸約184cm長軸約276cm、桶の埋まっていない区画の大きさは、短軸長軸とも約276cmで正方形であった。

北側に埋められている２個の埋設桶は、北側を１号桶、南側が２号桶である。２号桶が少し大きい。１号桶の大きさは桶の底面での直径84cm口縁部付近での直径85cm高さ65cm、２号桶の大きさは桶の底面での直径84cm口縁部付近での直径96cm、高さ64cmである。

【構造・所見】５号建物の付属建物であったと思われる。２個の桶は、桶を埋めるために桶より大きく掘られ、下面に厚さ４～14cmのロームを貼り、桶を埋め桶のまわりに厚さ５～６cmのロームを貼りつけ、その外側に掘り出した土等で埋めて固定している。桶の上面は少し表面より高く出ていたと思われる。２個の桶のまわりの土間には、厚さ６～８cmのロームをほぼ約184cm×約276cm全範囲に貼っているようである。

第10表　３号屋敷２号厠礎石計測表

No.	長径cm	短径cm	厚さcm
礎１	45	38	19
礎２	20	10	4
礎３	32	30	10
礎４	36	17	－
礎５	36	28	19
礎６	35	30	20
礎７	50	34	23
礎８	25	17	－
礎９	38	30	14
礎10	35	27	14
礎11	55	44	14

④　**11号土坑**（第42図、PL.33）33区J-12・13グリッドに位置する。

【帰属時期】天明三年以降

【概要】11号土坑は、５号建物南西部位置し、建物西壁の南端付近の礎石の西側から雨落溝部分を掘り込んでいる。５号建物より新しい。土坑覆土中は、泥流で埋まっている。

【規模】東西南北方向1.2mで方形に近い平面系を呈する。深さは20cmである。５号建物が泥流により埋没し、その後掘られたものと思われる。

⑤　**２号集石**　（第42図、PL.34）33区E・F-13・14グリッドに位置する。

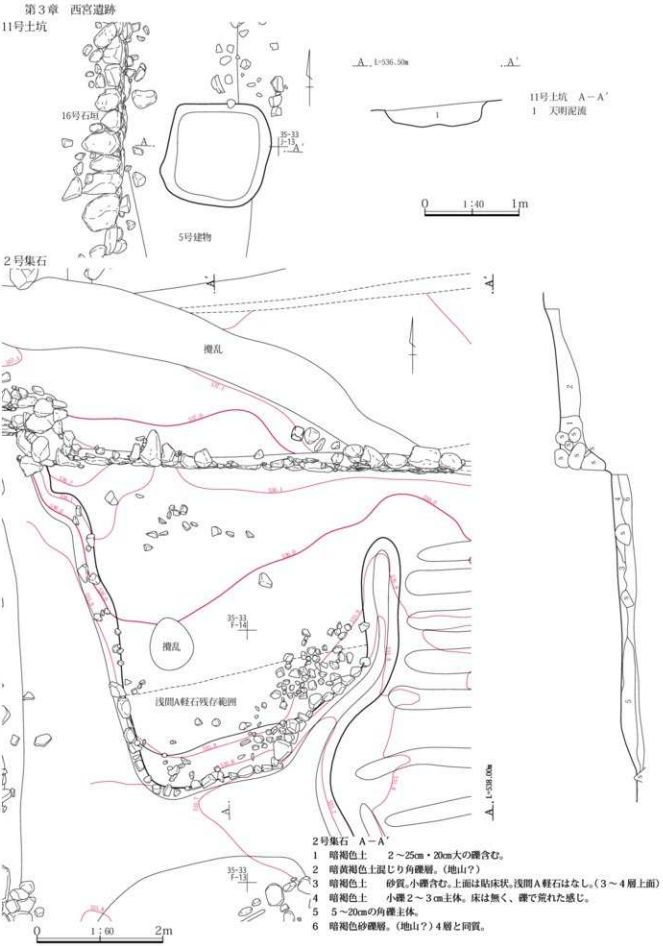
【位置・出土状況】５号建物と６号畑との間、２号厠の北側に位置する。16号石垣から南側に舌状に少し高い面を形成し、西・南・東側を１～２段の石を積み上げて区画している。石で区画された外側は浅い溝となっており、浅間Ａ軽石が２～３cm堆積していた。遺構の表面は、ほぼ平らに一部貼床状になっている。しかし建物を建てた痕跡はなく、東側の６号畑のように耕作した後も認められない。北側には浅間Ａ軽石は無かったが、南側には残っていた、その範囲を図示した。暗褐色土で覆われた表面の下には、20～30cmの大きな石が大量にあった。

【規模】遺構の性格が不明であり、どこまでを２号集石に含めるかは明らかでない。石垣までを範囲として計測すると、東西方向約５m、南北方向5.2mである。中央部と高さは南側の溝底部より30cm前後高くなっている。

【構造・所見】大量の石が集められ、大小の石を表面に積み上、表面を暗褐色土で覆い平面としている。当初石捨場等であったが、その後物置等にして使用していたのではないだろうか。南側の狭い範囲にある浅間Ａ軽石が、北側の広い範囲にない。そこにはものが置かれていたために、浅間Ａ軽石が残らなかったのではないだろうか。

⑥　**16号石垣**　（第43・44図、PL.34）33区C～J-13・14グリッドに位置する。

【概要・規模】16号石垣は、３号屋敷西側と北側を囲み、東側の２号集石北側、６号畑北側さらに、３号屋敷に入るための５号道西側まで繋がっている石垣である。この石垣全体を16号石垣と呼称している。しかし５号建物西・北壁面に積まれた石垣とそれ以外の石垣では、作られた目的が異なっている。５号建物西・北壁面の石垣は、建物のまわりに積まれた石垣であり、丁寧高くに積まれている。しかし石垣の中段付近で段差があり、そこを境に積み方や積んでいる石の大きさや色が異なっている。積まれた時期が異なるものと思われる。２号集石北側、６号畑北側さらに、３号屋敷に入るための５号道西側までの石垣は、大きな石を丁寧にほぼ垂直に積み上げている。



第42図　３号屋敷５号建物11号土坑、２号集石

16号石垣は屋敷を囲む石垣として、丁寧に積まれている石垣である。石垣の全長は、５号建物西側で12.7m、北壁面で14.6m、２号集石北側から６号畑北側面で13m、５号道西側で3.8m、全長合計44.1mである。

●屋敷西側と北側の石垣

５号建物西側に積まれている石垣を詳しく観察すると（立面図Ｄ－Ｄ′）石垣は２段階に分かれて積まれていることがわかる。上段に積まれている石垣は、南端から４m付近まで、１段であり直径40～50cmの大きな石を基礎石として置き、その上に30cm前後の石を積んでいる。南端から約４m北になると、40～50cmの大きな基礎石の手前を、基礎石より40cm前後深く掘り込んでいる。そこに直径30cm前後の小さな石を中心とした石垣が積まれている。上段の石垣にあったような一段と大きな基礎石は積まれていない。上段の石垣基礎石部分の底面の高さは標高536.40m前後であり、下段の石垣の底部は標高536.00m前後で、40cm前後低い位置に下段の石垣の底部が位置する。下段の石垣は、上段の石垣の手前に積んでおり、使われている石は、大きさが上段の石より小さく大きさも一定していない。積み方もやや雑である。また石垣の上面は上段の石の基礎部分下に擦り付けているように積んでいる。５号建物北側の石垣は、西側に積まれていた石垣同様に２段に積まれている。下段の石垣の底部の高さは上段の石垣の底部より40cm前後低い位置となっている。

【所見】これらの積み方や、積まれている石の違いから、以下のことが考えれれる。

（１）当初の石垣は、上段の石垣である。基礎部分に大きな石を使い、一定の大きさの石を使い丁寧に積んでいる。しかし石垣底面は、北側が南側より40cm前後高くなっており、水平ではない。５号建物を建たてるために、水平面の確保が必要となり、北側を中心に10～45cmほど掘り下げる。

（２）当初築かれた石垣の下に石が積まれていない面ができた。そこに大小の石を用いて石垣を追加する。

このような経過で２段の石垣が出来たのではないだろうか。

●２号集石北側、６号畑北側、５号道西側の石垣

５号屋敷北側の石垣は、建物の北東部分で建物を囲むように南側に直角に方向を変えて積まれている。しかし長さ50cm積んだ後に、石垣は直角に東側に方向を変えて、６号畑北東端で５号道南東方向に方向を変えている。２号集石北側、６号畑北側部分の石垣は自然石を平積みで３～５段。使われている石の大きさは幅40～60cmが多く、石垣の高さは60～120cmである。５号道西側の石垣は、同じような石を使い、１段前後である。石垣の高さは15～30cmである。

【所見】16号石垣は、３号屋敷を囲んで作られているが、積まれている場所で、石垣の基礎部分の高さが違っている。

５号建物部分での石垣の底面の高さは標高536.00cm前後、２号集石北側、６号畑北側で536.30m前後、５号道西側の石垣部分で536.40mである。５号建物周辺の石垣も当初は、536.30m前後の高さであったが、その後40cmほど北側を掘り下げて、５号建物が作られたのではないだろうか。

⑦　出土遺物

３号屋敷の母屋である５号建物からはカマドの周囲、床板貼り部分、建物の北壁近くから陶磁器、鍋、煙管、石臼などが出土している。以下、その概要を記す。

床板貼り部分からは陶器すり鉢(18・21)の破片が出土している。南東隅からは円盤状の金属製品(22)が出土している。土間部分では１号カマドの手前に石臼の上臼(26)、下臼(25)が重なった状態で横転していた。カマド斜め右後の管状の空洞部分からは陶器灯火皿(７)が、カマド後方からは鉄鍋(24)の底部部分が出土している。炭出土方形遺構内からは陶器碗(１・２・４)、４号床付近から陶器(３)、煙管(23)が出土した。

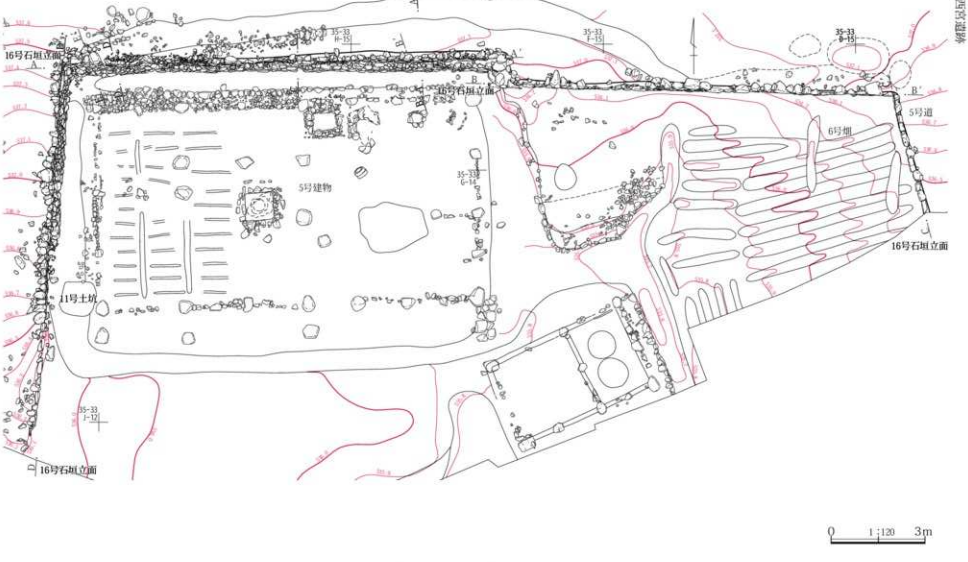
戸外から出土した遺物としては、建物北辺中央部分から陶器の摺絵皿８点(８～10、12～16)が出土している。これらより東方の地点から同じ文様の摺絵皿(11)が、西方から陶器香炉(20)が出土している。また、西方2mの地点からは陶器摺絵皿(17)と片口鉢(６)が出土している。北東隅寄りの戸外からは陶器碗(５)が出土している。

土台の痕跡が残っていた礎石(27・28)を図示した。

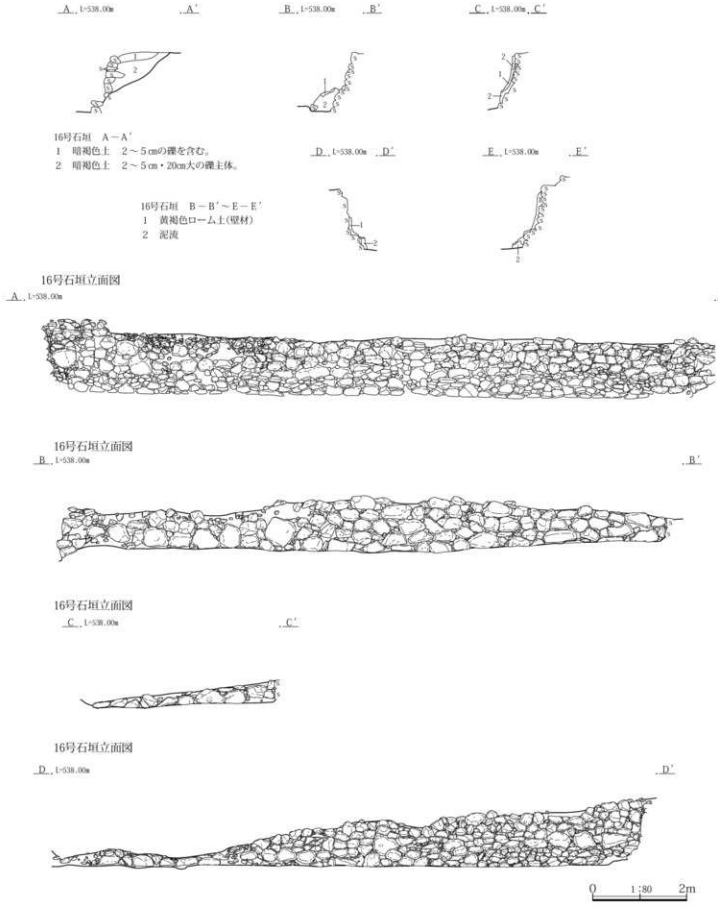
５号建物出土の陶磁器は、掲載資料の他に、江戸時代の国産磁器10点、重量36ｇ、近・現代の陶磁器６点、重量89ｇが出土したが、図示し得なかった。

屋敷西側と北側の石垣、２号集石、６号畑北側、５号道西側の石垣からの遺物の出土は無かった。

16号石垣



第43図　3号屋敷16号石垣



第44図　３号屋敷16号石垣断面・立面

（４）屋敷外

①　**１号建物**（第45図、PL.36）33区D・E-20・21グリッドに位置する。

【位置・調査経過】１号建物は、平成20年12月に建物北側の調査を行った。しかし南側に水道本管があり調査できた範囲は狭かった。平成26年度に水道本管を撤去し、建物全体の調査を実施した。１号建物は、１号屋敷東側、２号屋敷北側に位置し。建物の南側は１号集石、北側に12号石垣、西・東・南側は７号畑である。畑の中に作られた小さな建物である。建物は細い４本の柱穴をもつ掘立柱建物であり、多くの炭とわずかに焼土を含む炉が建物南寄りにある。竈等は作られていない。床面は、ほぼ平らであるが、踏み固められた面は無かった。北西端部床面上２ヶ所にロームが持ち込まれていたが用途は不明である。

【規模・構造】４ヶ所掘られていた柱穴は、東西南北とも約275㎝間隔で４本建てられていた。１間×１間の建物と思われる。中間に簡単な柱があってもよいと思われるが、柱穴は掘られていなかった。柱穴の直径は15～20㎝深さは25㎝前後である。細い柱を用いて建てられたほぼ正方形の建物である。北側の12号石垣は、垂直に近い状態で積まれた石垣でなく、急斜面の表面に積まれたような石垣であった。その石垣の上端部分と１号建物床面との高低差は1.5mあった。建物周辺の畑には多くの浅間Ａ軽石が残っていたが、建物内および周溝中にはなかった。浅間Ａ軽石降下段階では屋根があり、建物として使われていたものと思われる。住居北側で周溝の外で12号石垣下部分から半分に割れた石臼が出土している。この石臼は、浅間泥流で埋没する以前にすでに割れており使用できる状態ではなかった。１号建物に伴う遺物としては疑問が残る。小さな囲炉裏等はあるが、住むための建物ではなく、畑等を管理するための小屋であろうか。

②　**６号建物**（第46図、PL.37）33区I-15・16グリッドに位置する。

【位置・調査経過】６号建物は、１号屋敷南、３号屋敷北側に位置し、西側に１号道、北側に２号道に囲まれている。確認段階では、１・２号道に面し、東側は石垣により区画されている一定の平地面が確認され、そこは畑として耕作されていないので建物の存在が想定された。調査を進める中で、北側床面で焼土と炭が出土する場所と２個の埋設桶の痕跡および井戸を確認した。井戸は埋設桶を壊していることや、井戸石垣の積み方の特色から、天明３年以降に作られたことが確認された。２個の埋設桶と焼土および炭を出土した遺構と北側で確認された２個の柱穴をもって、６号建物とした。しかし６号建物は、２個の埋設桶の配置と並行でないことや、建物南側が、２号井戸により大きく壊されていることにより、不明な点が多い建物である。

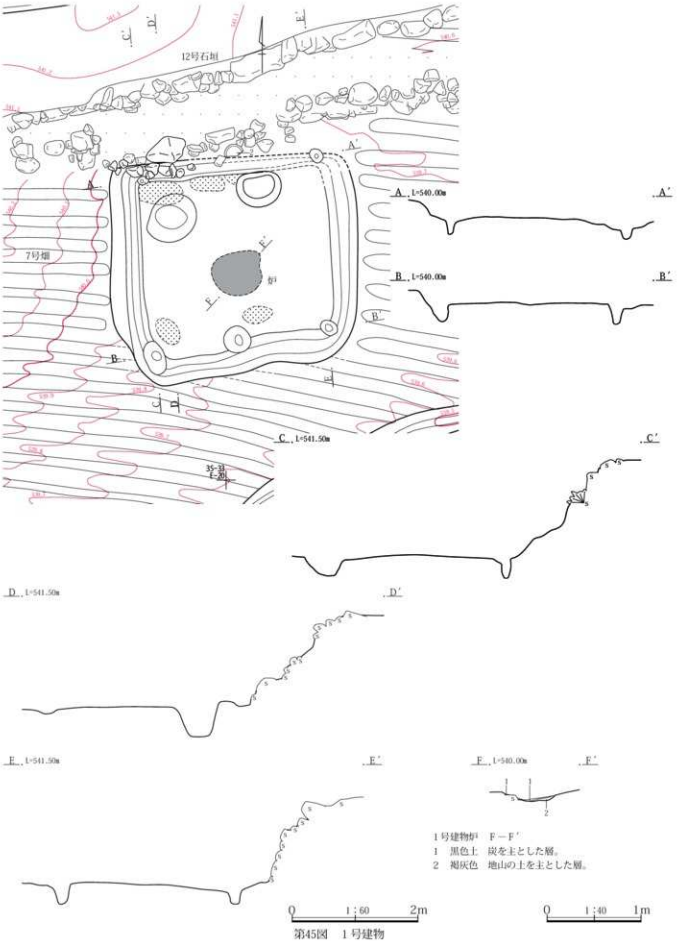
【規模・構造】２号道南に接して２個の柱穴と思われる掘り込みがあり、そこから南に２つの埋設桶を含む建物があったものとして規模等を想定する。柱穴の距離東西方向2.4m南北方向は不明である。柱穴の大きさは、直径40㎝前後床面からの深さ50㎝前後である。

２個の埋設桶は、西側を１号桶、東側を２号桶とした。いずれの桶にも板材は残っていなかった。

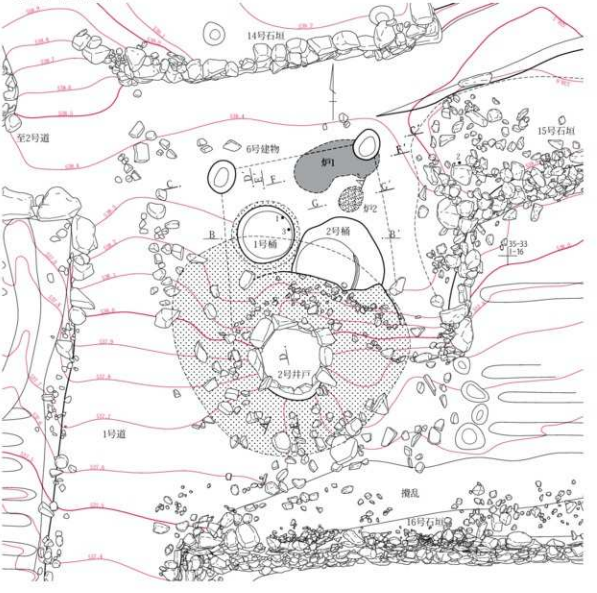
１号桶　１号桶は、２号井戸により桶外面埋土の一部が削られているが、桶本体は削られずに残っていた。桶の大きさは、底面径78㎝口縁部付近85㎝深さ60㎝である。埋められていた桶の底面や側面の板材は残っていなかったが、底面から14㎝ほど高い位置にタガ痕跡が残り、縦方向の横板の痕跡は明瞭に残っていた。底面の板材の痕跡は残っていなかった。桶は地山を掘り込み、埋設桶の底面と側面に厚さ10～12㎝ほどロームを貼りその上に桶を置き、桶側面の外側に10～15㎝ほどの厚さで、桶の外側を囲むようにロームを埋め込んでいる。桶を囲むように土間表面に厚さ８㎝のロームを貼っている。

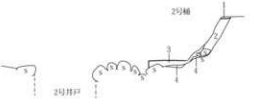
２号桶　２号桶は、２号井戸により南側1/3ほど底部迄掘り込まれている。１号桶は、木質部は残っていなかったが、桶本体は埋められた状態であった。しかし２号桶は底面に貼られたロームは残っていたが、側面部分は大きく掘られており、側面に桶の痕跡はなかった。底部は、北側で残っていたが、残りは良くなかった。おそらく井戸を掘る段階で、桶の板材は抜き取られたものと思われる。

残りが悪く、規模の多くは不明であるが、推定を含めた規模は、底面径約95㎝深さ55㎝前後である。桶は地山を掘り込み、埋設桶の底面にロームを貼っている。


12号石垣
7号畑
炉
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
A L=540.00m
B L=540.00m
C L=541.50m
D L=541.50m
E L=541.50m
F L=540.00m
1号建物炉　F－F'
1　黒色土　炭を主とした層。
2　褐灰色　地山の土を主とした層。
0　1:60　2m
0　1:40　1m

第45図　1号建物





６号建物２号桶　Ａ－Ａ'
1　ローム土による貼床。
2　暗褐色土　締まり弱い。
3　黄褐色粘土
4　暗褐色土

６号建物　Ｃ－Ｃ'
1　暗黄色砂層　軟質。石はほとんど含まない。
2　黒褐色土　　柱痕。0.2～1cmの炭を多く含む。

0　1:60　2m

第46図　６号建物

炉　２号桶の北側床面に長径1.4m（炉１）、短径少量の焼土・炭を主とした広がりとその南に厚さ２cm（炉２）の灰を主とした遺構が確認された。全体を炉として報告する。建物内部で火を炊いた痕跡と思われる。

③　**２号井戸**（第47図、PL.38）33区I・J-15グリッドに位置する。

【帰属時期】天明三年以降

【位置・確認状況】２号井戸は６号建物南側を円形に掘り込んで造られていた。１号埋設桶南側埋め土と２号埋設桶南側を掘り込んで造られている。２号井戸はこれらの埋設桶を掘り込んでいること、また覆土が柔らかく、多くの木や草の根が入っていること、さらに井戸の石垣の積み方は、天明泥流下で大部分の石垣で共通する細長い石を横方向に積む、平積みではなく斜めに積んでおり、谷積に近い積み方であり、天明以降に作られた井戸と思われる。

【構造・規模・形状】井戸は出来上がりの大きさで、内径90cm前後、深さは２mまでは確認したが、危険なためにそれ以上は確認していない。井戸表面は、井戸掘り込み面から外側に井戸を円形に囲むように１～1.6m幅の範囲にロームを敷いて、平らな面を確保している。使われている石は、幅30～40cm、厚さ15～50cmの大きさの自然石である。

④　**１号井戸**（第48図、PL.38）33区O・P-15～17グリッドに位置する。

【位置・確認状況】１号井戸は平成26号調査区の西端に位置し、調査区の中では最も標高の低い場所に位置する。

発掘着手前には、１号井戸の西側に現在まで使用されていた井戸が２つあり、最近までこの場所は水を確保するのに適していた場所であった。１号井戸は井戸表面から1.3mほど掘ると常に水があった。井戸は３軒の屋敷から西に離れて掘られており、最も近い１号屋敷２号建物から西南15mの位置である。南西は１号畑、南東は２号畑、北側は３号畑があり、畑中に掘られた井戸である。井戸南には４号道がある。４号道と井戸南部分には多くの石があり、道路面の確認はできなかったが、４号道は井戸まで、道が繋がっていたと思われる。井戸東側には東西方向の２号道がある。この２号道は１号道や３号道を経由して、１・２・３号屋敷と繋がっている。

井戸の掘られている地形は、北側が高く南側が低い。そのため北側の畑から流れ出る雨水等が井戸に流れ込まないために井戸のまわりに溝を掘るか、石を高く積み上げる必要があると思われる。しかしそのような溝や石積みは残っていなかった。浅間Ａ軽石は、井戸内側から一定の距離の範囲には残っていないが、その外側では、井戸を囲むように残っていた。そこには簡単な石積みがあったが、井戸を確認する段階で土手状の石組を撤去してしまったのではないだろうか。このように井戸の確認面より上に石が積まれていたであろう例は、東宮遺跡４号屋敷９号建物北側にある４号井戸で確認されている。井戸南側に幅90×40cmの大きな石が１個置かれている。井戸で水をくみ上げるときの踏み石ではないだろうか。浅間Ａ軽石は西側の大きなな岩の上にも積もっていた。

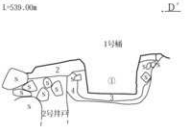
【構造・規模・形状】井戸は、共同井戸として作られており、規模の大きな丸い井戸である。大きさは内径1.7～1.8m、深さは1.3m迄掘り進んだ。湧水で危険のために手掘りでの発掘は中止し、その後重機で井戸を半裁して調査した。その結果井戸の石積みは高2.35mであることが確認された。井戸で使われている石は、幅30～40cm厚さ15～30cmの大きさの自然石である。平らで細長い石は、水平方向の平積みである。天明以降に作られている２号井戸より、使われている石は小さく積み方も異なる。

【所見】平成26年度に発掘された区域では、天明三年段階で確認された井戸はこの１号井戸だけである（２号井戸は天明三年以降）。発掘された３軒の屋敷とこの１号井戸は、道で繋がっており、これらの屋敷の共同井戸として使われていた。東宮遺跡でも天明三年段階の円形に掘られている井戸を５基発掘しているが（２・３・６・７・９号井戸）、いずれも直径は90cm前後であり、この井戸のような大きさの井戸は掘られていなかった。東宮遺跡では、各屋敷に付属する井戸が多く、西宮遺跡のような共同で使う井戸では、直径の大きな井戸が使われていたのであろうか。

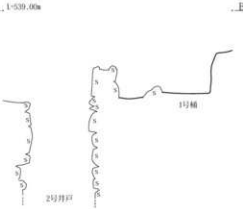
⑤　**１号集石**　（第49図、PL.39）33区C・D-19・20グリッドに位置する。

【位置・出土状況】１号建物南、４号建物北側で、７号畑の東端に位置する。楕円形に溝が掘られており、溝の中には多くの浅間Ａ軽石が堆積していた。溝の内側には浅間Ａ軽石は無かった。また畑の耕作痕も無かった。10～20cmの多くの石があった。

６号建物



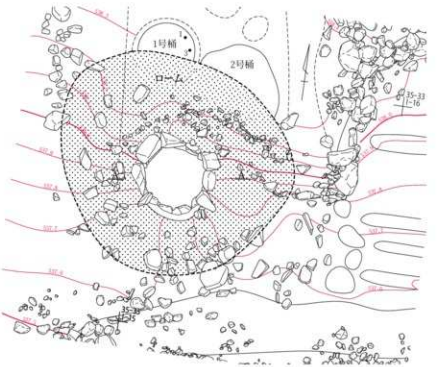
６号建物１号桶　D－D'
① 暗褐色土　礫を含む。
1　黄色粘土による貼床　ローム由来。
2　黄色土による整地面層　２層は中位に暗褐色土を挟み、上位が黄色ローム土。
　下位がローム粒子を含む暗褐色粘土質(良く叩き締められている)のサンドイッチ構造。
3　灰褐色～黄色粘土による桶の固定材 黄色粘土は２号井戸と重複する部分にあり。
4　暗褐色砂質土　礫を多く含む。



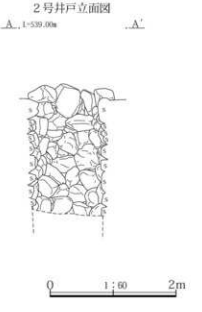
６号建物炉１　F－F'
1　暗褐色土　焼土・炭を少量含む。

６号建物炉２　G－G'
1　灰色土　灰を主とした層。

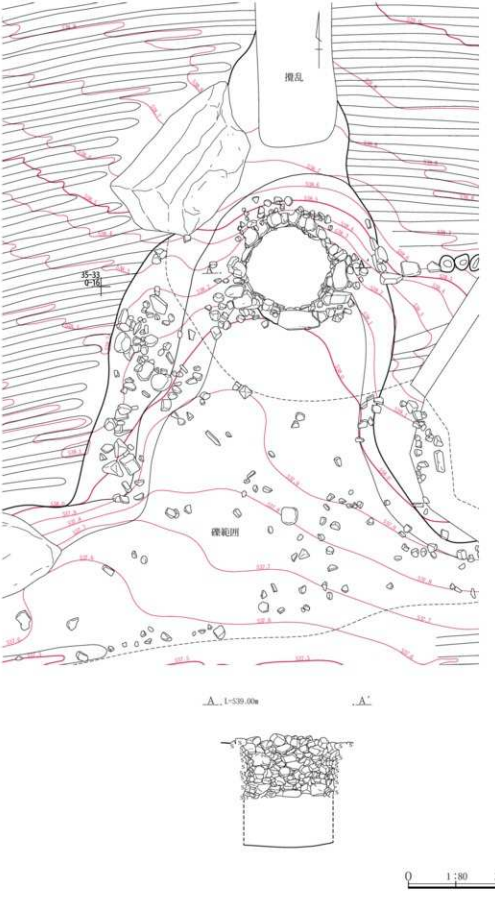
２号井戸



２号井戸立面図



第47図　６号建物断面、２号井戸



第48図　１号井戸

第49図　１号集石

【規模】規模は、東西方向約6.1m南北方向は西側が2.5m東側で3.2mである。周溝は幅35～45cm、周溝の深さは６～12cmである。周溝内に堆積していた浅間Ａ軽石の厚さは２～３cmである。

【構造・所見】楕円形に囲まれた内側に浅間Ａ軽石は無い。そこにはヤックラのように大量の不要となった石が集められており、重機で遺構確認の段階で撤去した可能性も考えられる。あるいはヤックラ等ではなく堆肥等置場であったのであろうか。

⑥　道の概要

発掘区域内に道が６本確認されている。道幅は場所により少し異なるが180cm・90cm・40cm幅を基本としているようである。これは必要とされる道の機能により異なっていると思われる。最大幅の180cmの道は、集落の幹線道路から屋敷に入るための道であり、１・５号道がそれにあたる。90cm幅の道は、集落の幹線道路から1号井戸迄の道路及び集落内の通路であり、２・３・４号道がそれにあたる。40cm幅の道６は、２号道東端から２号屋敷北西部で、７号畑方向に延びている細い道である。５号道については、２号屋敷の中で説明した。以下１～４・６号道について説明する。

(ア) １号道(第50・51図、PL.39) 33区J-11～16グリッドに位置する。

【位置・確認状況】３号屋敷５号建物および６号建物の西側、２号畑の東側に位置する。南にある村の幹線道路から1号屋敷に繋がる道路である。1号屋敷南側出入り口部分で東西方向にある２号道と交差している。その付近の道は残りが良好で、道の上に浅間Ａ軽石が良好に残っていた。道の西側は２号畑であり、２号畑との境部分には、石を並べて境界としている。調査段階ではこの石列を19号石垣として調査したが、石垣のように積んではいないので、石垣とは呼称しない。19号石垣は欠番とする。

６号建物西側部分でも明瞭な石列は残っていなかった。

【規模・形状】道路面は、北側では良好に残り、道路面は平らに整地されて、浅間Ａ軽石が残っていたが、南側は残りが悪く、浅間Ａ軽石もほとんど残っていなかった。道の規模は幅1.8mを基本としている。

【所見】集落の幹線道路から屋敷に入ための道である。幅1.8mを基本にしており、道幅は２号屋敷に入るための５号道と同様である。東宮遺跡においては７号屋敷に入るための５号道は２m前後と、８号屋敷に入るための７号道は、１m前後となっており様々である。

(イ)２号道(第50・51図、PL.39) 33区G～M-16・17グリッドに位置する。

【位置・確認状況】調査区西側にある１号井戸から１号屋敷南側で南北方向の１号道と交差し、２号屋敷西側迄東西方向に作られている道である。２号屋敷西側で、南に曲がって２号屋敷に繋がる３号道、北東方向に向かっている６号道と分かれる。１号屋敷南側部分では道の両脇に石垣が積まれ、道面は平らに整地されていた。1号屋敷南側および12号畑南側では、道の表面に多くの浅間Ａ軽石が良好に残っていた。

【規模】道幅は、0.9mを基本とし、長さは33mである。

【所見】３軒の屋敷と井戸とをつなぐ重要な道である。

(ウ)３号道(第50・51図、PL.39) 33区F・G-15・16グリッドに位置する。

【位置・確認状況】東西方向の２号道東端から２号屋敷西側で分かれる南北方向の道である。２号屋敷西側に位置し、２号道から屋敷に入るための道と思われる。屋敷南西部で屋敷の前庭と繋がっていたものと思われる。その部分は撹乱により残っていなかった。道の西側は５号畑となっている。畑面は２号屋敷の敷地より高い位置にあり、畑面の東端を削り道が作られている。
道の表面の一部には浅間Ａ軽石が良好に残っていた。

【規模】道幅は、0.9mを基本とし、長さは７mまで確認できる、南側はさらに伸びると思われるが不明である。２号道と分かれる北側部分より屋敷に入る南側部分の高さは、１mほど低くなっており、傾斜の強い道となっている。

【所見】２号屋敷から１号井戸に繋がる道であり、２号屋敷で使われていた道と思われる。道の表面は、かなり荒れていた。

(エ)４号道(第50・51図、PL.40) 33区O-12・13グリッドに位置する。

【位置・確認状況】調査区西側にある1号井戸の南端に位置する。道の南側には町道があり、町道の下には天明三年段階の幹線道路が埋まっていると思われ、その道と繋がっていると思われる。その当時の幹線道路から1号井戸まで繋がっている道と思われる。南の一部を確認することが出来たが、井戸に近い北側は、残りが悪く道を確認することはできなかった。道の東側は２号畑、西側は１号畑がある。１号畑は４号道より低く、道の西端には石が並べてあり、１号畑との境には浅い溝が掘られていた。２号畑と４号道の高さはほぼ同じである。２号畑から４号道に雨水等が流れ込まないように、境部分には、小さな土手状の高まりが作られていた。確認できた道の表面に多くの浅間Ａ軽石が良好に残っていた。

【規模・所見】道幅は、0.9mを基本とし、確認できた範囲での長さは2.8mである。道は南側の一部の確認しかできなかったが、村の幹線道路と井戸とを結ぶ道と思われ、村人だけでなく多くの通行人も利用した井戸ではないだろうか。

(オ)６号道(第50・51図、PL.39) 33区G・F-17・18グリッドに位置する。

【位置・確認状況】２号道東端から２号屋敷北西部で、７号畑方向に延びている細い道である。道の表面は荒れており、浅間Ａ軽石は確認できなかった。

【規模・所見】道幅は、0.9mを基本とし、長さは4.7mである。14号石垣手前で道は確認できなくなっている。道の造られた目的は、明らかでない。

⑦　石垣

屋敷に伴わないで畑の段差に積まれている10号・11号・15号・18号石垣についてまとめて報告する。

(ア)10号石垣(第52図、PL.40) 33区E～I-22～24グリッドに位置する

【概要】調査区北端に位置する。３ヶ所で直角に曲がっている石垣である。西側に９号畑・南に10号・11号畑がある。

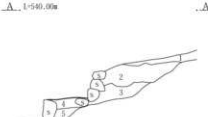
【規模・構造】石垣は、40～50cmの大きさの自然石を石垣の最下部に置き、その上に20～30cmの大きさの石を平積みで７段前後積んでいる。ほぼ垂直に丁寧に積まれている。裏込めには多くの石を詰めている。石垣の高さは、

１号道

１号道跡　Ａ－Ａ'
1　暗黄褐色土　粘性に富む。礫混じり。
2　暗褐色土　φ２～３cmの礫の他、20cm大の礫を含む。

１号道跡　Ｂ－Ｂ'
1　暗褐色土　小礫を含む。
2　暗黄褐色土　20cm大の礫を含む。（裏込め）
3　灰褐色土　小礫を含む。
4　暗黄褐色土　土層に小礫(0.5mm)、下層に角礫が多い。

２号道

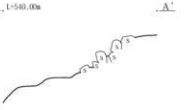


２号道跡　Ａ－Ａ'
1　暗黄褐色土　２～３cmの礫多く含む。
2　暗褐色土　20cm大の礫多く含む。
3　礫(角礫～円礫)主体の暗褐色土。
4　暗褐色土　角礫主体(５cm)。
5　暗黄褐色土　礫多く含む。

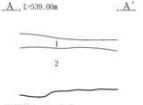
３号道

３号道跡　Ａ－Ａ'
1　暗褐色土　砂質。0.5mmの小礫を多く含む。
2　暗褐色土　φ５mmの礫を含む。
※道路と建物の雨だれ溝が重なる所で、両者は分けづらい。

６号道

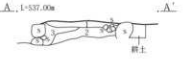


４号道



４号道跡　Ａ－Ａ'
1　耕作土
2　泥流

５号道



５号道跡　Ａ－Ａ'
1　暗褐色土　小礫含む。上面に浅間Ａ軽石。純層堆積。
2　５～20cmの角礫。
3　暗褐色土　角礫混。裏込め。

0　1:80　2m

第50図　道断面

2号建物
7号畑
6号道
12号畑
2号道
3号道
4号建物
7号建物
3号建物
3号畑
2号道
1号井
電柱
4号畑
2号井
5号畑
1号道
5号道
6号畑
5号建物
1号畑
2号畑
4号道
35-33
N-12
35-33
I-12
0
1:150
5m

第51図　道全体

最も高い南向きの石垣部分(Ａ－Ａ′)で1.1m、東向きの石垣部分(Ｂ－Ｂ′)で60㎝前後である。石垣の長さは、西面で2.4m南面で9.6m東面で5.7m東側に位置する南面で9.4mとなっており、全体の長さは27.1mである。

【所見】一定の大きさの大きな石を選び、ほぼ垂直に丁寧に積まれている石垣である。これまでの調査例ではこのような積み方の石垣は、屋敷を囲んで造られている例が多い。しかし10号石垣の南側はすべて畑となっており、石垣に伴う屋敷や建物は天明三年段階では存在していない。石垣が築かれた段階では、石垣の南側の10号・11号畑面には、建物が建っていたのではないだろうか。

(イ) 11号石垣(第53図、PL.41) 33区J～N-20～22グリッドに位置する。

【概要】11号石垣は、１号屋敷２号建物北側の９号畑の北側に位置する。石垣の北側は信仰の対象となっていた大きな石を中心とした１号祭祀遺構と呼称した遺構がある。石垣は、20～30㎝の大きさの自然石を平積みで４～５段積んでいる。石は河原から運ばれたであろう石も多く使われているが、耕作に伴い畑から出てきたと思われる小さな石も多く積まれている。石垣の高さは、50～60㎝である。石垣の長さは18.6mである。

【所見】小さな石をほぼ垂直に丁寧に積んでいる。９号畑の平面確保のため切土部分に積まれた石垣と思われる。

(ウ) 15号石垣(第53図) 33区G～I-15・16グリッドに位置する。

【概要】15号石垣は、２号屋敷４号建物西側、３号屋敷５号建物の北側に位置し、５号畑を西側と北側で囲うように積まれている石垣である。使われている石は、30～40㎝の大きさの自然石を一部使用しているが、多くは15～25㎝の小さな石を使用している。耕作に伴い畑から出てきたと思われる小さな石も多く積まれている。垂直に一定の大きさの石を選んで積んだ石垣ではない。石垣の高さは、50㎝前後である。石垣の長さは18.6mである。

【所見】15号石垣は、５号畑の平面を確保するため切土部分に積まれた石垣と思われる。石垣の北には２号道があり、石垣と２号道との空間に畑は無い。おそらく２号道までの空間には、畑の耕作に伴い出土した不要な石が積まれていた場所ではないだろうか。

(エ) 18号石垣(第54図、PL.40) 33区K～M-14～16グリッドに位置する。

【概要】４号畑の南側および東側と２号道南に積まれている石垣である。石垣の南には２号畑がある。石垣は西側が東西方向、東側は南北方向で、２号道南側は東西方向である。２号畑北側で東西方向に積まれている石垣から４号畑までの間の平坦面には、畑の耕作痕が無い。そこには大量の石が積まれており、畑の耕作等により出土した不要な石が高く積まれている。

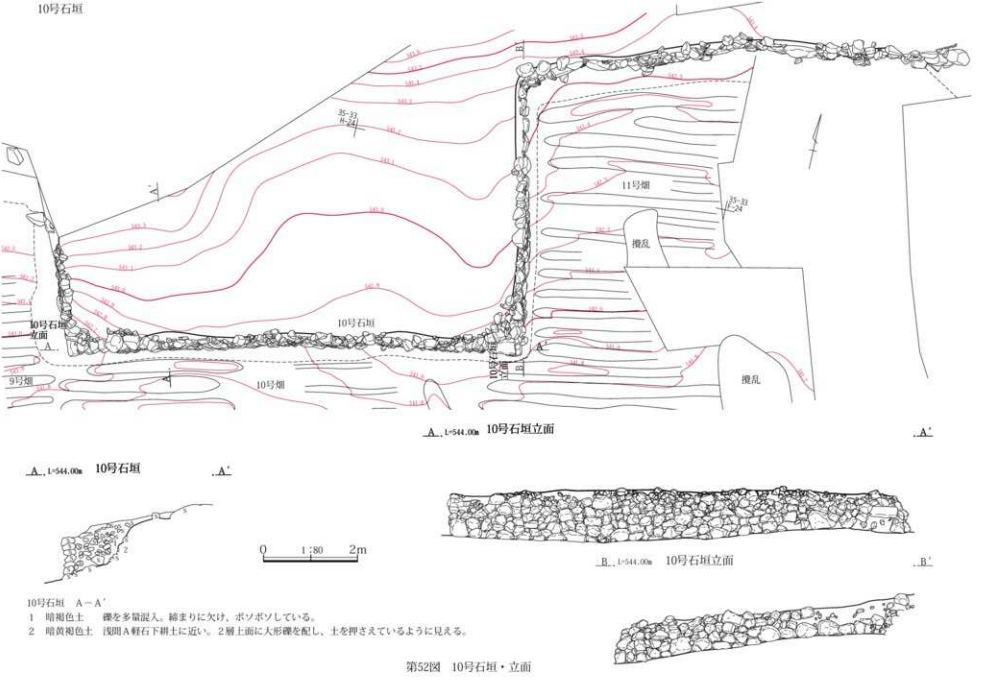
【規模・構造】石垣は、３面あるが、積み方や使われている石の大きさはほぼ同じである。20～30㎝の大きさの石も使われているが、50～60㎝の大きさの自然石を基本として積んでいる。中には70㎝を超える、大きな石も使われている。石垣は２～３段積んでいるが、大きい石が使われている場所では１石のところもある。石垣の高さは40～50㎝である。長さは東西方向の部分で11m、南北方向の部分で3.9m、２号道の下部に積まれている東西方向部分で5.9mであり。全体の長さは20.8mである。石垣の断面を観察すると、大きな石の裏込めには、たくさんの石があった。しかし積まれた石が崩れないように、他の石を絡まして積むような積み方にはなっていない。

【所見】大きな石を選び、ほぼ垂直に丁寧に積まれている石垣である。これまでの調査例ではこのような積み方の石垣は、屋敷を囲んで造られている例が多い。しかし18号石垣の南側はすべて畑となっており、石垣に伴う屋敷や建物は天明三年段階では存在していない。

⑧　１号祭祀遺構(第56図、PL.41) 33区I～N-21～23グリッドに位置する。

【概要】11号石垣北側の急斜面地で現在使われている町道の脇に、大きな石が存在していた。石の根元を調べると、切石が３個置かれており、何らかの信仰の施設であったことが想定された。町道を隔てた北西の山の中には、巨石があり西宮岩陰として、調査を進めていたので、関連した遺構として発掘調査を実施した。下段から切石が３個出土し、覆土中から、台座の一部と思われる石製品が出土した。調査段階では１号石造物として調査したが、１号祭祀遺構と遺構名を変更して報告する。

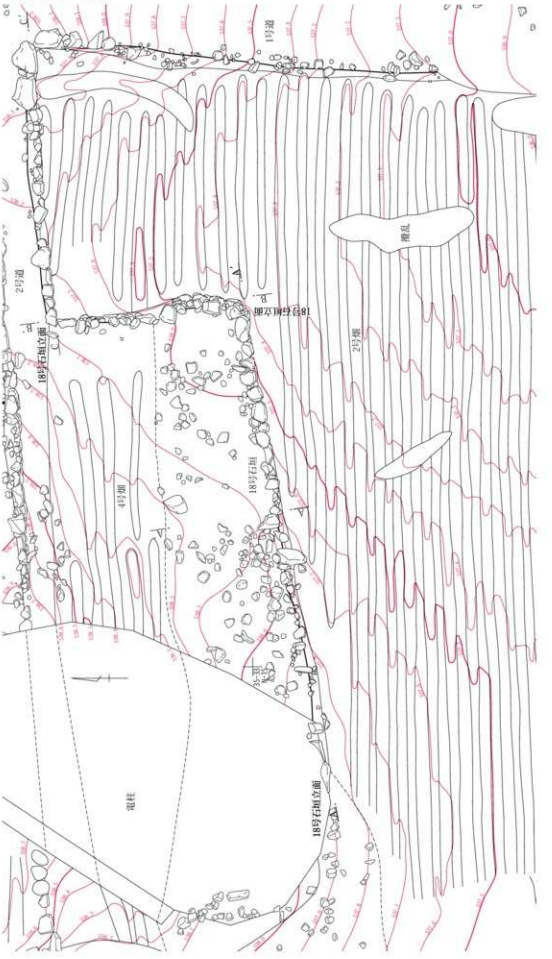
【規模・構造】遺構の南北範囲は、北側の大きな石から11号石垣北の３個の切石が出土している範囲とすると、南北で約６m、東西範囲は不明である。大きな石の据えられている場所と下段の切石が出土している比高差は、高約2.5mである。大きな石は、高さ1.8m幅1.7m厚さ1.5



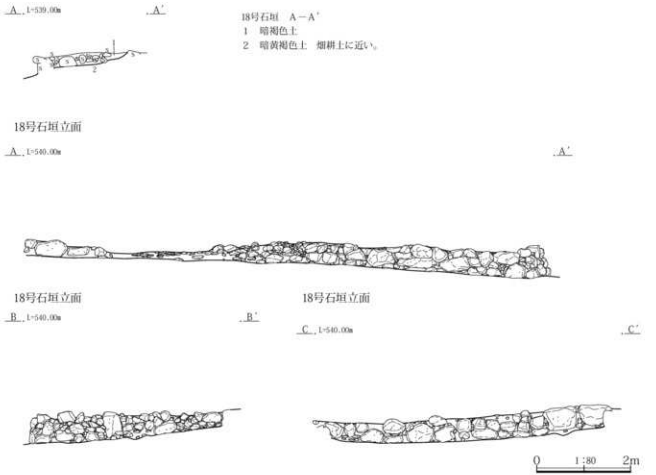
10号石垣　A－A'
1　暗褐色土　　礫を多量混入。締まりに欠け、ボソボソしている。
2　暗黄褐色土　浅間A軽石下耕土に近い。2層上面に大形礫を配し、土を押さえているように見える。

第52図　10号石垣・立面

第53図　11号・15号石垣



第54図　18号石垣



第55図　18号石垣断面・立面

m切石の大きさは、長さ65cm幅32cm厚さ7cmである。

【所見・その他】大きな石の根元に置かれていた３個の切石と、下段から出土した３個の切石は、大きな石の根元に上るための階段として利用されていたものと思われる。下段の切石付近には天明以降に積まれた石垣が積まれている。出土遺物から近世から近代まで信仰の対象としていたと思われる遺構である。

『長野原町の文化財調査報告書１』（５地区の石造物及び神社・社宇・堂宇の移転等保存移設について）長野原町平成25年３月の中に西宮地区調査番号17として地図とともに無縫塔が、報告されている。地図で場所を特定するには難しいが、地図と掲載されている写真からこの大きな石の根元にあたる可能性がある。無縫塔の高さは、60cm幅34cm厚さ25cmである。写真に写っていた無縫塔と無縫塔の据えられていた台座はすでに移転されて残っていない。

⑨　出土遺物

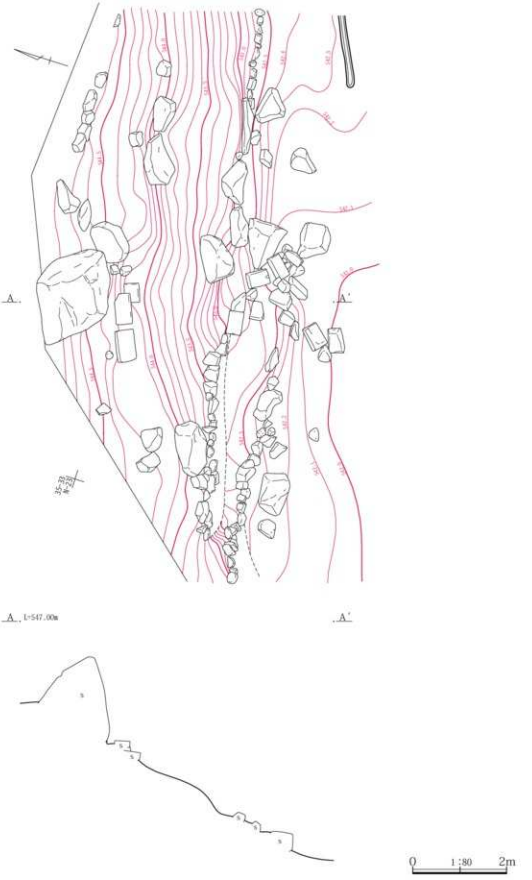
屋敷外として報告した遺構の中で、１号建物からは遺構の報文中にあるように土臼の破片（２）が出土している。

６号建物からは陶器碗（１）と古銭（２・３）が出土した。

１号井戸からは陶器練鉢（１）が、２号井戸からは近・現代の磁器と考えられる皿（１）と18世紀代の磁器皿（２）が出土している。１号集積からは、古銭（１・２）が出土している。

11号石垣では石積に再利用された五輪塔（１）が、15号石垣裏込からは、近・現代の磁器染付猪口（４）、磁器碗（１・３）、陶器すり鉢（５）、陶器碗（２）が出土している。

掲載資料の他に１号道から江戸時代の国産磁器２点、重量７ｇ、国産陶器９点、重量66ｇ、近・現代陶磁器３点、重量15ｇが出土しているが、資料化するに足るものではなかった。２～４号道、10号・18号石垣、１号祭祀遺構からは陶磁器の出土はなかった。



第56図　１号祭祀

（５）畑等

畑等について、以下①～⑩の順番で報告する。

①復旧溝②石捨場③畑④平坦面⑤ヤックラ⑥道⑦暗渠⑧列石⑨２区畑面で確認された植物痕⑩明治６年の壬申地引絵図との比較

平成20年度と平成26年度に発掘調査した１区と２区から復旧溝・石捨場・畑・平坦面・ヤックラ・道・暗渠・列石および畑面から植物痕が確認されている。これらの遺構について以下まとめて報告する。

発掘調査された遺構について、概要説明と一覧表で示した。その後各遺構について説明する。

第11表　畑規模一覧表

区	畑番号	畑の幅（cm）	畑の深さ（cm）	畑幅区分		
				45cm以下	46～70cm	70cm以上
１区	1	39	－	○		
	2	37	２～５	○		
	3	44	５～７	○		
	4	35	－	○		
	5	37.5	－	○		
	6	36	－	○		
	7	37	－	○		
２区	1	77	１～３			○
	2	41	１～４	○		
	3	35	３～５	○		
	4	40	４～７	○		
	5	39	２～３	○		
	6	64	5		○	
	7	40	２～10	○		
	8	80	１～４			○
	9	43	２～５	○		
	10	42	１～３	○		
	11	45	５～７	○		
	12	70	７～９		○	
	13	46	３～５		○	
計	20	－	－	15	3	2

第12表　復旧溝規模一覧

区	復旧溝名	幅(cm)	深さ(cm)	長さ(m)	復旧溝間隔(cm)
１区	１号復旧溝	110	18～21	4	40～45
	２号復旧溝	90～110	24～29	12.2～12.8	40～60
	３号復旧溝	90～110	28～37	19～19.2	40～60
	４号復旧溝	100～110	29～35	11.6	30～50
２区	１号復旧溝	116～130	29～35	7.9	20～30

第13表　平坦面計測表

区	遺構名	長径(cm)	短径(cm)
１区	平坦面１	165	158
２区	平坦面１	110	96
	平坦面２	160	120
	平坦面３	184	150

第14表　暗渠規模一覧

暗渠No.	幅(cm)	高さ(cm)	長さ(m)
１号	100	30	6.5
２号	80～100	30	18

①　復旧溝

天明三年８月５日の天明泥流堆積により畑が厚く覆われてしまう。泥流は土砂が主であり、耕作土としては適していない。そこで天明泥流下にある耕作土を掘り上げて泥流面の上に客土することにより耕作を可能とするための復旧作業が行われた。当時の文書では「起返し」と呼ばれていた作業と思われる。畑全体の泥流を除去することはできないので、泥流面を細長い溝状に掘り、耕作土を確保し、泥流面に敷く。溝状の掘り込みの中に次の溝で掘った泥流を埋めて平らにし、その上に溝の最も下面にある耕作土を客土する、その繰り返しが畑一面の復旧溝として確認されたものと思われる。西宮遺跡で堆積している天明泥流は深さが１ｍ前後であるために、その作業が可能であったものと思われる。溝状を呈しているので、旧来より復旧溝と呼称している。これまでの調査から、復旧溝を観察すると、一定の範囲で復旧溝の溝の長さや方向が異なっていることが確認できる、天明泥流下の畑単位で復旧作業が実施されていたものと、天明泥流下の畑の境界と異なる単位がありそうである。１区の畑の復旧溝はほぼ天明泥流下の畑単位で行われており、２区では、天明泥流下の畑とはあまり関係なく行われているようである。

１区に１～４号復旧溝があり、２区には１号復旧溝がある。復旧溝幅は90～100cmが多く、深さは24～35cmが多い。東宮遺跡では復旧溝はなかったが、西宮遺跡では多く確認されている。西宮遺跡では、１区と２区の２ヶ所で確認されているが、少し異なるところもある。１区では復旧溝と復旧溝の間隔が40～70cmあり、その部分に畑の耕作痕が明瞭に残っていた。しかし２区では復旧溝と復旧溝の間隔が20～30cmと狭く、その部分に畑の耕作痕は、明瞭に確認できなった。耕作痕が明瞭に確認できなかったのは、残られた畑面が狭かったことと、１区では耕作面と復旧溝が直行しているが、２区では斜めであったことも原因であると思われる。

（ア）１区１号復旧溝　１号畑とほぼ同じ範囲であり、掘られている方向はやや北西から南東方向となっており、畑の耕作痕と直行する。復旧溝の幅は110cmである。

（イ）１区２号復旧溝　４号畑とほぼ同じ範囲であるが、南側は掘られていない。これは４号畑の範囲が間違っている可能性もある。掘られている方向はほぼ南北であり、

畑の耕作痕と直行する。復旧溝の幅は90～110cmである。

(ウ) １区３号復旧溝　５号畑はほぼ同じ範囲である。掘られている方向はほぼ南北であり、畑の耕作痕と直行する。復旧溝の幅は90～110cmである。

(エ) １区４号復旧溝　７号畑とほぼ同じ範囲である。掘られている方向はほぼ南北であり、畑の耕作痕と直行する。復旧溝の幅は100～110cmである。

(オ) ２区１号復旧溝　１・８号畑の東側に位置する。１区と異なり、天明三年段階に作られていた畑の範囲や耕作の方向との関連は認められない。同じ復旧溝でも大きく異なっている。復旧溝の幅は116～130cmである。

②　石捨場

１区２号畑北側に復旧溝に似た掘り込みが２ヶ所確認された。その掘り込み底部から泥流中央部付近まで大量の石が投げ込まれたように埋められていた。埋められていた石の高さは、泥流の表面近くまでは無く、泥流の中央部付近までである。埋められいた石は、畑耕作土下面では復旧溝に似た掘り込みが２ヶ所に分かれていたが、上部の泥流中では一緒になっている。断面観察から対象の石は、逆台形の掘り込みに近く、石が崩れ落ちないように石の両側に大きな石が石垣状に積まれている様子は無い。ヤックラのような積み方はしていない。この遺構は、おそらく泥流の上から掘り込まれ、畑耕作土を掘り上げたのちに、耕作で出土していた大量の石が投げ込まれた石捨場と思われる。大量の石は泥流表面近くまでは捨てられていない。石を捨てた後で、石の表面には泥流その上には耕作土を客土し、表面は畑として利用していたのではないだろうか。畑面を掘り込んでいる西側の掘りの深さ0.45m幅1.65m、東側の掘りの深さは0.25m幅1.62mであり、石の高さは1.2mである。埋められている石の天井部から泥流表面の耕作土迄0.7 ～ 0.9m間隔がある。

③　畑

平成20年度に１区で７面、平成26年度に２区で13面合計20面調査した。１区では畑の畝サクの間隔がすべて45cm以下であった。２区では畑の他に３軒の屋敷と２軒の建物、６本の道と２基の井戸等があり、畑は屋敷の周辺に作られていた。畑の畝サクはすべて等高線にほぼ沿って耕作されていた。

畑の畝サクの間隔は、45cm以下が８面、46～70cmが３面、71cm以上が２面と畝サクの間隔が異なる畑が作られていた。作られている作物は、当時の記録から粟・稗・大豆・麻等が考えられるが、発掘結果では明らかでない。畝サクの間隔の広い畑が、屋敷に近い場所にあることが、東宮遺跡では確認されており、西宮遺跡でも同じことが指摘できる。天明泥流下畑の下により古い畑は確認されていない。

(ア) １区１号畑(第58図、PL.45) 33区M-2・3グリッドに位置する。一覧表参照

１区北西部に位置し、北側は現在道となっている。東側は２号畑、南側は４号畑となっている。狭い範囲の畑であり、畝間は39cm前後で狭い。畑の大部分は天明以降の復旧溝により掘り込まれている。

(イ) １区２号畑(第58図、PL.45) 33区J～M-3～5グリッドに位置する。一覧表参照

１区北部に位置し、北側は現在道となっている。西側は１号畑、東側はヤックラがありその東側が３号畑になっている。畑北端に石捨場が掘られている。畝間は37cm前後と狭い。天明以降の復旧溝は、全く掘られていない。

(ウ) １区３号畑(第61図、PL.45・46)33区G～K-5～8グリッドに位置する。一覧表参照

１区北東部に位置し、北側は現在道となっている。畑の西側と南側にはヤックラがあり、畑とヤックラの間に１区１号道がある。ヤックラの東側が２号畑、南側が７号畑となっている。３号畑は、西側の２号畑より30～40cm、南側の７号畑より60～80cmほど耕作面が高い。畝間は44cm前後と狭い。２号畑同様に天明以降の復旧溝は、全く掘られていない。

(エ) １区４号畑(第59図、PL.45) 33区I～K-23～25グリッドに位置する。一覧表参照

１区西端中央部に位置し、西側は現在道となっている。畑の東側が５号畑、南側に６号畑がある。畑の南側以外の大部分が、復旧溝により掘り込まれている。畑の境界は明瞭でないが、復旧溝により掘られていない畑や、復旧溝の間に残された耕作痕から４号畑の畑範囲を推定した。畝間は35cm前後と狭い。

(オ) １区５号畑(第60図) 23・33区G～K-25～4グリッドに位置する。一覧表参照

１区中央部に位置する。畑の西側が４号畑、北側に２

号畑、西側に３・７号畑がある。畑の大部分が、復旧溝により掘り込まれている。畑の境界は明瞭でないが、復旧溝の特色と畑面に残されている境から５号畑の畑範囲を推定した。畝間は37cm前後と狭い。

(カ)１区６号畑(第59図、PL.43・46) 23区I～K-23・24グリッドに位置する。一覧表参照

１区南西端部に位置する。畑の西側は町道、北側が４号畑、東側に５号畑がある。畑の東側の一部が、復旧溝により掘り込まれている。畑の境界は明瞭でないが、畑面に残されている境から５号畑の畑範囲を推定した。畑の畝サクの断面を調査すると、耕作土表面でなく、断面に浅間Ａ軽石を観察することが出来た。浅間Ａ軽石降下後土寄せ等の耕作が行われていたものと思われる。畝間は36cm前後と狭い。

(キ)１区７号畑(第62図、PL.43) 33区D～H-2～6グリッドに位置する。一覧表参照

１区南東部に位置する。畑の北側にヤックラがあり、その北は３号畑、西側に５号畑がある。畑の大部分が、復旧溝により掘り込まれている。畑の境界は明瞭でないが、復旧溝の特色と畑面に残されている境から５号畑の畑範囲を推定した。畝間は37cm前後と狭い。

(ク)２区１号畑(第68図、PL.47) 33区P～R-12･13グリッドに位置する。一覧表参照

２区南西端部に位置し、南と西側は現在町道となっている。北側は１号井戸と３号畑となっている。井戸の下側であり、湿気の多い畑である。畑耕作面から、加工された角材の一部が出土している。畝間は77cm前後と広い。

(ケ)２区２号畑(第67図,PL.47) 33区K～O-12～15グリッドに位置する。一覧表参照

２区南西端部に位置し、西側は４号道、南側は現在町道となっている。北側は18号石垣と４号畑および２号道に面する。東側は１号道があり、道の東側には３号屋敷がある。道や屋敷に囲まれている畑である。畝間は41cm前後と狭い。

(コ)２区３号畑(第69図、PL.47・48) 33区M～S-15～20グリッドに位置する。一覧表参照

２区西端部に位置し、西と北側は町道、南側は１号井戸と１号畑、西側は１号屋敷に面する。道や屋敷に囲まれている畑である。西宮遺跡では最も広い範囲で調査できた畑である。畝間は35cm前後と狭い。

(サ)２区４号畑(第67図、PL.47・48) 33区L･M-15グリッドに位置する。一覧表参照

２区西側に位置し、南と東側に18号石垣があり、石垣の下に２号畑、北側は２号道に接し、２号道の北側は１号屋敷である。４号畑と南側の18号石垣との間で、耕作されていない空間がある。そこにはヤックラとして大量の石が置かれていたと思われる。電柱があり発掘できなかった西側断面に大量の石がヤックラ状に残っていた。重機により石が撤去されたと思われる。畑と道と屋敷に囲まれている畑である。畝間は40cm前後と狭い。

(シ)２区５号畑(第75図、PL.47・48) 33区G･H-15・16グリッドに位置する。一覧表参照

２区中央部に位置し、南に16号石垣があり、南に３号屋敷がある。西と北側に15号石垣がある。東側は３号道があり、３号道の東に２号屋敷がある。道や屋敷に囲まれている畑である。畝間は39cm前後と狭い。

(ス)２区６号畑(第66図、PL.47・48) 33区C～E-13・14に位置する。一覧表参照

２区南東端部に位置し、南に町道があり、西側に３号屋敷がある。北側に16号石垣がある。東側は５号道がある。道や屋敷石垣に囲まれている畑である。畝間は64cm前後と広い。

(セ)２区７号畑(第70図、PL.47・48) 33区C～H-18～21グリッドに位置する。一覧表参照

２区中央部東寄りに位置し、南に14号石垣があり、石垣の南側に２号屋敷がある。北側に12号石垣があり、東側に８号畑がある。畑の中に１号建物、１号建物の南に１号集石がある。畝間は40cm前後と狭い。

(ソ)２区８号畑(第71図、PL.47・48)　33区A～C-17～21グリッドに位置する。一覧表参照

２区東側に位置し、南に２号屋敷４号建物と１号厠がある。西側に７号畑、北側に11号畑がある。東側は1号復旧溝がある。畝間は80cm前後と最も広くなっている。

(タ)２区９号畑(第74図、PL.47・48) 33区I～K-21・22グリッドに位置する。一覧表参照

９・10・11号畑は、12号石垣の北側に位置し、ほぼ同じ面の畑である。耕作痕が南北方向で２ヶ所区切れており、西から９・10・11号畑と分けて呼称した。

２区９号畑は２区中央部北側に位置し、南に12号石垣があり、石垣の下は１号屋敷となっている。北側は11号

石垣がある。東側は10号畑である。９号畑から北側では、泥流の堆積がほとんどなく、９号畑から北側では、畑を確認できなかった。畑の畝間は43cm前後と狭い。

(チ)２区10号畑(第73図、PL.47・49) 33区G～I-21・22グリッドに位置する。一覧表参照

西側に９号畑、東側に11号畑がある。南側の12号石垣南は７号畑となっている。北側は10号石垣がある。10号石垣から北側では、泥流の堆積がほとんどなく、畑を確認できなかった。畑の畝間は42cm前後と狭い。

(ツ)２区11号畑(第73図、PL.47・49) 33区E～G-21～24グリッドに位置する。一覧表参照

西側に10号畑、東側は２区１号復旧溝となっている。北側は10号石垣がある。10号石垣から北側では、泥流の堆積がほとんどなく、畑を確認できなかった。畑の畝間は45cm前後と狭い。

(テ)２区12号畑(第75図、PL.47・49) 33区G～I-17グリッドに位置する。一覧表参照

２区中央部に位置し、南に２号道があり道の南側は５号畑、西側は１号屋敷、東側は２号屋敷、北側は14号石垣がある。屋敷・石垣・道に囲まれた狭い畑である。畝間は70cm前後と広い。

(ト)２区13号畑(第66図、PL.47・49)33区B・C-13・14グリッドに位置する。一覧表参照

２区南東端部に位置する。２号屋敷に入るための５号道の東側に位置する５号道との境には石が並べれれ畑と区分されている。畝間は46cm前後とせまい。

④　平坦面　畑の耕作面にほぼ円形に耕作していない平坦面が１区で１ヶ所、２区で３ヶ所確認されている。畑は20面確認されているが、平坦面は４ヶ所だけであった。大きさは直径96～184cmと様々である。

⑤　ヤックラ　１区３号畑の西側と南側にはヤックラがあり、畑とヤックラとの境分には、畑を区画するように浅い溝が掘られている。この溝とヤックラとの間は、30～120cmほど耕作していない場所がある。道として使われていたものと思われる。ヤックラの東側が２号畑、南側が７号畑となっている。３号畑は、西側の２号畑より30～40cm、南側の７号畑より60～80cmほど耕作面が高い。畑の境界部分に土手が築かれ、道として使用されていた。その道に耕作により出土した石を集め、ヤックラが出来、その後道はヤックラの内側に別に作られたものと思われる。１区のヤックラは、３号畑の西側で南北方区に長さ７m、高さ0.6mあり、南端で東側にほぼ直行してL字状に約3.5m続く、その先は３号畑の南側の土手の上や土手の斜面に石が並べられてはいるが、高く大量に積まれていないのでヤックラとは区別する。ヤックラの下は、畑面よりやや高くなっており、おそらく道として使われていた部分に、耕作で出た石を積みあげたものと思われる。石が積まれ高くなると、崩れないように両側に大きな石を石垣のように積み上げ、中央部には小さな石を詰めている。ヤックラの幅や高さは、場所により一定でない。

２区では18号石垣と４号畑の間にヤックラがあった。重機により大部分撤去してしまっているが、発掘できなかった電柱部分の観察から存在が明らかである。２区ではほかに12号石垣と10・11号畑との間にヤックラと思われる遺構があったと思われる。しかし重機で石を除去してしまったと思われはっきりしない。

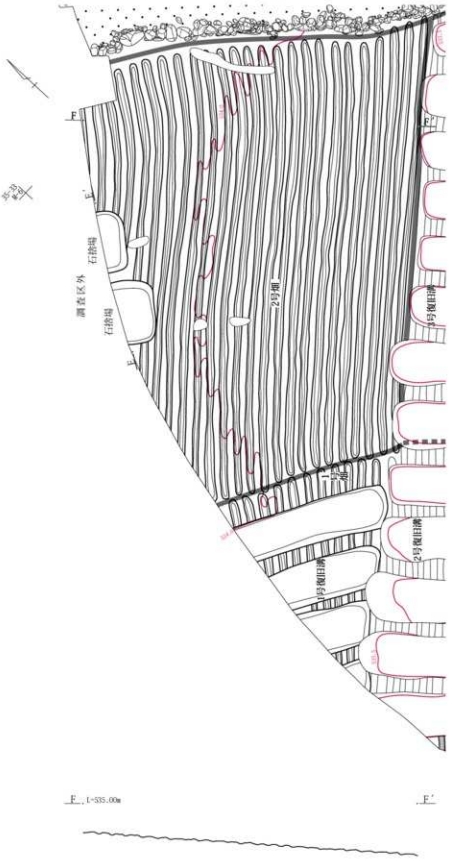
⑥　１区１号道　１区３号畑の西側と南側にはヤックラがあり、畑とヤックラとの境分には、畑を区画するように浅い溝が掘られている。この溝とヤックラとの間は、30～120cmほど耕作していない場所がある。道として使われていたものと思われる。道幅は、南北方向のヤックラ東側で70～80cm幅とほぼ一定しているが、東西方向では、30から120cmと一定していない。道の表面は、ほぼ平らであり、少量の浅間Ａ軽石が堆積している。

⑦　暗渠　畑調査後畑面の下から多くの石を１～２段溝状に並べた遺構が1区南側で２ヶ所確認された。用途や目的は不明であるが、暗渠の可能性が考えられ、西側を1号暗渠、東側を２号暗渠として調査した。1号暗渠の並べられた石はほぼ１段で、南北6.1m幅1m、２号暗渠はほぼ１～２段で、南北18.6m幅0.5～1m、高さ0.3m前後である。２号暗渠は、１号暗渠より多くの石を用いている。

⑧　列石　同じく畑調査後畑面の下から石を並べた遺構が暗渠東側で確認された。暗渠と違い、石列は１個から２個程度で並べられている。畑の境界に並べられたものではないだろうか。しかし天明泥流下の畑の境界とは大きく異なっている。石が並べられている全体の長さは、17.5mである。

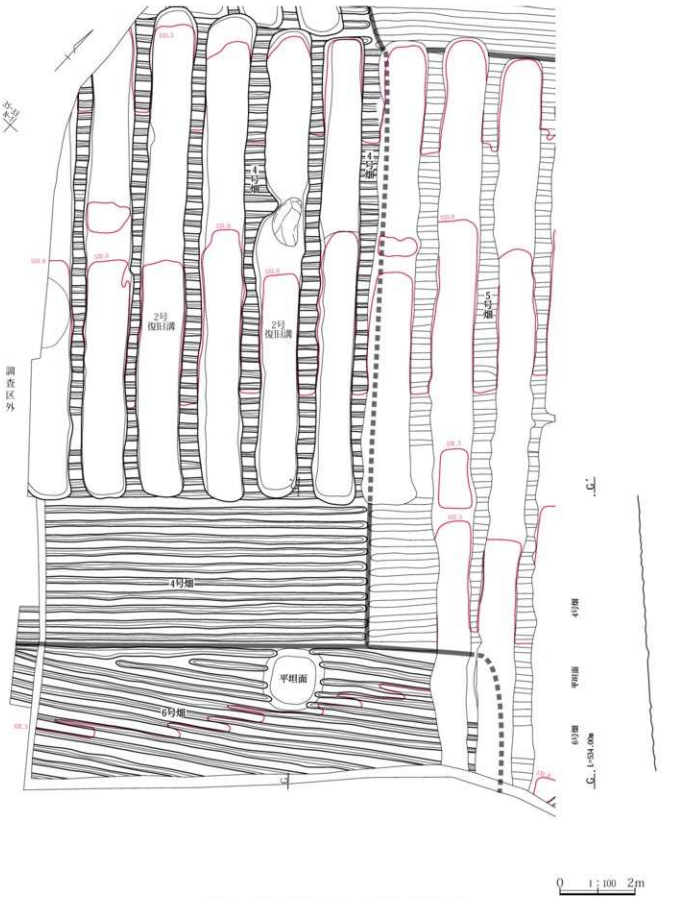
1区畝割図全体図

第57図　1区畝田溝、畑全体



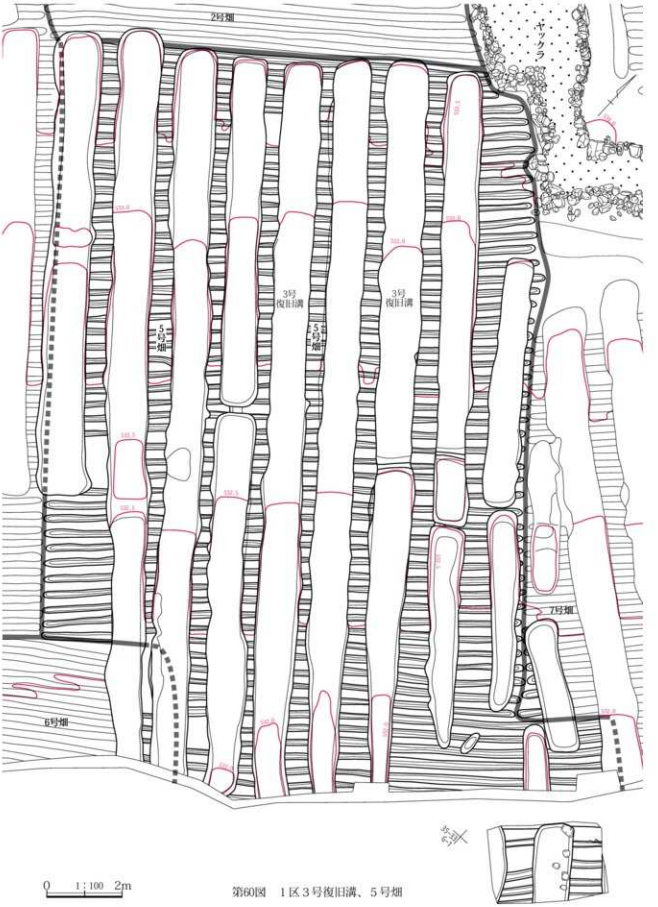
第58図　1区1号溝、1・2号畑・2号畑断面

１区畑割図２



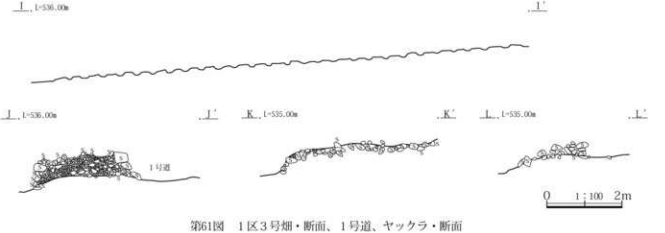
第59図　１区２号復旧溝、４・６号畑・６号畑断面

１区畑割図３

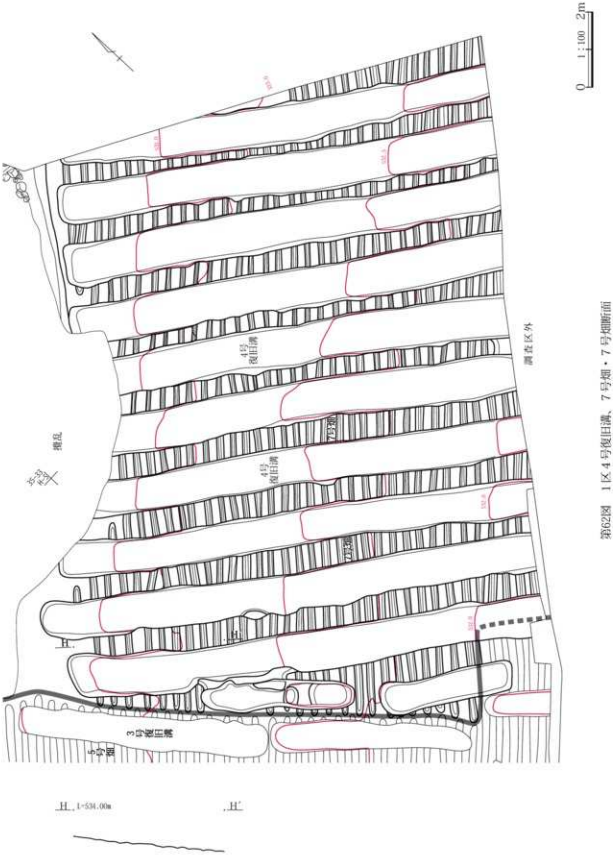


第60図　１区３号復旧溝、５号畑

１区畑割図４（３号畑・ヤックラ）



第61図　１区３号畑・断面、１号道、ヤックラ・断面



第62図　1区４号畝状溝、７号畝・７号畝断面

1区畑割図５

１号復旧溝

A L=534.00m　A'

２・３号復旧溝

B L=534.00m　B'

２・３・４号復旧溝

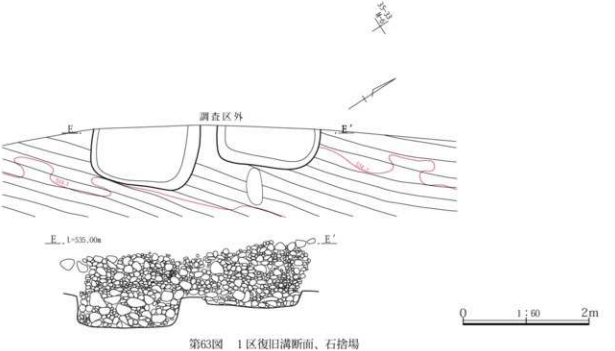
C L=534.00m　C'

２・３・４号復旧溝

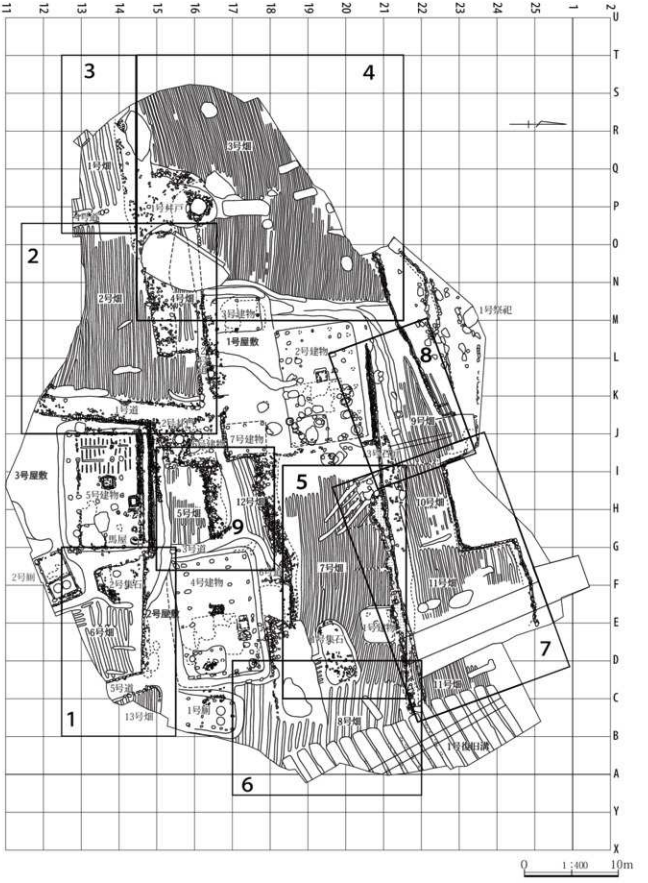
D L=533.00m　D'

0　1:100　2m

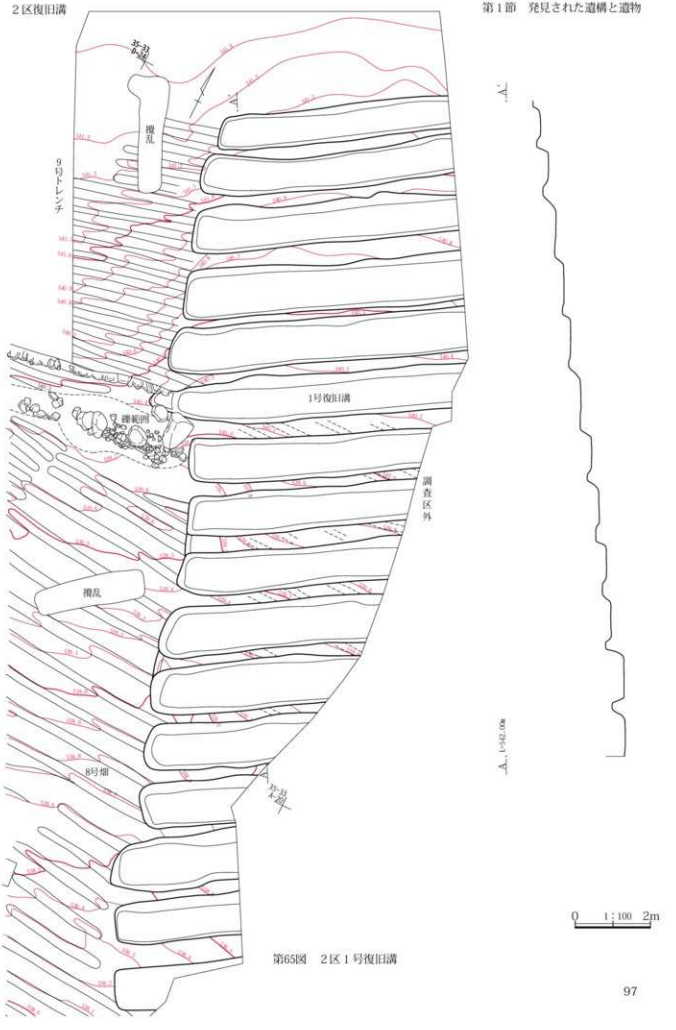
１区石捨場



第63図　１区復旧溝断面、石捨場

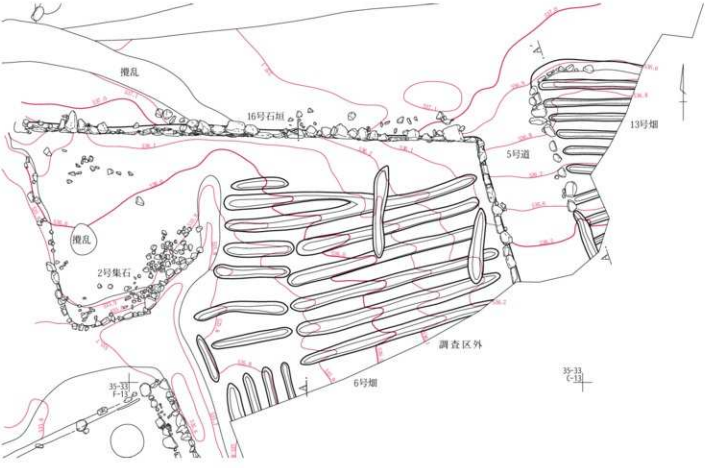


第64図　２区復旧溝、畑全体

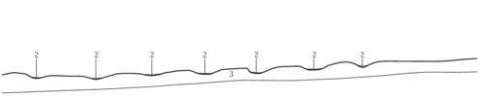


第65図　２区１号復旧溝

２区畑割図１

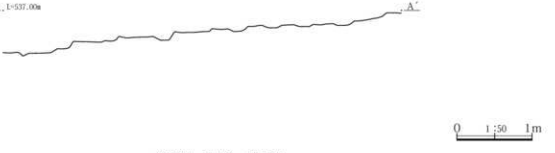


6号畑



６号畑　Ａ－Ａ'
２　浅間Ａ軽石
３　暗黄褐色土　φ5mm～３cmの礫を含む。浅間Ａ軽石下耕土。
※土寄せ無し。Ａは雨で流出して詳細不明。畝幅30cm程。畝は高く明瞭。

13号畑



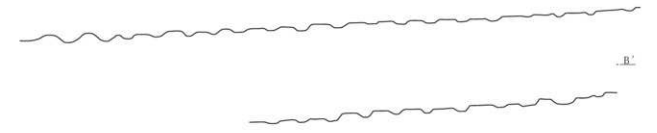
第66図　２区６・13号畑

2区畑別図2
0 1:100 2m
第67図　2区2・4号畑
1号畑
2号畑
4号畑
調査区外
撹乱
撹乱
1号溝
2号溝
17号石囲
18号石囲
16号石囲
電柱
Pa
Pb
Pc
Pd
Pe
Pf
Pg
Ph
Pi
Pj
Pk
Pl
Pm
Pn
Po
Pp
Pq
Pr
Ps
Pt
Pu
Pv
Pw
Px
Py
Pz
Qa
Qb
Qc
Qd
Qe
Qf
Qg
Qh
Qi
Qj
Qk
Ql
Qm
Qn
Qo
Qp
Qq
Qr
Qs
Qt
Qu
Qv
Qw
Qx
Qy
Qz
Ra
Rb
Rc
Rd
Re
Rf
Rg
Rh
Ri
Rj
Rk
Rl
Rm
Rn
Ro
Rp
Rq
Rr
Rs
Rt
Ru
Rv
Rw
Rx
Ry
Rz
Sa
Sb
Sc
Sd
Se
Sf
Sg
Sh
Si
Sj
Sk
Sl
Sm
Sn
So
Sp
Sq
Sr
Ss
St
Su
Sv
Sw
Sx
Sy
Sz
Ta
Tb
Tc
Td
Te
Tf
Tg
Th
Ti
Tj
Tk
Tl
Tm
Tn
To
Tp
Tq
Tr
Ts
Tt
Tu
Tv
Tw
Tx
Ty
Tz
Ua
Ub
Uc
Ud
Ue
Uf
Ug
Uh
Ui
Uj
Uk
Ul
Um
Un
Uo
Up
Uq
Ur
Us
Ut
Uu
Uv
Uw
Ux
Uy
Uz
Va
Vb
Vc
Vd
Ve
Vf
Vg
Vh
Vi
Vj
Vk
Vl
Vm
Vn
Vo
Vp
Vq
Vr
Vs
Vt
Vu
Vv
Vw
Vx
Vy
Vz
Wa
Wb
Wc
Wd
We
Wf
Wg
Wh
Wi
Wj
Wk
Wl
Wm
Wn
Wo
Wp
Wq
Wr
Ws
Wt
Wu
Wv
Ww
Wx
Wy
Wz
Xa
Xb
Xc
Xd
Xe
Xf
Xg
Xh
Xi
Xj
Xk
Xl
Xm
Xn
Xo
Xp
Xq
Xr
Xs
Xt
Xu
Xv
Xw
Xx
Xy
Xz
Ya
Yb
Yc
Yd
Ye
Yf
Yg
Yh
Yi
Yj
Yk
Yl
Ym
Yn
Yo
Yp
Yq
Yr
Ys
Yt
Yu
Yv
Yw
Yx
Yy
Yz
Za
Zb
Zc
Zd
Ze
Zf
Zg
Zh
Zi
Zj
Zk
Zl
Zm
Zn
Zo
Zp
Zq
Zr
Zs
Zt
Zu
Zv
Zw
Zx
Zy
Zz

２号畑

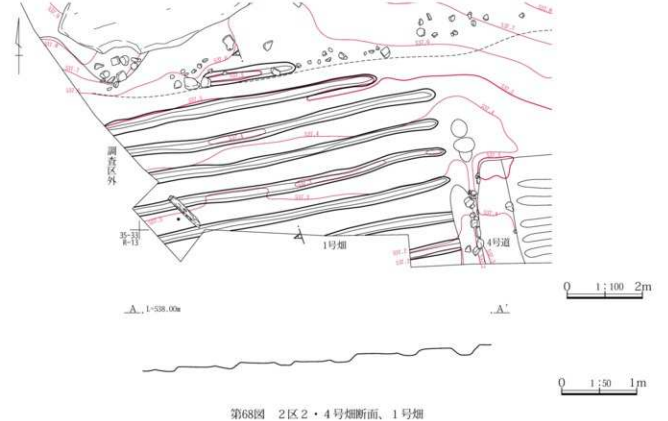
２号畑　Ａ－Ａ'
1　暗黄褐色土　３層と同質。上寄せ。
2　浅間Ａ軽石
3　暗黄褐色土　φ0.5mmの小礫を含む。
　　非山側から川側に上寄せ。畝幅は30cm程。

２号畑



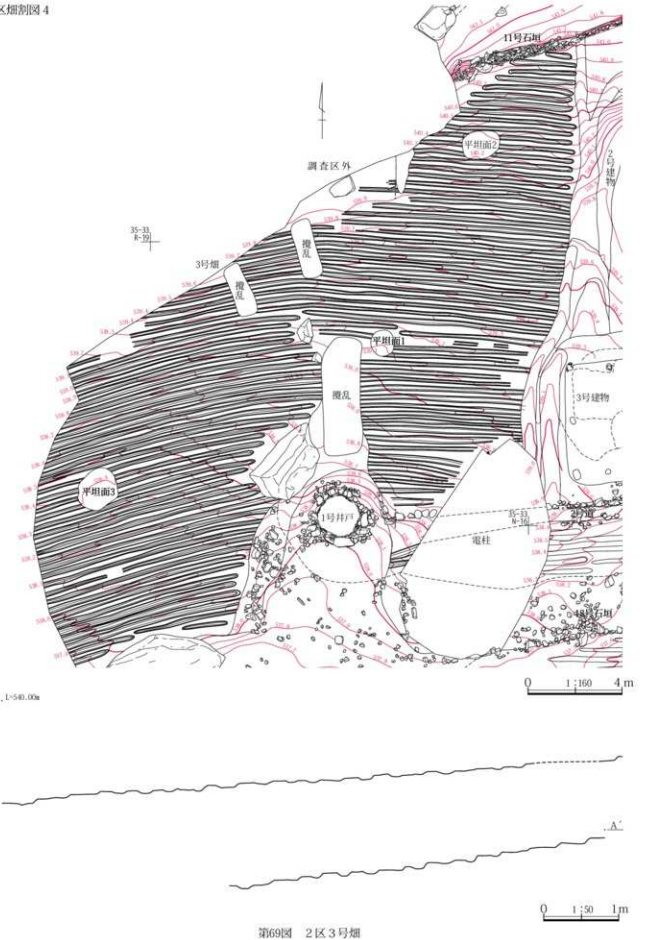
４号畑

２区畑割図３

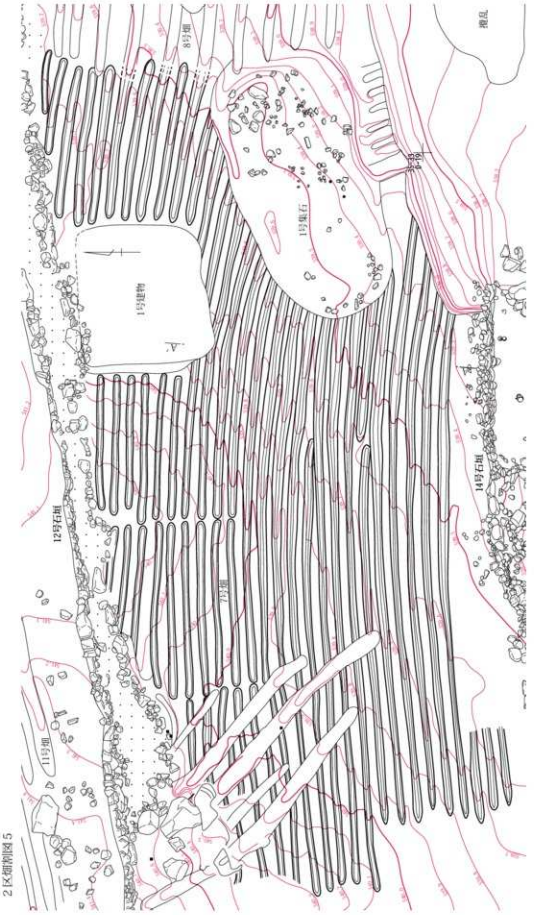


第68図　２区２・４号畑断面、１号畑

２区畑割図４

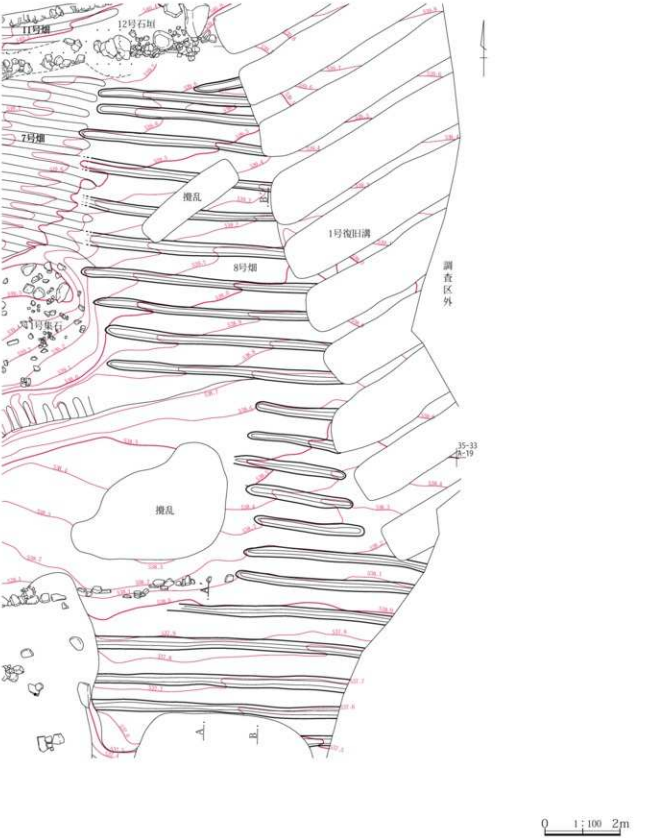


第69図　２区３号畑


2区畑南図５
11号畑
12号畑
13号畑
15号建物
16号畑
17号集石
18号畑
14号石畑
溝
A
A'
0　1:100　2m
0　1:50　1m
7号畑
A　L=40.0m
A'

第70図　2区７号畑

２区畑割図６

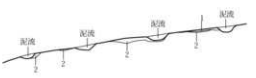


第71図　２区８号畑

割図６　８号畑

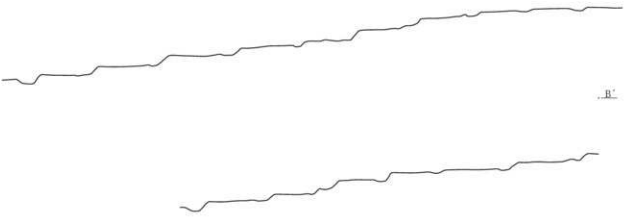
A　L=539.00m　　A'

８号畑　Ａ－Ａ'
1　暗黄褐色土　土寄せ。
2　浅間Ａ軽石



８号畑

B　L=540.00m

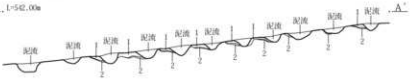


割図７　10号畑

A　L=542.00m　　A'

11号畑

A　L=542.00m



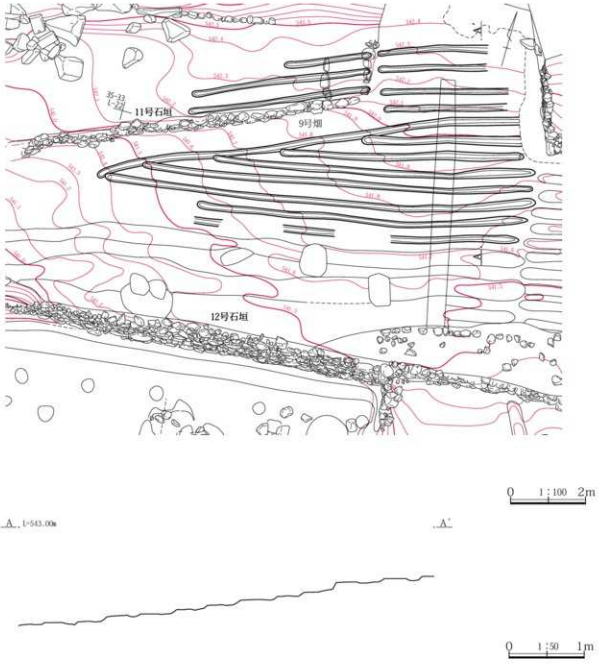
11号畑　Ａ－Ａ'
1　暗黄褐色土　土寄せ。
2　浅間Ａ軽石

0　1:50　1m

第72図　２区８・10・11号畑断面

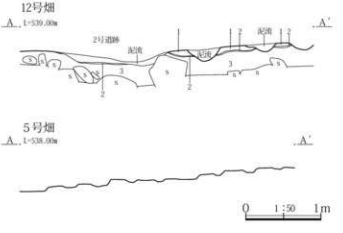
第73図　2区10・11号畑

２区畑割図８



第74図　２区９号畑

２区畑割図９



12号畑　A－A'
1　暗黄褐色土　３層と同質。上寄せ。
2　浅間Ａ軽石
3　暗黄褐色土　φ0.5mmの小礫を含む。
※両側から上寄せ。畝幅は40cmより広い。

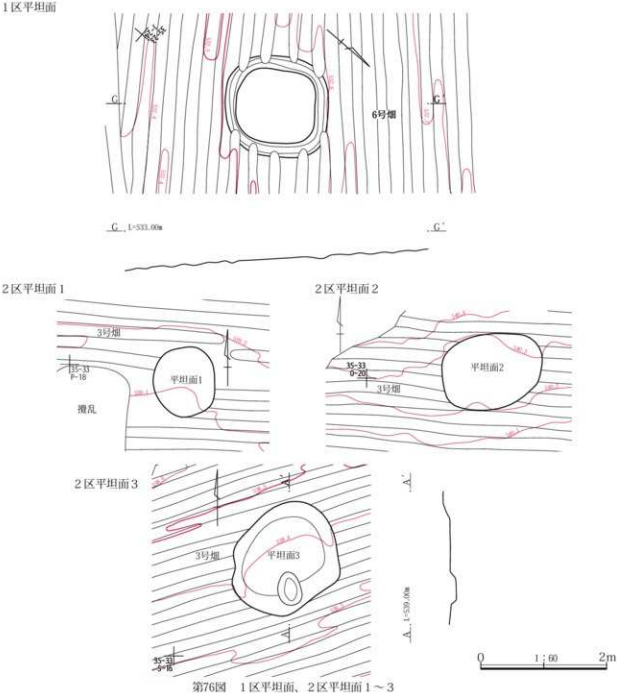
第75図　２区12・５号畑

⑨　２区の畑面で確認された植物痕

２区２号畑や６号畑西端拡張部で、これまで上郷岡原遺跡等で確認されている麻の茎に似ている植物痕が確認された。畑面の畝サクの上の浅間Ａ軽石のすぐ上に位置する泥流中からの確認である。植物は、ほぼ南北方向に倒れており、畑の南側にある吾妻川方面からの泥流により倒れたものと思われる。２区の畑ではこのような植物痕は確認できなかった。

⑩　明治６年の壬申地引絵図との比較

発掘調査された遺跡全体図と明治６年の壬申字引絵図を比較検討してみると、道路・水路・屋敷・畑との位置がほとんど一致している。地図に記録されている畑の等級を見ると、地図と同じ位置にあると思われる１区１・２号畑は中畑、４・６号畑は上畑、２区号畑は中畑と思われる。他の畑はわからないが、２区の南側で道に近い畑が下畑、北側で傾斜強い部分に作られている畑に下々畑が多いようである。１区６号畑から麻と思われる植物痕が確認され、その畑が上畑なら、「天明三年八月吾妻郡柏木村畑方作秋作小前書上張」（群馬県史資料編11近世）の資料検討から麻が栽培されていた可能性が高い。



第76図　１区平坦面、２区平坦面１～３

暗渠　　列石

2号暗渠

1号暗渠

1号列石

調査区外

0　1:160　4m

1区列石

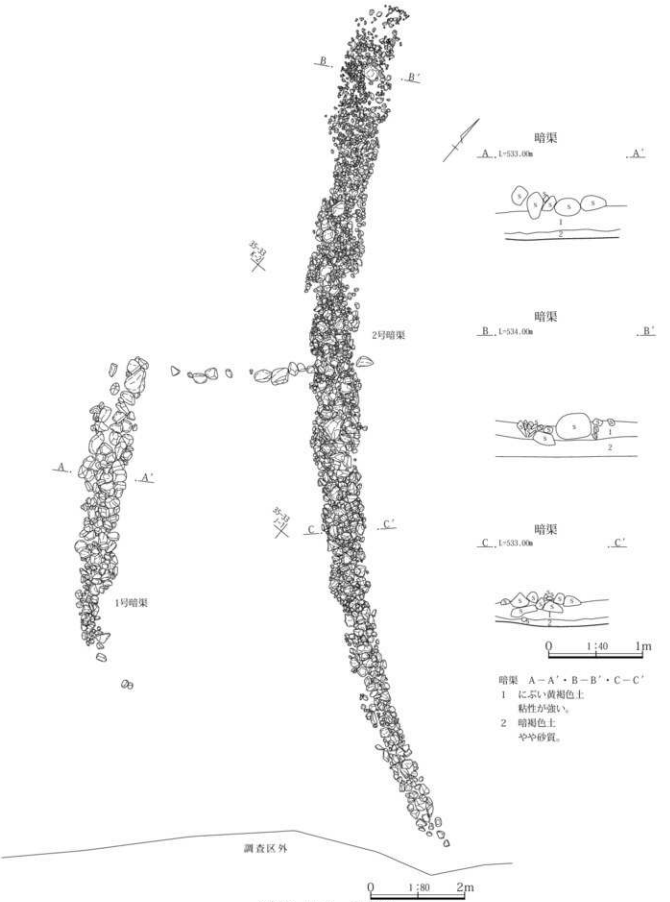
1号列石

A, L=533.00m　A'

1　にぶい黄褐色土
粘性の強い土層。

0　1:80　2m　　0　1:40　1m

第77図　１区１・２号暗渠、１号列石全体図・１号列石断面



第78図　１区１・２号暗渠

（６）北斜面の調査

①　**調査概要**　発掘区域北側は、標高が高く傾斜がきつい斜面である。北端での表土面標高は550m前後、３号屋敷の造られていた表土面標高が538m前後である。両地点の距離は100mあり、その間で12m前後標高差がある。傾斜面であるために平らな宅地や畑面等を確保する必要があり、多くの石垣が積まれていた。これらの石垣の積まれた時期と天明泥流がどの範囲まで堆積しているかの範囲確認、さらに泥流下にどのような遺構が埋まっているか等を確認するために、１トレンチから11トレンチまで11ヶ所トレンチ調査を実施した。

調査の結果、地形や石垣の有無等により影響されるが、標高541mから542m付近まで泥流が残っており、泥流の下には、畑が確認できた。１～７トレンチ部分には遺構が無いことが確認できた。また石垣は1号から９号石垣までは天明三年以降に積まれていることが確認できた。

(ア) 1号トレンチ　深さ80㎝掘る。表土の下は砂礫層（土層注記では場所により異なっており明褐色土・暗褐色土・暗黄褐色度と表記）、天明泥流堆積なし。

(イ) 2号トレンチ　１号石垣下を含めて深さ110㎝掘る。石垣の下は砂礫層、天明泥流堆積なし。１号石垣は天明より新しい。

(ウ) 3号トレンチ　３号石垣下を含めて深さ90㎝掘る。石垣の下は砂礫層、天明泥流堆積なし。石垣は天明より新しい。

(エ) 4号トレンチ　深さ70㎝掘る。表土の下は砂礫層。天明泥流堆積なし。

(オ) 5号トレンチ　深さ170㎝掘る。表土と砂礫層の下に、砂礫をほとんど含まない密な土層（暗褐色土）がある。天明泥流堆積なし。

(カ) 6号トレンチ　深さ60㎝掘る。表土の下は砂礫層。天明泥流堆積なし。

(キ) 7号トレンチ　深さ70㎝掘る。表土の下は砂礫層。天明泥流堆積なし。

(ク) 8号トレンチ　長さ15.5mと長く設定したトレンチである。北側は、５号石垣を断ち割る。石垣は高さ1.5mで６段前後積まれている。石垣の裏込めは、角礫主体で砂礫層に近い土で埋められていた。石垣の積み方は細長い石を斜め方向の谷組で積んでおり、天明以降に積まれたものである。石垣の下部は、天明泥流下の畑耕作土に近い土であるが、天明泥流や浅間Ａ軽石は無かった。

トレンチ南端から７m付近では、天明泥流と思われる土層が南端５m付近では浅間Ａ軽石が、1.5m間隔で３ヶ所確認された。畑の存在が考えられたが攪乱を受けて残りが悪かった。５号石垣付近までは、天明泥流が堆積しており、それを削り込んで、５号石垣と石垣南側に平地面が造成されたものと思われる。

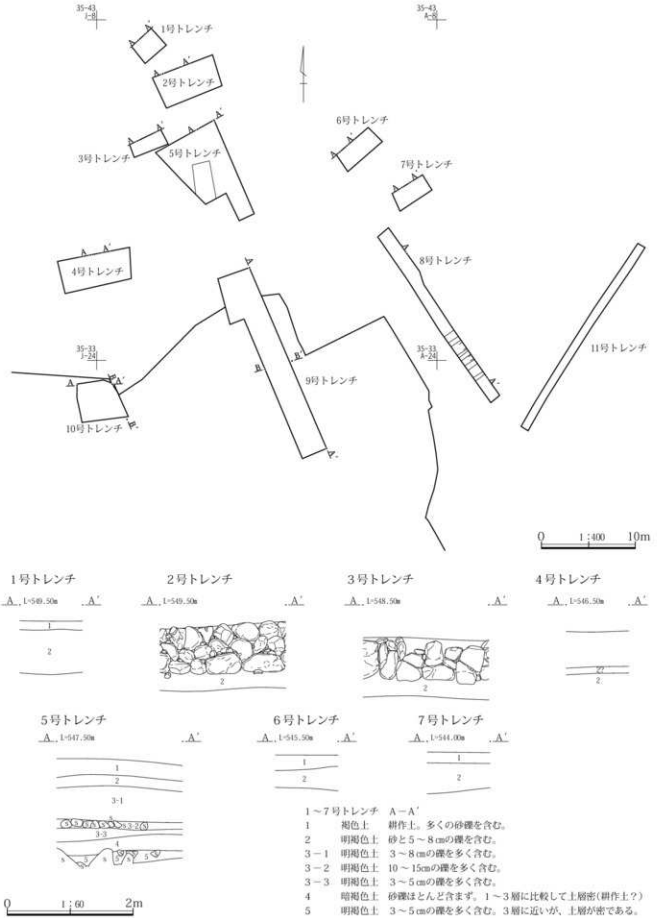
(ケ) 9号トレンチ　長さ20.2mと長く設定したトレンチである。トレンチの北側の標高は535.30m、南側は530.50mで５m近くの標高差がある。トレンチ内に北側から６号石垣・10号石垣・７号石垣の３基の石垣がある。６号石垣・７号石垣は、発掘前から確認できた石垣であり、砂礫層の上に積まれており、天明泥流以降に積まれた石垣である。10号石垣底部から南側には天明三年の天明泥流と浅間Ａ軽石下から畑が確認されており、天明三年以前に積まれていた石垣である。

(コ) 10号トレンチ　９号畑の北側に設定したトレンチである。９号畑がどこまで北側に延びているかの確認のために設定した。調査の結果、石垣底部に畑の耕作土に近い土層は確認できたが、浅間Ａ軽石の堆積が無く。畑の耕作痕を確認することはできなかった。10号トレンチより北側に畑は無いものと思われる。

(サ) 11号トレンチ　遺構の存在を確認するためのトレンチである。調査の結果、浅間Ａ軽石の堆積を確認することはできなかった。

②　**砂礫層について**

北斜面で表土の下から砂礫層が厚く堆積している。この砂礫層は、東宮遺跡でも８号建物周辺で天明泥流の上で厚く堆積していることが確認されている。この砂礫層は、どの時期に堆積した土砂なのだろうか。数回の堆積が観察できるので、過去多くの堆積があったものと思われる。記録の一つとして長野原町誌下巻の中で、昭和10年９月25日に長野原尋常小学校第一分教場が山津波により２教室・便所・昇降口・廊下・物置等が転壊したとの記述がある。この小学校は西宮遺跡に近く、西宮遺跡のある川原畑村の小学生が通っていた学校である。砂礫層の堆積した一つの時期の可能性としてこの災害が考えられる。

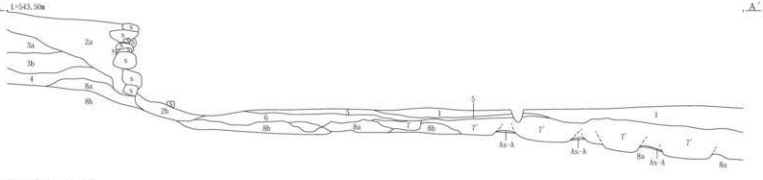


１～７号トレンチ　Ａ－Ａ'

１	褐色土	耕作土。多くの砂礫を含む。
２	明褐色土	砂と５～８㎝の礫を含む。
３－１	明褐色土	３～８㎝の礫を多く含む。
３－２	明褐色土	10～15㎝の礫を多く含む。
３－３	明褐色土	３～５㎝の礫を多く含む。
４	暗褐色土	砂礫はとんど含まず。１～３層に比較して土層密(耕作土？)
５	明褐色土	３～５㎝の礫を多く含む。３層に近いが、土層が密である。

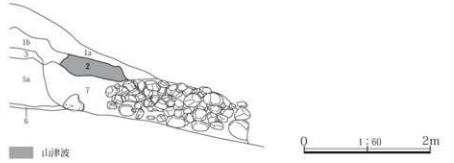
第79図　２区北斜面トレンチ・断面(１)

8号トレンチ

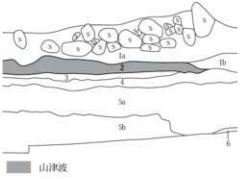


8号トレンチ　A－A'

1　表土
2a　角礫主体の５号石垣の裏込め。
2b　積み直し後の石垣下部か。3.5m付近に人頭大の礫が弧状に並ぶ。
3a　暗褐色土　拳大の角礫多く含む。（昭和10年崩落土？）
3b　暗黄褐色土　拳大の角礫多く含む。最下部に厚さ５mmの砂層。（昭和10年崩落土？）
4　暗褐色土　φ１cm～３cmの礫含む。
5　黄褐色土　砂質。９号トレンチの３層に近い。昭和10年以前の生活面？
6　暗褐色土　淡黄色パミス混。角礫混。
7　暗褐色土　小礫を多く含む。泥流起源。復旧溝覆土に近い層。
7'　暗褐色土　泥流起源。復旧溝覆土か。
8a　暗褐色土　浅間Ａ軽石下畑の耕土。小礫を含む。
8b　暗褐色土　８a層と同質だが、やや明るい色調を呈す。



10号トレンチ



10号トレンチ　A－A'

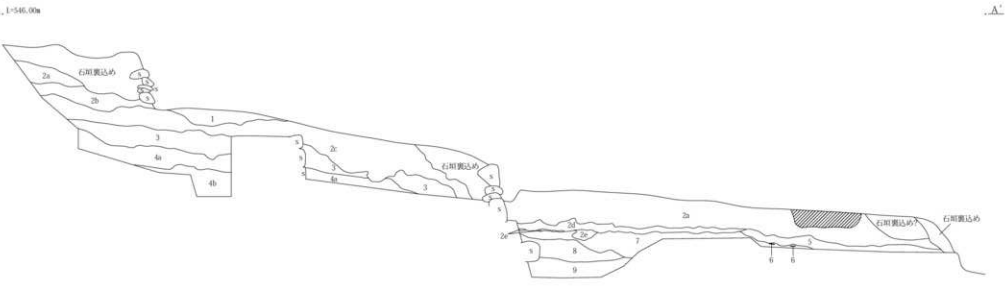
1　１a現代の耕作土　１bには鉄板などのゴミを含む。
2　角礫を多く含む褐色土　昭和10年山津波。
3　暗褐色土　砂質。昭和10年以前の生活面？
4　暗褐色土　小礫を含む。古い耕土？
5a　暗褐色土　淡黄色パミスを含む。φ５mm～３cmの小礫多く含む。
5b　暗褐色土　５aと同質だが、やや黒味が強い。小礫を含む割合が少ない。
6　黄褐色土　砂質で角礫を含む。浅間Ａ軽石下畑の耕土に近い。

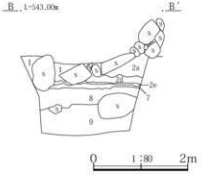
10号トレンチ　B－B'

1　１a現代の耕作土　１bには鉄板などのゴミを含む。
2　角礫を多く含む褐色土　昭和10年山津波。
3　暗褐色土　砂質。昭和10年以前の生活面。
5a　暗褐色土　淡黄色パミスを含む。φ５mm～３cmの小礫多く含む。
6　黄褐色土　砂質で角礫を含む。浅間Ａ軽石下畑の耕土に近い。
7　暗褐色土　小礫を含む。石垣の裏込め？

第80図　２区北斜面トレンチ・断面（２）

9号トレンチ





9号トレンチ

1　表土層

2a　角礫を多く含む暗褐色土　(山体崩落土(昭和10年)？)

2b　角礫を多く含む暗褐色土　2a層より暗い。(山体崩落土(昭和10年)？)

2c　角礫を多く含む黄褐色土　(山体崩落土(昭和10年)？)

2d　暗褐色砂質土　φ5mmの小礫を含む。(山体崩落土(昭和10年)？)

2e　暗褐色土　砂質。2dをブロック状に含む。(山体崩落土(昭和10年)？)

3　暗褐色土　小礫を含む。

4a　角礫混じり黄褐色土　(山体崩落土？)

4b　角礫混じり黄褐色土　(山体崩落土？)

5　天明泥流

6　浅間A軽石

7　暗黄褐色土　礫混じり。浅間A軽石下畑の耕土。

8　暗褐色土　φ数mm～2cmの角礫を含む。他、黄色岩片を含む。

9　拳大～人頭大の角礫を含む。　暗黄褐色土。崩落土。

第81図　2区北斜面トレンチ・断面(3)

第４章　西宮岩陰

第１節　発見された遺構と遺物

（１）　調査概要

西宮岩陰は、巨大な岩の根元の岩陰と岩の上にある祭祀遺構である。発掘調査前にここに置かれていた４基の石像物は撤去されているが、その石造物に刻まれた年号は、古い順に、・宝篋印塔(文和三年三月1354年)・庚申等(寛文十一年1671年)・庚申等(享和十一年1720)・御嶽山大権現遙拝所1816)である。(『長野原町の文化財調査報告書１』(５地区の石造物及び神社・社宇・堂宇の移転等保存移設について)長野原町平成25年３月)。また天保十四年に作られた「上野国吾妻郡川原畑村村絵図面」に描かれている、「むくろ山」と書かれた岩山のふもとに堂が描かれており、この場所が西宮岩陰にあたると思われ、ここには堂が建っていたものと思われる。調査の結果岩陰で５ヶ所の台座(すでに石造物は撤去され、台座のみ現地に残されていた。)及び岩の手前に石垣を積んで平地面を確保していることが確認できた。

岩陰部分を１号石造物と総称し、各台座を１a号石造物・１b号石造物・１c号石造物・１d号石造物・１e号石造物とした。岩の上の遺構は、五輪塔が出土したが、台座は残っていなかった。全体を２号石造物とした。

１b号石造物手前に地蔵(Ａ)と台座(Ｂ)が置かれていた。長野原町教育委員会に移管した。

（２）　調査された西宮岩陰の平坦面

大きな岩は、北に向かって低くなる急斜面にある。西宮の集落に面した岩の南側底面は、少し抉られたようになっており、そこに少し手を加えて、石像物等が安置されていた。岩陰部分では、岩と岩の間に石垣を築いて平地面を確保している。１a・１b号石造物の北側の平地面には幅20×12㎝厚さ12㎝前後の平石が多く出土しており、覆土中からは、大量の平石が出土している。確保した平地面には川原から運んだ大量の平石が並べられていたものと思われる。平地面の標高は552m前後であり、出土した半分以上の遺物も標高は552m前後の高さからである。出土遺物は東側の１a・１b号石造物の手前が大部分であり、五輪塔や陶磁器や灯明皿等が出土している。南側の平地面から遺物は出土していない。西側の平地面は、建物等が建っていたと考えられないだろうか。

（３）　１号石造物（１a・１b・１c・１d・１e号石造物）

①　**１a号石造物**(第83～86･88図参照)35-33･I-20グリッドに位置する。

西宮岩陰の東端に位置する。１b号石造物より0.5mほど高い位置にある。地山の岩の上に石と土を盛って平地面を作り、その上に２個の台石が置かれていた。大きな岩に接して位置するが、１b・１d号台座のように抉られた岩陰に位置する台座ではない。台石の上にどのような石造物が置かれていたのかは不明である。Ｓ－１とＳ－２の台座の大きさは表で示した。

②　**１b号石造物**(第83～86･88図参照)35-33･I-20グリッドに位置する。

西宮岩陰１a号石造物の西側に位置する。地山の岩の上に石５個の台石が置かれていた。一部台座の下には土が置かれ水平面を確保している。台座の表面は多少の凸凹はあるがほぼ水平面となっていた。５個の台石は抉られた岩陰の下に位置しているが、この岩陰は岩脈の違いによる抉れ部分であり、岩を掘り込んで加工している部分は一部であると思われる。加工痕と考えられる部分は５個置かれていた台石の、Ｓ－２・Ｓ－３・Ｓ－４の３石の上の部分である。台石の置かれている岩陰の規模は、奥行き100㎝、幅140㎝、高さ100㎝である。台石の上にどのような石造物が置かれていたのかは不明である。Ｓ－１とＳ－５の台座の大きさは表で示した。

③　**１c号石造物**(第83～85･87図参照)35-33･I-20グリッドに位置する。

西宮岩陰の西側に位置し、１d号石造物の東側に位置する。１b号石造物より1.3mほど高い位置にある。地山の岩の上に石と土を盛って平地面を作り、その上に１個の台石が置かれていた。大きな岩に接して位置するが、２・４号台座のように抉られた岩陰に位置する台座ではない。台座の中央部分に凹状の掘り込みがある。台石の上にどのような石像物が置かれていたのかは不明である。台座の中央部分に凹状の掘り込みは長軸幅５㎝奥行３㎝深さ３㎝である。Ｓ－１の台座の大きさは表で示した。

④　１d号石造物(第83～85･87･88図参照) 35-33・I-20グリッドに位置する。

西宮岩陰の西側端に位置する。１b号台座より2.9mほど高い位置にある。岩の壁面を底面部分で奥行100cm、掘り込み手前部分での横幅および高さは、横幅150cm、高さ160cmとなっている。このように掘り込み石像物を置く空間を確保している。底部には１個の台石が置かれていた。台座部分は岩肌の高い位置にあり、登るために手前に地山の岩山を削って３段の階段が作られていた。階段の幅は70cm前後である。１d号石造物は表土により埋没することなく残っていた遺構である。台石の上にどのような石像物が置かれていたのかは不明である。階段状の３段の掘り込みとＳ－１の台座の大きさは表で示した。

⑤　１e号石造物(第83～85･87･88図参照) 35-33・I-20グリッドに位置する。

西宮岩陰の中央部西寄りに位置する。１b号石造物より1.1mほど高い位置にある。これまでの１a～１d号石造物は、地山の岩面の上に平らな石を置いて台座としていた。しかし１e号石造物は岩面を掘り込んで、そこに石像を設置しており、これまでの台座と少し構造が異なる。石像を設置する手前には、１d号石造物と同じような横幅70cmの階段と思われる掘り込みが１ヶ所ある。石像が据えられたであろう掘り込みは、奥の岩面が直線で幅広い台形に近い形状をしている。大きさは奥の直線部分で横幅32cm、手前の短い部分の横幅20cm、深さ10cmである。大きな岩に接して位置するが、１b・１d号石造物のように挟られた岩陰に位置する台座ではない。

台石の上にどのような石造物が置かれていたのかは不明である。階段状の掘り込みは表で示した。

（４）　２号石造物

西宮岩陰の大きな岩の頂上部は平らになっており、調査時には撤去されていたがその上には宝篋印塔(文久三年1354)が調査前に設置されていた。(『長野原町の文化財調査報告書１』（５地区の石造物及び神社・社宇・堂宇の移転等保存移設について）長野原町平成25年３月)、さらに岩の頂上部に面した北側の道は、西宮から岩陰の上を通り、諏訪神社に抜ける道に面している。(『上野国吾妻郡川原畑村村絵図面』(天保十四年))。そこには寛保元年(1741)と記された双体道祖神が置かれていた。(『長野原町の石造文化財』長野原町1989)。以上のことより、江戸時代には岩の頂上部も信仰の対象となっていたことが考えられた。調査前の頂上部は多くの石が乱雑な状況で散乱していた。発掘調査の結果、五輪塔の地輪１個、火輪２個、風空輪１個の計４個出土した。１a・１b・１d号石造物のような平らな石の台座は、なかった。西宮の集落を一望できる頂上部には、五輪塔や宝篋印塔等が建てられていたものと思われる。

（５）　調査結果から考えられること

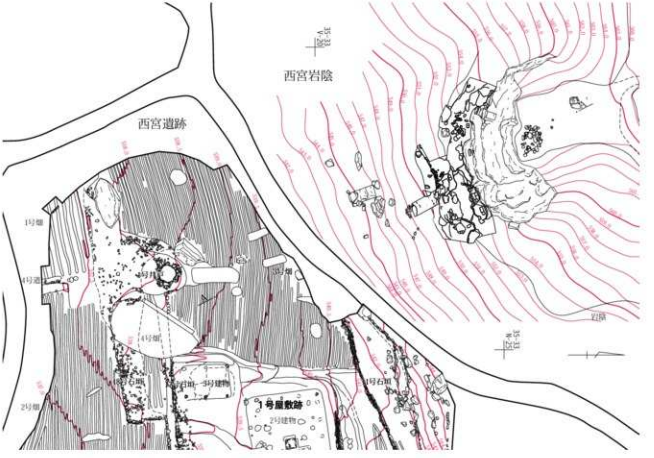
西宮の集落を見渡すことの出来る、大きな岩の頂上と岩陰を信仰の対象としたものと思われる。発掘の結果、５基の石造物を据えたであろう台座、岩陰部分では集落を見渡す傾斜面に、岩と岩の間に石垣を築いて平地面を確保し、標高552m前後を水平面とした平地面の存在が想定された。出土した大量の平石の存在から、そこには川原から運んだ大量の平石をタイル張りのような状態で敷き占めていたと思われる。そこから首の欠けたお地蔵さんと思われる石造物(長野原町に移管)・五輪塔・中世の渡来銭である皇宗通宝・元豊通宝・太平通宝・天聖元宝や江戸時代の寛永通宝(新･旧)、陶磁器として美濃の擂鉢・小さな土師質の杯・狐と思われる泥人形等が出土した。

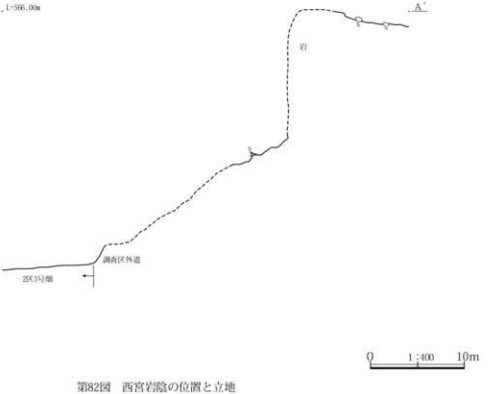
前に紹介したように天保十四年図の絵図には、建物が建っている。明治６年の壬申地引絵図には、岩山と思われる表現があり、岩山の手前部分は竹藪と畑の記述はあるが、寺社等の記述は全くない。おそらく壬申地引絵図が作られた段階では、寺社としての認識は、既になかったのであろうか。このような調査結果から、この西宮岩陰は、中世のある段階から、信仰の対象として存在し、江戸時代には多くの石像等が建てられ、小さな堂も作られ信仰の場となっていたと思われる。

（６）　出土遺物

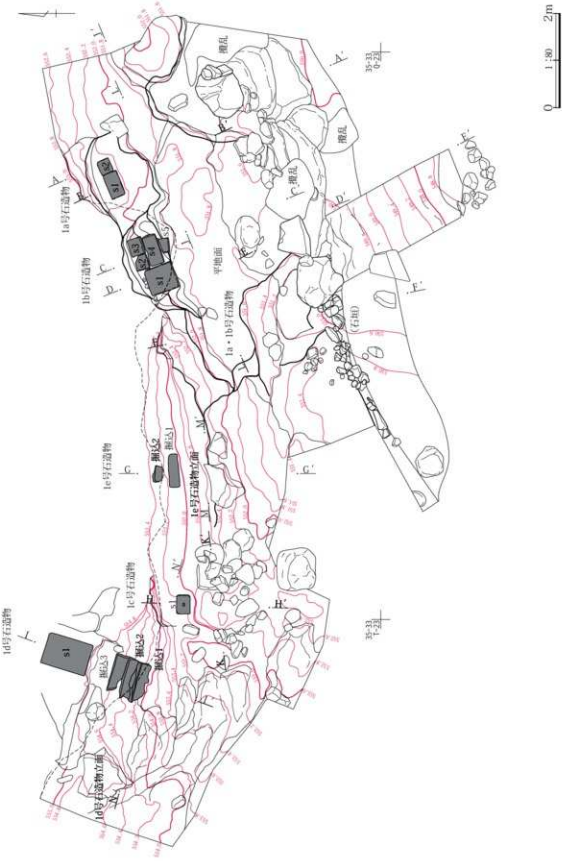
１号石造物出土遺物の中からは、小型の皿(１～３・15)、陶器灯火皿(11･14)、灯火受皿(12･13)、陶器すり鉢(４・19)、磁器(16･17)、土製の狐(18)、五輪塔の空風輪(５・６)、火輪(７・８)、地輪(９)、石製品(10)、古銭(20～28)、硯(29)を資料化した。２号石造物出土遺物では、五輪塔の空風輪(１・２)、火輪(３・４)、地輪(５)を資料化した。

掲載資料の他に１号石造物出土の陶磁器は、江戸時代の国産磁器１点、５g、国産陶器６点、150g、近・現代の陶磁器４点、38gが出土したが、図示し得なかった。

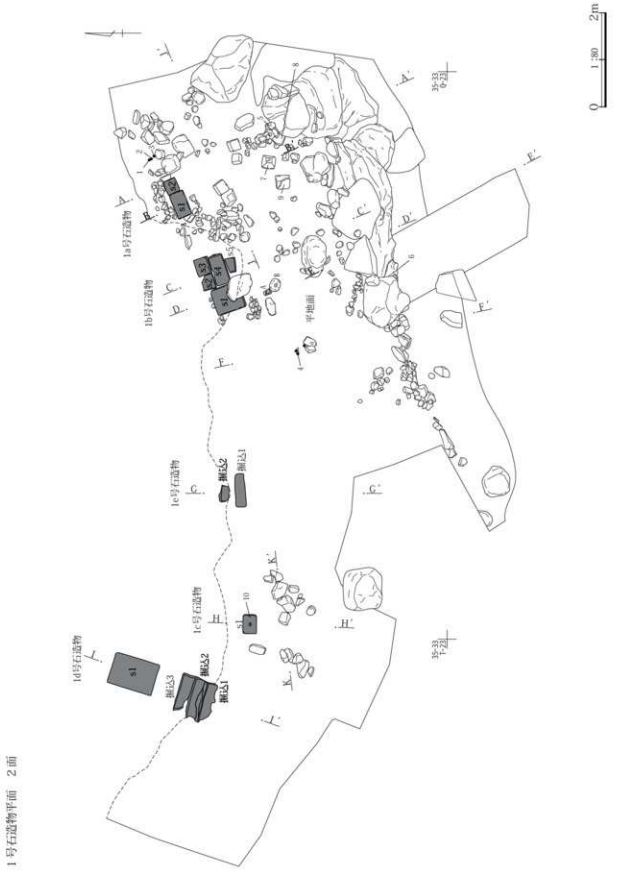




第82図　西宮岩陰の位置と立地

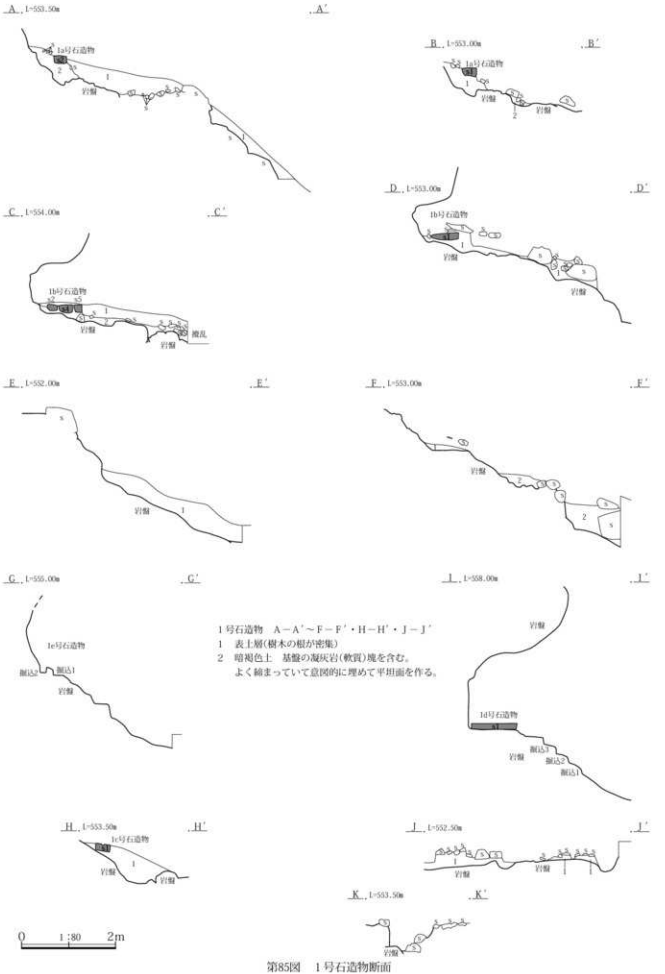


第83図　1号石造物全体



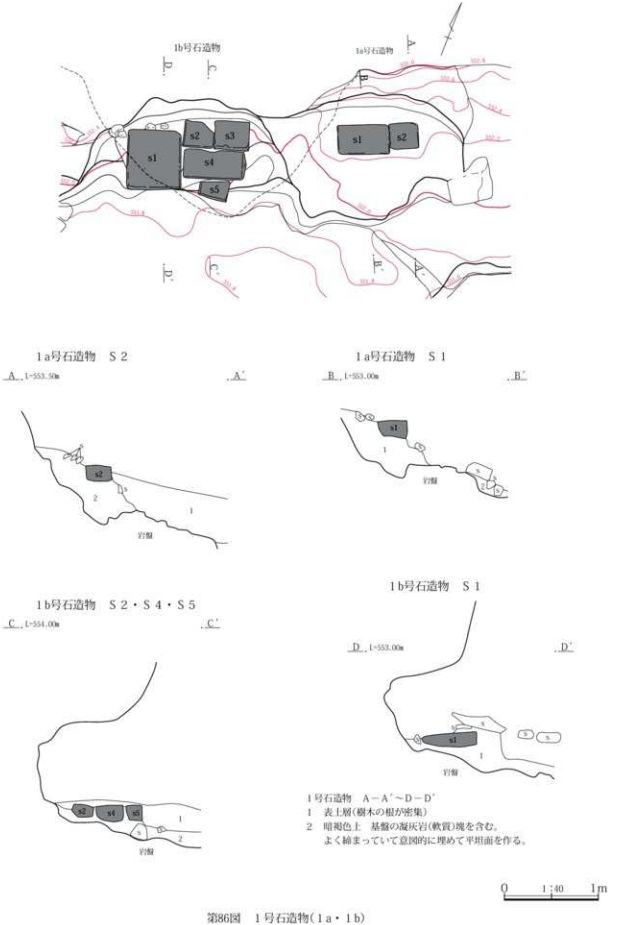
1号石造物平面　2面

第84図　1号石造物出土遺物

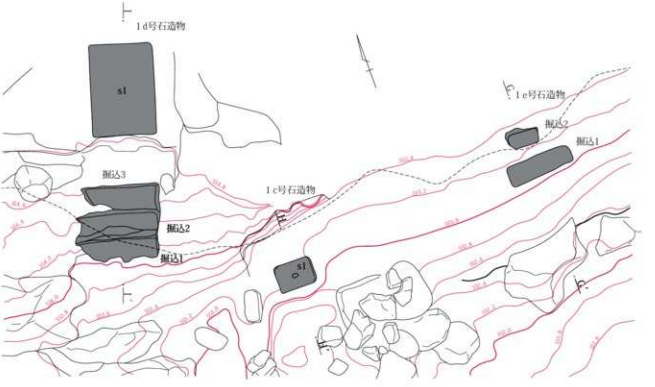


1号石造物　A－A'～F－F'・H－H'・J－J'
1　表土層(樹木の根が密集)
2　暗褐色土　基盤の凝灰岩(軟質)塊を含む。
　よく締まっていて意図的に埋めて平坦面を作る。

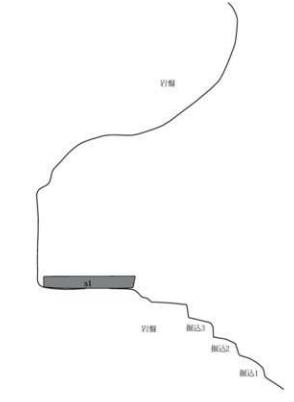
第85図　1号石造物断面



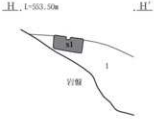
第86図　１号石造物(１a・１b)



1d号石造物　S１・掘込１～３

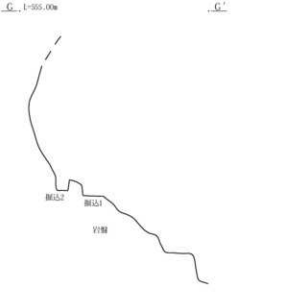


1c号石造物　S１



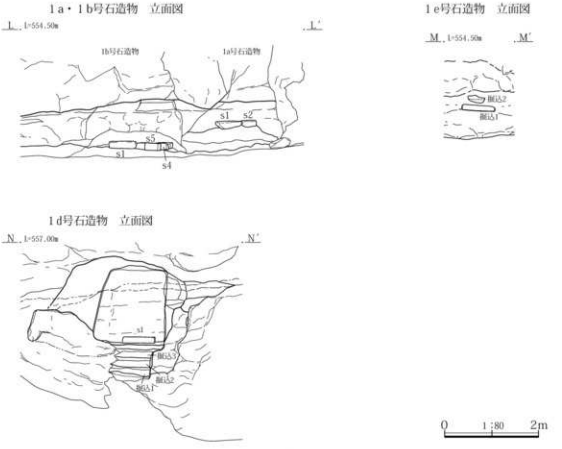
１号石造物　H－H'
1　表土層(樹木の根が密集)

1e号石造物　掘込１・２



0　1:40　1m

第87図　１号石造物(1c・1d・1e)



第88図　１号石造物１a・１b・１d・１e立面

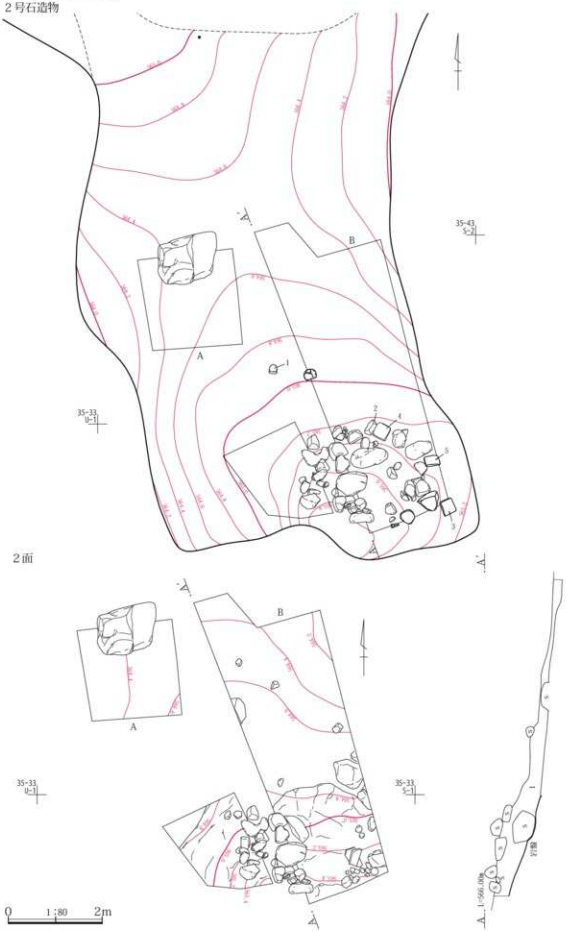
１号石造物出土物(長野原町教育委員会に移管済み)

第15表　西宮岩陰１～５号台座規模一覧

石造物番号	標高(m)	比高差(m)	S1　長径×短径×厚(cm)	S2　長径×短径×厚(cm)	S3　長径×短径×厚(cm)	S4　長径×短径×厚(cm)	S5　長径×短径×厚(cm)	掘込1　長径×短径×深(cm)	掘込2　長径×短径×深(cm)	掘込3　長径×短径×深(cm)
1a	552.6	0.8	56×32×18	32×28×17						
1b	552.1	0.3	60×36×16	32×26×14	38×32×－	66×30×18	30×20×16			
1c	553.3	1.5	40×30×16							
1d	555	3.2	96×70×12					80×26×384	90×30×364	80×26×344
1e	553.2	1.4						70×24×180	32×20×190	

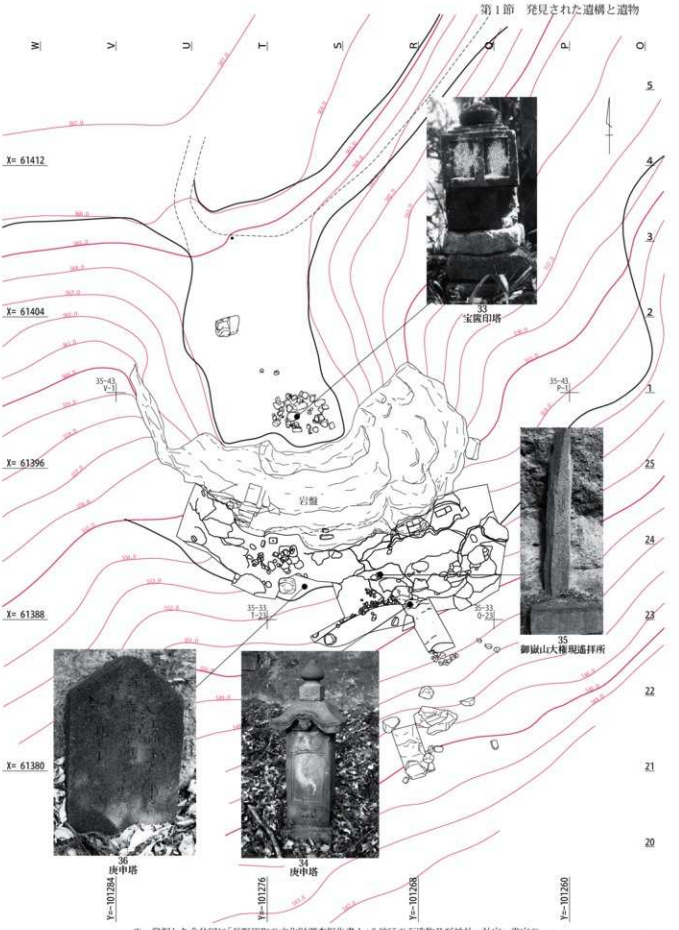
基準高　551.8（１b石造物手前の平坦地標高）

２号石造物



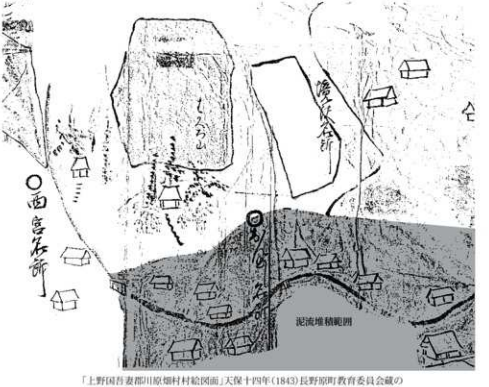
２号石造物　A－A'
1　表土層（樹木の根が発達）綿密りなし。

第89図　２号石造物全体

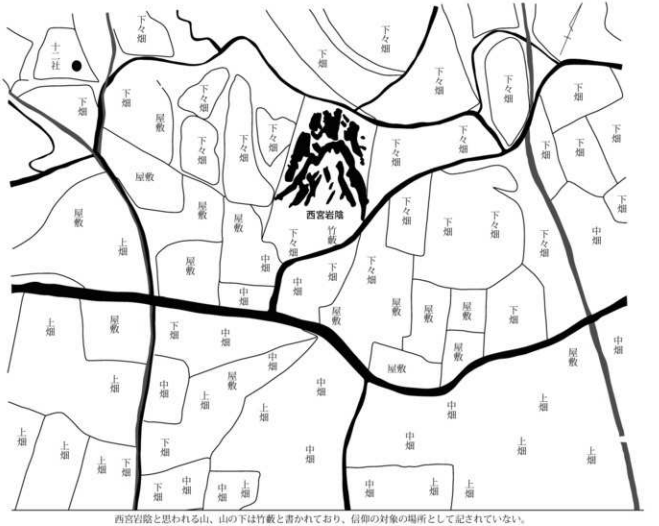


※　発掘した全体図に「長野原町の文化財調査報告書Ⅰ」5地区の石造物及び神社・社宇・堂宇の移管等保存移設について長野原町平成24年度に掲載された資料を追加して作成

第90図　発掘調査以前に存在していた石造物（現在は移設済み）



「上野国吾妻郡川原畑村村絵図面」天保十四年（1843）長野原町教育委員会蔵の
一部に描かれている西宮岩陰と思われるむくろ山と下に描かれている建物



西宮岩陰と思われる山、山の下は竹藪と書かれており、信仰の対象の場所として記されていない。
「壬申地引絵図」（川原畑村）明治６年（1873）加除筆により作成

第91図　絵図に描かれている西宮岩陰周辺

第５章　自然科学分析

第１節　川原畑西宮岩陰の露頭について

（１）　凝灰角礫岩

露頭は凝灰角礫岩と火山礫凝灰岩の互層よりなる。凝灰角礫岩は４層あり、各単層の厚さは３～４ｍで、最下部層は剥土した下部斜面に、上位３層は崖部分にそれぞれ露出している。基質は黄褐色ないし灰褐色を呈し、粗粒火山灰および軽石片等よりなり、火山礫を含む。下位２層では黄褐色軽石がやや多い。礫は暗灰色細粒の輝石安山岩で、小～大角礫がまばらに含まれる。一部に径0.5～１ｍの岩塊がみられる。岩塊中にジグソークラックの入るものがある。上位２層では角礫がやや多く、部分的に火山角礫岩的である。

凝灰角礫岩層内部は塊状不均質で、節理に乏しい。

（２）　火山礫凝灰岩

火山礫凝灰岩層は２層あり、凝灰角礫岩の下部３層の間に１枚ずつはさまれる。下部層は層厚１ｍで、0.1～0.2m厚さの平行ラミナ状の層理が発達する。上部層は層厚１～1.5mで、同様の平行層理がみられるが、上部は空隙に富む。上・下部とも淘汰良好で、径２～３㎝の多孔質安山岩礫からなり、黄褐色～淡黄色の軽石を伴なう。軽石は斜長石斑晶に富み、輝石を含む。

（３）　構造等

火山礫凝灰岩層の層理は緩い北傾斜、N80～90Eの走向、10Nの傾斜を示す。

緑色化、珪化等の変質作用は認められない。よく固結しており、新第三紀末ないし第四紀初期の地層と思われるが、詳細については検討を要する。

西宮岩陰全景（発掘終了後　平成29年８月３日撮影 南から）

第６章　調査成果のまとめ

第１節　上野国における馬の牡牝について

（１）江戸時代における西宮遺跡周辺の馬

八ッ場ダム建設に伴う発掘により、東宮遺跡・西宮遺跡・尾坂遺跡・上郷岡原遺跡等において付属建物を持つ屋敷が多く発掘調査されている。それらの屋敷の中で最も大きな建物である母屋の土間部分には、馬屋が作られていることが多い。馬屋は、広さは４畳半が多い。馬屋の中には馬糞が残っている例が多くある。馬屋の土間は、屋敷土間部分より10cm以上低くなっており、そこに馬小屋があったことが容易に推定できる。飼われている馬数は大部分が１頭であるが、東宮遺跡１・９号建物では複数飼われていたようである。当時馬は非常に大切にされ、家族とともに同じ屋根の下で、寝泊まりしており、馬は運搬・耕作・堆肥造り等重要な役割を果たしていた。

記録に残された村で飼われている馬数については、東宮遺跡の存在する川原畑村の様子を記した天保八年に作成された古文書に、馬弐拾疋との記載がある(註)。長野原町の資料として長野原町誌の中で「天保九年宗門人別書上張の実態（長野原町）」として天保九年の段階での百姓名・所持石高・馬数・労働人口・宗門等を表にして紹介している。天保九年の長野原町では、家数が72軒で50頭飼われている。この中で土地は持っていない２軒で馬が各１疋飼われおり、家族数も４人と５人いる。この２軒は田畑からの収入でなく、馬を用いた駄賃稼ぎ等の仕事から収入を得ていたことが考えられる。

元禄二年「吾妻郡長野原町と川原湯村荷物馬継ぎ連判証文」によると、信州から酒荷物は川原畑でおろし、原町まで搬送することが取り決められている。そのほかの荷物についても馬で荷物を搬送していることがわかる(註)。

元禄十五年に作成された上野国絵図の中に、川原畑村が小判型楕円形の中に川原畑村の村名と石高が書かれ、小判型楕円形の隣に馬次と書かれている(註)。このように馬は農耕の他に荷物を搬送するために飼われていたことがわかる。しかしそれらの馬が牡馬か牝馬なのかについてはこれまで明らかにされてこなかった。

(註)群馬県立文書館資料　資料は「東宮遺跡（３）」に掲載

（２）発掘成果から見る牡馬と雌馬

牡馬と雌馬の頭数について、最も明確に分析報告した遺跡として藤岡市上栗須遺跡がある。分析の結果20頭の馬の中で牡が18頭、牝が２頭であった。報告している宮崎重雄氏は「江戸時代の中期にこのあたりに飼育されていた馬になぜ雄が多いのかは一考を要する」と記述されており、牡牝馬数の偏について疑問を呈している。県内で発掘調査され報告されている遺跡を、事業団の報告書の中から調べてみると藤岡市上栗須遺跡を含めて39遺跡で確認された。時代が明らかな馬は古墳時代22匹・奈良・平安時代145匹・中世171匹・近世53匹合計391匹であった。（中近世や古墳～奈良等表記の頭数は省く）藤岡市上栗須遺跡以外で牡牝が確認されたのは、６遺跡だけで牡が２匹、牝が４匹であった。ほかの遺跡では牡牝馬の区別はほとんど明らかでない。（第18表参照）

（３）明治時代の上野国における牡馬と牝馬

昭和60年に刊行された「上野国郡村誌」の中に記録されている資料から牡牝馬について調べた。本の凡例には次のように記載されている。『太政官の「皇国地誌編纂例則」（明治八年六月五日達）により編集された内務省地理局へ提出されたものの稿本又は写しである。原本には「勢多郡村誌」等郡名をとった表題がある。』明治以降の資料であり、作成の内容も同一ではないが、明治の初めのころの村の様子を知るには良好な資料である。江戸時代の様子と共通することが多いとの前提でこの資料から県内の牡牝馬の様子について調べた。その結果を16～19表・グラフ等で提示し、付図を作成した。付図・表・グラフ等でみると明らかなように、県内において牡馬と牝馬は、北と南で住分けされていることがわかる。

①牡馬牝馬の数

上野国郡村誌の資料から見る数字では、群馬県内合計で37,347頭飼われている。その中で牡馬が24,858頭、牝馬が12,489頭で、牡馬が全体の約67％、牝馬が約33％となっている。極端に牡馬が多くなっている。自然界の中でこのように差があるのはなぜであろうか。

②県内における牡馬と牝馬の住み分け

県内の馬の牡牝の分布を調べると、県北と県南の２つの地域に分かれる。

県北地域　大部分が牝馬で、郡中心部以外の地域では、牡馬が全くいない村が多い。

県南地域　大部分が牡馬で、牝馬の多い県北に近い村以外では、全く牝馬がいない村が多い。

③馬の繁殖地

このように牡馬と牝馬が南北に住み分かれた場合、馬の繁殖がどのように行われたのか。その繁殖が考えられる場所は、種馬となるであろう牡馬が一定数飼われ、過半数以上牝馬が飼われている地域と思われる。そのような地域が、県内に３郡４地域ある。

１．吾妻郡中之条町・東吾妻町周辺(榛名山北、吾妻川両岸)
２．利根郡沼田市・月夜野町周辺（赤城山北、利根川左岸）
３．勢多郡赤城村・北橘村周辺（赤城山西、利根川左岸）
４．勢多郡宮城村・粕川村周辺（赤城山南、荒砥川・粕川周辺）

この４地域が繁殖等を行っていたのではないだろうか。牡馬が圧倒的に多い県南地域では、他に牝馬が一定数飼われていた地域に、甘楽郡上野村と中里村がある。両村で牝馬が17％飼われている。

これら利根郡・吾妻郡・勢多郡・甘楽郡の４郡は、古代上野国牧が推定されている郡とほぼ一致しているようである。(高島英之「上野国の牧」『牧の考古学』2008)

このように江戸時代末期から明治初めのころ、上野国においては、牡馬と牝馬が切り離されて、飼われていたようである。なぜこのような飼われ方をしていたのであろうか。

④去勢の実施

日本における馬は、明治34年(1901)の「馬匹去勢法」が実施されるまで、ほとんど去勢されることなく飼育されてきた。そこで牡牝馬を別の地域で飼うことにより、去勢されていない牡馬を使いこなしていたものと思わる。

⑤西宮・東宮遺跡周辺の馬について

西宮・東宮遺跡(川原畑村)周辺５町村における牡牝馬頭数は以下の第16表のとおりである。馬数は235頭、大部分の牝馬が233頭、牡馬は川原畑村と林村で各１匹計２匹が記録されているだけである。

馬は耕作の他に荷物の運搬を重要な仕事としていた。それらの馬の大部分が牝馬の可能性が高くなってきた。この地域は長野県から大笹街道を通り、江戸に荷物を運ぶ重要な街道筋に面してる。そこで使われていた馬継等の馬はほとんどが牝馬なのだろうか。また同じ吾妻郡永井村では、三国峠を越えて荷物の運搬が村の大切な仕事であった。永井村で飼われていた馬は同じ記録によると42匹ですべて牝馬である。山や谷を越えて重い荷物を運ぶ馬が、なぜ牡馬でなく牝馬であったのであろうか。

第16表　西宮・東宮遺跡(川原畑村)周辺町村牡牝馬頭数

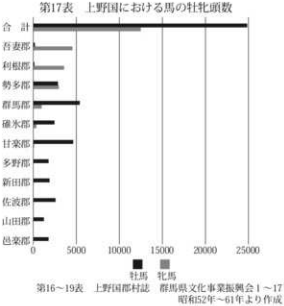
村　名	牡　馬	牝　馬	合　計
川原畑村	1	30	31
川原湯村	0	13	13
横壁村	0	27	27
林村	1	99	100
長野原町	0	64	64
合計	2	233	235

牡馬は全体の１％以下である。

（４）付図２明治８年頃　上野国における馬の牡牝住み分け図について

「上野国郡村誌」に記載されている記録から、県内において、牡牝馬は、住み分けて飼われていたであろう様子が明らかになってきた。上野国郡村誌に記載されている地図に牡牝馬が飼われている町村ごとに色別して作成した地図を付図として作成した。一目で極端に牡馬と牝馬が住み分けられていることがわかる。これほど明確に住み分けて飼われていた実態については、当然詳しい研究がなされているものと思われる。筆者は専門外でそのことについての知識がないので、これ以上のことはわからない。今後発掘調査を進める中で、この問題について取り組んでいきたい。

第17表　上野国における馬の牡牝頭数

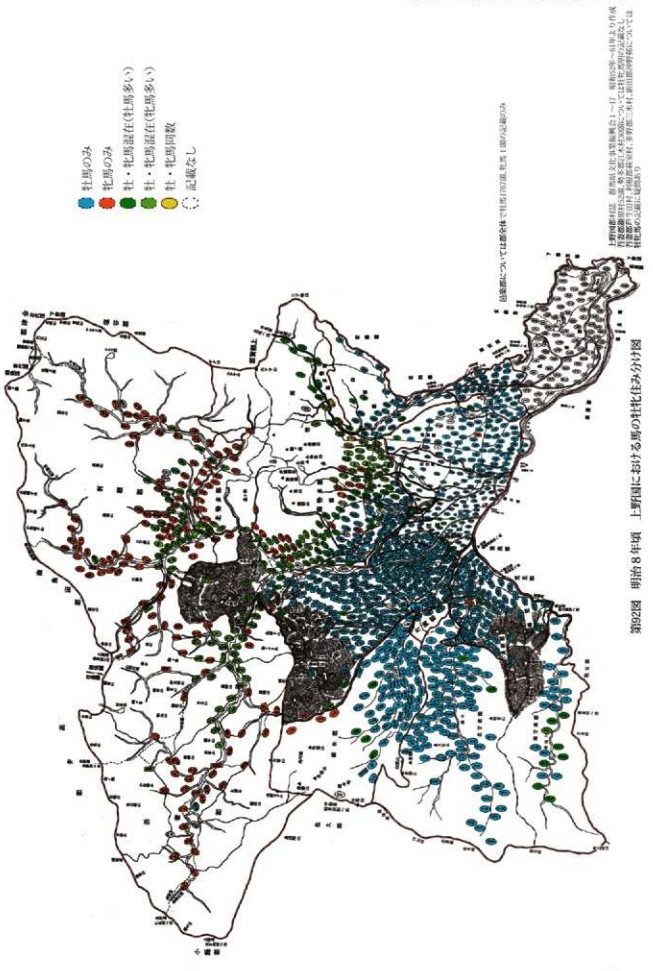


第16～19表　上野国郡村誌　群馬県文化事業振興会１～17
昭和52年～61年より作成

第18表　群馬県内で発掘報告されている馬出土遺跡一覧表(当事業団の報告例から作成)　　通番：当事業団報告書番号

通番	報告書名	馬	備考	鑑定
10	日高遺跡	馬骨	平安:12・中世１遺、老合馬３・社合馬７・幼合馬１、中世幼合馬１。中型馬以上81.9%（内55.5%大型馬）、社合馬72.7%。	大江正道
43	三ツ寺Ⅲ・保渡田遺跡・中里天神塚古墳	馬骨	中世以降(1108～1763)：**老合馬１(17.5歳)離**、小型馬中で中程度。	大江正道
58	下東西遺跡	馬歯	奈良～平安:老合馬１、平安:老合馬１・社合馬１、(中型馬66.4%・小型馬33.3%・老合馬66.4%)、室町:社合馬６・幼合馬１、(小型馬14.3%・中型馬以上85.7%)、性別不明。	大江正道
67	三ツ寺Ⅰ遺跡	馬歯・馬骨	６世紀初頭:　２～４頭　７歳前後、中型馬・小型馬。	宮崎重雄
72	田端遺跡	馬	奈良～平安時代前期:社合馬１・幼合馬１・不明６、平安前期～中期:幼合馬１・不明１、平安中期～後期:老合馬１・社合馬２・不明３、中世:老合馬１、社合馬１、不明３、時代不明４、性別不明。馬90%小型馬。	大江正道
84	田篠上平遺跡	馬	近世以降：歯・骨(馬の墓)：性別不明。	－
88	上栗須・下大塚・中大塚遺跡	馬骨	江戸中期：27個体出土、**性別数20個体18頭、離２頭**、20歳を越える老合馬９、16～20歳老合馬９、10～15歳社合馬７、幼馬馬１、70%老合馬。体高116.1cm・最大135.1cm・平均126.4cm。	宮崎重雄
93	三ツ寺Ⅱ遺跡	馬歯・馬骨	古墳時代：社合３・幼合１・不明１、平安時代：老合１・幼合１、平安～中世：社合馬１・幼合１・不明３、時代不明５。体高132.6cm・最大135.1cm・平均133.5cm。性別不明。	大江正道
100	熊野堂遺跡（２）	馬歯・馬骨	弥生時代～平安時代：社合馬８(中型)・幼合馬３・不明１、**(内１頭離馬１)**、その他不明。頭部のみ、当時の動物祭祀遺跡。	宮崎重雄
103	上野国分僧寺・尼寺中間地域（４）	馬歯・馬骨	古墳時代：社合１・不明３(中型小)、古墳～平安：社合１・不明２(中型小)、奈良時代:幼合１(小型)、平安時代:幼合34・社合20・老合４・不明15（大型小・中型・小型）、中世：幼合８・幼合14・老合15・不明82（大型小・中型・小型）、中世～近世:社合１(小型)、中世～近代：幼合２・社合１・老合３(中型・小型)、近世：幼合１・社合１(中型・小型)、近代：社合１、不明：幼合４・社合29・老合２(大型小・中型・小型)。	大江正道
104	国分境遺跡	馬歯	古墳～平安時代：幼合馬１、体高140cm、大型馬の小。	大江正道
116	有馬条里遺跡Ⅱ	馬歯	古代～近世：**社合馬１(７歳前後)離**、小型在来馬に近い体高。	宮崎重雄
147	下川田下原・下川田平井遺跡	馬骨	近世：幼合馬２(性別不明)・**社合馬１(９歳)離**、体高不明。	宮崎重雄
154	神保富土塚遺跡	馬歯	古墳～平安時代：幼合馬３・老合馬１、性別不明、体高100～120cm。	宮崎重雄
160	白井遺跡群(集落編Ⅰ)、二位屋遺跡	馬骨	９世紀後半：幼合馬～社合馬１、７世紀末～８世紀初頭：社合馬１、不明：２	宮崎重雄
164	二之宮宮東遺跡	馬歯	19世紀後半、人為的に切断した馬歯。	－
183	行方春名社遺跡	馬骨	14世紀後半～16世紀中頃：社合馬４、性別不明、現在の中型在来馬。	宮崎重雄
186	下田中中道遺跡・下田中田久保遺跡	馬歯・馬骨	平安(９世紀)：社合馬４(中型馬)・老合馬２、性別不明。祭祀行為の供献。	大江正道
192	小角田前Ⅰ・Ⅱ遺跡	馬歯	平安(９世紀)：社合馬４(内小型馬１・中型馬１)・不明２、性別不明。祭祀行為の供献。	大江正道
216	矢田遺跡Ⅶ	馬歯	近世か：社合馬１(中型在来馬相当)・老合馬１(小型在来馬相当)・不明１、性別不明。	宮崎重雄
222	白倉下原天引向原遺跡Ⅴ	馬骨	中・近世：馬２　年齢・性別不明。	－
271	中里見遺跡群	確認	奈良～平安時代：**幼合馬１(雄)**、体高126.5cm、墓地に隣接した場所に埋葬できたこの馬の所有者は権力者であろう。	大江正道
320	稲荷塚道東遺跡	馬骨	古墳～平安時代：社合馬１、年齢不明、中世～近世：１(年齢不明・性別不明)、９世紀~10世紀：社合馬１(性別不明)・不明３(年齢・性別不明)。	植崎修一郎
358	沼町遺跡	馬骨	江戸時代の近世～近代：１(年齢・性別不明)。	植崎修一郎
369	高崎城Ⅳ遺跡	馬骨	16世紀：幼合馬１、性別不明。	植崎修一郎
407	総社関泉明神北Ⅳ・元総社牛池川・元総社北川・元総社小見内Ⅴ遺跡	馬歯	古墳時代中期：馬歯(詳細なし)。	－
436	横壁中村遺跡(６)土坑編	馬歯	中世：幼合馬１、性別不明。	植崎修一郎
442	西川原古墳群	馬歯・馬骨	７世紀後半：社合馬１(性別不明)葬送儀礼用。	植崎修一郎
459	古氷条里制水田跡・二の宮遺跡	馬歯	古代～中近世：社合馬１(性別不明)・不明１	植崎修一郎
484	斉田中耕地遺跡	馬歯・馬骨	中世～近世：遺跡のⅠ区～Ⅳ区から馬歯・馬骨出土(内２頭幼合馬)。	植崎修一郎
489	西野原遺跡(５)（７）	馬歯・馬骨	近世：幼合馬１・社合馬５(性別・年齢不明)。	植崎修一郎
516	斉田竹之内遺跡	馬骨	中世：幼合馬１・社合馬２、その他３、性別不明。	植崎修一郎
537	浜町遺跡・浜町古墳群・宮内遺跡	馬歯・馬骨	古墳時代：社合馬１、性別不明、中型在来馬相当。	宮崎重雄
586	長野原城跡・林中原Ⅰ遺跡	馬歯・馬骨	中近世:幼合馬１(中型在来馬相当)、中世:幼合馬１(中型在来馬相当)近世：老合馬５(小型～中型在来馬相当)、性別不明。	宮崎重雄
601	関根細ケ沢遺跡	馬歯	奈良～平安：幼合馬１(中型在来馬相当)、社合馬３、性別不明。	宮崎重雄
613	宮久保遺跡	馬歯	近世：社合馬１(小型在来馬)、老合馬１、性別不明。	宮崎重雄
616	南玉二丁町遺跡	馬歯・馬骨	中世～近世：幼合馬１・社合馬２・老合馬１・その他１、性別不明。	宮崎重雄
624	川端根岸遺跡	馬歯・馬骨	中世：社合馬１(小型在来馬)、中近世：幼合馬６(型不明)・社合馬５(小型在来馬・中型)・老合馬２(小型在来馬)性別不明。	宮崎重雄
625	田口下田尻遺跡	馬歯・馬骨	中世～近世初頭：**老合馬１、離馬**(小型在来馬相当)、社合馬３・幼合馬２(年齢・性別不明)、不明２。	宮崎重雄

馬の年齢は５歳で人間の20歳相当、10歳で40歳、12歳で50歳、30歳で80歳にそれぞれ相当する。(宮崎重雄氏　88集上栗須・下大塚・中大塚遺跡より)
馬の年齢区分　５歳以下～幼合馬・６～15・16～壮合馬・16・17歳以上～老合馬(大江正道氏、宮崎重雄氏、植崎修一郎氏)



第92図　明治8年頃　上野国における馬の牡牝比率分布図

第19表　明治８年頃上野国における郡別馬の牡牝頭数一覧表

郡　名	牡馬	牝馬	合　計	牡牛	牝牛	合　計
吾妻郡	185	4466	4651	17	6	23
利根郡	123	3539	3662	0	0	0
勢多郡	2841	2949	5790	16	0	16
群馬郡	5386	950	6336	25	35	60
碓氷郡	2461	351	2812	0	0	0
甘楽郡	4628	72	4700	13	0	13
多野郡	1770	12	1782	11	0	11
新田郡	1886	30	1916	4	0	4
佐波郡	2564	26	2590	0	0	0
山田郡	1217	21	1238	0	0	0
邑楽郡	1767	1	1768	0	0	0
合　計	24828	12417	37245	86	41	127

吾妻郡鎌原村52頭、勢多郡江木村30頭については牡牝馬別の記載なし頭数に含めず

利根郡下平郷については牝馬廿口と記載あり頭数に含めず

吾妻郡芦生田村、利根郡萩室村、多野郡三木村、新田郡沖野郷については牡牝馬の記載に疑問あり

第20表　郡町村別牡牝頭数一覧表

吾　妻　郡

№　村　名	牡馬	牝馬	総計
1　須川村	2	83	85
2　東家須川村	0	50	50
3　西家須川村	0	36	36
4　入須川村	0	81	81
5　袋ヶ京村	0	60	60
6　吹路村	0	23	23
7　矢倉村	0	128	128
8　御川村	0	14	14
9　永井村	0	42	42
10　石町山郷	10	60	70
11　大戸村	0	132	132
12　本宿村	0	127	127
13　萩生村	0	95	95
14　須賀尾村	0	104	104
15　大柏木村	0	135	135
16　郷町	10	109	119
17　山田村	8	103	111
18　二島村	10	235	245
19　熊川村	0	30	30
20　小泉村	3	42	45
21　袋沢村	0	40	40
22　新巻村	7	40	47
23　原山村	0	46	46
24　箱橋村	17	23	40
25　岡崎新田	4	35	39
26　赤坂村	0	50	50
27　平村	8	47	55
28　大堀村	0	25	25
29　柳原村	0	22	22
30　中棚村	17	42	59
31　伊勢町	5	56	61
32　西中棚村	0	33	33
33　作山村	5	16	21
34　市城郷	5	16	21
35　横尾郷	5	67	72
36　幡川郷	3	67	70
37　原沢本郷	0	90	90
38　五反田村	3	57	60
39　大蔵新田	0	30	30
40　川戸村	9	73	82
41　金井村	1	20	21
42　宮井村	6	54	60
43　植栗村	9	70	79
44　新田村	0	52	52
45　下沢渡村	2	43	45
46　上沢渡村	0	103	103
47　四萬村	0	93	93
48　川原湯村	1	30	31
49　川原湯村	0	13	13
50　横壁村	0	27	27
51　長野原町	0	64	64
52　入山村	0	66	66
53　西窪村	0	29	29
54　門口村	0	0	0
55　干俣村	0	150	150
56　日影村	0	53	53
57　赤谷村	0	40	40
58　吾妻村	0	11	11
59　生須村	0	15	15
60　小雨村	0	28	28
61　太子村	0	18	18
62　入山村	0	85	85
63　羽根尾村	0	37	37
64　萩倉村	0	24	24
65　袋倉村	0	43	43
66　鎌原村	0	0	0
67　仙蔵尾村	0	50	50
68　三原郷	0	48	48
69　林村	1	99	100
70　芦生田村	24	0	24
71　大津村	0	80	80
72　郷原村	5	39	44
73　鹿下村	2	47	49
74　松谷村	5	80	85
75　矢倉村	1	30	31
76　今井村	0	42	42
77　足倉村	0	90	90
78　大柳村	0	20	20
79　田代村	0	93	93
80　草津村	1	16	17
	185	4466	4651

利　根　郡

№　村　名	牡馬	牝馬	総計
1　沼田町	23	116	139
2　戸鹿野村	7	33	40
3　戸鹿野新村	1	21	22
4　上久屋村	5	45	50
5　下久屋村	0	25	25
6　沼須村	1	39	40
7　岡谷村	5	49	54
8　町田村	2	18	20
9　戸神村	0	17	17
10　下須川村	8	20	28
11　白沢村	0	4	4
12　善桂寺村	0	9	9
13　横田村	7	21	28
14　恩田村	5	11	16
15　井土上村	4	26	30
16　原村	0	16	16
17　宇野村	0	21	21
18　大原村	1	16	17
19　篠塚村	0	22	22
20　石墨村	1	23	24
21　上佐山村	0	20	20
22　下佐山村	1	40	41
23　上発知村	0	58	58
24　中発知村	0	38	38
25　下発知村	0	23	23
26　発知新田	0	26	26
27　秋塚村	0	12	12
28　倉品村	2	40	42
29　川場湯原村	1	48	49
30　谷地頭	0	50	50
31　萩室村	25	0	25
32　門前郷	1	59	60
33　大神郷	1	20	21
34　中野村	0	10	10
35　太田川村	0	0	0
36　小田川村	0	0	0
37　生品村	0	40	40
38　宮内村	1	22	23
39　上古語父村	0	44	44
40　下古語父村	0	42	42
41　横塚村	1	27	28
42　尾台村	0	19	19
43　高平村	2	52	54
44　生越村	0	29	29
45　平出村	0	15	15
46　岩室村	0	14	14
47　藤原村	2	48	50
48　日向南郷村	0	7	7
49　柿平村	0	5	5
50　小松村	0	5	5
51　穴原村	0	10	10
52　入原新町	1	33	34
53　入幅村	0	21	21
54　老神村	0	11	11
55　高戸谷村	0	25	25
56　追貝村	2	85	87
57　千鳥新田	0	13	13
58　平川村	0	76	76
59　楢谷村	0	31	31
60　下平村	0	0	0
61　船郷村	0	16	16
62　花咲村	0	50	50
63　針山新田	0	8	8
64　鍋鶴入村	0	25	25
65　須賀川村	0	11	11
66　塩地村	0	5	5
67　東川代村	0	0	0
68　前田村	0	12	12
69　東小川村	0	80	80
70　越本村	0	75	75
71　土出村	0	40	40
72　戸倉村	0	12	12
73　政所村	1	34	35
74　真庭村	2	34	36
75　師村	3	50	53
76　後閑郷	2	81	83
77　上牧村	0	80	80
78　下牧郷	0	64	64
79　大沼村	0	3	3
80　上津村	1	83	84
81　下津村	1	160	161
82　上川辺村	0	60	60
83　下川辺村	0	103	103
84　今井村	0	6	6
85　尾形郷村	0	40	40
86　岩本村	0	18	18
87　小川村	0	103	103
88　月夜野町	2	81	83
89　石倉村	0	26	26
90　新巻村	0	80	80
91　羽場村	0	75	75
92　相俣村	0	76	76
93　川上村	0	18	18
94　小仁田村	0	15	15
95　寺間村	0	10	10
96　湯原村	0	41	41
97　阿能川村	0	19	19
98　大穴村	0	14	14
99　谷川村	0	4	4
100　温糠窪村	0	9	9
101　奈良沢村	0	12	12
102　高日向村	0	13	13
103　小日向村	0	20	20
104　鍋野沢村	1	15	16
105　吉本村	0	2	2
106　幸知村	0	1	1
107　向山村	0	1	1
108　獅子村	0	5	5
109　栗沢村	0	8	8
110　夜後村	0	1	1
111　藤原村	0	70	70
	123	3539	3662

勢多郡

No.	村名	牡馬	牝馬	総計
1	大胡町	0	0	0
2	一毛村	7	0	7
3	清王寺村	6	0	6
4	荻村	2	0	2
5	才田村	5	0	5
6	西片貝村	45	0	45
7	東片貝村	41	0	41
8	幸塚村	18	0	18
9	三夜村	23	0	23
10	下神戸郷	21	0	21
11	上神戸郷	15	0	15
12	荒牧村	25	0	25
13	関根村	28	6	34
14	川端村	4	2	6
15	江幡郷村	11	0	11
16	上小河内村	23	1	24
17	上小出村	40	0	40
18	北代田村	50	0	50
19	上細井村	72	0	72
20	下細井村	28	0	28
21	芳賀村	25	0	25
22	竜蔵寺村	15	0	15
23	端気村	0	36	36
24	五代村	27	0	27
25	鳥取村	14	0	14
26	小板子村	38	27	65
27	猪村	47	33	80
28	勝沢村	0	0	0
29	小神明村	25	0	25
30	時沢村	59	18	77
31	小沢新田	10	5	15
32	小鷹村	0	5	5
33	保沢新田	11	2	13
34	横室	31	27	58
35	原之郷村	83	19	102
36	引田村	10	12	22
37	末野村	3	67	70
38	漆窪村	10	7	17
39	一之木場村	4	9	13
40	山口村	1	11	12
41	石井村	80	30	110
42	田島村	7	32	39
43	真壁村	21	35	56
44	上箱田村	28	2	30
45	箱田村	9	42	51
46	下箱田村	5	23	28
47	田口村	38	4	42
48	持船木村	0	26	26
49	濃沢木村	0	44	44
50	北上野村	0	14	14
51	勝保沢村	1	18	19
52	海沢村	0	12	12
53	見立村	8	18	26
54	二原田村	0	16	16
55	上三原田村	3	15	18
56	下南室村	2	15	17
57	上南室村	0	11	11
58	八崎村	15	54	69
59	小室村	7	24	31
60	樽村	4	20	24
61	宮田村	0	42	42
62	鎧村	5	25	30
63	津久田村	15	112	127
64	長井小川田村	0	68	68
65	深山村	0	39	39
66	棚下村	3	28	31
67	駒形堀	0	0	0
68	小塚原村	68	0	68
69	天川大島村	17	0	17
70	上大島村	30	0	30
71	下大島村	24	0	24
72	野中村	27	0	27
73	安原村	20	0	20
74	上長瀞村	33	0	33
75	下長瀞村	32	0	32
76	荒井村	0	0	0
77	小淵山村	25	0	25
78	上熊谷村	40	0	40
79	下熊谷村	61	0	61
80	市之関村	0	40	40
81	相俣村	0	75	75
82	桑原石村	0	51	51
83	沼ケ窪村	2	60	62
84	二渡沢村	3	5	8
85	大前田村	0	48	48
86	黒崎村	2	18	20
87	宮沢村	0	25	25
88	安間村	4	48	52
89	湯桧村	22	60	82
90	新屋村	2	26	28
91	山崎戸村	10	20	30
92	月田村	5	60	65
93	河原沢村	18	11	29
94	樋越村	6	3	9
95	上大屋村	9	5	14
96	茂木村	32	0	32
97	菊間村	67	13	80
98	横沢村	20	0	20
99	湯窪村	0	0	0
100	院口村	35	0	35
101	袋沢村	41	0	41
102	荒子村	43	3	46
103	下大屋村	23	1	24
104	西大室村	68	4	72
105	東大室村	61	0	61
106	新井村	9	0	9
107	飯土井村	31	0	31
108	江木村	30	0	30
109	東上野村	13	0	13
110	堀村	19	0	19
111	富田村	58	3	61
112	今井村	34	0	34
113	二之沢村	83	0	83
114	上泉村	95	1	96
115	福之下村	10	1	11
116	亀泉村	20	0	20
117	萩窪村	36	0	36
118	磯村	5	1	6
119	一日市村	11	1	12
120	前橋石村	0	6	6
121	東山面村	2	5	7
122	下東山面村	1	13	14
123	西山面村	1	4	5
124	駒寺	4	23	27
125	中村	2	22	24
126	山上村	13	82	95
127	関村	2	15	17
128	板橋村	2	34	36
129	新田村	39	33	72
130	野村	18	2	20
131	小林村	10	24	34
132	武井村	7	38	45
133	鎧ヶ谷村	2	12	14
134	大久保村	6	22	28
135	高安村	6	6	12
136	奥沢村	8	11	19
137	下神梅村	8	8	16
138	上神梅村	10	16	26
139	宿堀村	100	40	140
140	金沢村	7	20	27
141	下田沢村	10	89	99
142	上田沢村	0	0	0
143	塩沢村	5	8	13
144	萩原村	9	1	10
145	田間村	2	23	25
146	草木村	45	10	55
147	花輪村	39	16	55
148	八木原村	6	6	12
149	小梅沢村	25	10	35
150	小中村	40	10	50
151	柳平村	12	29	41
152	沢入村	21	6	27
153	樽久保村	0	54	54
154	森下村	1	121	122
155	川額村	1	136	137
156	赤城村前橋氏塩谷郡	0	140	140
157	江野瀬村	0	58	58
158	生越村	0	40	40
159	多都村群馬郡	0	31	31
160	幅田村	0	18	18
161	青木村	1	13	14
162	砂川村	0	28	28
163	江原南郷村	0	15	15
164	樋利村	5	23	26
		2871	2949	5820

群馬郡

No.	村名	牡馬	牝馬	総計
1	南橋町	35	0	35
2	虫窪村	5	0	5
3	宗永分村	26	0	26
4	南代田村	17	0	17
5	中之坪村	7	0	7
6	八幡村	45	0	45
7	天川原村	12	0	12
8	天川村	25	0	25
9	朝倉村	45	0	45
10	後閑村	52	0	52
11	上佐鳥村	22	0	22
12	下佐鳥村	21	0	21
13	櫛島村	13	0	13
14	二宮田村	35	0	35
15	横手村	20	0	20
16	亀里村	65	0	65
17	宮崎村	10	0	10
18	房丸村	11	0	11
19	鮫丸村	14	0	14
20	万丸村	52	0	52
21	下阿内村	16	0	16
22	鶴光路村	16	0	16
23	新堀村	30	0	30
24	大友村	7	0	7
25	大櫛村	4	0	4
26	内藤分村	28	0	28
27	小相木村	11	0	11
28	吉市村	15	0	15
29	江田村	28	0	28
30	鳥羽村	13	0	13
31	福島分村	4	0	4
32	中尾村	36	0	36
33	北觀寺村	13	0	13
34	小八木村	36	0	36
35	日高村	41	0	41
36	井野村	20	0	20
37	浜尻村	20	0	20
38	江尻村	45	0	45
39	原大類村	33	0	33
40	南大類村	37	0	37
41	上大類村	40	0	40
42	矢島村	20	0	20
43	西島村	8	0	8
44	福田村	30	0	30
45	南福田村	9	0	9
46	新保田中村	20	0	20
47	新保村	40	0	40
48	島野村	30	0	30
49	元島名村	40	0	40
50	萩原村	24	0	24
51	大沢村	6	0	6
52	京目村	31	0	31
53	川島村	10	0	10
54	上新田村	24	0	24
55	下新田村	26	0	26
56	福島新田村	11	0	11
57	後家村	3	0	3
58	上芝村	18	0	18
59	保渡田村	40	0	40
60	下芝村	38	0	38
61	行力村	9	0	9
62	菊間村	18	0	18
63	西新波村	15	0	15
64	民事村	20	0	20
65	柴池村	13	0	13
66	北新波村	17	0	17
67	南新波村	27	0	27
68	下小鳥村	40	0	40
69	上小鳥村	22	0	22
70	浜川村	57	0	57
71	井出村	36	0	36
72	西明屋村	30	0	30
73	東明屋村	21	0	21
74	生原村	40	1	41
75	久留村	22	0	22
76	金蔵寺村	12	0	12
77	白川村	40	0	40
78	和田山村	11	0	11
79	浜田村	50	0	50
80	松之沢村	15	0	15
81	本郷村	70	0	70
82	白岩村	12	0	12
83	高浜村	25	0	25
84	三ツ子沢村	13	0	13
85	神谷村	15	0	15
86	宮沢村	31	0	31
87	上文字村	20	0	20
88	善地村	45	0	45
89	下室田村	86	0	86
90	中室田村	97	0	97
91	上室田村	103	1	104
92	三之宮村	18	121	139
93	樋口村	0	246	246
94	榛名山村	1	0	1
95	高崎町	69	0	69
96	赤坂村	0	0	0
97	下豊田村	35	0	35
98	上豊田村	35	0	35
99	飯塚村	55	0	55
100	江木村	25	0	25
101	高間村	14	0	14
102	岩神村	4	0	4
103	新後閑村	3	0	3
104	下和田村	6	0	6
105	和田多中村	13	0	13
106	上中居村	51	0	51
107	下中居村	27	0	27
108	下之城村	45	0	45
109	上佐野村	35	0	35
110	佐野浮村	7	0	7
111	下佐野村	38	0	38
112	倉賀野村	50	0	50
113	板井村	38	0	38
114	西横手村	15	0	15
115	原横手村	9	0	9
116	中島村	9	0	9
117	上滝村	20	0	20
118	下滝村	40	0	40
119	滝村	0	0	0
120	綿貫村	42	0	42
121	下倉田村	12	0	12
122	中大類村	23	0	23
123	下大類村	32	0	32
124	柴崎村	35	0	35
125	矢中村	31	0	31
126	東中里村	19	0	19
127	柴崎村	23	0	23
128	岩鼻村	15	0	15
129	台新田村	14	0	14
130	宇留村	11	0	11
131	上新田村	28	0	28
132	ヶ八分村	2	0	2
133	八幡原村	50	0	50
134	藤田村	13	0	13
135	元総社村	79	0	79
136	総社村	41	0	41
137	植野村	15	0	15
138	東国分村	10	0	10
139	西国分村	8	0	8
140	厚切村	7	0	7
141	引間村	17	0	17
142	後引間村	2	0	2
143	冷水村	7	0	7
144	金古町	60	0	60
145	高井村	8	0	8
146	北原村	8	0	8
147	上青梨子村	8	0	8
148	青梨子村	35	0	35
149	入矢原村	41	0	41
150	広馬場村	75	0	75
151	柏木沢村	67	0	67
152	足門村	20	0	20
153	箕郷村	18	0	18
154	笛木村	14	0	14
155	中里村	24	0	24

136	中泉村	19	0	19
137	三ツ谷村	9	0	9
138	梶高村	23	0	23
139	上小島村	10	0	10
160	下小島村	0	0	0
161	染郷村	15	0	15
162	大八木村	31	0	31
163	伊香保村	3	2	5
164	渋川村	82	0	82
165	石原村	66	0	66
166	中村	0	0	0
167	川端村	39	0	39
168	箱島村	15	20	35
169	水沢村	2	0	2
170	高中子村	0	12	12
171	高神村	66	0	66
172	有馬村	50	0	50
173	八木原村	26	0	26
174	長岡村	30	0	30
175	山子田村	75	0	75
176	小倉村	14	0	14
177	南下村	30	0	30
178	北下村	27	0	27
179	新井村	50	0	50
180	池端村	9	0	9
181	上野沢村	44	0	44
182	下野沢村	25	0	25
183	清原村	62	0	62
184	川原崎新田	0	0	0
185	野良犬村	10	0	10
186	平山村	69	0	69
187	金井村	56	5	61
188	阿久津村	10	1	11
189	南牧村	9	0	9
190	北牧村	0	0	0
191	白井村	20	3	23
192	上白井村	12	58	70
193	吹屋村	4	5	9
194	中郷村	22	65	87
195	小野子村	5	70	75
196	横堀村	10	48	58
197	村上村	7	83	90
198	尻高村	3	131	134
199	中山村	5	78	83
200	東谷村	92	0	92
201	石原村	98	0	98
202	寺尾村	71	0	71
		5386	950	6336

碓氷郡

No.	村名	牡馬	牝馬	総計
1	下豊田村	60	0	60
2	上豊田村	137	13	150
3	西上磯部村	25	0	25
4	安中郷	0	0	0
5	安中田城辺	0	0	0
6	上野沢村	19	0	19
7	下野沢村	9	0	9
8	谷津村	7	0	7
9	古屋村	15	0	15
10	小沢村	15	0	15
11	高宮沢村	11	0	11
12	金井湯村	12	0	12
13	町屋村	18	0	18
14	下大蔵村	20	0	20
15	上大蔵村	27	0	27
16	下里見村	65	0	65
17	中里見村	35	0	35
18	上里見村	105	0	105
19	中原村	29	0	29
20	板鼻村	21	0	21
21	藤塚村	19	0	19
22	若田村	4	0	4
23	八幡村	29	0	29
24	磯崎村	22	0	22
25	中秋間村	38	0	38
26	東秋間村	59	0	59
27	郷原村	39	0	39
28	岡田村	21	0	21
29	坂本郷	42	0	42
30	下秋間村	90	0	90
31	笛木村	3	0	3
32	岩井村	44	0	44
33	野殿村	68	0	68
34	大谷村	31	0	31
35	春高村	39	0	39
36	上豊岡村	26	0	26
37	中豊岡村	0	0	0
38	下豊岡村	28	0	28
39	八城村	28	0	28
40	峠町	0	0	0
41	岩水村	0	71	71
42	川浦村	0	198	198
43	水谷村	0	60	60
44	入山村	18	0	18
45	原村	8	0	8
46	横川村	20	1	21
47	五料村	112	0	112
48	新堀村	28	0	28
49	新井村	46	0	46
50	松井田驛	8	0	8
51	高梨子村	28	0	28
52	小日向郷	42	0	42
53	土塩村	96	6	96
54	上塩原村	64	0	64
55	中塩原村	72	0	72
56	下塩原村	60	0	60
57	西上秋間	52	0	52
58	原市村	30	0	30
59	柴郷村	11	0	11
60	福村	27	0	27
61	行田村	31	0	31
62	二軒在家村	47	0	47
63	入足郷	75	0	75
64	中野谷村	106	0	106
65	鷺宮村	75	0	75
66	入竹村	40	0	40
67	上間仁田村	17	0	17
68	下間仁田村	33	0	33
69	上磯部村	17	0	17
70	東上磯部村	23	0	23
71	下磯部村	23	0	23
		2461	351	2812

甘楽郡

No.	村名	牡馬	牝馬	総計
1	熊倉村	17	0	17
2	多胡村	19	0	19
3	福尾村	22	0	22
4	戸塚村	14	0	14
5	八塚村	51	0	51
6	大丁田村	23	0	23
7	大日向郷	15	0	15
8	檜沢村	31	0	31
9	野戸村	16	0	16
10	下郷村	11	0	11
11	大塩沢村	73	0	73
12	小沢村	32	0	32
13	宮原村	3	0	3
14	瓶子郷	8	0	8
15	大桑郷村	9	0	9
16	青倉村	65	0	65
17	川合村	8	0	8
18	下仁田町	15	0	15
19	白山郷	5	0	5
20	小桜村	20	0	20
21	東小沢村	32	0	32
22	西野牧村	341	0	341
23	上小流村	34	0	34
24	中小流村	74	0	74
25	下小流村	28	0	28
26	馬山村	130	0	130
27	南蛇井村	50	0	50
28	中沢村	34	0	34
29	牧沢村	21	0	21
30	神成村	51	0	51
31	上小林村	9	0	9
32	神農原村	6	0	6
33	宮崎村	13	0	13
34	山崎村	9	0	9
35	妙義町	14	0	14
36	大牛村	25	0	25
37	岳村	12	0	12
38	行沢村	18	0	18
39	諸戸村	35	0	35
40	宮原村	110	0	110
41	古立村	18	0	18
42	八木連村	50	0	50
43	中里村	18	0	18
44	上高田村	76	0	76
45	下高田村	190	0	190
46	原村	34	0	34
47	上丹生村	101	0	101
48	下丹生村	75	0	75
49	宇田村	20	0	20
50	一宮町	20	0	20
51	黒田村	28	0	28
52	別保村	6	0	6
53	七日市町	10	0	10
54	富岡町	32	0	32
55	曽木村	25	0	25
56	君川村	28	0	28
57	星山村	16	0	16
58	上黒沢村	48	0	48
59	下黒沢村	46	0	46
60	上高尾村	31	0	31
61	下高尾村	29	0	29
62	藤木村	19	0	19
63	桑原村	28	0	28
64	小桑原村	17	0	17
65	相野谷村	16	0	16
66	白石村	12	0	12
67	後賀村	14	0	14
68	磯村	17	0	17
69	坂口村	13	0	13
70	上奥平村	53	0	53
71	下奥平村	10	0	10
72	宮崎村	30	0	30
73	秋畑村	250	2	252
74	轟村	12	0	12
75	小幡村	41	0	41
76	下野村	55	0	55
77	白倉村	84	0	84
78	天引村	86	0	86
79	小川村	33	1	34
80	金井村	36	0	36
81	造石村	13	0	13
82	尾谷村	22	0	22
83	福島村	53	0	53
84	山篠村	22	0	22
85	野上村	120	0	120
86	宮染村	18	0	18
87	南蛇井村	53	0	53
88	大幡村	3	0	3
89	高瀬村	90	0	90
90	内匠村	15	0	15
91	岡本村	46	0	46
92	番場村	25	0	25
93	福塚村	67	0	67
94	横原村	39	1	40
95	乙父村	30	3	33
96	乙母村	12	0	12
97	川和村	12	0	12
98	勝山村	22	1	23
99	新羽村	40	2	42
100	野栗沢村	12	7	19
101	尻郷村	14	0	14
102	平原村	63	0	63
103	神原村	2	51	53
104	魚尾村	87	3	90
105	青梨村	32	1	33
106	相原村	17	0	17
107	船子村	70	0	70
108	小平村	47	0	47
109	森戸村	6	0	6
110	黒田村	20	0	20
111	塩原村	50	0	50
112	万場村	40	0	40
113	生利村	55	0	55
114	南生村	26	0	26
115	柏木村	44	0	44
116	保原村	76	0	76
117	保美濃山村	35	0	35
118	浦原村	1	0	1
		6628	72	6700

多野郡

No.	村名	牡馬	牝馬	総計
1	藤岡町	40	0	40
2	小林村	15	0	15
3	上戸塚村	25	0	25
4	下戸塚村	23	0	23
5	岡ノ郷村	47	0	47
6	新町駅	12	0	12
7	上柴浦村	9	0	9
8	中柴浦村	14	0	14
9	下柴浦村	14	0	14
10	根小屋村	30	0	30
11	山名村	31	0	31
12	上落合村	27	0	27
13	木部村	15	0	15
14	阿久津村	1	0	1
15	中村	16	0	16
16	森村	13	0	13
17	森新田村	15	0	15
18	中郷村	6	0	6
19	立石村	18	0	18
20	立石新田村	2	0	2
21	金井村	25	0	25
22	西平井村	48	0	48
23	東平井村	32	0	32
24	緑埜村	25	0	25
25	船川村	14	0	14
26	平石村	38	1	39
27	篠塚村	20	0	20
28	本動堂村	12	0	12
29	三本村	0	11	11
30	上大塚村	37	0	37
31	中大塚村	29	0	29
32	下大塚村	8	0	8
33	本郷村	68	0	68
34	相印村	13	0	13
35	川島村	11	0	11
36	牛山村	23	0	23
37	神山村	47	0	47
38	久場村	27	0	27
39	三本木村	17	0	17
40	高山村	28	0	28
41	保美村	19	0	19
42	浄法寺村	54	0	54
43	尾石村	24	0	24
44	二渡川村	105	0	105
45	古井戸村	20	0	20
46	川内村	5	0	5
47	矢田村	12	0	12
48	石神村	6	0	6
49	神保村	25	0	25
50	塩村	20	0	20
51	高村	2	0	2
52	東谷村	14	0	14
53	大沢村	12	0	12
54	長根村	62	0	62
55	下長根村	1	0	1
56	小機村	29	0	29
57	片山村	23	0	23
58	本郷村	24	0	24
59	塩川村	6	0	6
60	池村	15	0	15
61	馬場村	41	0	41
62	上日野村	101	0	101
63	下日野村	45	0	45
64	中島村	5	0	5
65	多胡村	11	0	11
66	多比良村	105	0	105
67	岩井村	13	0	13
68	小暮村	20	0	20
69	黒熊村	30	0	30
70	小串村	20	0	20
71	深谷村	6	0	6
		1770	12	1782

新田郡

№	村名	牡馬	牝馬	総計
1	藤都	46	2	48
2	西藤村	20	0	20
3	大久保郷	16	0	16
4	久谷郷	15	0	15
5	阿左美郷	32	0	32
6	横塚郷	69	2	71
7	西長岡郷	26	0	26
8	笠塩村	30	0	30
9	北金井村	11	0	11
10	大原本町郷	15	0	15
11	上中村	7	0	7
12	權右衛門郷	5	0	5
13	大村	0	0	0
14	湯池郷	6	0	6
15	八千石郷	3	0	3
16	蕨郷郷	4	0	4
17	大原村	35	0	35
18	金井郷	12	0	12
19	市野井村	55	0	55
20	山之神村	5	0	5
21	市郷	20	0	20
22	成塚郷(和市郷)	16	0	16
23	寄合郷	0	0	0
24	小金井村(和小和)	65	0	65
25	小金村	0	0	0
26	寺井郷(和元郷)	29	0	29
27	天良郷	0	0	0
28	脇屋村	22	0	22
29	強戸郷	44	0	44
30	指山郷	0	0	0
31	新野郷	33	0	33
32	境郷	2	0	2
33	上矢場郷	10	0	10
34	花香塚郷	10	0	10
35	西今井郷	2	0	2
36	上田中郷	77	0	77
37	下田中郷	28	0	28
38	三本郷	5	0	5
39	小角田村	5	0	5
40	女塚郷	4	0	4
41	米岡村	5	0	5
42	平塚郷	8	0	8
43	上江田郷	21	0	21
44	中江田郷	29	0	29
45	下江田郷	14	0	14
46	高尾郷	7	0	7
47	赤塩郷	13	0	13
48	村田郷	75	0	75
49	四軒在家郷	0	0	0
50	多賀新田	0	0	0
51	反町郷	31	0	31
52	木崎郷	22	0	22
53	沖野郷	0	25	25
54	別所郷	13	0	13
55	西野谷郷	11	0	11
56	世良田郷	77	0	77
57	粕川郷	7	0	7
58	安養寺郷	11	0	11
59	出塩村	3	0	3
60	徳川郷	1	0	1
61	大館郷	6	0	6
62	二小屋郷	9	0	9
63	前小屋郷	2	0	2
64	武蔵嶋郷	1	0	1
65	前嶋村	3	0	3
66	太田町	64	0	64
67	大嶋村	30	0	30
68	長手村	20	0	20
69	横丁田村	27	1	28
70	市良村	60	0	60
71	綾谷村	35	0	35
72	下田嶋村	40	0	40
73	上田嶋郷	18	0	18
74	藤岡久村	27	0	27
75	新井村	25	0	25
76	新嶋村	13	0	13
77	飯田村	19	0	19
78	小舞木村	12	0	12
79	内ヶ嶋村	25	0	25
80	東別所村	16	0	16
81	飯塚村	28	0	28
82	東矢嶋村	32	0	32
83	内矢嶋村	13	0	13
84	高林村	34	0	34
85	生塚村	38	0	38
86	蕨塚村	9	0	9
87	福塚村	5	0	5
88	米塚村	14	0	14
89	岩瀬川村	17	0	17
90	下浦田村	23	0	23
91	尾嶋村	5	0	5
92	中根村	14	0	14
93	押切村	1	0	1
94	岩松郷	26	0	26
95	横曲嶋村	30	0	30
96	堀口村	2	0	2
97	亀岡村	9	0	9
98	阿久津村	2	0	2
		1886	30	1916

佐渡郡

№	村名	牡馬	牝馬	総計
1	今井村	53	0	53
2	西久保郷	37	3	40
3	堀下村	13	0	13
4	赤堀村	47	2	49
5	五目牛郷	30	0	30
6	下嶋村	33	2	35
7	西林村	0	0	0
8	西野郷	19	10	29
9	高澤村	0	0	0
10	関野谷村	21	0	21
11	野郷	14	1	15
12	國定村	70	0	70
13	山部井郷	70	0	70
14	流江江郷	120	0	120
15	安藤郷	47	0	47
16	大田村	30	1	31
17	伊勢須町	41	0	41
18	上植木郷	66	0	66
19	下植木村	68	0	68
20	八寸郷	59	0	59
21	西小保方村	14	0	14
22	東小保方村	113	0	113
23	上田村	7	0	7
24	茂呂村	132	0	132
25	今泉村	23	0	23
26	保泉村	11	0	11
27	上武士郷	9	0	9
28	下武士郷	12	0	12
29	木島郷	22	0	22
30	伊與久村	61	0	61
31	上淵名村	45	0	45
32	下淵名村	61	0	61
33	東新井村	21	0	21
34	境村	2	0	2
35	百々村	3	0	3
36	中嶋村	2	0	2
37	小武木村	2	0	2
38	島郷	17	0	17
39	芝町町小泉村	36	0	36
40	小泉村榮町に奇遇	0	0	0
41	中町	20	0	20
42	阿佛入寺村	8	1	9
43	田中村	43	2	45
44	田中島村	18	0	18
45	非塚村	20	0	20
46	北ヶ井村	11	0	11
47	戸谷塚村	16	0	16
48	下福島村	12	0	12
49	堀口村	20	0	20
50	山王堂村	61	1	62
51	大正寺村	15	0	15
52	豊受村	17	0	17
53	八斗島村	0	0	0
54	富塚村	21	0	21
55	下諏訪村	11	0	11
56	馬見塚村	52	0	52
57	上蓮沼村	4	0	4
58	長沼村	6	0	6
59	飯島村	0	0	0
60	下蓮沼村	4	0	4
61	國領村	1	0	1
62	前河原村	0	0	0
63	今村	69	0	69
64	藤川村	10	0	10
65	飯塚村	31	0	31
66	中内村	12	0	12
67	西善村	46	0	46
68	東善寺村	11	0	11
69	山王村	13	0	13
70	宮子村	60	0	60
71	宮古村	16	0	16
72	連取村	98	0	98
73	東上之宮村	68	2	90
74	西上之宮村	8	0	8
75	上福島村	40	0	40
76	植越村	60	0	60
77	下新田村	0	0	0
78	上之手村	26	1	27
79	角淵村	56	0	56
80	後閑村	5	0	5
81	飯島村	0	0	0
82	福島村	21	0	21
83	南玉村	23	0	23
84	上茂木村	9	0	9
85	下茂木村	17	0	17
86	川井村	33	0	33
87	箱石村	15	0	15
88	下之宮村	23	0	23
89	小泉村	8	0	8
90	飯倉村	8	0	8
91	沼之上村	7	0	7
		2564	26	2590

山田郡

№	村名	牡馬	牝馬	総計
1	桐原村	8	0	8
2	大間々町	22	0	22
3	藤町村	3	0	3
4	天沼新田	5	0	5
5	天王宿村	10	0	10
6	下新田村	20	0	20
7	知恵堂村	10	1	11
8	新宿村	24	0	24
9	境野村	26	0	26
10	廣瀬村	33	0	33
11	一本木村	14	0	14
12	小平村	31	9	40
13	塩原村	28	10	38
14	浅原村	30	0	30
15	長尾根村	9	0	9
16	山田村	35	1	36
17	高津戸村	14	0	14
18	須永村	15	0	15
19	西小倉村	10	0	10
20	東小倉村	7	0	7
21	安藤土村	24	0	24
22	桐生新町	7	0	7
23	下久方村	8	0	8
24	上久方村	25	0	25
25	高澤村	6	0	6
26	浅原村	8	0	8
27	二澤村	8	0	8
28	山根村	14	0	14
29	吉澤村	34	0	34
30	丸山村	24	0	24
31	吉永村	8	0	8
32	矢沼塩村	17	0	17
33	東今泉村	24	0	24
34	東金井村	30	0	30
35	江上村	97	0	97
36	市場村	35	0	35
37	大町村	18	0	18
38	植木野村	21	0	21
39	富沢村	20	0	20
40	上小林村	20	0	20
41	安良岡村	9	0	9
42	東長岡村	30	0	30
43	桑之瀬	52	0	52
44	矢場村	107	0	107
45	石原村	15	0	15
46	茂木村	18	0	18
47	下小林村	11	0	11
48	龍舞村	90	0	90
49	八重雲村	17	0	17
50	神之郷村	42	0	42
51	荒金村	24	0	24
		1217	21	1238

邑楽郡

№	村名	牡馬	牝馬	総計
	89町村	1767	1	1768

佐藤健太郎氏より「牝馬が多い地域については、生産と消費という側面よりも、牝馬の方が扱いやすいという側面がより反映しているかもしれない」との御教示を得た。

第２節　まとめ

（１）天明泥流により被害を受けた江戸時代の川原畑村

これまで、東宮遺跡と西宮遺跡が発掘調査されてきた。この両遺跡は、吾妻川の左岸に位置する遺跡であり、江戸時代では吾妻郡川原畑村と呼ばれていた小さな山村である。この村は、吾妻川の中位段丘面の中でも一段低い段丘面に作られている下村の集落と１段高い段丘面に作られている上村の集落に分かれている。この山村が天明３年浅間山の大噴火により発生した浅間泥流により、下村の大部分が埋まってしまった。上野国吾妻郡原町富沢久兵衛氏の記録『浅間記』(浅間山津波実記)によれば、「河原畑　/廿壱軒流/四人死」と記されている。「萩原進　浅間山天明噴火史料集成Ⅱ 記録編(一)群馬県文化事業振興会　1986」。「御代官山本大善様当分御預り所　上州吾妻郡　川原畑村」と表題のある古文書(天保８年)(高山直行氏所蔵)には、村の石高・卯年(天明３年)泥入(泥流)の被害面積・村の規模等の他に、「一　当村家数三拾壱軒/　一　人数百参拾七人(内男七拾壱人/女六拾六人/馬弐拾疋)(＝割注)」と書かれている。この古文書から天明３年段階の家数を約30軒とするなら、村の2/3近い家が被害を受けたことになる。

天明泥流により被害を受けたのは、人や家だけでなく生産手段である畑も大きな被害を受けている。同じ天保８年の古文書には、川原畑村の耕地面積「弐拾三町壱反四畝廿三歩」の耕地の中で「九町六反四畝廿六歩去々卯泥入」と記されている。去々卯年は天明３年(卯年)と考えれ、この年の泥入により耕地の４割以上が被害を受けている。このような川原畑村の被害状況が、発掘調査により次第に明らかになってきた。

（２）これまで発掘調査された江戸時代の川原畑村

川原畑村の発掘調査は、平成７年の工事用道路建設に伴う畑の調査に始まる。平成19～21年度の発掘調査では、６軒の屋敷をはじめ、畑・水路・井戸等の調査を行った。１号屋敷からは、腐敗せずに残っていた建物の構造材や生活用具が多く出土し、当時の生活の様子を理解するうえで重要な遺跡であることことが確認された。発掘調査報告書は「東宮遺跡(１)」2011「東宮遺跡(２)」2012として刊行されている。平成25年の発掘調査では、４軒の屋敷をはじめ、前回発掘調査できなかった屋敷の残り部分の調査を実施した。その結果各屋敷に伴う井戸・水路・道等を詳しく調査することが出来た。発掘調査報告書「東宮遺跡(３)」2017として刊行されている。東宮遺跡の西側に位置する西宮遺跡では、平成20年に畑と屋敷および小屋等の発掘調査を実施した。平成26年度の調査では付属建物を含む３軒の屋敷・畑・道・井戸の一部を発掘調査した。その成果がこの発掘調査報告書「西宮遺跡(１)　西宮岩陰」2018である。その後平成27・28・29年度に、東宮遺跡・西宮遺跡とも膨大な面積の発掘調査が実施されている。特に平成29年度の発掘では多くの屋敷が調査されており、大量の建築部材や生活用具等が出土している。これらの成果から当時の農家の建築技術や家の構造、生活用具等から当時の食生活の様子、幹線道の存在から村を構成する集落のありかたや東西の村とのつながり等多くの調査成果があった。これまでの東宮遺跡や西宮遺跡の発掘調査から、筆者は様々なことを考えてきたが、その回答の多くが遺跡内に埋まっていた。

（３）出土しない米を炊く鍔を持つ釜

これまでの発掘で、出土遺物として多くの陶磁器や鉄製品、また木製の椀等が大量に出土している。食事はおそらく家族で囲炉裏を囲んで行われていた。これまで漆椀や陶磁器の椀や皿、箸や匙等が出土している。また鉄製品や銅製品として、薬缶や鍋が各屋敷から多く出土している。しかし近年迄の農家では必需品であった鍔を持つ鉄の釜が全く出土していない。このことは、米を炊いて食べるということが無かったことを示している。発掘調査の結果、川原畑村では多くの畑は確認されているが、現在まで水田の発掘例は無い。米は川原畑村ではほとんど栽培されていない。文献に残された記録として、年貢割付状や年貢を納めた段階で発行される皆済目録を調べと、明和２年(1765)～文化11年(1841)の88年間で米を納めるように年貢割付状に書かれている年は多いが、実際納めた皆済目録には、米を納めた記録がない。

農民が米を炊いて食べいることはほとんど無かったのではないだろうか。栽培が確認されている里芋・栗・稗・大豆等を鍋で雑炊として調理し食べていたと思われる。そのため盛り付ける食器は、熱伝導率の高い陶磁器ではなく、木製の椀が使われていた。天明泥流下の遺跡から

陶磁器製の飯碗がほとんど出土していないのは、そのことを反映している可能性が窺われた。

（４）家の規模や構造について

これまで東宮遺跡や西宮遺跡での発掘調査から10軒の屋敷が調査されている。その中から東宮遺跡16号建物、西宮遺跡２・４・５号建物の４軒の建物の間取り、柱の継手等の技術に関して東宮１号建物等から特色を説明する。

①中世16世紀ころのこの地域の建物は、全て掘立柱の建物であり、奥行きは２間にほぼ限定される。18世紀の東宮・西宮遺跡では、屋敷の母屋は、礎石を用いた建物であり、奥行きは3.5間で南に半間の庇が付く。

②中世では土間と板間の区別はできないが、18世紀の東宮・西宮遺跡では明確に区分されている。

③柱は、板間では広くても２間（約3.64m）間隔、土間では３間四方（約5.46m）または3.5間四方（約6.37m）の空間に１本の柱も立てていない空間が確保されている。

④家は貫構造で建てられ、北側壁面の多くは土壁となっている。土台と柱は枘と枘穴で組みこまれ、土台の継手部分には扉い鎌枘が用いられ、隅土台接合は横平枘差が用いられている。これらの技術により作られた家は、数十年と長い年月に耐えれれる建物となっている。最近まで見られた農家の建物に多くの部分が共通している。このような建物は、専門の大工によらなければ建てられない。これらの大工が村に住んでいたものと思われる。時代や地域は異なるが、享保16年(1731)、吾妻郡中之条町明細帳には大工三人が住んでいたことが記録されている。（群馬県史　資料編11近世３　北毛地域）

（５）度重なる災害と復旧

西宮遺跡は、天明３年の浅間泥流により埋まっている。この大災害に対して、いつまでも嘆いていることなく、生きていくためにすぐに災害復旧の活動を開始している。決められた年貢の義務も果たす必要がある。西宮遺跡１区からは、発掘の結果復旧溝と呼ばれている天明３年の畑面の耕作土を掘り出して、泥流面の上に持ち上げて耕作土を確保するための作業が実施されている。この作業が行われた時期は発掘結果では明らかにできないが、川原畑村の西に位置する羽根尾村に残された古文書の記録から、天明泥流後まもなく開始され、天明４年２月の段階では、麦が芽を出していることが記録されている。「吾妻郡羽根尾村麦作付け状況報告 群馬県立文書館所蔵文書P0106　No.193」この文書により８月に泥流に埋まり、10月頃までに復旧作業を行い（起こし返し）麦の種を播き次の年天明４年２月段階では、麦の芽が出ている。復旧作業が浅間泥流被災後すぐに行われていることがわかる。災害は、天明３年だけでなく、天和３年(1683)享保13年(1728)寛保２年(1742)等にも大雨等により大規模な山崩れ等が発生し、多くの畑等が埋まっている記録がある。『群馬県史通史編10』また地元岩島村誌にもその記録が報告されている。（『岩島村誌』岩島村史編纂委員会1971）

このような度重なる災害に負けないで、西宮遺跡では畑に流れ込んだ土石流を耕し、山石を集めて、多くのヤックラが築かれていた。山から流れ出した山砂は、保水力や地力も少ないと思うが、それにも負けずに、耕作を繰り返し家族や地域社会を支え、決められた年後を納めてきた村人の生活の様子が、少しずつ見えてきた。

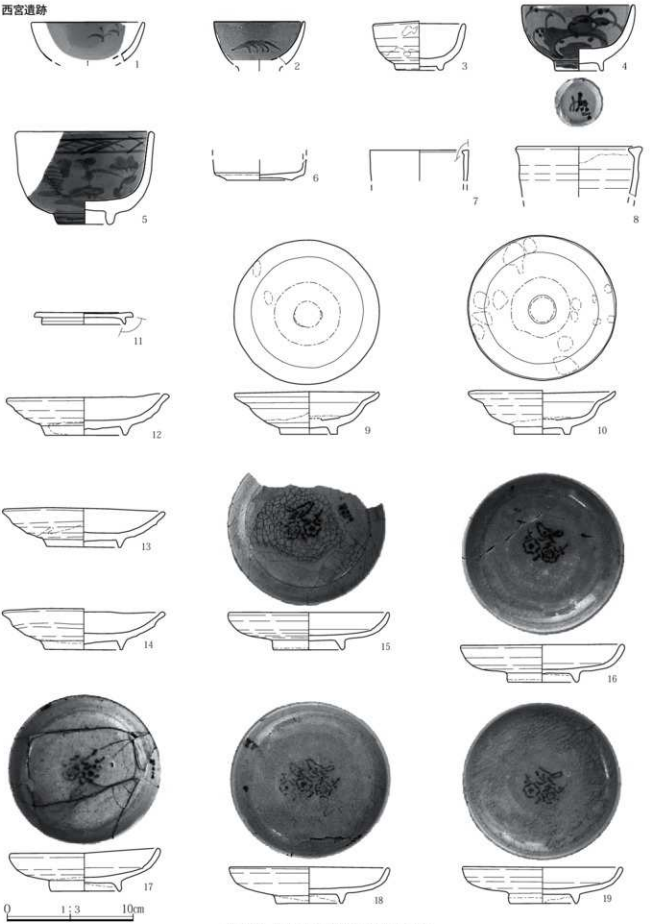
（６）西宮岩陰

西宮岩陰は、江戸時代を中心とした村の信仰の場である。川原畑村では、天明８年の古文書に村内に鎮守６ヶ所あることが書かれている。西宮岩陰はその中の１つであったものと思われる。最近発掘された川原畑村の三ツ堂遺跡や諏訪神社跡・川原湯村の祭祀（墓地）とともに当時の信仰のあり方を示す貴重な調査例である。今後の比較検討が重要な遺跡である。

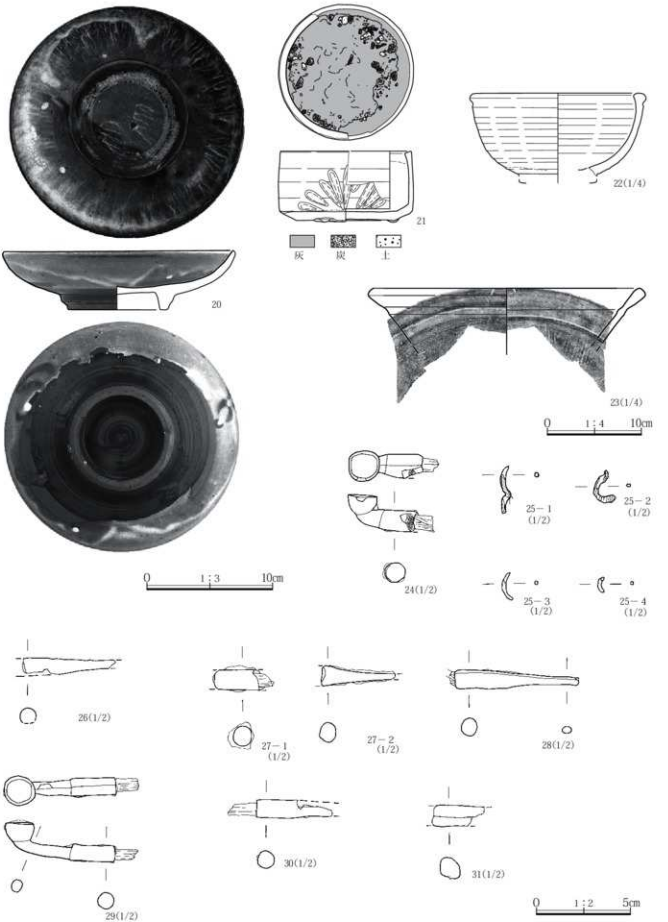
（７）災害時における検見の一例

度重なる災害について、村人は決められた年貢を納めるために懸命に働いてきた。しかし災害があまりにもひどい時は、代官に訴えて年貢を減免してもらっている。このことは地元に残る年貢の皆済目録からも明らかである（『東宮遺跡（２）』参照）。さらにこの被害状況を調査し、年貢を決める検見の一例として天保14年に作られた絵図「上野国吾妻郡川原畑村絵図面　耕地色分　○御取下ケ耕地目印」（長野原町教育委員会所蔵）を検討することにより、検見の一端を知ることが出来る。通常上畑・中畑・下畑・下々畑の４区分により各畑の年貢高が決められるが、絵図中で西宮名所と書かれているところの年貢高は、上畑が２区分・中畑が２区分・下畑１・下々畑３区分の７区分に細分され、それぞれの畑の年貢高が書かれている。これは、現地での検見の結果、細かく年貢高を決めたことを示し、災害の現状に即した行政が行われていることを物語っている。

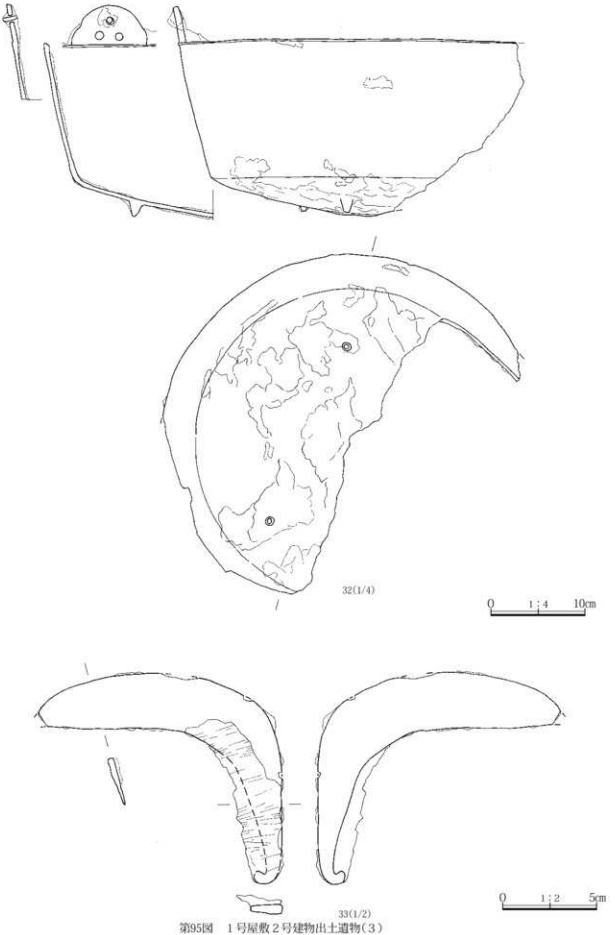
西宮遺跡



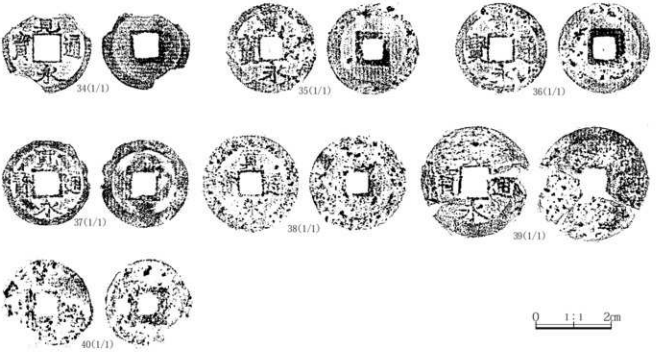
第93図　1号屋敷2号建物出土遺物(1)

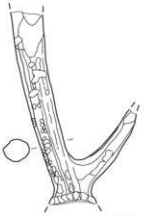


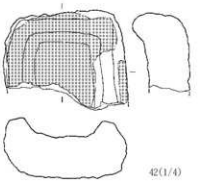
第94図　1号屋敷2号建物出土遺物(2)



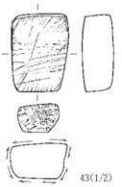
第95図　1号屋敷2号建物出土遺物(3)







0 1:4 10cm

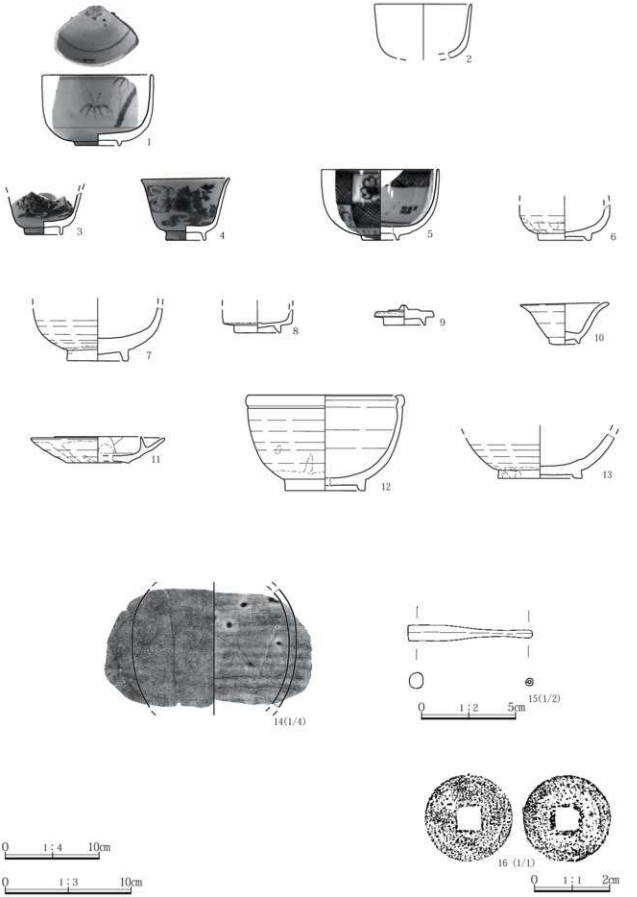


0 1:2 5cm

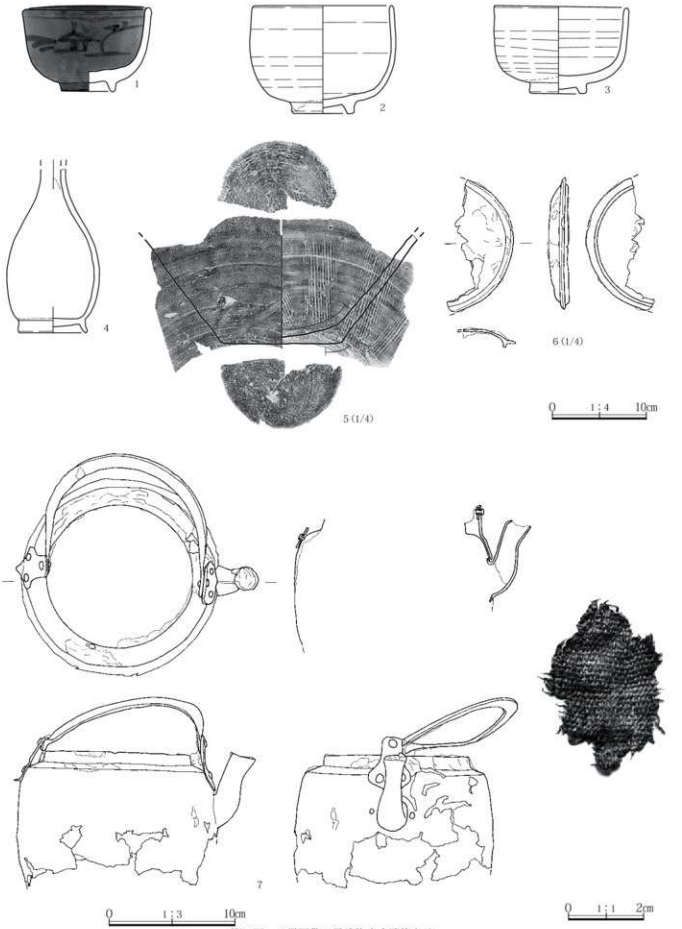
第96図　1号屋敷2号建物出土遺物(4)

遺物実測図

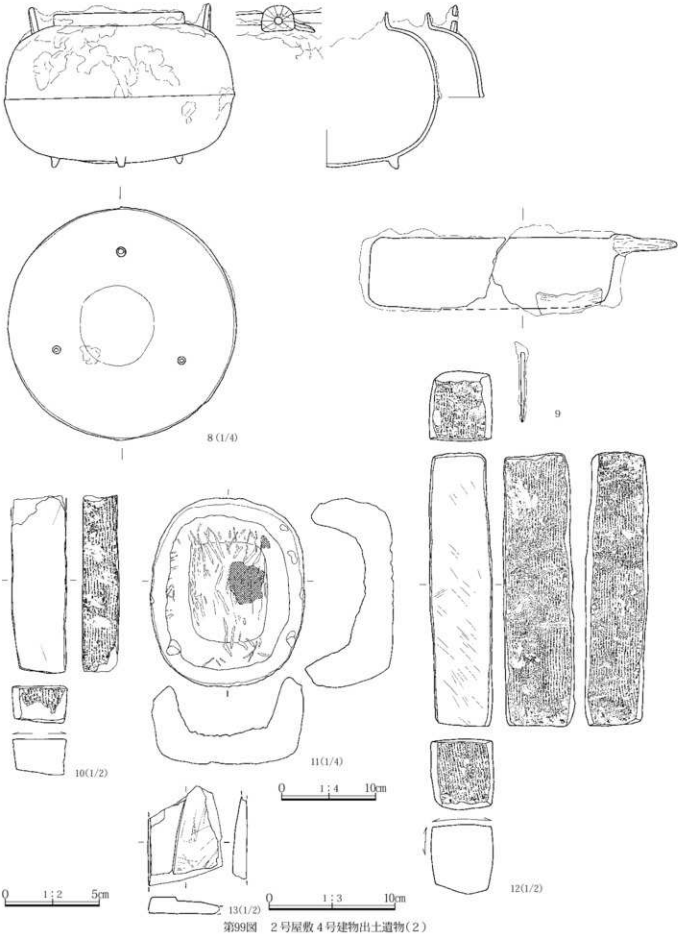
12・13・14号石垣



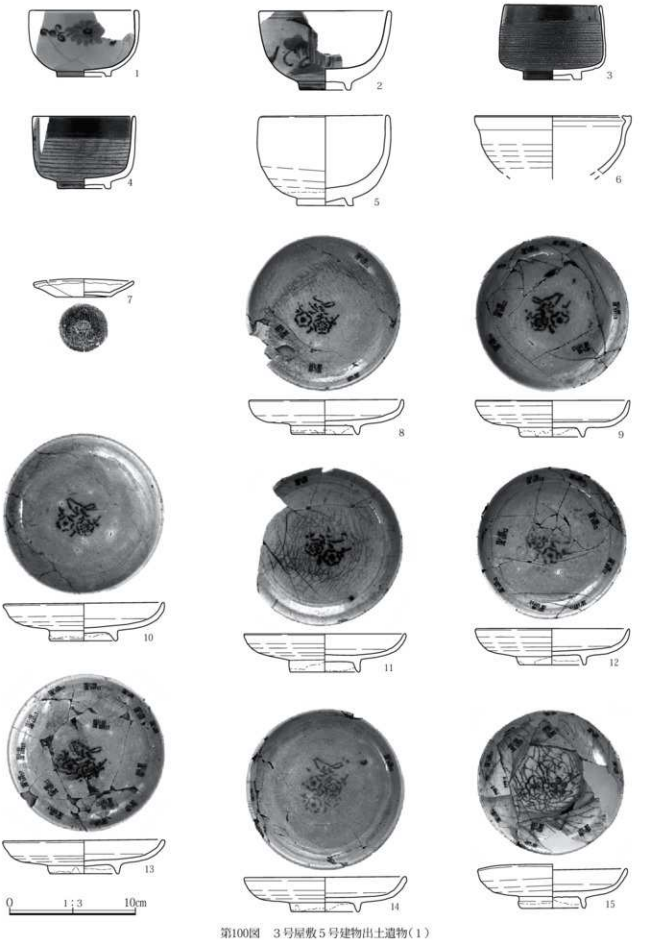
第97図　1号屋敷12・13・14号石垣出土遺物



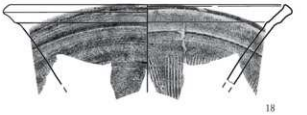
第98図　2号屋敷4号建物出土遺物(1)

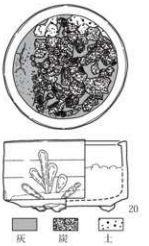


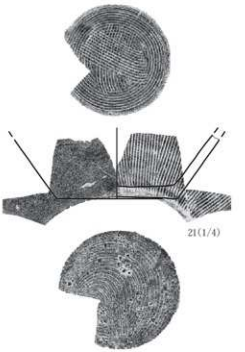
第99図　2号屋敷4号建物出土遺物(2)

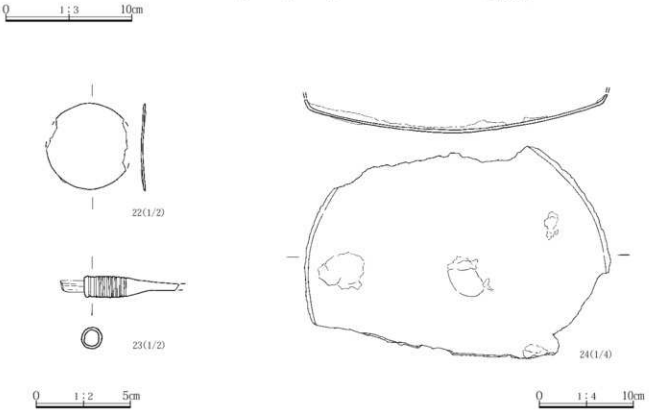


第100図　3号屋敷5号建物出土遺物(1)

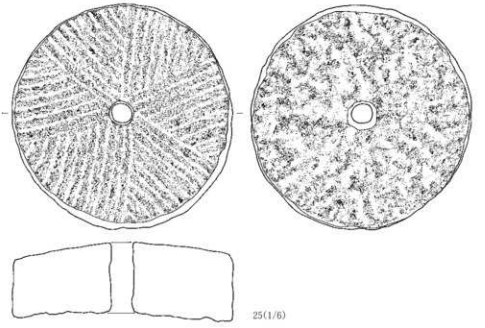


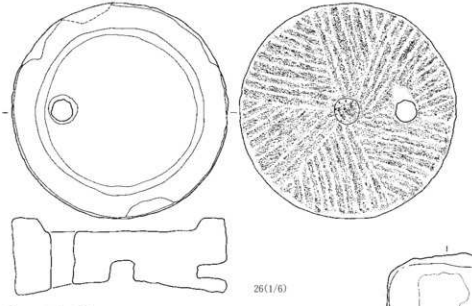


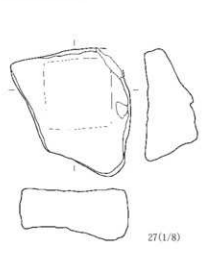


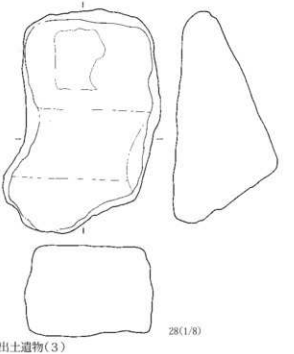


第101図　3号屋敷5号建物出土遺物(2)





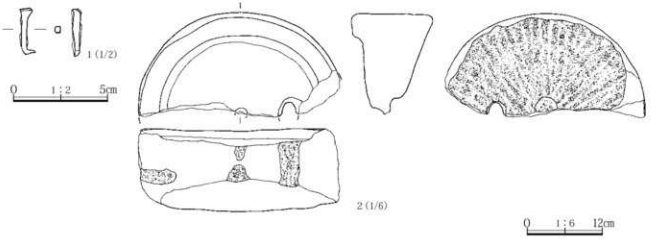




第102図　3号屋敷5号建物出土遺物(3)

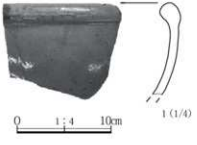
遺物実測図

1号建物

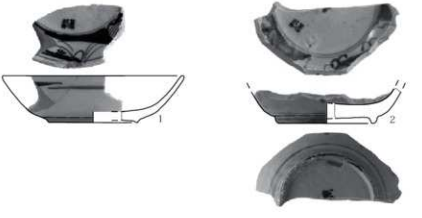


6号建物

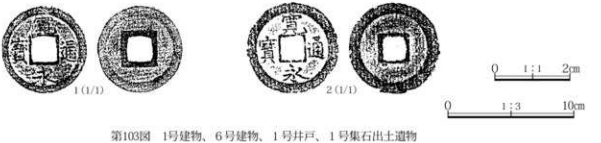
1号井戸



2号井戸

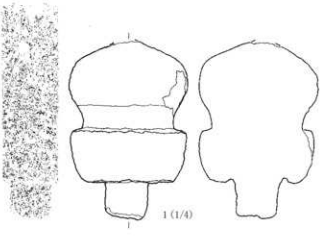


1号集石

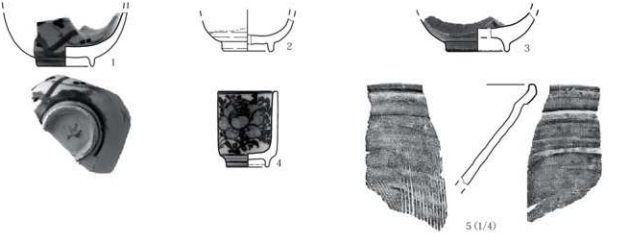


第103図　1号建物、6号建物、1号井戸、1号集石出土遺物

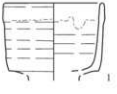
11号石垣

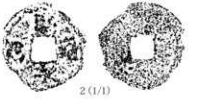


15号石垣



3号畑

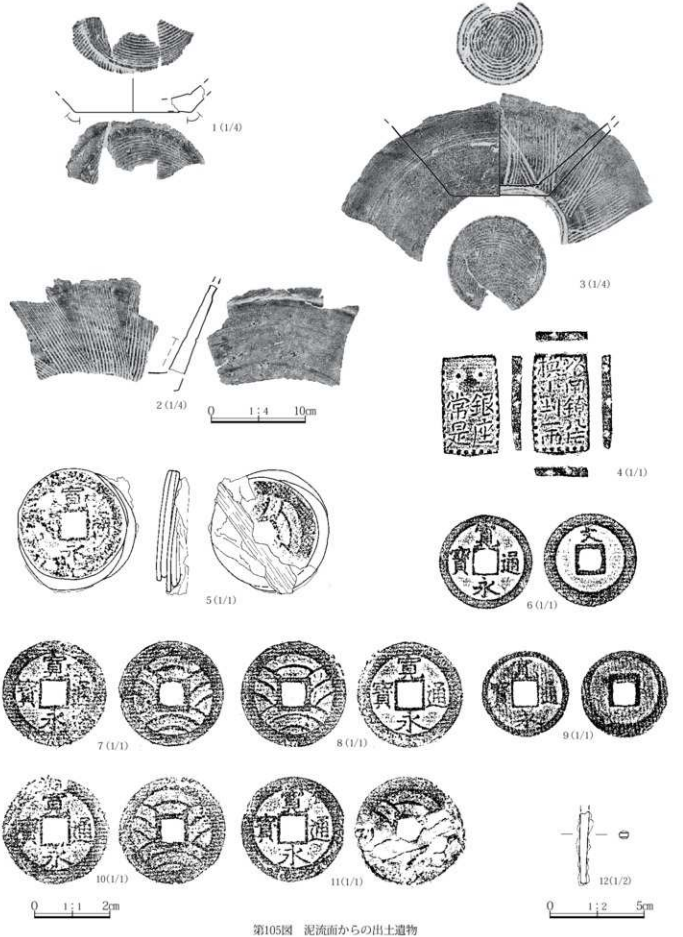




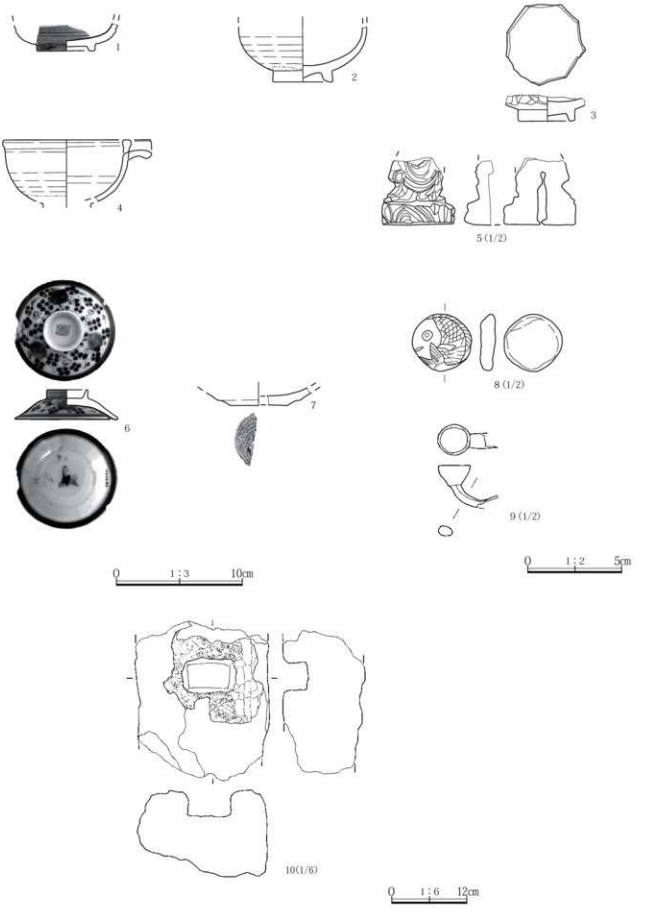
5号畑

0　1:1　2cm　　0　1:4　10cm　　0　1:3　10cm

第104図　11号・15号石垣、3号・5号畑出土遺物

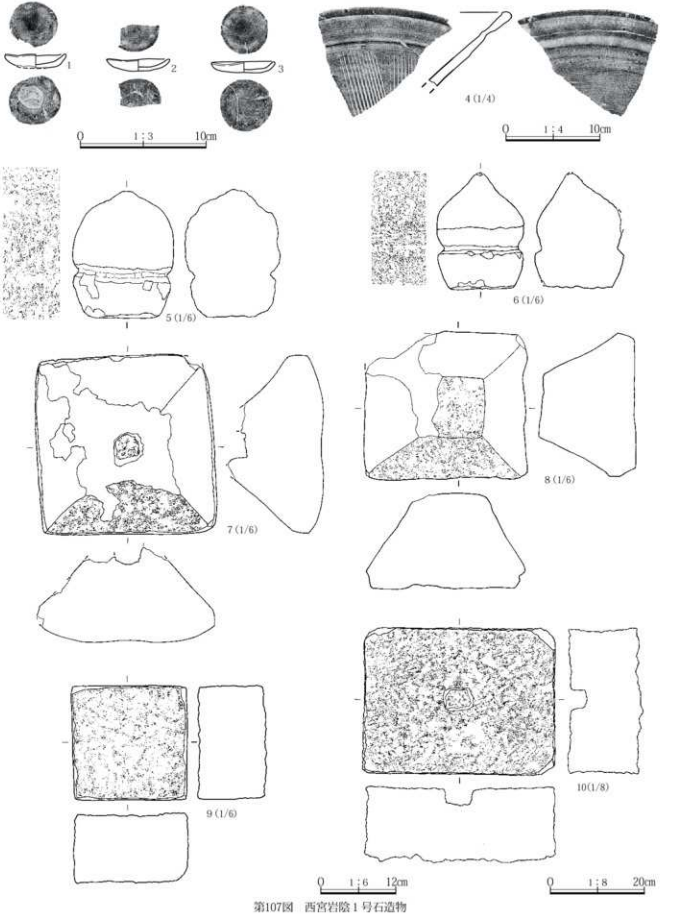


第105図　泥流面からの出土遺物

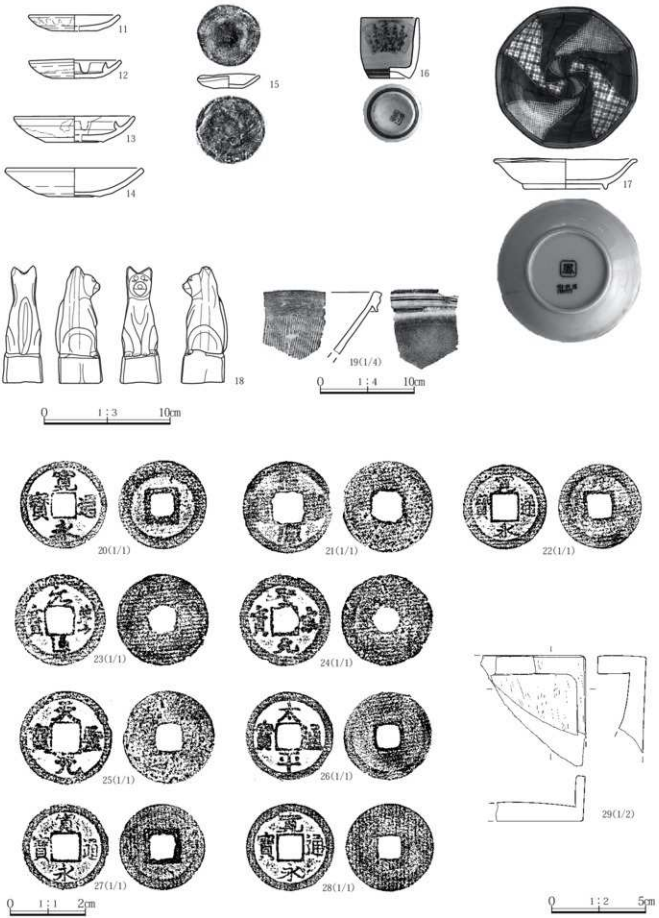


第106図　ヤックラ、トレンチ、1号祭祀からの出土遺物

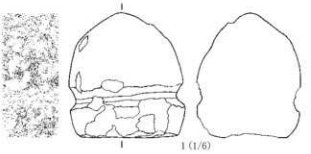
西宮岩陰

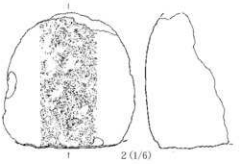


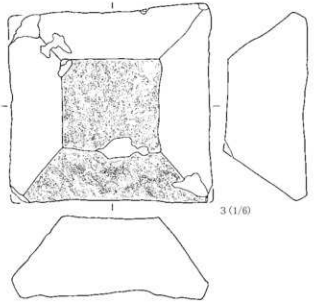
第107図　西宮岩陰1号石造物

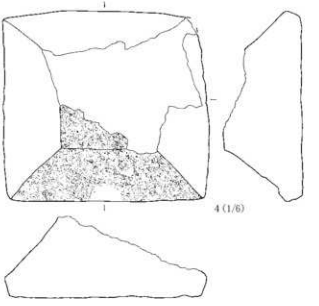


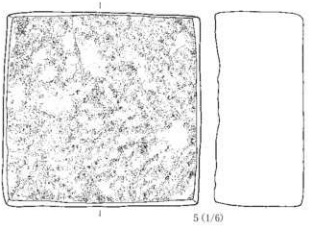
第108図　西宮岩除1号石造物覆土











第109図　西宮岩陰２号石遺物

1号屋敷2号建物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第93図 PL.57	1	肥前磁器 染付碗	口縁部1/4	口 (8.8) 底 —	器 — 高 —			夾雑物無し/—/灰白	体部外面に染付文。	18世紀中頃～後半。
第93図 PL.57	2	肥前磁器 染付碗	口縁部1/4	口 (7.0) 底 —	器 — 高 —			夾雑物微量/—/灰白	体部外面に笹の染付文。	18世紀。
第93図 PL.57	3	瀬戸・美濃 陶器 小碗	口縁部1/2欠	口 (7.0) 底 3.7	器 3.6～3.9 高 —			夾雑物少量/—/淺黄	体部外面の下半に回転ヘラ削り。内面全面と外面の口縁部に施釉。	18世紀。
第93図 PL.57	4	肥前磁器 染付碗	高台1/3欠	口 (8.8) 底 (3.7)	器 5.2 高 —			夾雑物無し/—/灰白	体部外面に雪輪梅樹文。高台外面に2重の圏線。高台内に不明銘。口唇部、畳付による欠損か。	18世紀中頃～後半。
第93図 PL.57	5	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部1/3欠	口 10.6～11.0 底 4.2	器 7.3 高 —			夾雑物少量/—/灰	外面は口縁部に四方襷文、体部に束屋山水文。体部下位と高台外面に1重の圏線。	18世紀前半。
第93図	6	京・信楽系 陶器 蓋物	底部1/2	口 — 底 5.2	器 — 高 —			夾雑物無し/—/灰白	体部下位は回転ヘラ削り。内面と下位を除く体部外面に透明釉。	6・7・8は同一個体か。2点接合。時期不詳。
第93図	7	京・信楽系 陶器 蓋物	口縁部片	口 (7.8) 底 —	器 — 高 —			夾雑物無し/—/灰白	口唇端部は内側に小さくかえる。内外面に透明釉。口唇端部の上端面は無釉。	6・7・8は同一個体か。時期不詳。
第93図	8	瀬戸・美濃 陶器 筒型香炉	口縁部片	口 (9.7) 底 —	器 — 高 —			夾雑物微量/—/灰黄	口唇端部は内側に肥厚し、上端は平坦面をなす。外面に施釉。内面は無釉。	
第93図 PL.57	9	肥前陶器 皿	完形	口 11.4 底 4.5	器 3.4 高 —			不明/—/にぶい黄橙	高台を除く内外面に灰釉。内面、蛇の目釉剥ぎ。内面に銅緑釉が点状に付く。10と揃い。	18世紀か。
第93図 PL.57	10	肥前陶器 皿	完形	口 11.7 底 4.5	器 3.3～3.5 高 —			不明/—/黄灰	高台を除く内外面に灰釉。内面、蛇の目釉剥ぎ。内面に銅緑釉が点状に付く。10より顕著。10と揃い。	18世紀か。
第93図	11	京・信楽系 陶器 蓋	1/6	口 (7.4) 底 (6.6)	器 0.9 高 —			夾雑物無し/—/灰白	口縁端部から内側に入った位置に小さなかえりが付く。内外面に透明釉。かえりから口縁端部までは無釉。	6・7・8は同一個体か。時期不詳。
第93図 PL.57	12	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口 12.5～13.0 底 6.3～6.9	器 2.9～3.3 高 —			夾雑物少量/—/灰黄	体部外面の下位に回転ヘラ削り。高台は外側を削り、内縁。高台を除く内外面に灰釉。釉薬く、発色悪い。内面に重ね焼きの痕跡。12・13・14は揃い。	2点接合。17世紀後半～18世紀前半。
第93図 PL.57	13	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口 12.5～12.7 底 5.8	器 2.8～3.1 高 —			夾雑物少量/—/灰黄	体部外面下位に回転ヘラ削り。高台は外側を削り、内縁。高台を除く内外面に灰釉。釉薄く、発色悪い。内面に重ね焼きの痕跡。12・13・14は揃い。	3点接合。17世紀後半～18世紀前半。
第93図 PL.57	14	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口 12.7 底 6.2	器 2.9～3.3 高 —			夾雑物少量/—/淡黄	体部外面下位に回転ヘラ削り。高台は外側を削り、内縁。高台を除く内外面に灰釉。釉薄く、発色悪い。内面に重ね焼きの痕跡。12・13・14は揃い。	7点接合。17世紀後半～18世紀前半。
第93図 PL.57	15	瀬戸・美濃 陶器 皿	口縁部1/3欠	口 12.7 底 5.5	器 3.0 高 —			夾雑物無し/—/灰白	内面、見込みに小さな段が付く。梅文画。梅に鶯を只須を用いた型紙摺り。発色悪い。16～19と絵柄が反転している。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	14点接合。18世紀。
第93図 PL.57	16	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口 12.7 底 5.5	器 3.0 高 —			不明/—/灰白	内面、見込みに小さな段が付く。内外面に灰釉。貫入入る。梅文画。梅に鶯を只須を用いた型紙摺り。発色悪い。御深井戸製品。	6点接合18世紀。。
第93図 PL.57	17	瀬戸・美濃 陶器 皿	口縁部一部欠	口 11.8～12.0 底 5.4	器 3.0～3.4 高 —			夾雑物微量/—/灰白	内面、見込みに小さな段が付く。梅文画。梅に鶯を只須を用いた型紙摺り。絵柄不鮮明。発色悪い。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	15点接合。18世紀。
第93図 PL.57	18	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口 12.6 底 5.2	器 2.9 高 —			不明/—/灰白	梅文画。梅に鶯を只須を用いた型紙摺り。発色悪い。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	8点接合。18世紀。
第93図 PL.57	19	瀬戸・美濃 陶器 皿	完形	口 12.6 底 5.2	器 2.9 高 —			不明/—/灰白	梅文画。梅に鶯を只須を用いた型紙摺り。摺り絵、ずれて2つが重なる。発色悪い。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	18世紀。
第94図 PL.58	20	肥前陶器 皿	完形	口 18.2 底 7.9	器 4.7 高 —			不明/—/にぶい赤褐	焼成不良。高台は外側が削られ内傾する。鉄泥を刷毛で塗っている。見込みに重ね焼きの痕跡。	18世紀。
第94図 PL.58	21	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	完形	口 (10.4) 底 7.8	器 5.1 高 —			夾雑物少量/—/灰	低い脚が3ヶ所に付く。体部外面に平菊文。施釉。内側に炭・灰が口唇部近くまで入っていた。	As-A混淆下。
第94図 PL.58	22	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	口縁部1/2	口 (17.5) 底 —	器 — 高 —			夾雑物少量/—/淺黄	口唇端部の断面は丸い。口縁端部直下には沈線が廻る。体部外面の下半は回転ヘラ削り。外面内外面に灰釉。	14点接合。18世紀。
第94図	23	瀬戸・美濃 すり鉢	口縁部1/4	口 (28.10) 底 —	器 — 高 —			黒色鉱物粒少量/—/淺黄	口縁部は外面側がわずかに肥厚する。内面に12本1単位のクシ目。内外面に錆釉。	4点接合。As-A混淆下。
第94図 PL.58	24	銅製品 キセル(雁首)		長 4.6 幅 1.6	厚 1.9 重 7.0				煙管の雁首。つなぎ目が確認でき、羅宇が残存する。火皿の一部は変形、欠損している。小口に煙管内部に沿うように植物繊維が残存。	
第94図 PL.58	25-1	銅製品		長 2.6 幅 0.6	厚 0.3 重 0.5				銅製の線状のもの。線の内部は密になっている。上端部から1.5cmのところで0.7cmほど湾曲する。植物質が付着している。用途不明。	

挿図 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第94図 PL.58	25-2	銅製品		長 1.7 幅 1.2		厚 0.2 重 0.4			銅製の線状のもの。上端部から0.4cmのところで1.0cmほど張り出して湾曲する。同型の4点の中で一番扁平している。全体に植物痕がある。用途不明。	
第94図 PL.58	25-3	銅製品		長 1.4 幅 0.5		厚 0.2 重 0.3			銅製の線状のもの。端部より0.5cm張り出して湾曲し、半円状の状態を示す。劣化により平面の途中より破損。植物痕がある。用途不明。	
第94図 PL.58	25-4	銅製品		長 0.8 幅 0.3		厚 0.2 重 0.1			銅製の線状のもの。端部より0.3cm張り出し湾曲。植物痕が見られ、表面が劣化で破損している部分がある。用途不明。	
第94図 PL.58	26	銅製品		長 5.0 幅 0.9		厚 0.8 重 1.9			煙管の吸口。全体がさびにおおわれ劣化しており、羅宇に近い部分と口付が欠損。3点に破損している。	
第94図 PL.58	27-1	銅製品		長 3.2 幅 1.5		厚 1.4 重 2.1			煙管雁首か。劣化が激しく、さびと砂におおわれ状態が悪い。羅宇の残存し、一部に乾燥による収縮が見られる。吸い口が残存してることから雁首と判断。	
第94図 PL.58	27-2	銅製品		長 3.9 幅 1.0		厚 1.1 重 1.9			煙管の吸口。全体がさびにおおわれ加工装飾などは判別できない。内部に羅宇が残存。口付の近くにも木質が見られるが、羅宇か疑いているものかは不明。	
第94図 PL.58	28	銅製品		長 7.8 幅 1.0		厚 0.9 重 8.8			煙管吸口。羅宇が残存。口付が一部欠損。つなぎ目の判別可能。全体をさびがおおっており、一部に鉄釘が埋没時に隣接し付着した部分は鉄のさびが付着している。	
第94図 PL.58	29	銅製品		長 7.2 幅 1.6		厚 2.2 重 8.7			煙管雁首。首の部分から2点に割れ破損、欠損あり。羅宇が残存。火皿は砂が多く詰まり、詳細不明。つなぎ目に沿ってひびが入っている。	
第94図 PL.58	30	銅製品		長 5.5 幅 1.0		厚 0.9 重 3.6			煙管吸口。残存するほぼ中心で破損。羅宇は残存するが収縮している。表面はさびが覆い、劣化も激しく、加工装飾は判別できない。	
第94図 PL.58	31	銅製品		長 2.7 幅 1.0		厚 1.1 重 2.3			煙管断片。破損した時に押しつぶされるように4片に破損している。羅宇に近い部分が残存しているが、残存部分が少ないため部位は特定できない。	
第95図 PL.58	32	鉄製品		長 37.6 幅 35.6		厚 22.1 重 3040			吊耳鉄鍋。三足を有する。底部から側面にかけて煤の付着が見られる。耳が一方のみ残存し、孔は2段3つ空いている。吊り手が一部残存し、鉄鋼に癒着している。	
第95図 PL.58	33	鉄製品		長 13.0 幅 11.2		厚 1.3 重 86.9			鎌。2つに破損。片面に有機物が付着している。柄に近い端部は丸まっている。全体的に非常にもろく剥離している部分が多数見られる。	
第96図 PL.59	34	古銭		縦 – 横 –		厚 0.120 重 1.0			新寛永。上の部分と左下が大きく破損している。面の字、郭、輪の彫は深く明瞭。背も郭、輪ともに明瞭。一部、彫が浅くなっているところがある。	
第96図 PL.59	35	古銭		縦 2.460 横 2.432		厚 0.243 重 3.1			古寛永。面、背ともに彫が深く、字、郭、輪が明瞭である。面にはさびが多く付着しており、一部文字が見えづらくなっている。背は輪の部分に多くさびが付着している。	
第96図 PL.59	36	古銭		縦 2.456 横 2.449		厚 0.160 重 2.7			古寛永。面、背ともに全体にさびが付着している。字、郭、輪は明瞭。背の郭の上と右が太くなっている。	
第96図 PL.59	37	古銭		縦 2.360 横 –		厚 0.120 重 1.6			新寛永。2つに破損している。面の字、郭、輪は明瞭。ただし、輪は劣化が激しく破損している。背の郭は彫が浅く不明瞭。内輪が盛り上がり、輪の内側に輪に沿うような形で傷が入っている。	
第96図 PL.59	38	古銭		縦 2.565 横 2.572		厚 0.235 重 2.9			新寛永。全体がさびでおおわれている。字と郭は彫は浅く、輪は彫が深くなっている。背は郭と輪の判別は可能。	
第96図 PL.59	39	古銭		縦 2.926 横 –		厚 0.183 重 2.5			寛永通宝。四文銭11波。劣化が激しく3点に破損し、一部欠損部分もあり、全体がさびでおおわれている。背も劣化が激しく、郭、輪、波紋が不明瞭。	
第96図 PL.59	40	古銭		縦 – 横 –		厚 0.232 重 2.0			新寛永。劣化が激しく、土とさびにおおわれている。一部欠損。彫は浅く、寛の字より新寛永と判断。	
第96図	41	獣骨 鹿角		長 19.5 幅 2.6					2歳以上の雄の自然に落角した鹿角。切り落としたような切断面や加工の痕跡はない。	
第96図 PL.59	42	石製品 石製品	1/2	長 (10.6) 幅 (13.3)		厚 (6.7) 重 769.4		粗粒輝石安山岩	粗粒で多孔質な石材である。全体的に矩形に丁寧に整形する。表面には矩形のくぼみがあり内部を中心に黒色物質が付着し炭化物の可能性が考えられる。灯火具等の可能性がある。	
第96図 PL.59	43	石製品 砥石	完形	長 4.1 幅 3.0		厚 1.9 重 38.6		砥沢石	正面が主要な砥面であり線条痕が数多く認められる。左右両側面、裏面、上部小口面も滑らかであり砥面として利用されたと考えられる。下部小口面は滑らかでなく砥面と認定できないが、細かい線条痕がわずかに認められ加工痕の可能性がある。	
第96図 PL.59	44	石製品 砥石	1/2	長 (7.6) 幅 (3.7)		厚 (2.5) 重 115.0		流紋岩	正面が主要な砥面であり線条痕が数多く認められる。左右両側面は滑らかな部分と線条痕がわずかに認められ使宜的な砥面と考えられる。裏面は多くの平坦な作出面で構成され平ノミ状の工具痕の可能性がある。	
1号屋敷12・13・14号石垣										
第97図 PL.59	1	肥前磁器 染付碗	1/4	口 (8.6) 底 (3.4)		器高 5.6		夾雑物無し/一/白	口縁直下と体部下位に廻らせた圏線区画内に雪輪の染付文。内面は口縁部に2重の、見込みに1重の圏線。底部内面に五弁花。	18世紀後半。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第97図 PL.59	2	製作地不詳 磁器 碗	1/4	口 7.6 底 —	器 — 高 —			夾雑物無し/—/緑	無文。	近・現代。
第97図 PL.59	3	製作地不詳 磁器 杯	1/3	口 — 底 2.8	器 — 高 —			夾雑物無し/—/白	体部外面に銅版転写の文様。	近・現代。
第97図 PL.59	4	製作地不詳 磁器 小杯	完形	口 6.8 底 3.0	器 4.8～5.0 高			夾雑物無し/—/灰白	銅板転写で施文。	近・現代。
第97図 PL.59	5	肥前磁器 小杯小丸碗	口縁部1/8、体部1/4	口 (9.2) 底 (2.8)	器 5.6 高			夾雑物無し/—/灰白	体部外面に市松文の区画の中に斜格子文、桜の花文。高台境に圏線。内面は口縁部に四方襷文。見込みに２重圏線。	18世紀中頃～後半。
第97図	6	瀬戸・美濃 陶器 小碗	底部1/4	口 — 底 4.0	器 — 高			夾雑物少量/—/淡黄	高台外面を除いて内外面に錆釉。口縁部の別れ口、黒色味を帯びる。	江戸時代。
第97図	7	瀬戸・美濃 陶器 碗	底部1/2	口 — 底 5.0	器 — 高			夾雑物少量/—/浅黄	高台外面を除いて器面に飴釉。	18世紀。
第97図	8	瀬戸・美濃 陶器 小香炉	底部1/4	口 — 底 (3.6)	器 — 高			夾雑物少量/—/灰白	体部に透明釉。	江戸時代。
第97図 PL.59	9	京・信楽系 陶器 蓋	口縁部1/4欠	口径 4.5 底径 3.3	器 1.6 高			夾雑物無し/—/灰白	天井部中央に小さな摘みが付く。内面にかえり。外面に透明釉。	As-A泥流上。
第97図 PL.59	10	肥前磁器 小杯	完形	口 6.8 底 2.3	器 3.1～3.3 高			不明/—/灰白	無文。灰釉。	時期不詳。
第97図	11	志戸呂陶器 灯火受皿	1/4	口 (10.6) 底 (5.0)	器 2.1 高			白色鉱物粒少量/—/にぶい赤褐	体部下半は回転ヘラ削り。内面に錆釉。	18世紀中頃～後半。
第97図 PL.59	12	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	口縁部一部、底部1/3	口 (16.3) 底 (8.5)	器 10.1 高			夾雑物少量/—/淡黄	口唇端部は内側が断面三角形に肥厚する。体部外面と内面に飴釉。	３点接合。As-A泥流下。
第97図	13	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	底部	口 — 底 8.8	器 — 高			夾雑物少量/—/淡黄	体部外面と内面全面に飴釉。内面に重ね焼き痕。	江戸時代。
第97図	14	製作地不詳 陶器 壺	体部片	口 — 底 —	器 — 高			夾雑物少量/—/灰黄褐	外面に鉄釉。	時期不詳。
第97図 PL.59	15	銅製品 キセル(吸い口)		長 6.6 幅 0.8	厚 0.8 重 6.7				煙管吸口。内部に羅宇が残存している。つなぎ目が明瞭。完形。劣化により表面が一部剥離してしまっている。	
第97図 PL.59	16	古銭		縦 2.360 横 2.336	厚 0.136 重 2.4				新寛永。劣化による摩滅が見られ、面と背の字、郭、輪が不明瞭。一部文字は判読可能。	

２号屋敷４号建物

第98図 PL.59	1	肥前陶器 陶胎染付碗	完形	口 9.7 底 4.0	器 6.3～6.8 高			不明/—/灰	口唇端部直下と体部下位に廻る圏線区画内に東屋山水文。表現は退化傾向にある。釉薬っている。	18世紀中頃。
第98図 PL.59	2	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部から体部1/2欠	口 (10.8) 底 4.6	器 8.6 高			夾雑物微量/—/灰白	体部下半に回転ヘラ削り。無文。高台を除く内外面に灰釉。	２点接合。18世紀。
第98図 PL.59	3	瀬戸・美濃 陶器 碗	完形	口 10.5 底 4.4	器 7.0 高			白色鉱物粒少量/—/灰白	体部下半に回転ヘラ削り。無文。高台を除く内外面に飴釉。	18世紀中頃。
第98図 PL.60	4	製作地不詳 染付徳利	口縁部欠損	口 — 底 5.4	器 — 高			夾雑物微量/—/淡黄	頸部は細く締り、体部の重心は低い。高台内を含む全体に釉。全体に貫入入る。肩部に呉須で文様を描く。	時期不詳。
第98図 PL.60	5	瀬戸陶器 すり鉢	体部6底部1/2	口 — 底 12.5	器 — 高			黒色鉱物粒少量/—/灰白	左回転ロクロ整形。体部外面下位は回転ヘラ削り。底部は回転糸切り離し後無調整。内面に14本１単位のクシ目。クシ目は使用により磨滅。器面は平滑になっている。器面に錆釉。	３点接合。As-A泥流下。
第98図 PL.60	6	鉄製品		長 13.9 幅 7.2	厚 2.2 重 100.1				茶釜の蓋。表面にさざがおおい、劣化による剥離が見られる。今回出土した茶釜とロの径は合っているため、同一の可能性も考えられる。	
第98図 PL.60	7	銅製品 ヤカン		長 19.1 幅 15.4	厚 14.4 重 290.8				やかん。吊り手が残存、吊り手は断面が長方形で、衝撃による変形が生じている。底部は破損、変形により詳細不明。注口は内部から外に出し、鋲止めが見られる。注口は鶴いや字である。やかんの中に大きさ4.5×３cm、糸の厚さ１mmとよい布切れあり。	
第99図 PL.60	8	鉄製品		長 24.4 幅 24.1	厚 17.0 重 8300				茶釜。口径13.5cm。内部は錆や砂などが大量に詰まっており、詳細は不明。三足が底部に付き足は釜を鋳造したのちに付属させたものとみられる。蹴付は放射状に装飾が施され、一部端手が残存している。胴部分に刷毛目があり、底部付近は煤が付着している。	
第99図 PL.60	9	鉄製品		長 25.1 幅 7.0	厚 1.3 重 126.9				刀工。２点に破損しており、欠損も見られる。柄の部分に有機質も見られる。劣化が激しかったため補強をおこなった。	
第99図 PL.60	10	石製品 砥石	完形	長 (9.4) 幅 3.0	厚 2.0 重 92.0			砥沢石	正面に砥面が認められる。裏面、左右両側面、下部小口面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。上部欠損。	

挿図 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第99図 PL.60	11	石製品 石製品	完形	長 幅	20.0 16.4	厚 重	9.3 2038.8	石製品	粗粒で多孔質な石材である。全体的に丁寧に整形する。表面には矩形のくぼみがあり、底面を中心に断面U字形の線条痕が多く認められ棒状工具による加工痕の可能性がある。同じく内部には黒色物質がわずかに付着し炭化物の可能性が考えられる。灯火具等の可能性がある。	
第99図 PL.60	12	石製品 砥石	完形	長 幅	14.5 3.3	厚 重	3.8 347.7	砥沢石	正面が主要な砥面である。裏面、左右両側面、上下小口面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。左側面の一部には非常に滑らかな箇所が認められ使宜的な砥面と評価できる。	
第99図 PL.60	13	石製品 硯	不明	長 幅	(5.3) (4.0)	厚 重	0.9 25.0	頁岩	硯面と縁は非常に滑らかでわずかに光沢がある。硯側と硯背は滑らかであるが光沢は認められない。硯面には擦痕が多く認められる。	

3号屋敷5号建物

第100図 PL.61	1	京・信楽系 陶器 碗	口縁部1/8、底部1/2	口 底	(8.3) 4.3	器 高	5.3	夾雑物微量/－/灰白	高台を除く内外面に透明釉。口縁部外面に呉須と鉄絵による花の下絵を描く。貫入入る。	6点接合。18世紀。
第100図 PL.61	2	肥前陶器 陶胎染付碗	口縁部一部、底部1/3	口 底	(10.3) (4.0)	器 高	6.3	夾雑物微量/－/灰	口唇部直下と体部下位に廻る圏線区画の中に山水系染付文。高台外面にも圏線。	2点接合。18世紀前半～中頃。
第100図 PL.61	3	美濃陶器 鉢碗	口縁部一部欠	口 底	7.6 4.5	器 高	6.0	夾雑物微量/－/灰白	口縁部の外面に柿釉。体部下位から高台に錆釉。	18世紀後半。
第100図 PL.61	4	美濃陶器 鉢碗	口縁部1/4、底部2/3	口 底	(8.0) 4.2	器 高	5.8	夾雑物微量/－/灰黄	口縁部外面と内面全面に鉄釉。体部下位、鉄化粧風の仕上がり。	2点接合。18世紀後半。
第100図 PL.61	5	瀬戸・美濃 陶器 碗	口縁部1/3欠	口 底	10.2 4.4	器 高	7.2	白色鉱物粒少量/－/灰白	高台を除く内外面に飴釉。	5点接合。18世紀前半～中頃。
第100図 PL.61	6	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	口縁部1/4	口 底	(12.3) －	器 高	－	夾雑物無し/－/灰	口唇端部は内側に肥厚する。上端は平坦面をなす。口唇端部内面に飴釉。	17と同一個体か。17世紀前半。
第100図 PL.61	7	瓦入系土器か 皿	口縁部3/4欠	口 底	8.0 4.2	器 高	1.4	夾雑物無し/－/にぶい橙	左回転ロクロ整形。底部は回転糸切り離し後無調整。口縁部に灰釉。灯火に使用か。口縁部内外面に油煙付着。底面に墨書。判読不明。	5点接合。As-A混濁下。
第100図 PL.61	8	瀬戸・美濃 陶器 摺絵皿	口縁部一部欠	口 底	12.2 5.3	器 高	2.8	夾雑物少量/－/灰白	内面、見込みに小さな段が付く。梅文皿。梅に鶯を呉須を用いた型紙摺り。発色良い。2号建物15と絵柄が同じ。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	8点接合。18世紀。
第100図 PL.61	9	瀬戸・美濃 陶器 摺絵皿	完形	口 底	12.2 4.8	器 高	2.9	不明/－/灰白	内面、見込みに小さな段が付く。梅に鶯を呉須を用いた型紙摺り。8と同じ構成であるが文様が反転している。文様不鮮明。貫入入る。内面に灰釉。御深井戸製品。	16点接合。18世紀。
第100図 PL.61	10	瀬戸・美濃 陶器 摺絵皿	完形	口 底	12.7 5.2	器 高	3.0	不明/－/灰白	梅文皿。梅に鶯を呉須を用いた型紙摺り。8と同じ文様。口径は8より大きい。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	18世紀。
第100図 PL.61	11	瀬戸・美濃 陶器 摺絵皿	口縁部1/4欠	口 底	12.7 5.4	器 高	3.1	夾雑物少量/－/灰白	内面、見込みに小さな段が付く。梅に鶯を呉須を用いた型紙摺り。口径は10と同径。絵柄は9と同じ、10を反転。文様不鮮明。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	3点接合。18世紀。
第100図 PL.61	12	瀬戸・美濃 陶器 摺絵皿	完形	口 底	12.1 5.1	器 高	2.9	不明/－/灰白	内面、見込みに小さな段が付く。梅に鶯を呉須を用いた型紙摺り。8と同径。文様不鮮明。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	21点接合。18世紀。
第100図 PL.61	13	瀬戸・美濃 陶器 摺絵皿	完形	口 底	12.7 5.4	器 高	2.7	夾雑物少量/－/灰白	内面、見込みに小さな段が付く。梅に鶯を呉須を用いた型紙摺り。10と同径。絵柄も10と同じ。文様2度摺りされ、ずれている。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	23点接合。18世紀。
第100図 PL.61	14	瀬戸・美濃 陶器 摺絵皿	口縁部一部欠	口 底	12.8 5.3	器 高	2.8	不明/－/灰白	10と同径。絵柄も10と同じ。内面、見込みに小さな段が付く。梅に鶯を呉須を用いた型紙摺り。文様2度摺りされ、ずれている。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	12点接合。18世紀。
第100図 PL.61	15	瀬戸・美濃 陶器 摺絵皿	口縁部1/4欠	口 底	11.8 5.0	器 高	3.0～3.5	不明/－/灰白	9より一回り小径。内面、見込みに小さな段が付く。花文を呉須を用いた型紙摺り。文様不鮮明。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	18点接合。18世紀。
第101図 PL.61	16	瀬戸・美濃 陶器 摺絵皿	完形	口 底	12.1～12.5 5.6	器 高	2.8～3.1	不明/－/灰白	9と同径。絵柄も10は同じ。内面、梅に鶯を呉須を用いた型紙摺り。文様不鮮明。発色悪い。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	19点接合。18世紀。
第101図 PL.61	17	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	片口部片	口 底	－ －	器 高	－	夾雑物無し/－/灰黄	短い片口が付く。飴釉。	2点接合。6と同一個体か。17世紀前半。
第101図 PL.61	18	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部1/2	口 底	29.2 －	器 高	－	黒色鉱物粒少量/－/淡黄	口縁部は内外面に弱い段を持つ。内面12本1単位のクシ目。器面余り磨滅していない。内外面に錆釉。	6点接合。21と同一個体か。18世紀前半。
第101図 PL.62	19	瀬戸・美濃 陶器 摺絵皿	完形	口 底	12.2～12.7 5.3	器 高	2.6～2.9	夾雑物少量/－/灰白	10と同径。絵柄も10と同じ。内面、梅に鶯を呉須を用いた型紙摺り。文様不鮮明。内外面に灰釉。貫入入る。御深井戸製品。	12点接合。18世紀。

挿図 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値					胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第101図 PL.62	20	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	口縁部2/3欠	口	9.7	器	5.3		夾雑物少量/－/灰	低い脚が3ヶ所に付くか。体部外面に半菊文。飴釉。	18世紀後半。
				底	7.2	高				内側に炭・灰が残されていた。	
第101図 PL.62	21	瀬戸陶器 すり鉢	底部3/4	口	—	器	—		黒色粗物粒少量/－/淡黄	底部右回転糸切り離し後無調整。体部外面の下半はヘラ削り。内面に12本1単位のクシ目。内外面に錆釉。	4点接合。18と同一個体か。18世紀前半。
				底	12.8	高					
第101図 PL.62	22	銅製品		長	4.6	厚	0.2			円形の銅製品。用途不明。深さ0.1cm～0.2cmのレンズ状に製作されている。裏面には葉脈と思われるものが付着しているが、元々の用途に関係しているかは不明。全体にさびがおおっている。	
				幅	4.2	重	7.5				
第101図 PL.62	23	銅製品		長	6.2	厚	1.1			煙管吸口。全体に銀鍍金が施されていた。凹凸の装飾が施され、凹部分の銀鍍金の残存が良好。雁字が残存。表面はさびで覆われている部分が多い。	
				幅	1.1	重	4.5				
第101図 PL.62	24	鉄製品		長	32.2	厚	4.0			鎹或。底面の銅の中心はやや平坦になり、すすが多く付着している。内面は砂やさびでおおわれ、内容物等は判別できない。	
				幅	22.5	重	1401.3				
第102図 PL.62	25	石製品 石臼(下)	完形	径	35.4	高	12.6		粗粒輝石安山岩	上面に挽き目の痕跡が明瞭に認められる。側面及び底面には棒状の工具痕が明瞭に残る。軸孔の直径約3.5cm。	
				幅	—	重	22640.0				
第102図 PL.62	26	石製品 石臼(上)	完形	径	34.4	高	13.1		粗粒輝石安山岩	わずかに片減りする。上面の縁及び側面には棒状の工具痕が明瞭に認められる。底面に挽き目の痕跡が明瞭に残り、ものくぼりの痕跡がわずかに認められる。側面には矩形の挽き手孔が認められる。供給孔及び軸受孔の直径約4cm。	
				幅	—	重	21840.0				
第102図 PL.62	27	石製品 礎石	完形	長	27.2	厚	11.2		粗粒輝石安山岩	ほぼ全面が自然面で構成され角礫を利用する。礫平坦部を上面に使用。柱当たり痕(14.0×13.5cm)が認められる。	
				幅	25.2	重	9350.0				
第102図 PL.62	28	石製品 礎石	完形	長	47.6	厚	21.6		粗粒輝石安山岩	全面が自然面であり亜角礫を利用する。表面はほぼ平坦であり一辺約12cmの柱当たり痕が認められる。	
				幅	34.0	重	37220.0				
1号建物											
第103図 PL.63	1	鉄製品		長	2.5	厚	0.5			釘。脚部が先端から0.5cmの部分で直角に折れる。頭部は0.3cmのところで直角に折り、頭を製作している。	
				幅	0.9	重	0.9				
第103図 PL.63	2	石製品 石臼(上)	1/2	長	31.8	厚	13.2		粗粒輝石安山岩	底面に挽き目の痕跡がわずかに残る。側面には矩形の挽き手孔の一部が認められる。供給孔は隅丸の方形である。軸受孔の直径約3cm。	
				幅	16.5	重	8050.0				
6号建物											
第103図 PL.63	1	瀬戸・美濃 陶器 碗	完形	口	10.4	器	6.3～6.6		夾雑物少量/－/淡黄	体部外面の下半は回転ヘラ削り。高台を除く内外面に飴釉。口縁部に灰釉をかけているか。体部外面、鉄化粧。	
				底	4.4	高					
第103図 PL.63	2	古銭		縦	2.364	厚	0.168			新寛永。2点に破損。全体に劣化が激しく、さびでおおわれ、一部剥離している。面に向けて力がかかりやや湾曲しており、その影響で破損したか。	
				横	2.327	重	1.9				
第103図 PL.63	3	古銭		縦	2.383	厚	0.217			新寛永。2点に破損している。全体にさびがおおい、劣化している。劣化による剥離、さび化がはげしい。背の郭と輪は不明瞭。	
				横	2.405	重	1.7				
1号井戸											
第103図	1	製作地不詳 陶器 鉢	口縁部片	口	—	器	—		夾雑物無し/－/にぶい橙	口唇端部は内外面に肥厚する。口縁部外面に銅緑釉。	近・現代。
				底	—	高					
2号井戸											
第103図 PL.63	1	瀬戸・美濃 磁器か 染付皿	1/7	口	(14.1)	器	3.7		夾雑物少量/－/白	内外面に染付文。酸化コバルトが使用されているか。外面の高台境に2重の圏線。蛇の目凹型高台。	2点接合。近・現代。
				底	(7.0)	高					
第103図 PL.63	2	肥前磁器 染付皿	底部1/2	口	—	器	—		夾雑物無し/－/灰白	内外面に染付文。外面の体部下位と高台に圏線が廻る。底部内面に五弁花か。高台内に渦福字銘か。	18世紀。
				底	(7.6)	高					
1号集石											
第103図 PL.63	1	古銭		縦	2.289	厚	0.140			新寛永。永の字の部分にひびが入っている。面、背の郭は浅いが字、郭、輪はともに明瞭。輪に一部剥離が見られる。郭の上がやや膨らむ。	
				横	2.279	重	2.0				
第103図 PL.63	2	古銭		縦	2.436	厚	0.105			新寛永。面、背ともに郭は浅いが、字、郭、輪は明瞭。輪を中心にやや劣化による剥離などが見られる。	
				横	2.437	重	2.3				
11号石垣											
第104図 PL.63	1	石造物 空風輪	ほぼ完形	長	(18.9)	厚	12.6		粗粒輝石安山岩	空風輪。成形は均質、表面は丁寧な研磨整形を施す。底面は突起を有する。	
				幅	12.5	重	2827.9				
15号石垣											
第104図	1	肥前磁器 染付碗	口縁部一部、底部2/3	口	—	器	—		夾雑物無し/－/灰白	体部外面に雪輪梅樹文の染付。体部下位と高台境に圏線。高台内に不明銘。	18世紀前半～中頃。
				底	4.4	高					
第104図 PL.63	2	瀬戸・美濃 陶器 碗	底部1/2	口	—	器	—		夾雑物少量/－/淡黄	体部下位は回転ヘラ削り調整。体部下位から高台外面を除き、器面に灰釉。	江戸時代。
				底	(4.0)	高					

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第104図	3	肥前陶器 陶胎染付碗	底部1/3	口 底	— (4.6)	器 高	—	灰雑物少量/—/灰	体部外面に染付文。	18世紀前半。
第104図 PL.63	4	製作地不詳 磁器 染付猪口	1/2	口 底	(4.4) (3.1)	器 高	6.0	灰雑物無し/—/灰白	体部外面に酸化コバルトによる花文。高台境と高台外面に圏線。	近・現代。
第104図	5	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部から体部片	口 底	— —	器 高	—	黒色鉱物粒少量/—/淡黄	口縁部は内面に弱い稜をなし、受け口状に内傾する。内面に1単位15本以上のクシ目。内外面に錆釉。	2点接合。17世紀末。
3号畑										
第104図	1	美濃陶器 碗	1/8	口 底	(7.7) —	器 高	—	灰雑物少量/—/灰黄	口縁部先端の内外面に鉄釉。体部下半は鉄化粧風の薄い釉。	18世紀後半。
第104図 PL.63	2	古銭		縦 横	— —	厚 重	0.140 1.6		詳細不明。文字があることはわかるが、判読不可。非常に劣化が激しく、字、郭、輪が不明瞭。形がゆがんでおり、面側に曲がる。	
5号畑										
第104図 PL.63	1	瀬戸・美濃 陶器 柳碗	底部1/3	口 底	— 3.8	器 高	—	灰雑物少量/—/灰	体部外面に鉄絵具による柳文。高台部分を除き透明釉。	As-k泥流前後。
泥流面										
第105図	1	瀬戸陶器 すり鉢	底部片	口 底	— (12.0)	器 高	—	黒色鉱物粒少量/—/淡黄	底部は回転糸切り離し後無調整。内外面に錆釉。内面にクシ目。底部外面の周縁部は摩滅。	3点接合。江戸時代。
第105図	2	瀬戸陶器 すり鉢	体部片	口 底	— —	器 高	—	黒色鉱物粒少量/—/淡黄	内外面に錆釉。内面に15本1単位のクシ目。	江戸時代。
第105図 PL.63	3	瀬戸陶器 すり鉢	体部から底部 3/4	口 底	— 10.4	器 高	—	黒色鉱物粒少量/—/灰白	右回転ロクロ整形か。底部は回転糸切り離し後無調整。内外面に錆釉。内面に7本1単位のクシ目。使用により器面は平滑になっている。胎土に石英・長石を混入。口縁部欠損後も二次加工して使用しているか。	2点接合。江戸時代。
第105図 PL.63	4	銀貨		縦 横	2.655 1.519	厚 重	0.281 10.0		古南鐐二朱銀。ほぼ完形で状態も良い。側面に一部さびが付着している。	
第105図 PL.63	5	古銭		長 幅	3.3 3.2	厚 重	0.8 21.7		7・8・10・11の出土状態。	4枚癒着出土。
第105図 PL.63	6	古銭		縦 横	2.498 2.504	厚 重	0.130 3.2		新寛永。文銭。面、背ともに彫深く、字、郭、輪が明瞭。面の郭の一部が切れている。背の左内輪にわずかな段が見られる。	
第105図 PL.63	7	古銭		縦 横	2.835 2.843	厚 重	0.149 5.3		寛永通宝。四文銭。11波。面の右半分はさびが多くやや不明瞭だが、他は彫は浅いが明瞭。背は上下方向の細かい傷が入り、彫が浅くやや不明瞭。	
第105図 PL.64	8	古銭		縦 横	2.844 2.832	厚 重	0.137 4.4		寛永通宝。四文銭。11波。面は彫が深く、字、郭、輪が明瞭。背はやや彫が浅いが明瞭。内輪の凹みに光沢を持つ。	
第105図 PL.64	9	古銭		縦 横	2.345 2.338	厚 重	0.130 2.9		新寛永。面、背ともに彫は浅いが、字、郭、輪は明瞭。背の郭が孔の位置より上にずれ、輪は下が太く、上が細い。	
第105図 PL.64	10	古銭		縦 横	2.932 2.936	厚 重	0.171 5.8		寛永通宝。四文銭。11波。面、背ともに彫が浅く、全体がさびでおおわれている。一部に光沢を残す。劣化によりやや粉化している部分もある。	
第105図	11	古銭		縦 横	2.841 2.859	厚 重	0.354 5.5		寛永通宝。四文銭。11波。面、背ともに劣化が激しく剥離が見られる。背には植物が付着しているが、遺物に伴うものか詳細は不明。	
第105図 PL.64	12	鉄製品		長 幅	3.9 0.9	厚 重	1.0 2.5		釘の体部。全体がさびにおおわれ、劣化が激しい。頭部は欠損。脚部は不明瞭。	
ヤックラ・トレンチ・1号祭祀										
第106図 PL.64	1	美濃陶器 碧碗	底部1/2	口 底	— 4.6	器 高	—	灰雑物無し/—/灰黄	体部下位から高台は鉄化粧風の仕上がり。内面に鉄釉。	18世紀。中頃～後半。
第106図 PL.64	2	瀬戸・美濃 陶器 碗	体部から底部	口 底	— 4.7	器 高	—	白色鉱物粒少量/—/灰	体部外面、回転ヘラ削り。内外面に灰釉。高台部分は無釉。	3点接合。江戸時代。
第106図 PL.64	3	瀬戸・美濃 陶器 碗	底部	口 底	— 4.3	器 高	2.0	灰雑物無し/—/灰	内面に灰釉。体部を打ち欠き、円盤状に二次加工している。	江戸時代。
第106図 PL.64	4	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	口縁部から体部 1/2	口 底	(11.7) —	器 高	—	灰雑物少量/—/褐灰	体部内外面に灰釉。口唇端部と注口端部は外側に肥厚する。	2点接合。18世紀後半～19世紀前半。
第106図 PL.64	5	搬入系土器 土人形	1/2	高 幅	— —	厚	—	灰雑物少量/—/橙	型作り。台の上に立つ人物の正面部分。頭部は欠損している。	時期不詳。
第106図 PL.64	6	瀬戸・美濃 磁器 端反碗蓋	完形	口 摘	8.0 3.1	器 高	2.4	灰雑物無し/—/灰白	天井部外面に唐草文。摘みの内側に不明銘。内面中央に草花文。	19世紀前半～中頃。
第106図 PL.64	7	瀬戸・美濃 陶器 山皿か	底部1/2	口 底	— (4.6)	器 高	—	黒色鉱物粒少量/—/灰白	内面、斑状に釉付着。底部は回転糸切り離し後無調整。	時期不詳。

挿図 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第106図 Pl.64	8	搬入系土器 面模か	完形	径 厚	3.0～3.2 0.8			夾雑物少量/－/橙	粘土塊を型に押し付けて鋼が表現されている。細部は線掘りしているか。	時期不詳。
第106図 Pl.064	9	銅製品 キセル(雁首)	完形	長 幅	3.2 1.6	厚 重	2.2 3.3		煙管雁首。火皿と首部の一部が残存。つなぎ目は明瞭。羅宇に近い首部が上下を押しつぶされた扁平に変形。表面は劣化により詳細は不明。	
第106図 Pl.64	10	石製品 石造物台座	2/3	長 幅	(25.2) 21.3	厚 重	13.8 6450.0	粗粒輝石安山岩	表面に縦約4cm×横約7cm×深さ約3cmの矩形の孔が認められる。表面右側には幅1cm程度の長方形の平坦な作出面が複数認められ平ノミ状の工具痕の可能性がある。	

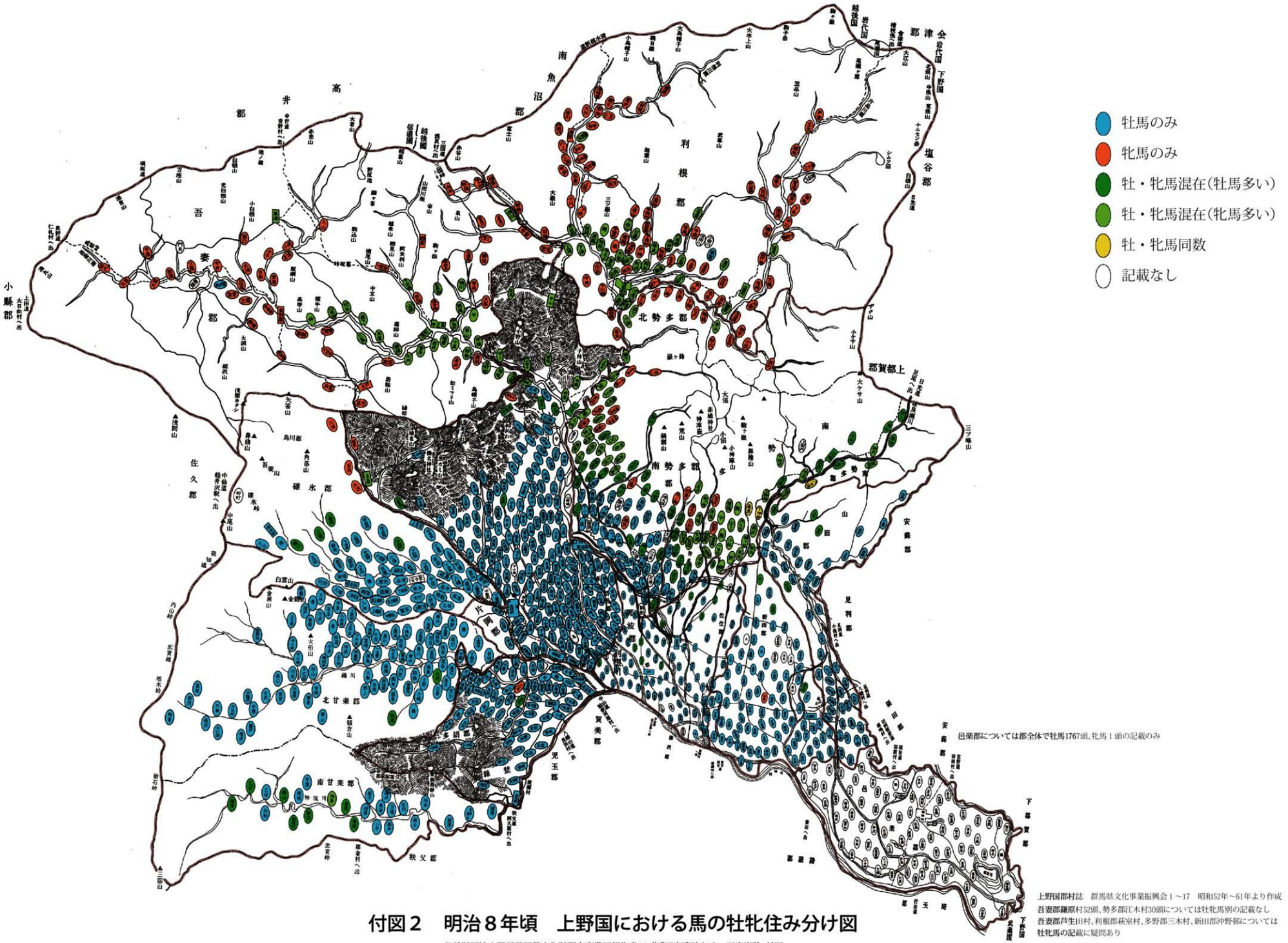
西宮岩陰１号石造物

挿図 Pl.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第107図 Pl.65	1	搬入系土器 か 皿	完形	口 底	5.0 －	器高	－	夾雑物少量/－/橙	小径。手づくね。底部外面の中央部分は剥離。	時期不詳。
第107図 Pl.65	2	搬入系土器 か 皿	1/3	口 底	(5.0) －	器高	0.8～0.9	夾雑物少量/－/橙	小径。手づくね。	時期不詳。
第107図 Pl.65	3	搬入系土器 か 皿	完形	口 底	5.0 －	器高	0.6～0.8	夾雑物少量/－/にぶい褐	小径。手づくね。	3点接合。時期不詳。
第107図	4	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	口縁部片	口 底	－ －	器高	－	黒色鉱物粒少量/－/にぶい黄橙	口縁部はわずかに外傾。内面にケシ目。内外面に銹釉。	18世紀後半～19世紀前半。
第107図 Pl.65	5	石造物 空風輪	＊ 完形	長 幅	20.4 16.2	厚 重	15.1 3628.4	軽石/＊/＊	空風輪。成形は均質、表面は丁寧な研磨整形を施す。底面は突起が認められない。くびれ部は垂直でなく、風輪上部から空輪下部へと外開きの曲線で接続する。先端はわずかに突出する。	
第107図 Pl.65	6	石造物 空風輪	＊ ほぼ完形	長 幅	18.8 13.8	厚 重	13.8 3252.8	溶結凝灰岩/＊/＊	風空輪。成形は均質、表面は丁寧な研磨整形を施す。底面は突起が認められない。先端はわずかに突出する。	
第107図 Pl.65	7	石造物 火輪	4/5	長 幅	28.5 28.8	厚 重	(17.7) 7680.0	粗粒輝石安山岩	火輪。丁寧な成整形。隅棟に反りがあり、上面に矩形の孔が認められる。屋だるみはわずかに認められ、軒はそれほど厚くない。底部の中心付近が円形にわずかに窪んでおり、水輪との接触部分と考えられる。	
第107図 Pl.65	8	石造物 火輪	4/5	長 幅	(23.1) 25.5	厚 重	15.6 7250.0	粗粒輝石安山岩	火輪。丁寧な成整形。隅棟に反りは認められない。屋だるみはわずかに認められ、軒の下辺はほぼ直線であるが、上辺は両端で厚く中央で薄い曲線を呈する。	
第107図 Pl.65	9	石造物 石造物台座	完形	長 幅	18.4 18.6	厚 重	11.1 7000.0	粗粒輝石安山岩	矩形に丁寧に整形する。側面部に棒状あるいは平ノミ状の工具痕がわずかに認められる。	
第107図 Pl.65	10	石製品 鑿石	完形	長 幅	31.2 40.8	厚 重	16.1 23980.0	粗粒輝石安山岩	矩形に丁寧に整形する。表面中央に縦約3.5cm×横約5.5cm×深さ約2.0cmの矩形の孔が認められる。表面及び側面部に棒状の工具痕が認められる。	
第108図 Pl.65	11	瀬戸・美濃 陶器 灯火皿	1/2	口 底	(7.1) (3.4)	器高	1.3	夾雑物少量/－/灰黄褐	体部下半から底部には回転ヘラ削り調整。口縁部外面と内面に銹釉。	18世紀後半。
第108図 Pl.65	12	瀬戸・美濃 陶器 灯火受皿	完形	口 底	7.2 3.5	器高	1.3～1.5	夾雑物少量/－/灰黄	口縁部外面と内面に銹釉。体部下半は釉を拭う。体部下半から底部には回転ヘラ削り調整。	18世紀後半～19世紀前半。
第108図 Pl.065	13	瀬戸・美濃 陶器 灯火受皿	1/2	口 底	(9.5) (4.6)	器高	2.1	夾雑物少量/－/灰黄	受け部の縁は口縁部より低い。Ⅰ カ所、U字に切り込み、油の流れ口を作っている。体部下半から底部には回転ヘラ削り調整。口縁部外面と内面に銹釉。体部下半は釉を拭う。	18世紀後半～19世紀前半。
第108図 Pl.065	14	製作地不詳 陶器 灯火皿	1/2	口 底	(10.7) 4.0	器高	2.3	夾雑物微量/－/灰黄	受け部の縁は口縁部より低い。体部下半から底部に回転ヘラ削り調整。口縁部外面と内面に灰釉。内面に重ね焼きの痕跡。	3点接合。19世紀か。
第108図 Pl.65	15	搬入系土器 皿	完形	口 底	4.9 －	器高	1.2	夾雑物少量/－/橙	小径。手づくね。	3点接合。時期不詳。
第108図 Pl.65	16	製作地不詳 磁器 猪口	完形	口 底	4.6 3.2	器高	4.8	夾雑物少量/－/灰白	口唇部に金線。外面に上絵。和歌か。高台内に「金山」の銘。	近・現代。
第108図 Pl.65	17	製作地不詳 磁器 染付皿	完形	口 底	11.3 6.5	器高	2.4	夾雑物少量/－/白	口縁部は平面八角形。内面に文様あり。外面高台内に「鳳」の銘。	現代。
第108図 Pl.65	18	搬入系土器 狐	完形	高 幅	－ －	厚	－	夾雑物少量/－/明赤褐	表裏２点の型を合わせて台に座る狐が形づくられている。台の部分は中空になっている。	２点接合。時期不詳。
第108図	19	製作地不詳 陶器 すり鉢	口縁部片	口 底	－ －	器高	－	夾雑物少量/－/灰黄褐	口唇端部は外面にかえりを有する。口縁部内面と外面に銹釉。内面にケシ目。	２点接合。時期不詳。
第108図 Pl.65	20	古銭 寛永通寶		縦 横	2.365 2.354	厚 重	0.124 2.5		古寛永。面は彫が深く、字、字、郭、輪ともに明瞭。背も郭、輪ともに明瞭。郭の下がやや太くなっている。	
第108図 Pl.65	21	古銭 皇宋通宝		縦 横	2.457 2.430	厚 重	0.150 3.7		皇宋通寶。表面が摩滅しており、字が見えづらい。輪の一部が劣化で見えづらくなっている。孔の変形は生産時の影響か。	
第108図 Pl.65	22	古銭 寛永通寶		縦 横	2.252 2.254	厚 重	0.109 2.1		新寛永。背元。彫は浅いが、字、郭、輪は明瞭。輪に左右方向の細かい傷が見られる。背も彫が浅いが、字、郭、輪は明瞭。輪に縦方向の細かな傷が見られる。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第108図 PL.65	23	古銭 元豊通宝		縦 横	2.456 2.451	厚 重	0.127 3.0		元豊通寶。郭はやや浅いが明瞭。孔にケバが残存か。輪の一部に欠けが見られる。背はほとんど郭がなく郭、輪が不鮮明。	
第108図 PL.65	24	古銭 聖宋元寶		縦 横	2.438 2.455	厚 重	0.134 3.0		聖宋元寶。字は摩滅しており読みづらい。郭、輪は明瞭。郭の一部が細く、孔が丸い。縁は劣化による剥離が見られる。背は郭が浅く、郭、輪が不明瞭。	
第108図 PL.65	25	古銭 天聖元寶		縦 横	2.480 2.472	厚 重	0.143 2.7		天聖元寶。字が摩滅により一部不明瞭。郭と輪は明瞭だが、輪の一部に欠けが見られる。背は郭、輪ともに不明瞭。	
第108図 PL.66	26	古銭 太平通寶		縦 横	2.360 2.375	厚 重	0.117 2.3		太平通寶。郭が深く、字、郭、輪が明瞭。背は郭が浅く摩しており、郭、輪が一部判別しづらい。	
第108図 PL.66	27	古銭 寛永通寶		縦 横	2.292 2.297	厚 重	0.123 2.5		新寛永。面、背ともに郭は浅いが、字、郭、輪は明瞭。輪の一部が劣化により剥離している。やや孔が逆台形状になっている。	
第108図 PL.66	28	古銭 寛永通寶		縦 横	2.345 2.343	厚 重	0.115 2.9		新寛永。面の郭が深く字、郭、輪が明瞭。左上の輪に一部ゆがみが発生してる。背はほとんど郭が見えず、郭、輪が不明瞭。	
第108図 PL.66	29	石製品 硯	不明	長 幅	(5.9) (5.6)	厚 重	(2.4) 50.1	デイサイト	全体的に非常に滑らかである。硯面には縦方向の細かい擦痕が数多く認められる。硯側には背とほぼ並行する方向の長い線条痕が累積する。	
西宮岩陰２号石造物										
第109図 PL.066	1	石造物 空風輪	ほぼ完形	長 幅	19.9 18.6	厚 重	18.6 5750.0	溶結凝灰岩	空風輪。成形は均質、表面は丁寧な研磨整形を施す。底面は突起が認められない。くびれ部は垂直でなく、風輪上部から空輪下部へと外開きの曲線で接続する。	
第109図 PL.066	2	石造物 水輪	1/3	長 幅	21.7 21.1	高 重	13.4 5150.0	粗粒輝石安山岩	水輪。側面部は丁寧な研磨整形を施す。	
第109図 PL.066	3	石造物 火輪	ほぼ完形	長 幅	31.8 32.4	厚 重	13.6 14080.0	粗粒輝石安山岩	火輪。丁寧な成整形。隅棟の反り及び屋だるみは認められない。軒の下辺はほぼ直線であるが、上辺は両端でやや厚く中央で薄い曲線を呈する。	
第109図 PL.066	4	石造物 火輪	2/3	長 幅	30.3 32.7	厚 重	17.2 12750.0	粗粒輝石安山岩	火輪。丁寧な成整形。隅棟の反りはわずかに認められる。屋だるみはわずかに認められ、軒の上辺は両端で厚く中央で薄い曲線を呈する。底面には棒状あるいは平ノミ状の工具痕がわずかに残る。	
第109図 PL.066	5	石造物 石造物台座	完形	長 幅	30.5 31.8	厚 重	14.5 22760.0	溶結凝灰岩	上面と側面は比較的滑らかであり丁寧な研磨整形を施す。底面は比較的粗い凹凸が認められる。	

付図１　西宮遺跡（１）・西宮岩陰全体図（1：200）



付図２　明治８年頃　上野国における馬の牡牝住み分け図

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書634集「西宮遺跡（１）・西宮岩陰」付図